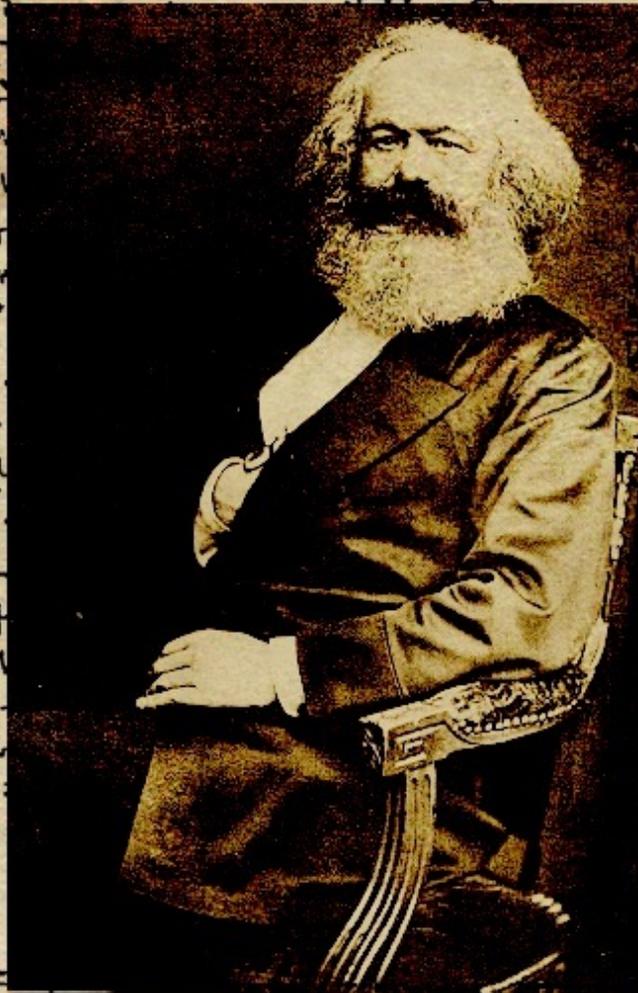


# 『資本論』第2部諸草稿(主に第8稿)の研究

—大谷禎之介氏の諸説の批判的検討—



《目次》

【はじめに】

- 第8稿第21章該当部分の全体の構成について
- 再生産表式の「眼目」についての「誤解」もエンゲルスの編集のせいだろうか？
- 大谷氏に、エンゲルスをく「著者の拡大された視野」のかなめ」の無理解で非難する資格があるだろうか？
- 編集者の一人であるのに、どうして自身のことについて、編集の段階で訂正できなかったのだろうか？
- 第1稿や第3稿にも「利用すべき諸箇所」があった？
- 「ノートⅠ～Ⅳの執筆次期の推定」と若干の思いつき
- 邦訳のある参考文献には、邦訳の頁数も併記すべきではないだろうか？
- 第2稿における理論的前進のやや過大ともいえる評価
- 流動資本と固定資本との区別は「価値増殖過程」だけの問題ではない
- 「b 償却ファンドを蓄積ファンドに流用することの可能性についての問題の解決」については分かりにくい。
- 「c 資本と資本との、資本と収入との、収入と収入との交換、という考え方の放棄」は果たして本当か？
- 「a 第3章の課題についての新たな視点」なるものの説明も納得がいかない
- 【第2稿第3章における二段構えの敘述方法による制約】なるものへの根本的な疑問
- 「第Ⅰ部門の資本家と労働者とのあいだでの労働力の売買によって媒介される両部門間の相互補填」は第Ⅱ部門の「第Ⅰ部門からの生産手段の購買によって開始される」というのは本当だろうか？
- 「Ch.III) b.II. ) (第2部第3章)」はどう理解したらよいのか？
- 第4稿は第2稿より先に書かれたのにどうして「形式が完全」なのであろうか？
- 「ノート」と「草稿」をことさら区別する意味
- 第2稿が基礎に置かれなければならないというマルクス自身による指示は重要
- 第1篇第1章の「書き出し」にどうしてマルクスは拘ったのか？
- 【資本循環論における理論的前進】も今一つ納得がいかない
- 「b 商品資本の循環の独自性の明確化」についても疑問がある
- 「あとに置くべきものの先取り」とは？
- 【スミスのドグマについての最終的な総括】に関して
- 【「実体的諸条件」の解明から社会的総再生産過程の考察への課題の転換】についても疑問
- 【社会的生産の二つの部門の呼び方の変更】について
- 【二重の敘述方法の放棄と貨幣運動の全面的な組み入れ】も受け入れられない

- 「a 可変資本の貨幣形態での前貸および還流の重要性の強調」 について
- 「b 資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流との区別および関連の分析」 について (その1)
- 「b 資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流との区別および関連の分析」 について (その2)
- 「b 資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流との区別および関連の分析」 について (その3)
- 「e 社会的総再生産過程における金生産の分析」 も今一つハッキリしない
- 5月号掲載分の論文の全体の見通し
- 「II 蓄積または拡大された規模での生産」 の冒頭にある「先取り」を如何に理解すべきか
- 1で論じていることは、現実の拡大再生産の直接的な規定である
- 3、4でマルクスは何を問題にしているのか
- 《5) 部門IIでの蓄積》 はどこまで含まれるのか？
- 何のためのく「a 「困難」の確認」なのか？
- 同じような拡大再生産の表式の提示でも、その目的や役割、位置づけには決定的な相違がある
- 表式 aは何のために提示されているのか、「一つの新しい問題」としてマルクスは何を論じようとしているか (その1)
- 表式 aは何のために提示されているのか、「一つの新しい問題」としてマルクスは何を論じようとしているか (その2)
- 表式 aは何のために提示されているのか、「一つの新しい問題」としてマルクスは何を論じようとしているか (その3)
- 「d 二回目の試み——追加労働者の賃金支出についての新たな想定。「資本主義的生産の進行とは矛盾している」→中断」 の検討
- 単純再生産部分の転換を見落とす
- 「g コメント—拡大再生産の展開についての総括」 も混乱である
- 「h これまでの考察からの帰結」 における大変な勘違い
- 「i 「貨幣源泉」問題への最終的コメント」 について
- 第2部第2稿の執筆を中断した理由は何か？
- 「第8稿における貨幣べール観の最終的克服」とは何か？ (その1)
- 「第8稿における貨幣べール観の最終的克服」とは何か？ (その2)
- 【第8稿におけるマルクスの厳しい自己批判】とは何か？ (その1)
- 【第8稿におけるマルクスの厳しい自己批判】とは何か？ (その2)

## 【はじめに】

---

この論文は、大谷禎之介氏御自身が編集作業に携わったメガ第Ⅱ部門第11巻が昨年（2008年）3月に刊行されたことを踏まえて、書かれたものである。大谷氏は同巻の「アパレート（付属資料）の部」に「解題」の草案を執筆されたのであるが、どうやらそれは共同編集者の修正を受け、同氏の本意とするものとはやや異なるものになってしまったようである。そこでこの論文では、「解題」の内容にとらわれず、同氏の見解をそのまま展開されているものようである。

その意味では、本論文は、マルクスの『資本論』第2部の諸草稿をその現物にも当たって、丹念に研究された成果であり、その集大成ともいえるものであって、マルクスの『資本論』第2部の諸草稿に興味をもつ人たちにとっては、大きな関心を呼ぶものであろう。

いうまでもなく、私もその一人であるが、この論文によって多くの新しい知見が得られたことを、まず指摘し、謝意を示しておきたい。

しかし私は、この論考では、大胆にも、この大谷氏の論文を批判的に検討するという試みをやろうとしている。もちろん、私自身は、第2部の諸草稿については、大谷氏御自身によって邦訳されたものや、他の研究者（例えば市原健志氏や八柳良次郎氏、あるいは水谷・名和両氏等々）の諸研究以外には、目を通しておらず、メガ第Ⅱ部門第11巻もいまだ手に取っていない（これはこの部分を書いた時点の話ではあるが）。それでも私は大谷氏のこの論文を一読してさまざまな疑問を禁じえなかったのである。これまでも、第8稿の第21章該当部分の段落ごとの解読では（この解読は先に紹介した「マルクス研究会通信」に連載）、大谷氏の業績に依拠しながら、氏の諸説を批判してきたのであるが、この論文においても、やはり次々と疑問が生じるばかりであった。

そこでここでは、主に、私がこの論文を読んでゆく過程で、引っ掛かった部分について、率直に、その疑問を提起するという形で、続けることにしたい。つまり大谷氏のこの論文の展開に沿って、その都度、湧いてくる疑問を披露し、それに対する自身の批判的見解を展開することにしたい。だから、あるいは読者の皆さんにとっては読みにくいかも知れないが、その点、ご容赦願いたい。なお、読者の便宜を考慮して、それぞれの引っ掛かった部分については、適当な表題をつけておいた。

## ●第8稿第21章該当部分の全体の構成について

大谷氏は『経済』3月号143頁下段で、エンゲルスの編集が実際のマルクス自身の展開をみえなくしていると批判して、次のように述べている。

〈のちに見るように、マルクスが表式を利用しながら思考を重ねた「5 第II部門での蓄積」の部分を、エンゲルスは、「第2節 第II部門での蓄積」と「第3節 蓄積の表式的叙述」と「第4節 補遺」との三つの節に分けたが、これによって、マルクスがここで行なった研究の筋道がほとんど見えなくなっている。マルクスはこの「5」のなかで、エンゲルス版でそう見えるのとは違って、両部門間の過不足のない相互補填のもとで順調に進行する拡大再生産の過程を示すような表式を描こうと苦心惨憺したのではまったくなかった。マルクスは、浮上した困難を打開する道を探るために表式を利用しただけだった。〉（『経済』3月号143頁、以下、「上143頁」と略して記す）

ここでは大谷氏は、マルクスが拡大再生産の表式を展開している部分（先に連載した段落ごとの解読で利用させてもらった『経済志林』の頁数によれば、下の21頁から始まる拡大再生産の表式の年次を重ねた展開部分）をも、〈「5 第II部門での蓄積」の部分〉と捉えていることが分かる。こうした捉え方は、伊藤武氏のものでもあるが、果たしてこうした捉え方は正しいのであろうか。つまりマルクスは「蓄積および拡大再生産」という草稿全体を「1）～5）」の番号をふって、全体を5つの部分にわけて展開していると考えられる捉え方である。しかも最後の「5）」の部分（ということはこの「5）」と番号が打たれたところから最後まで部分）は、マルクスが表題をつけたとおりに「第II部門での蓄積」が論じられているという捉え方である（この「1）」～「5）」のうちで表題がつけられているのはこの「5）」だけである）。しかしこれだと「5）」の部分の占める分量は、極めて大きなものになる。大谷氏が翻訳された頁数（しかしこれはドイツ語原文も含めた頁数になる）で計算してみると、次のようになる。

- 1) = 32～34 [約3頁分]
- 2) = 35～40 [約6頁分]
- 3) = 40～72 [約33頁分]
- 4) = 72～77 [約6頁分]
- 5) 「部門IIでの蓄積」 = 1～78 [約78頁分]。
  - a) = 1～12 [約12頁分]
  - b) = 12～78 [約67頁分]

つまり全体の頁数は125頁になるが、「5）」の部分は62%以上、つまり半分以上になるのである。おまけに「5）」の部分は、「a)」と「b)」に分けられているが、「b)」だけでも半分以上（約54%）になることになる。そして奇妙なことに、大谷氏らの捉え方では、そこでは「部門IIでの蓄積」、さらにそのうちの「b)」と項目が打たれた部分で提起されている問題、

すなわち「貨幣源泉がIIのどこで湧き出するのか」という問題が論じられていると捉えるわけである。

しかしこうした捉え方は、単に全体のアンバランスだけではなく、内容的にも納得のゆくものではない。確かにマルクスは「3）」と番号を打っているパラグラフの直前で次のように述べている。

《われわれは、この外観上の困難をさらに詳しく解決するために、まず部門I（生産手段の生産）での蓄積と部門II（消費手段の生産）での蓄積とを区別しなければならない。部門Iから始めよう。》（『経済志林』上40頁、以下「上40頁」と略す）

そしてその次のパラグラフの冒頭に「3）」と番号が打たれているのである。だからエンゲルスもこのパラグラフの前に「第1節 部門Iにおける蓄積 1、蓄蔵貨幣」と表題をつけたわけである。

しかし「5）」と番号が打たれている部分以降の内容を検討すると、「部門IIでの蓄積」が考察の対象になっていると考えられるのは、大谷訳の下の21頁の拡大再再生産の表式（いわゆるB式）が提示される前までの部分においてである。すでに述べたように、マルクスは「5）」を「a）」と「b）」にわけて論じているが、この「b）」の部分で論じているのが、いわゆる「新しい問題」であり、「貨幣源泉がIIのどこで湧き出するのか」という問題なのだが、しかしB式が提示された以降（下21頁以降）は、そうした問題が論じられているわけではない。伊藤武氏などは草稿の最後の「補論」（とエンゲルスが表題をつけた部分）においても、この同じ問題が、すなわちIIにおける「貨幣源泉」の問題をマルクスは論じているのだから、だからマルクスは最後まで、この同じ問題を追究しているのだと捉えているのであるが、大谷氏が次のように書いているのは、恐らくこの伊藤武氏の見解を踏まえたものと考えることができる。

〈マルクスはこの「5」のなかで、エンゲルス版でそう見えるのとは違って、両部門間の過不足のない相互補填のもとで順調に進行する拡大再生産の過程を示すような表式を描こうと苦心惨憺したのではまったくなかった。マルクスは、浮上した困難を打開する道を探るために表式を利用しただけだった。〉

つまりここで〈浮上した困難を打開する道〉というのは、いわゆる「新しい問題」のことであり、「貨幣源泉がIIのどこで湧き出するのか」という問題のことであろう。つまり表式の年次を重ねて展開している部分でも、マルクスは部門IIIにおける貨幣源泉を捜し続けているのだという立場に大谷氏も立っているわけである。しかしこれはとんでもない理解だと私には思える。私自身の捉え方をここでは詳述しないが（それはすでに第8稿の段落ごとの解読のなかで論じている）、こうした捉え方はマルクスの考察を極めて狭いものにしてしまうのではないかと思うのである。

この問題を考える場合、次のような水谷謙治・名和隆央両氏の指摘が重要な気がする。両氏

は《『資本論』第2部第2草稿（「第3章」）の未公開部分について――その概要と解説――》（『立教経済学研究』33巻1号s.54.7）のなかで、次のように指摘している。

〈再生産表式の説明に続いて両部門の総体を対象とした考察がある。部門Ⅰおよび部門Ⅱに続いて両部門の総体を考察する方法は、第2稿の特徴といってよいだろう。（1863年、学説史ノート第22冊におけるマルクスの経済表では、これと同様の取り扱いであったことが想起できる。）また、貨幣流通による媒介を考慮した単純再生産の考察においても、部門Ⅰ、部門Ⅱ、および両部門の総体という順序で考察が進められている。〉（154頁）

つまりマルクスが第8稿の拡大再生産のところで先に指摘したように、《われわれは、この外観上の困難をさらに詳しく解決するために、まず部門Ⅰ（生産手段の生産）での蓄積と部門Ⅱ（消費手段の生産）での蓄積とを区別しなければならない。部門Ⅰから始めよう》と述べているのは、だから明らかに、これまでのマルクスの考察の方法が踏襲されていると考えることができるのである（ただ注意が必要なのは、第2稿と第8稿では部門Ⅰと部門Ⅱが入れ代わっている。つまり第2稿では、消費手段の生産部門が部門Ⅰとなっている）。とするなら、マルクスはどこかで「両部門の総体」の考察に移っていると推測することも成り立つわけである。そして私はそれはすでに指摘したように、マルクスが拡大再生産の表式を単純再生産の表式と並べて提示して、拡大再生産の表式を年次を重ねて計算しているところから（下21頁以降）であると推測しているのである。ただマルクス自身は、そこには何の表題もつけていない。ただ横線を引いて、そこには区切りがあることを示しているだけである。しかし、明らかにそこからは問題が変わっていることは明らかなのである。（なお、この第8稿全体の構成の問題については、今後も問題になることが予測できるので、今回はこの程度の問題提起で終えることにしたい）。

## ●再生産表式の「眼目」についての「誤解」もエンゲルスの編集のせいだろうか？

次の一文は、先に紹介した文章に直接続く文章なのであるが、やはり大谷氏はエンゲルスの編集を批判する一環として次のように述べている。

〈ところがエンゲルスは、そのマルクスの作業を、彼の作成した、過程の順調な進行を示す表式——第4節の「第1例」と「第2例」——と入れ替えることによって、マルクスの問題解決の過程をまったく見えないものにしてしまったのである。それによって、マルクスの「経済表」にとってかわった「再生産表式」の眼目が、貨幣的な契機を排除して商品資本の諸要素を表示する点にあるかのような、さらに、それが分析の手段であるよりも、あたかも分析の対象でもあるかのような誤解が広まることになった。〉（上143-4頁）

この部分で大谷氏は、エンゲルスがマルクスが表式を展開している部分を「第1例」「第2例」という形で編集したので、〈「再生産表式」の眼目が、貨幣的な契機を排除して商品資本の諸要素を表示する点にあるかのような〉誤解が広まったと主張されているのであるが、果たしてそれはエンゲルスの編集に対する批判として妥当なものであろうか。というのは、周知のように、エンゲルスは、その序文で次のように述べているからである。

《第1篇の最も困難な部分は第5草稿で新たに書き改められた。第1篇の残りの部分と第2篇全体（第17章を除く）には、大した理論的困難はなかった。これに反して、第3篇、社会的資本の再生産と流通は、彼にはどうしても書き直しが必要だと思われた。というのは、第2草稿では再生産が、まずもって、それを媒介する貨幣流通を顧慮することなしに取り扱われ、次にもう一度、これを顧慮して取り扱われていたからである。このようなことは取り除かれ、またこの篇全体が一般に著者の拡大された視野に照応するように書き直されるべきであった。こうしてできあがったのが第8草稿で、これは四つ折り判でわずか70ページの一冊である。しかし、これだけのページにマルクスがどれだけ〔多く〕のものを凝縮することができたかは、印刷された第3篇から、第2草稿からの挿入部分を差し引いたものと右の草稿とを比較してみればわかる。》（全集版8-9頁）

つまりエンゲルスは、《常に、現存する最後の改稿を以前のものと比較して基礎に据えるようにした》（同9頁）と述べているように、第3篇を、第8稿を《基礎に据え》て、欠けている部分を第2稿によって埋めるという形で編集しているのである。そして第8稿では最初から媒介する貨幣流通を顧慮して問題が取り扱われていたのである。だからエンゲルスは、この第8稿の敘述こそ、マルクスの《拡大された視野》にもとづくものだと判断したのである。つまり社会的総資本の再生産の敘述においては、第2稿で考えられていたような《まずもって、それを媒介する貨幣流通を顧慮することなしに取り扱われ、次にもう一度、これを顧慮して取り扱われ》るといような二段構えのプランは放棄されたと考えたのである。

もちろん、エンゲルス自身は《拡大された視野》とは何かについては何も述べていない。しか

しそれが第2稿のいわゆる「二段構えの敘述」プランを否定する内容であったと判断していることは確かである。エンゲルスは、同じ序文の少し前のところでは次のようにも述べている。

《マルクスが第2部のために残した自筆の材料を数え上げるだけでも、彼がその偉大な経済学的諸発見を公表するまえに、いかに比類のない誠実さをもって、いかに厳格な自己批判をもって、それらの発見を最大限に完璧なものに仕上げようと努力したかが証明される。まさにこの自己批判のために、彼は、ただまれにしか、新たな研究によって絶えず拡大する彼の視野に内容的にも形式的にも敘述を適合させるにいたらなかったのである。ところで、この材料は次のものからなっている。》（同6頁）

つまりマルクスが第2部に関する諸草稿を何度も書き直したのは、それ以前のものが不十分だとマルクス自身が判断したからであり、だからいわば後のものはそれ以前ものの《厳格な自己批判をもって、それらの発見を最大限に完璧なものに仕上げようと努力した》結果であること、だから後のものは当然《新たな研究によって絶えず拡大する彼の視野》にもとづくものだと判断しているのである。だから同じ観点から第2稿に対しても第8稿が存在しているのだと考えたことが容易に推測できる。つまり最初から貨幣流通による媒介を顧慮して敘述するということが、マルクスが《新たな研究によって》獲得した《拡大された視野》によるものだと考えたのである。

こうしたエンゲルスの第8稿の評価の是非については、また別途検討する機会があると思うので、ここでは取り上げないが、しかし私が問題にしているのは、エンゲルス自身は、第3篇を彼が考える《拡大された視野》にもとづいて、最初から媒介する貨幣流通を顧慮して取り扱っているという事実である。だからそうした意図のもとに行なわれた編集が、どうして〈貨幣的な契機を排除して商品資本の諸要素を表示する点にあるかのような〉誤解を広めることに繋がったのかが理解できないのである。ここでは大谷氏自身はそれについて、具体的には何の説明もされていないのであるが、しかしエンゲルスのそうした編集方針を考えるなら、例え形式的に考えたとしても、こうした非難は当たらないのではないかと思わざるをえないのである。

もちろん、他方で大谷氏はエンゲルスの編集によって、〈「再生産表式」の眼目が、……それが分析の手段であるよりも、あたかも分析の対象ででもあるかのような誤解が広まることになった〉とも述べており、この点では私も大きな異論はないのではあるが。

●大谷氏に、エンゲルスを〈「著者の拡大された視野」のかなめ〉の無理解で非難する資格があるだろうか？

---

これも先の一文中に直接続くものであるが、続けて大谷氏は次のように述べている。

〈このような結果になったのは、エンゲルス自身が序文で書いた「著者の拡大された視野」(III/13, S. 8.15–16; MEW, Bd. 24, S. 12)のかなめがどういう点にあったのか、そして第8稿の「II 蓄積または拡大された規模の生産」でマルクスがなにを明らかにしようとして苦闘したのか、ということ、エンゲルスが十分に理解できなかったためであろう。〉(上144頁)

大谷氏はここで、「著者の拡大された視野」とエンゲルスが書いた問題そのものは否定せずに、その内容の捉え方が違うと考えているようである。先に見たように、エンゲルス自身は「著者の拡大された視野」というのはどういうことなのかについては、何も具体的には論じていない。ただエンゲルスが言っているのは、マルクスが第8稿の時点で到達した「著者の拡大された視野」にもとづいて、第2稿の段階で考えていたいわゆる「二段構えのプラン」を放棄したのだということだけである。ところが、大谷氏は、そうしたエンゲルスの主張、つまり第8稿の段階では第2稿の段階での二段構えのプランを破棄したという判断そのものは肯定しながら、しかしエンゲルスのいう「著者の拡大された視野」の理解は不十分だというのである。しかしエンゲルス自身は「著者の拡大された視野」については何も具体的には述べていないのだから、どうしてそれが不十分と判断できるのであろうか。しかもエンゲルスがいう「著者の拡大された視野」にもとづいてマルクスは第8稿の段階では「二段構えのプラン」を放棄したのだ、という主張そのものは正しいとしながらである。ここには明らかに論理的に整合しないものが存在している。

もちろん、エンゲルスがいう「著者の拡大された視野」について、エンゲルス自身が何か具体的に論じているのなら、大谷氏の主張も成り立つのである。つまりエンゲルスはマルクスが第8稿の段階で獲得した「拡大された視野」にもとづいて、第二稿の段階で考えていた「二段構えのプラン」を放棄したのだというのだが、確かにそうしたエンゲルスの指摘は正しいが、しかしその根拠としてエンゲルスが上げている「著者の拡大された視野」の理解そのものは不十分なものである、とその具体的内容に即して論じることができるわけである。しかしエンゲルスは自身は「著者の拡大された視野」については、何一つ具体的には論じていないのだから、もしエンゲルスの「二段構えのプラン」放棄説が正しいとするなら、少なくともエンゲルスがその根拠として上げている「著者の拡大された視野」についても正しいとしなければならないはずではないだろうか。これは形式的に考える限りそうとしか考えられない。そしてここでは問題は形式的にしか成り立たないのである。というのは、エンゲルス自身は「著者の拡大された視野」の内容について何も述べていないのだから、もし「二段構えのプラン」放棄説が正しいとするなら、その根拠としてエンゲルスが上げている「著者の拡大された視野」も形式的には正しいとしなければ不合理だからである。だから「二段構えのプラン」放棄説の立場に立っている大谷氏には〈エンゲルス自身が序文で書いた「著者の拡大された視野」のかなめがどういう点にあったのか、……ということ、エンゲルスが十分に理解できなかった〉などと批判する資格はないのである。それもやは

りこの限りでは、まったく根拠のないエンゲルス批判としかいいようがないのである。

●編集者の一人であるのに、どうして自身のことについて、編集の段階で訂正できなかったのでしょうか？

---

大谷氏は「付属資料（アパレート）の部」についての説明のなかで、「解題」の最後に「編集作業に当たった担当者が示され」という部分に注5）をつけ、その部分を紹介したあと、次のようなコメントを加えている。

〈ここでの記述について、二つのことを述べておきたい。

第一に、「**1980**年代に……大谷禎之介（**1876—1881**年の諸草稿）によって点検」された、と記されているが、筆者は**1980—1981**年に第8稿の拡大再生産にかんする部分を解読して、それを**1981**年に拙稿にまとめて発表したのであって、第8稿の解読文に接したのは**1990**年にメガに収録するテキストの作成を引き受けたのちである。また、それ以外の「**1876—1881**年の諸草稿」の解読文を受け取って「点検」したのは、この部分の編集を引き受けた**1995**年以降であった。〉（上148頁）

これは「二つのこと」のうちの最初のものであるが、ここで、大谷氏はMEGA II部11巻の「付属資料の部」の一部の不正確な記述を指摘して、それを訂正されているのだが、しかしこれは大谷氏が同巻の編集者であることを考えれば、やや首をかしげざるをえない。もちろん、実際の編集作業というものがどういうものなのかはわれわれ部外者には分からないが、率直に考えて、なぜ、そうした不正確な記述があったのなら、編集の段階で訂正されなかったのかと誰しも思うであろう。「いや、それは自分が担当した部分ではないから」、とでも言われるのかも知れないが、しかし最終段階では、編集者であれば、すべての部分に一応のチェックの目を入れるべきであろうし、とりわけ自分自身について言及している部分ならばなおさらそうであろうと思われる。にも関わらず、すでに発刊されてから、こうした形で訂正するのはいかなるものであるのか。少なくとも編集者の一人として自省の弁が一言あってしかるべきかと思うのであるが、どうであろうか。

また大谷氏は〈第二に〉として、たしかに大谷氏が「解題」の「草案」を執筆したが、ヴァーシナとフォルグラーフの修正意見を入れてあちこち書き直し、最終的には大谷氏の意に沿わない内容になっているとこのことを記している。そして今回の論文は、だからその解題にとらわれないで書いたとされている。とするなら、それはどういう点で意に沿わないものなのか、また今回の論文のどの部分が解題と違った内容をなしているのか、そこらあたりも誰しも興味のあるところではないだろうか。もちろん解題を直接検討できるものなら、比較検討すれば分かるだろうと言われればそれまでであるが、しかしすべての『経済』の読者がそれができるわけではない。やはりそうした点も明らかにして頂いて、また出来たら関連して、ヴァーシナやフォルグラーフの意見も紹介して欲しいものである。しかし、残念ながらそうした説明はこの論文では見ることはできない。

## ●第1稿や第3稿にも「利用すべき箇所」があった？

---

これは別に大谷氏の諸説の批判的検討ということではなく、興味深い事実の指摘ということで、記しておきたいと思うのだが、大谷氏は、本巻（メガ第II部第11巻）所収の諸草稿の内容に立ち入る前に、第1稿（メガ第II部第4巻第1分冊で既刊、邦訳あり）と第3・4稿（メガ第II部第4巻第3分冊に収録予定）について、その概要を説明されている。そこで興味深いのは、第1稿や第3稿について、マルクスが後に書いた〈「利用すべき箇所」ではこれを「ノートI」と呼び〉とか〈マルクスは「第二部に属するもの」の表紙に「III」と書き付け、のちに「利用すべき箇所」で「ノートIII」と呼んだ〉と書いていることである。ということは、マルクスは「利用すべき箇所」では「ノートI」や「ノートIII」について言及しているということになる。つまりマルクス自身は「ノートI」（第1草稿）や「ノートIII」（第3草稿）にも「利用すべき箇所」があると自分では考えていたということにならないだろうか。

周知のように、エンゲルスは編集の段階では、第1稿や第3稿をまったく利用しなかったのだが、マルクス自身は利用すべきと考えていた箇所がそれらにはあったということにならないであろうか。もちろん、マルクスが「利用すべき」と考えていたからと言って、それはそのまま草稿として「利用すべき」と考えていたとは断定できないが、しかしエンゲルスが編集段階でまったく採用しなかった諸草稿にも「利用すべき箇所」があるとマルクス自身が考えていたことは重要なことではないだろうか。一体、マルクスはそうしたノートのどの部分をどのように「利用すべき」と考えていたのかは興味深いことである。誰か研究者のなかで、この問題を究明して頂けないものかと期待するものである。

## ●「ノートⅠ～Ⅳの執筆次期の推定」と若干の思いつき

マルクスが第2部のために書いた諸草稿は執筆時期も興味深いことであるが、こうした問題についても、今回の論文ではより一層詳しい事実が指摘されている。そこでここでは、大谷氏が推定している執筆時期を簡単にまとめておこう。

- ・「ノートⅠ」――1865年前半に、第3部の執筆（これは1964年の夏にとりかかる）を中断して書かれた。（エンゲルスは編集段階でまったく利用せず）
- ・「ノートⅢ」――1867年8月末ののち、とりわけ1868年に入ってから、第2部と第3部のための材料を書き付け、それを「利用すべき諸箇所」をまとめるときに、このノート「第二部に属するもの」と「第三部に属するもの」と書いた紙表紙でくるんで二つに仕分けしたが、その「第二部に属するもの」を「ノートⅢ」とした。（これもエンゲルスは編集段階で利用せず）
- ・「ノートⅣ」――Ⅲと同じ時期に、第2部のテキストとして書きはじめたもので、第1章と第2章の二番目の項目まで書いてある。全体で58頁分。この一部は「ノートⅡ」と平行して書かれている部分もあり、執筆時期を特定するのは困難。（エンゲルスは編集段階で第1篇と第2篇に利用した）。
- ・「ノートⅡ」――第1稿の全面的な書き直しになっている。執筆時期については、あまり正確には書かれておらず、1868年の春から1870年の中頃までに書かれたとされている。

これをみると、第3稿、第4稿、第2稿はほぼ同じ時期に書かれたと言えるのかも知れない。ただ第3稿は資料的な性格が強く、第2稿は第1稿を書き直す意図のもとに書きはじめられ、少なくとも第3章（篇）の途中まで書き続けられたが、しかし同時にその過程でマルクス自身は第1章と第2章について不十分さを覚えて、より練った形で書き直し始めたのが、あるいは第4稿だった可能性もある。エンゲルスも大谷氏も手稿をみる限り第4稿は第2稿よりも形式が完全であって、印刷できるまでに仕上げられているという印象を与えるものだと書いているからである。

とするなら、マルクスがこれらにⅡ～Ⅳの番号を打ったということは、そこにマルクス自身の何らかの意図が反映されているはずではないだろうか。まず第2稿にⅡと番号を打ったのは、やはり第1稿にⅠと番号を打って、それを書き直すという意図があったから、Ⅱと打ったと考えられるのではないだろうか。それに対して、ほぼ同じ時期に第2稿を書く準備資料として「1861-1863年草稿」執筆当時のサブノートから材料をとってまとめたもの（そのうち第二部関連のもの）にⅢと番号を打ち（第3稿）、さらに第2稿で不十分と思った第1章と第2章の一部を書き直したものにⅣと番号を打った（第4稿）ということになるのではないだろうか。つまりそうしたマルクスの作業の手順がそうした番号のつけ方に反映されていると考えられないだろうか。

●邦訳のある参考文献には、邦訳の頁数も併記すべきではないだろうか？

---

次にいよいよ今回刊行されたメガ第II部第11巻のテキストの内容の説明に入る。まず最初は「第2部第2稿について」である。ここからは第2稿の第1稿に対する理論的な前進が論じられ、そのなかでも〈資本循環理論と資本回転論における前進〉が対象になっている。しかしその内容を検討する前に、少し苦言を呈しておきたい。

特にこの部分では大谷氏は、第1稿ではマルクスは資本循環論を四つにわけていたが、それを第2稿では三つの形態として論じるようになったとしている。ただ第1稿で第二の形態とされた部分については、すでに第1稿でもそれが第三の生産資本の循環に吸収されるべきものであることを示唆しているところがあるとして、MEGA II/4、1分冊の頁数のみを記しているのであるが、しかしこの第1稿については、すでに大谷氏他による邦訳が出されているのであるから、邦訳の頁数も併記すべきではないかと思うのである（同じことは、他にも例えば上155頁上段後1～2行にある『1861-1863年草稿』や第1稿の参照箇所もやはりすでに邦訳が出ているのだから邦訳頁数も併記すべきではないかと思う）。とくにこの論考が学術雑誌ならともかく、『経済』誌に掲載されたことを考えるなら、なおさらそうした読者に対する配慮が必要ではないかという気がするのである。『経済』の読者のなかで、一体、どれだけの人がMEGAの原典を参照できる状況におかれているだろうか。こうした配慮の無さは、この論文は一体どういう読者層を想定して書かれたのかを疑わせるものである。もちろん、こうした配慮のなさは『経済』誌の編集部にも言いうるであろう。

## ●第2稿における理論的前進のやや過大ともいえる評価

さて、大谷氏は第2稿の【第1稿にたいする理論的な前進】として、まず[a 資本循環論と資本回転論における前進]を取り上げ、次のような指摘をされている。

〈マルクスは第1稿では、『1861—1863年草稿』での記述を引き継いで、可変資本は収入として支出される、つまり可変資本は労働者の手に移って収入となる、と書いていた(III/4.1, S. 305.33-35 und S. 319.36-39)。それにたいして第2稿でマルクスは、可変資本はあくまでも資本が循環のなかで取る形態にとどまるのであって、その貨幣形態から生産要素すなわち労働力の形態に転化するとき、それに対応して労働者の側では労働力が貨幣形態に転化するけれども、可変資本そのものが労働者の手に移るわけではない、ということを確認にした。つまり、資本の循環的運動と労働力の変態運動との二つを区別したうえで、それらが貨幣および商品の位置変換によって媒介されるのだ、ということをはっきりと把握したのである。〉(上151-152頁、引用部分の下線はマルクスによる強調、それ以外の部分の下線は大谷氏による強調)

しかし、ここでの大谷氏の第2稿におけるマルクスの理論的前進の評価は、やや過大に過ぎるような気がする。大谷氏は〈第2稿でマルクスは、可変資本はあくまでも資本が循環のなかで取る形態にとどまるのであって、その貨幣形態から生産要素すなわち労働力の形態に転化するとき、それに対応して労働者の側では労働力が貨幣形態に転化するけれども、可変資本そのものが労働者の手に移るわけではない、ということを確認にした。つまり、資本の循環的運動と労働力の変態運動との二つを区別したうえで、それらが貨幣および商品の位置変換によって媒介されるのだ、ということをはっきりと把握した〉とされている。しかし後の大谷氏自身の敘述を見ても(例えば5月号の下187頁以下の【第8稿におけるマルクスの厳しい自己批判】の項目を参照)、ここでのこうした指摘はやや行き過ぎの感じがするのである。というのはもし第2稿のなかでこうした問題が〈はっきりと把握されている〉のであるなら、どうして同じような問題を第8稿で〈自己批判〉する必要があったのか、ということになるからである(もちろん、ここで大谷氏がマルクス自身の〈自己批判〉とする評価が正しいのかどうかは検討の余地があり、それはそのところで問題にする予定であるが、しかし少なくともここでは大谷氏自身の敘述上の齟齬として問題にしておきたい)。

そして実際、事実問題として、可変資本が収入に転化するというような敘述は第2稿の段階でも、アチコチで見られるのである。その一つの例を紹介してみよう。以前、この「マルクス研究会通信」に2009.01.20に掲載した〈いわゆる「注釈32問題」について——市原健志氏の第2部第2稿の当該部分の翻訳を読んで気付いたこと——〉という3回の連載のなかで、このエンゲルスによって注釈32にされた部分を含む鍵括弧部分の直前の文章から市原氏は翻訳されているのであるが、そのなかにつぎのような一文がでて来る。

《第二に——これもI)とII)との第一の区別と関連しているのであるが、労働者はII)の場合にもI)の場合にも、自分の買う生活手段の代価を、彼の手のなかで流通手段に転化した可変資本

で支払う。》（市原健志氏《『資本論』に関する若干の新事実について――草稿を調査して――》〔『商学論纂』28-5・6/1987/3〕607頁）

このように、ここではマルクスは労働者は《彼の手のなかで流通手段に転化した可変資本で支払う》などと述べている。しかしいうまでもなく、労働者の手のなかで流通手段に転化するのは、彼自身の労働力の価値であり、その貨幣形態であって、決して可変資本ではない。つまりここではマルクスは、資本家の手のなかで可変資本として存在している貨幣に注目して、それが労働者に支払われて、労働者の手のなかで労賃になり、流通手段として機能して、労働者が生活手段を購入するために支払われると考えている。このように、第二稿でも必ずしも資本の循環形態と労働力の変態運動とが明確に区別されているとは言い難い部分も多々あるのである。だからそうした区別が第2稿では〈はっきりと把握されている〉という大谷氏の評価は、やはりやや行き過ぎではないかとの疑問が生じるのである。

## ●流動資本と固定資本との区別は「価値増殖過程」だけの問題ではない

これも先の一文に続く文章であり、第2稿の第1稿に対する理論的前進の一つとして、「資本循環論と資本回転論における前進」を論じている部分からである。

〈第2稿および第4稿の第2章でマルクスは、固定資本と流動資本との区別を最終的に明確にした。その前提の一つは、第1部の執筆のなかで達成された、労働は一方で、抽象的労働として対象化して新価値となるが、他方では具体的労働として、労働対象を生産物に形態変化させるとともに、生産手段の価値を生産物に移転し維持する、という価値増殖過程における労働の二重性の作用の明確化である。これによって、不変資本の価値の全部的移転と部分的漸次的移転との区別にもとづいて、不変資本のうちの固定資本の運動の独自性が最終的に確定され、それにたいして、同じ価値還流形態をもつ流動不変資本と可変資本とが流動資本として区別されることになった。〉（上152頁）

ここでは問題が厳密に論じられている。労働の二重性が固定資本と流動資本との区別のための前提の一つであることを明確にしたというだけでなく、この労働の二重性が使用価値の生産（労働過程）と価値増殖過程とで、どのような役割を果たしているかについて、極めて厳密且つ正確に論じられている。

ここでは大谷氏は〈労働は一方で、抽象的労働として対象化して新価値となるが、他方では具体的労働として、労働対象を生産物に形態変化させるとともに、生産手段の価値を生産物に移転し維持する、という価値増殖過程における労働の二重性の作用の明確化〉について述べている。ここで具体的労働の一つは〈労働対象を生産物に形態変化させる〉こと、同時に〈生産手段の価値を生産物に移転し維持する〉と述べられている。ここで〈労働対象〉と〈生産手段〉が明確に区別されて論じられていることに注意が必要である。生産手段にはいうまでもなく、労働対象も含まれるが、労働手段も含まれる。しかし新しい生産物として生産過程で消費されるのは労働対象であり、その形態変化によって新生産物が生産されること、だから労働手段は、その過程で作用し続けるが、しかしそれ自体が新生産物に物的に移転するわけではなく、だからそれが形態変化して生産物になるのではないこと、しかし価値の移転としては、労働対象も（そのすべてが）労働手段も（その一部が）移転させられるということが、こうしたカテゴリーの使い分けによって厳密に論じられているわけである。

ただ一つだけ難点を上げるとするなら、大谷氏は最後に〈価値増殖過程における労働の二重性の作用の明確化〉と述べているが、しかし労働の二重性について語るなら、問題は単に〈価値増殖過程〉だけの問題ではないこと、それは同時に〈使用価値の生産〉（フランス語版、現行版だと「労働過程」）の問題でもあるということか注意されなければならない。不変資本の価値の生産物への移転は、生産物としての使用価値の生産、つまり労働過程と不可分であって（それによって媒介されているのであって）、決して価値増殖過程だけの問題として論じることはできないからである。そして大谷氏の厳密な説明そのものがそうしたことを論じているのであり、にも拘らず問題が「価値増殖過程」だけの問題であるかに論じるのは、やはり軽率であり、疑問としなけ

ればならない。

だからまた不変資本における固定資本と流動資本との区別においても、常に使用価値が問題になるのであり（それが使用価値として労働対象になるか、すなわち形態変化を受けて物的にも生産物に移転するか、それとも労働手段として作用するだけで形態変化を受けずに、物的にもそのまま生産過程に留まるか等々が問題になる）、こうした使用価値の定在に規定されて、価値の移転の仕方、その還流形態の相違が生じてくるのだからである。だから使用価値を抜きにそれは論じることはできないことから、使用価値の生産は重要な契機として入ってくるのである。

ついでにこの問題について、マルクス自身は第二稿でどのように述べているのかを紹介しておこう。

《（一） 固定資本と流動資本という形態規定は、ただ、生産過程で機能する資本価値、すなわち生産資本の回転の相違から生ずるだけである。この回転の相違はそれ自身また、生産資本の色々な成分が自分の価値を生産物に移す仕方の相違から生ずるのであって、それらの成分が生産物価値の生産に関与する仕方の相違または価値増殖過程でのそれらの特徴的な働き方から生ずるのではない。最後に、生産物に価値を引き渡す仕方の相違は――したがってまたこの価値が生産物によって流通させられ、生産物の諸変態によって自分の元来の現物形態で更新される仕方の相違も――生産資本がとっている色々な素材的な姿の相違、すなわちそれらの素材的な姿の一部は個々の生産物の形成中に全部消費されるが他の部分はだんだん消費されて行くだけだという相違から生ずる。》（全集版203－4頁）

ここではマルクスは固定資本と流動資本との区別は生産資本のさまざまな成分が自分の価値をどのように生産物に移転するかによって規定されており、その相違によって区別されること、だから《価値増殖過程でのそれらの働き方から生じるのではない》と明確に述べている。さらにそうした価値の移転の相違は、生産資本のさまざまな素材的な相違（つまり使用価値の相違）から生じるとも明確に述べているのである。

● 「c 資本と資本との、資本と収入との、収入と収入との交換、という考え方の放棄」は果たして本当か？

---

次も第1稿に対する第2稿の理論的進展の一つとして大谷氏が指摘していることである。まず、大谷氏は〈第2稿の第3章での社会的総再生産過程の分析は、一方では、……貨幣流通を捨象した流通を論じたのちに、それを伴う流通を分析する、という二段構えの構成を第1稿から引き継いでいたことによる制約を残していたが、第1稿の第3章での分析に含まれていた大きな難点を乗り越えるものであった〉（上152頁）という。それがこうした「考え方の放棄」だということである。というのは〈マルクスはここでは、社会的総再生産過程の運動の核心を、商品形態を取った資本および収入が持ち手を変える三つの「交換」に見ていた〉が、〈こうした把握には、少なくとも、三つの難点がある〉（上153頁）のだということである。その〈三つの難点〉を、大谷氏は次のように説明している。

〈第一に、資本家も労働者もこれらの取引で、自分の資本または収入を、そのような規定性において相手に引き渡すのではなく、相手に引き渡すものはたんなる商品または貨幣でしかない。どちらの側も、これらの取引によって自分の資本または収入の形態を商品から貨幣へ、あるいは貨幣から商品へと変換するだけであり、彼らはけっして自分の資本や収入を手放すわけではない。

第二に、消費手段生産部門の労働者たちは、この部門の資本家から貨幣形態で労働力の対価である賃金を受け取り、この賃金でこの部門の資本家から商品資本の一部をなす商品を買うのである。彼らが、資本家から受け取ったそれぞれの生産物（消費手段）を互いに交換するのではない。同じく、生産手段生産部門の労働者たちは、この部門の資本家から貨幣形態で労働力の対価である賃金を受け取り、この賃金で消費手段生産部門の資本家から商品資本の一部をなす商品を買うのである。彼らが、生産手段生産部門の資本家から受け取った、生産手段の形態にある商品を、消費手段生産部門の資本家のもつ消費手段の形態にある商品と交換するのではない。

第三に、このような表現においては、資本家のもとの可変資本の貨幣形態での前貸による貨幣資本の労働力への転化と、その可変資本の貨幣形態での還流という、社会的総再生産過程における決定的な契機がすっぱり抜け落ちてしまう。〉（上153頁）

しかしここで挙げられている〈難点〉なるものは、すべて貨幣流通による媒介を考慮した場合に考えられうるものでしかない。大谷氏は先に第2稿はいわゆる「二段構えの構成を第1稿から引き継いでいたという制約を残していた」と述べていたが、こうした大谷氏が指摘する〈難点〉は、いわゆる「二段構えの構成」を「制約」と受けとめる大谷氏の立場と不可分の関係にあることが分かる（ついでにいうと、大谷氏は第1稿でも、そうした「二段構えの構成」になっていたかに述べているが、しかし正確には、第1稿では、そうした構成の必要には言及しているものの、構成そのものはそうしたものにはなっていない）。つまり大谷氏は、貨幣流通による媒介抜きでの叙述の意義を認めず、最初から社会的総資本の再生産の分析は、貨幣流通による媒介を入れて

なされなければならないという立場に立った上で、こうした〈難点〉なるものを上げているのである。だからこうした大谷氏の立場が正しくないとするなら、すなわち貨幣流通による媒介を考慮せずに、社会的総商品資本を価値と素材の両面からそれらの補填関係を考察する意義を認めるなら、こうしたマルクスの〈考え方〉は決して無意味なものではなく、〈放棄〉する必要はないこと、だから大谷氏がいう〈難点〉なるものも単なる不当な言い掛かり以上ではないとも言えるのである。

実際、マルクス自身は第8稿の段階でも「資本と収入」という観点そのものを放棄したわけではない。資本家の剰余価値や労働者の労賃が「収入」として支出されるという記述が第8稿で姿を消したわけではないのである。もちろん、「資本と資本との交換」や「資本と収入との交換」「収入と収入との交換」というような表題が姿を消したことは確かである。しかしそのことは「資本と収入」という形態規定性そのものが〈放棄〉されたことを意味するわけでは決してないし、そうした諸項目で検討されている社会的な総商品資本の価値・素材における補填関係が問題にされていないわけでは決してないのである（ただ第8稿では、貨幣流通による媒介を捨象した考察は、とりあえずは置いておいて、貨幣流通による媒介を入れた考察を「先取り」して考察しているだけなのである）。

実際の第1稿の敘述を辿って、大谷氏が主張する〈難点〉なるものを検討すると、それらはほとんど言い掛かりに近いものであることが分かる。それを少し検証してみよう。

まずマルクスは、これから考察する課題について、次のように論じている（引用は大月書店刊『資本の流通過程』から、下線はマルクスによる強調箇所）。

《資本の総流通過程＝再生産過程のこれまでの考察では（つまり第1章の「資本の流通（循環）」や第2章の「資本の回転」の考察では――引用者）、われわれはこの過程が経過する諸契機あるいは諸局面を、ただ形態的に考察してきたただけであった。これにたいして、今度は（つまり第3章の「流通と再生産」の考察では――引用者）われわれは、この経過が進行しうるための実体的な諸条件を研究しなければならない》（200頁）

そしてマルクスは《経過が進行しうるための実体的な諸条件を研究》する場合には、《資本の貨幣形態は、商品の変態 $W-G-W$ における貨幣一般と同様に、再生産の、媒介的ですがすぐに消えてしまう形態として〔機能する〕にすぎないし、また、現実的再生産過程そのものとはなんのかわりももたない》（200-201頁）ので、《それゆえわれわれは、この考察においては貨幣流通（および貨幣資本としての形態にある資本）を捨象する》（201頁）と断っている。つまりマルクスは貨幣流通による媒介の契機を捨象すると断っているのである。そしてその上で、マルクスは「収入」について、次のように説明している。

《すでに述べたように、われわれは剰余価値を、それが蓄積されるのでないかぎり、つまりそれが資本家の個人的消費に役立つかぎりでのみ考慮に入れる。剰余価値のこうした支出を、わ

れわれは剰余価値の収入としての支出と呼ぶ。他方、可変資本について言えば、それは貨幣の形態で労働者に前貸しされるのであって、労働者は、これと引き換えに彼の労働を引渡すが、その受け取った貨幣で彼は自分の生活手段を買う。労賃は労働の価値に、いなもっと正確に言えば労働能力の価値に等しい、と前提されているのだから、労働者は彼の全賃銀を彼の労働能力の再生産のために、それゆえ必需品の購入に支出する、ということが同時に前提されている。それゆえ、全可変資本が実際には(レアリーテル)収入として支出されるのであって、資本家にとってはそれは労働に転化するが、労働者にとってはそれは収入に転化する。つまり、貨幣形態によって行なわれる媒介を度外視すれば、可変資本は実際には(レアリーテル)、生活手段の形態で存在し、この生活手段が労働者階級の収入をなすのである。それゆえ、現実的生産過程の考察では、剰余価値として資本家によって消費される生産物部分と、労賃として労働者によって消費される生産物部分とはともに収入という共通の範疇に属するのである。したがってここでは、可変資本そのものは、すなわち、労賃・それゆえまた労働者にとっての収入・に転化するのではなく、資本家にとっての労働、つまり労働=必要労働+剰余労働に転化するかぎりでの可変資本は、さしあたりわれわれの考察の外に置かれるのである。》(202頁)

この一文を厳密に吟味すれば、マルクスには何の混乱もないことが分かる。確かにマルクスは《全可変資本が実際には(レアリーテル)収入として支出される》と述べているが、しかしここで重要なのは《実際には(レアリーテル)》という限定がついていることである。つまりマルクスは問題を《貨幣形態によって行なわれる媒介を度外視》して、素材的に見ているのである。そしてそうすれば社会のすべての《可変資本は実際には(レアリーテル)、生活手段の形態で存在し、この生活手段が労働者階級の収入をなすのである》。なるほど生産手段生産部門(現行版では部門I)の可変資本を表す商品資本(IV)は、素材的には直接には生活手段の形態で存在しているのではない。しかしそれは部門IIの不変資本が直接には生産手段の形態で存在していないのに対応しており、だから両者は補填関係にあるわけである。そしてこうした補填関係を考慮してみるなら、すべての可変資本は(だから部門Iの可変資本も)生活手段の形態で存在しているのである。こうしたことはマルクスにとっては自明のことであったと言える。

この場合も、マルクスは《全可変資本は……資本家にとってはそれは労働に転化する》とも明確に述べている。しかし《資本家にとっての労働、つまり労働=必要労働+剰余労働に転化するかぎりでの可変資本は、さしあたりわれわれの考察の外に置かれるのである》ともしているのである。なぜ、これが《考察の外に置かれる》のであろうか。それはすでに見たように、《これまでの考察では、……ただ形態的に考察してきただけであった》のに対して、《今度は……実体的な諸条件を研究し》ているからなのである。

つまり可変資本は資本の循環としてみるなら、貨幣資本から生産資本の形態に、すなわち労働力に転換し、さらに商品資本へ転換する。そしてその限りでは可変資本はただその形態を変えるだけで、資本家は彼らの可変資本を決して手放すわけではない。大谷氏らがあたかもマルクスが見落としているかに主張するこのような考察は、しかしマルクス自身は《形態的な考察》だとして、ここでは《考察の外に置》いているのである。ここでは《経過が進行しうるための実体的な諸条件を研究》するために《貨幣流通(および貨幣資本としての形態にある資本)を捨象》してい

なのだ。だから、可変資本が貨幣資本の形態から、生産資本（労働力）の形態や商品資本の形態に転換して、資本家の手元に止まり続けるなどというようなこと、つまり大谷氏が〈難点〉の〈第一〉に挙げるようなことは、マルクスにとっては分かりきったことではあるが、しかし今はそういうことを考察する場合ではないから、捨象しているのである。それを大谷氏は、あたかもマルクスはそうした問題を見落としているかに論じているのだから、これは言い掛かりの類ではないだろうか。

だからまた次のようなマルクスの説明にもなんの問題もない。

《さらに、資本主義的生産様式が、支配的に行なわれている生産形態であるばかりでなく、一般的かつ排他的な生産形態であると前提されているのだから、資本家にとってであれ労働者にとってであれ収入をなす諸商品も、不変資本の構成要素をなす諸商品も、まずは資本の生産物として、それゆえまた商品資本として存在するのでなければならない。それゆえ、収入にはいる商品資本と収入にはいる他の商品資本との交換、ならびに、収入にはいる商品資本と不変資本を形成する商品資本との交換、ならびに不変資本を形成する商品資本の相互のあいだの交換が行なわれなければならない。こうした交換の実体的(レアル)諸条件を研究することがわれわれの今度の仕事なのである。》(202頁)

これが大谷氏が〈放棄した〉という、〈資本と資本との、資本と収入との、収入と収入との交換〉ということでマルクスが考えていることなのである。ここには何ら〈放棄〉すべき間違った〈考え方〉などはない。現行版の表式で表すなら、〈資本と資本との交換〉というのは、部門Ⅰのcの商品資本の間の補填関係を意味し、〈資本と収入との交換〉というのは、Ⅰ(v+m)とⅡcとの商品資本の間の補填関係を意味している。また〈収入と収入との交換〉というのも、Ⅱ(v+m)の商品資本の間の補填関係を示しているのである。社会の総生産物、すなわち総商品資本が価値と素材の両面から如何なる補填関係にあるかを見るなら、これ以外にはありえない。Ⅰcは、いうまでもなく価値としては不変資本を表し、素材的には生産手段（生産手段の生産のための生産手段）である。これらは素材的には、あるいは鉄鉱石であったり、あるいは鋼材であるかも知れない。それらは互いに交換されて、それぞれの生産部門で再び生産手段として役立つわけである。あるいはまたⅠ(v+m)の一部は、あるいはリンネルであったり、Ⅱcは上着であるかも知れない。リンネルは部門Ⅱの資本家（裁縫業者）に生産手段として売られ、その代わりに部門Ⅰの労働者は部門Ⅱの資本家から上着を購入するであろう。ここには労働力の販売という契機が介在するが、すでに確認したように、マルクスは貨幣流通を捨象して考察しているのであるから、そうした契機も捨象され、ただ価値と素材の補填関係としのみ考察しているのである。そしてそうした考察においては、ただ資本と収入との交換があるのみなのである。

大谷氏は〈生産手段生産部門の労働者たちは、この部門の資本家から貨幣形態で労働力の対価である賃金を受け取り、この賃金で消費手段生産部門の資本家から商品資本の一部をなす商品を買入れるのであって、彼らが、生産手段生産部門の資本家から受け取った、生産手段の形態にある商品を、消費手段生産部門の資本家のもつ消費手段の形態にある商品と交換するのではない

〉などと彼が考える〈難点〉なるものを説明している。しかしそんなことをマルクスが知らなかったなどと本気で大谷氏は考えているのであろうか。あるいはまた〈消費手段生産部門の労働者たちは、この部門の資本家から貨幣形態で労働力の対価である賃金を受け取り、この賃金でこの部門の資本家から商品資本の一部をなす商品を買入れるのであって、彼らが、資本家から受け取ったそれぞれの生産物（消費手段）を互いに交換するのではない〉ともいう。そんな分かりきったことを述べて、それが〈難点〉だなどというのは、私にはどう考えても、マルクスを冒涇するに等しいと思えるのである。そして大谷氏が〈第三に〉として上げている理由なるものは、マルクスがそもそも意図的に貨幣資本や貨幣流通を捨象して論じていることを考えるなら、それが〈すっぱり抜け落ちてしまう〉などという批判は噴飯ものではないだろうか。

大谷氏は、結局、貨幣流通による媒介を捨象した考察の意義を認めないから、そうしたおかしなマルクス批判をすることになってしまっているのである。しかし大谷氏の著書『図解・社会経済学』（桜井書店2001.3.30）では、まったく正当にも、まずは貨幣流通による媒介を捨象して〈要するに、再生産表式のポイントは、単純再生産の前提のもとで、前年度の生産の結果としての両部門の商品資本が、どのようにして、本年度の生産の前提となる両部門の不変資本と可変資本とを素材的にも価値的にも補填すると同時に、本年度の労働者および資本家の収入を素材的にも価値的にも補填するかを明らかにしている、ということである〉（272頁）と説明している。そしてその上で、「貨幣流通による媒介」の説明に移っている。つまり正しくも「二段構えの構成」になっているのである。

● [a 第3章の課題についての新たな視点]なるものの説明も納得がいかない

次に大谷氏が第2稿の理論的進展として説明されているもので引っ掛かったのは、〈第3章の課題についての新たな視点〉というものである。というのは、その論旨が今一つジグザグしているような気がしたからである。

大谷氏は、マルクスが第3章の表題を第1稿では「流通と再生産」としていたのを、第2稿では「流通過程および再生産過程の実体的諸条件」という表題に変えたことを指摘しながら、実は「実体的諸条件」を解明しようとしたのは、第1稿であって、第2稿では「新たな視点」がそれに代わって据えられることになったかに論じているのである。

しかしもし、大谷氏が言うように、マルクスが第1稿では「実体的諸条件」を解明することに重点をおいていたが、第2稿では第1稿では十分に意識されていなかった「絡み合い」の解明という「見地」を「基本に据えることになった」と言うのであれば、むしろ第3章の表題のつけ方は、逆でなければならなかったのではないだろうか。つまり第1稿では「流通過程と再生産過程の実体的諸条件」とされ、第2稿になって「流通と再生産」というもっと包括的な表題に変えられるというふうなのである。ところが実際はその逆だったのである。だから大谷氏のここでの説明はいささかぎくしゃくしているのである。マルクスの表題の変更そのものは、大谷氏がいう第1稿から第2稿による第3章の基本的な視点の変更を少しも説明していないのである。説明しないどころかそれを反証さえしている。

第2稿の表紙にある目次は、マルクスが第2稿の本文を書き終えたあとに、もう一度、全体の見通しとして書いたものと推測されている（これは第2稿の本文のなかに書かれている表題と表紙にある表題とが必ずしも一致せず、後者の方が整然と構成されているように見えるからである。先に紹介した水谷・名和両氏の論文を参照）。つまりそれはマルクスが第2稿をとりあえず第3章の途中まで書き終えて、それまでの全体の考察を踏まえて、もう一度、第2部全体を見通して全体の構成のプランを再考して書いた、その意味では最後のものなのである（少なくとも第2部全体の見通しを書いたものは、これ以降のマルクスの草稿の中には見いだすことはできない）。だからマルクスが、第2稿の第3章の本文を、大谷氏に言わせれば、〈第1稿の第3章ではまだ十分に意識されていなかった見地を（つまり「新たな視点」を――引用者）基本に据えて書きながら、なおかつそのあとで第3章の表題を「流通過程および再生産過程の実体的諸条件」と書いたことを考えるならば、大谷氏の主張ではどうしても説明がつかないのである。

どうしてマルクスは第2稿では第3章の基本に据える視点を変えたのに、なおかつもう一度全体のプランを再考する段階になっても、相変わらず第3章の表題を、第1稿で展開したのと同じ見地のものをつけたのか、大谷氏はこれを説明しなければならないのではないだろうか。

また大谷氏は「実体的諸条件」ということでマルクスが何を考えていたかについて、次のように説明されている。

〈第1稿で頻出するこの「実体的〔realまたはreell〕」という形容詞でマルクスが考えていたのは、資本の循環に即して言えば、**W\_G**が、商品形態から貨幣形態への資本のたんなる「形態

的〔**formal**または**formell**〕」な変態であるのにたいして、生産過程での変態は、生産手段および労働力という特定の使用価値をもつ生産諸要素が特定の使用価値をもつ生産物に形態変化するという変態であり、したがってまた**G\_\_W**も、貨幣がそのような特定の使用価値をもつ生産諸要素に転化するという変態だということであって、こうした意味で**G\_\_W**および**\_\_P\_\_**は、ともに実体的な変態なのである。このように、「実体的」とは、使用価値にかかわる、という意味であった。だから、第3章が明らかにすべき「再生産の実体的諸条件」とは、社会的再生産の進行のために、使用価値の観点から区別される生産諸部門のあいだで、使用価値を異にする生産物が相互に転換されるのに必要な諸条件、ということであった。マルクスは、社会の生産諸部門を生産手段生産部門と消費手段生産部門との二つの部門に分割し、両部門の内部補填と両部門間での相互補填とによって再生産が進行するために必要な諸条件、諸法則がどのようなものであるか、ということ明らかにしなければならないと考え、これを「再生産の実体的諸条件」と呼んだのである。〉（上154頁）

もちろん、こうした説明が間違っているというのではない。しかしここでも大谷氏は〈資本の循環に即して言えば、……〉として資本の循環から説明されているのであるが、これは果たして問題の説明としては正しいやり方であろうか。これはすでに紹介した一文であるが、マルクスは《実体的な再生産過程の考察のためには、貨幣をひとまず捨象することができる》理由を次のように説明していた。

《そのかぎりでは資本の貨幣形態は、商品の変態**W-G-W**における貨幣一般と同様に、再生産の、媒介的ですがすぐに消えてしまう形態として〔機能する〕にすぎないし、また、現実的再生産過程そのものとはなんのかわりももたない。……したがってどちらの場合にも、実体的(リアル)な再生産過程の考察のためには、貨幣をひとまず捨象することができるのである(つまり、資本が貨幣に形態的に転化すること、資本が貨幣形態を周期的にとることが、摩擦なしに行なわれるものと前提する場合には〔そうすることができるのであり〕、またじっさいわれわれはさしあたりこのように前提するのである)。それゆえわれわれは、この考察においては貨幣流通(および貨幣資本としての形態にある資本)を捨象する。》（200-201頁）

だから問題は資本の形態転換が問題になる「資本の循環に即し」た説明ではなく、ここでマルクスが述べているように**W-G-W**の過程における貨幣と同様に、それを捨象して問題を捉えなければならないということである。つまり**W-W**の過程として問題を考えるべきだということである。これは資本の再生産過程としては社会的な総商品資本の相互の補填関係を意味している。社会の総商品資本を素材と価値との両面からの相互の補填関係を論じる場合には、貨幣はただ媒介的な契機として現われるだけだから、捨象して考えることができるし、しなければならないというのが、マルクスの考え方なのである。

またマルクスは第1稿の「第1節 資本の諸変態」の最初のあたりで、それぞれの章の課題を明らかにしているが、そこでは「第3章」について、次のような説明がある。

《第3章で行なうように、流通過程を現実の再生産過程および蓄積過程として考察するさいには、たんに形態を考察するだけではなくて、次のような実体的(レアル)な諸契機がつけ加わる。

(1) 実体的(レアル)な再生産(これは蓄積――ここではただ、拡大された規模での再生産のことである――を含む)に必要な諸使用価値が再生産され、かつ相互に条件づけあう、そのしかた

(2) 再生産は、再生産を構成するその諸契機の、前提された価値＝価格諸関係によって条件づけられているのであるが、この諸関係は、諸商品かその価値で売られる場合は、労働の生産力変化によって生じるその真実価値の変動によって変化するものである。

(3) 流通過程によって媒介されたものとして表現される、不変資本、可変資本、剰余価値関係。》(9頁)

つまりマルクスが第3章でやろうとしていることは、社会の総商品資本を素材(使用価値)と価値(これは与えられた諸使用価値の生産諸力において、社会の総労働を諸使用価値の生産諸部門に如何に配分すべきかの指標を意味している)の両面から、それらがどのように交換されて補填し合わなければならないかを考察しようということである。だからこそ、ここでは諸使用価値が重要な考察の対象になってくるのである。そしてそれをマルクスは《実体的(レアル)な再生産過程》と述べているのである。

マルクスは諸商品の諸使用価値においては、社会的な分業が示されていることを次のように説明していた。

《さまざまな種類の使用価値または商品体の総体のうちには、同じように多様な、属、種、科、亜種、変種を異にする有用労働の総体――社会的分業――が現れている。……どの商品の使用価値にも一定の合目的的な生産的活動または有用労働が含まれている。諸使用価値は、質的に異なる有用労働がそれらに含まれていなければ、商品として相対することはできない。その生産物が一般的に商品という形態をとっている社会においては、すなわち商品生産者たちの社会においては、独立生産者たちの私事としてたがいに従属せずに営まれる有用労働のこうした質的相違が、一つの多岐的な体制に、すなわち社会的分業に、発展する。》(全集版第1巻57頁)

社会的総再生産過程を考察する第3章では、社会の総生産物が過不足なく、社会的分業にもとづいて、それぞれが必要な部門や諸個人に配分される過程を(商品資本の流通過程として)考察することである。そうした社会的分業を体現しているのが、諸商品の使用価値なのである。だからこそ第3章では諸使用価値が問題にならなければならないのである。生産手段部門と生活手段部門とに社会的生産が大きく分けられるのは、それが一つの多岐的な体制となっている社会的分業のもっとも基本的な構成部分だからである。実際には、社会的な総生産物は、素材的にも価値的にも、社会的分業にもとづいて、あらゆる生産部門間において、また個人的消費に対しても、相互に補填し合わなければならないのである。それらは部門Ⅰ内部での、あるいは部門Ⅰと部門Ⅱと

の間での、さらには部門Ⅱ内部での相互の補填関係として捉えることができる。使用価値が問題になる理由はそうしたところにあるのであって、そうした観点が大谷氏には欠けているように思えるのである。

大谷氏は〈第2稿の第3章では、第1稿の第3章ではまだ十分に意識されていなかった見地を基本に据えることになった〉として次のようにその内容を説明されている。

〈すなわち、第一に、商品資本→貨幣資本→生産資本→商品資本、と形態を変化させていく資本の循環過程。第二に、商品資本のうちの剰余価値を表わす部分→貨幣→資本家の個人的消費手段、と形態を変化させていく資本家の収入（剰余価値）の変態。そして第三に、労働力→貨幣→必要生活手段、と形態を変化させていく労働者の労働力の変態、この三つの循環ないし変態が互いにどのように絡み合っただけで社会的総再生産過程を形成しているのか、ということ、商品資本の循環を基礎に据えて全面的に考察する、という見地である。第2稿の第3章の各所でマルクスは、社会的総再生産過程をこの視点から考察しようと努めた。〉（上154-155頁）

しかしこれらも、やはり貨幣流通と貨幣資本を考慮した場合の問題である。それらを捨象して考察している第1稿で、そうした「見地」が「十分に意識されていなかった」どころか、マルクスは「十分に意識して」それらを捨象しているのである。そして第2稿では、今度は問題は「二段構えの構成」で考察されており、よって単純再生産もまずは「a 貨幣流通による媒介なしの敘述」がなされたあと、「b 貨幣流通による媒介を入れた敘述」がなされているわけである。だからその意味では貨幣流通や貨幣資本の契機も考察の対象に入ってくるわけで、大谷氏が指摘するような「見地」が入ってくることは確かであろう。しかしそのことは何かそうした「見地を基本に据えることになった」ことを意味しないであろう。そうした見地も考察の対象として入ってくるということになったということだけではないかと思うのである。

ついでにいうと、大谷氏は「実体的」という概念を第2稿では拡張しているとして次のように指摘されている。

〈第2稿の第1章では、価値増殖過程での価値量の変化（増大）をも「実体的変化」と呼ぶことによって、この「実体的」という概念は価値の量的変化をも含むものに拡張された〉（11頁下段）

しかし具体的には第2稿の当該部分が引用されているわけでもなく、指示されてもいなので何とも確認しようがない（第2稿の第1章については、すでに八柳良次郎氏による翻訳があるのではあるが）。このあたりも少し配慮が必要なように思えた。

因みに、この問題については、早坂啓造氏の詳細な考察がある（《『資本論』第Ⅱ部の成立と新メガ》東北大学出版会、250-264頁）。ただし同氏も第1稿だけにもとづいて考察しているだけである。同氏は概念の拡張といった観点ではなく、マルクスはこの用語を「2様に使い分けて」と指摘されている。これはただ参考のために紹介するだけであるが。



●【第2稿第3章における二段構えの叙述方法による制約】なるものへの根本的な疑問

この部分で、大谷氏は先に指摘した「新しい視点」を、第2稿では十分に生かせなかったという。というのは第2稿では、いわゆる「二段構えの構成」とらわれていたからだというのである。しかしここでの大谷氏の主張は、氏が最後に書いている〈後述するように、こうした二重の叙述方法という枠組みは、のちの第8稿で完全に切り払われることになる〉（上157頁）との判断のもとに書かれており、氏のそうした判断が正しくなければ、ここで書かれていることも正しいとはいえないものなのである。しかしその問題はとりあえずは置いておいたとしても、ここでの大谷氏の論述は、論理的に考えてもおかしなものである。というのは、大谷氏は第2稿について、次のように説明している。

〈彼は第2稿の表紙に書き付けた項目編成のなかで、この章の「1 社会的に考察された、可変資本、不変資本、剰余価値」を「A 単純な規模での再生産」と「B 拡大された規模での再生産。蓄積」とに分け、これらをまたそれぞれ「媒介する貨幣流通を無視した」叙述 a と「媒介する貨幣流通を伴う」叙述 b とに分けた（S. 4.17-24）。マルクスは第3章で、「A 単純な規模での再生産。（貨幣流通を無視して叙述）」を書いたのちに、「b 媒介する貨幣流通の叙述」に転じたが、ここでさまざまな記述を試みたのちに叙述を中断した。〉（上155頁）

そしてこれを次のように批判している。

〈いま見たように、社会的総資本の再生産は、両生産部門における商品資本の循環（ $W' \_ G \_ W \dots P \dots W'$ ）、資本家の剰余価値の変態（ $w \_ g \_ w$ ）、労働者の労働力の変態（ $W(A) \_ G \_ W$ ）の三者の絡み合いによって進行する過程である。この過程に即してみると、貨幣は、流通手段として機能することによってこの絡み合いを成り立たせる媒介環であり、この三つの変態運動のなかの不可欠の形態である。貨幣流通を捨象するというのは、これらの変態運動のなかの貨幣形態を度外視し、流通手段としての貨幣による絡み合いの媒介を度外視するということである。その結果として、すべての変態  $W \_ G \_ W$  は、商品が直接に他商品に転化する過程  $W \_ W$  として観察されることになり、それら相互の絡み合いを成立させるものは商品と商品との交換だということになる。

このような方法の難点は、とりわけ第Ⅰ部門と第Ⅱ部門とのあいだでの諸変態の絡み合い、とりわけ、第Ⅰ部門の資本家と労働者とのあいだでの労働力の売買によって媒介される両部門間の相互補填の把握において明らかとなる。〉（上155-156頁）

ご覧のように、ここでも大谷氏が指摘する〈難点〉なるものは、貨幣流通による媒介を前提にしたものである。つまり本来は貨幣流通によって媒介されている事象をその貨幣流通による媒介を捨象すると、貨幣流通によって媒介されている事象が正しく把握できないということではない。しかしこんなことは大谷氏にいわれるまでもなく、当たり前のことではないだろうか。貨幣流通によって媒介されている事象を、その媒介の契機を捨象して考察するということは、貨幣

流通によって媒介されている事象の根底にあるものを、とりあえずは純粹に取り出して考察するということであって、だから貨幣流通によって媒介されることによるさまざまな事象がとりあえずは視野の外に置かれることは論理的に考えても、当然のことではないだろうか。現象的に貨幣流通によって媒介されているということは、その媒介されるもの間に内的な関連があるから、そうなのであって、だからとりあえずは、その媒介の契機を捨象して内的関連だけを純粹に取り出して考察することは、その媒介されている現象諸形態を科学的に解明するためにも不可欠な手続きなのである。むしろそうすることによってこそ、貨幣流通によって媒介される諸現象の特徴、すなわちその特殊歴史的な性格が浮き彫りになるのであり、マルクスのいわゆる「二段構えの構成」の意図もそこにあると考えなければならないのである。

確かにもしマルクスが第2稿で〈「媒介する貨幣流通を無視した」叙述 a〉だけをやっている、それですべての問題が解明できたとしているのなら、大谷氏の批判も意味がある。しかしマルクス自身は〈「媒介する貨幣流通を伴う」叙述 b〉もやっているのだから、大谷氏の批判はある意味では無意味であり、無駄骨折りでしかない。

だからもし大谷氏がその批判をやりたいのなら、マルクスが第2稿でやっているという〈「媒介する貨幣流通を伴う」叙述 b〉そのものが、そうした〈難点〉を持っていると指摘することではないだろうか。そうした批判ならそれはそれで無意味ではないだろう。

だからそもそも第2稿におけるマルクスの叙述方法の批判としては、大谷氏のやり方は間違っているのである。「二段構えの構成」を批判するのなら、大谷氏がやるべきことは、その第一段階の〈「媒介する貨幣流通を無視した」叙述 a〉は不必要なものだ、そんなものを論じることは間違いなのだということを論証することなのである。そうするのではなく、ただ〈「媒介する貨幣流通を伴う」叙述〉の必要をいくら対置してみても、マルクス自身もそれをやっているのなら、それは批判にはならないのである。あとはそのマルクスの〈「媒介する貨幣流通を伴う」叙述〉の内容そのものを批判的に論じるしか大谷氏には残された道はない筈なのである。

では大谷氏は、「二段構えの構成」の最初の部分である、〈「媒介する貨幣流通を無視した」叙述 a〉の意義をまったく認めないのかということ、どうもそうではないらしいのである。例えば次のような文言もみられるからである。

〈ところが、このような仕方で行なわれるもろもろの転態を媒介する貨幣流通を度外視してしまえば、第Ⅰ部門の生産手段と第Ⅱ部門の消費手段とが交換されることによって、前者の生産手段が消費手段に、後者の消費手段が生産手段に転換されるという、両部門間の超歴史的な補填関係を把握することはできても、第Ⅰ部門の資本家による可変資本の貨幣形態での前貸、すなわち労働者からの労働力の購買と、第Ⅰ部門の労働者による第Ⅱ部門の消費手段の購買という、第Ⅰ部門の労働者と第Ⅱ部門の資本家とのあいだでの相互転態とが、すなわち資本主義的生産のもとでの両部門間での転換の二つの決定的な媒介契機が後景に退かざるをえない。〉（上156頁）

〈たしかに、貨幣流通を度外視することは、社会的再生産過程を構成するさまざまな部分運動

を把握するさい、過程の理解にとって役立つことがある。〉（上157頁）

このように大谷氏は貨幣流通を度外視して、価値・素材における補填関係を考察する意義は〈両部門間の超歴史的な補填関係を把握する〉ものとして、〈社会的再生産過程を構成するさまざまな部分運動を把握する〉ために、役立つことを認めているのである。とするなら、大谷氏はマルクスの第2稿の敘述プランを批判する意味がないことになる。

そこで唯一、大谷氏が批判の根底に置けるのは、マルクスは第8稿ではそうした第2稿のプランを放棄し、最初から貨幣流通による媒介を考慮した考察を行なっているのではないか、ということだけである。つまりマルクスは第8稿では〈「媒介する貨幣流通を無視した」敘述 a〉の意義を否定したと、大谷氏らは事実上主張するわけだが、しかしそこには何の根拠も示されているわけではない。ただ第8稿では最初から貨幣流通の媒介を入れて考察しているという事実を指摘するのみである。例えばマルクスがさまざまところで（第1稿でも第2稿でも）貨幣流通の媒介を捨象して考察する意義を論じているように、こうした「二段構えの構成」がよくないことを一言でもマルクスはどこかで直接問題にして論じているというのなら話は別ではあるが、そうした部分は第8稿のどこを捜しても見つからないのである。にも関わらず第8稿ではマルクスはそうしたプランを破棄したと大谷氏らは主張されるのだが、もし本当にそうであったなら、そうしたことを直接論じているか、あるいは少なくともほのめかしているような、マルクス自身の何らかの言及があって然るべきではないだろうか。そうした言及がまったくないということは、マルクスにはプランの変更の意図は無かったとわれわれとしては判断すべきではないだろうか。そしてその上で、第8稿が第2稿の当初のプランのうちの、貨幣流通による媒介を入れた考察のみを、とりあえずは〈先取りして〉考察しているとするなら、こうした大谷氏らの論拠はもろくも崩れ去るのである。実際、大谷氏自身が認める貨幣流通による媒介を度外視した敘述の意義を考えるだけでも、それを論じる十分な理由があることを示しているのではないだろうか。

ついでに言うと、大谷氏は拡大再生産の場合は〈貨幣の運動を捨象して敘述できることはほとんどわずかなことにとどまらざるをえない〉（上157頁）などとも述べている。しかし、少なくともマルクスは、大谷氏が指摘する『1861-3年草稿』の当該個所や第1稿では拡大再生産を貨幣流通を捨象して論じているのであり、マルクスがそれを本格的に論じる場合にも、それが「わずか」でしかないとどうして断定できるのであろうか。第2稿の単純再生産の貨幣流通による媒介を捨象した敘述が、かなりの分量になっていることを考えるなら（それは先に紹介した水谷・名和両氏の前掲文献によれば、草稿の頁数で142-158頁にもなる〔前掲論文153頁参照〕）、なおさらそうした大谷氏の断定には疑問符がつくのである。それにそもそも問題は量の多少ではなく、そうした考察の意義を認めるのかどうかではないだろうか。

早坂啓造氏は、貨幣流通による媒介を捨象して考察する意義について、マルクスは第2稿で次のように語っていると指摘している（ただし早坂氏は大谷氏とは違い、貨幣流通を捨象した敘述が、必ずしも「超歴史的な補填関係」のみを示すものではないとも述べているのではあるが）

〈マルクスは、「貨幣抜き」の再生産でも、決して単なる生産物交換ではなく、一般的・抽象的な再生産、つまりどの社会構成体にも属さない再生産でもないことを強調しています。反対に、それはまさしく、特殊資本主義的な階級関係の再生産をも含んでいるのです。同様に、マルクスは、「社会的資本の年間の機能を……その結果において考察するならば」と述べて、再生産の運動の各個別の行為は捨象されて、過程が「結果において」叙述されていることを、明確に示しています。さらに、ここでは、「それ〔生産的消費と個人的消費〕は商品世界の再生産と、資本家階級と労働者階級との再生産（すなわち維持）、したがって総生産過程の資本主義的性格の再生産も含んでいる」と述べてもいるのです。

マルクスは、さらに方法上の枠組みについても触れています。すなわち、個々の資本にとっては、自己の運動の外部に商品世界、したがって商品市場が存在する。したがって、個々の資本の運動に限定すれば、社会総体において年々生産される商品の総体（社会的総生産物）の実現を問題とすることがそもそも不可能であろう。だが、社会的資本の観点からは、商品世界、したがって商品市場は、資本の、正確には社会的資本の運動の内部に設定されている。その限りで、実現の問題を外に追いやることなく、直接正面から立ち向かうことが出来よう、と。さらに、単純再生産を想定すれば、社会的総生産物がいかにして実現されるのかという問いに際して、買い手をもはや当該社会の外部に、つまり新たな企業に参加している者に、探し求めることは出来ない。なぜなら、ここでは蓄積は捨象されているのだから。むしろ、価値補填と素材補填との「逃げ道」なしの自己完結を確立せねばならない。この問題の解決こそ、再生産過程の叙述の核心点をなすのだ、と。〉（「『資本論』第Ⅱ部第3篇のエンゲルス編集稿とマルクス第Ⅱ稿、第Ⅲ稿の構成とを較するとーメガ（MEGA）第Ⅱ部門第13巻の編集作業からー」『経済』09年2月号154頁）

私は貨幣流通による媒介を捨象した考察の意義を認めるという点で、早坂氏の立場を擁護するのであるが、しかし〈マルクスは、「貨幣抜き」の再生産でも、決して単なる生産物交換ではなく、一般的・抽象的な再生産、つまりどの社会構成体にも属さない再生産でもないことを強調しています〉という早坂氏の主張には首をかしげざるをえないのである。貨幣流通による媒介を捨象すれば、労働力商品の販売という資本主義的生産の基本的な契機（よってまた可変資本の貨幣資本から生産資本としての労働力への転化と労働力の価値の労賃への変態）が捨象されるからである。だからここで早坂氏が主張していることには納得が行かないといわざるをえない。

例えば早坂氏は第2稿の「貨幣流通なしの叙述」の冒頭（これは現行版第20章第1節の冒頭部分に採用されている）でマルクスが《社会的資本ーつまり個別的諸資本がその断片をなすに過ぎない総資本であって、これらの断片の運動はそれらの個別的運動であると同時に総資本の運動を構成する環でもあるー、この社会的資本の一年間の機能をその結果において考察するならば、すなわち、社会が一年間に供給する商品生産物を考察するならば、社会的資本の再生産過程はどのように行なわれるのか、どんな性格がこの再生産過程を個別資本の再生産過程から区別するのか、そしてどんな性格がこれらの両方に共通なのか、が明らかになるに違いない。年間生産物は、社会的生産物のうちの資本を補填する諸部分すなわち社会的再生産を含むとともに、消費財源に入って労働者や資本家によって消費される諸部分を含んでおり、したがって生産的消費と

ともに個人的消費を含んでいる。それはまた資本家階級と労働者階級との再生産（すなわち維持）を含んでおり、したがってまた総生産過程の資本主義的性格の再生産を含んでいる》（現行全集版482頁）と述べている部分の後半の一部分を引用して、あたかもマルクスが貨幣流通による媒介を捨象して考察する場合も、《資本家階級と労働者階級との再生産（すなわち維持）を含んでおり、したがってまた総生産過程の資本主義的性格の再生産を含ん》だものとして考察しているかに論じているが、しかし早坂氏はこの部分でマルクスが何をいわんとしているのかを十分理解されているとは言い難いのである。この部分で、マルクスが言いたいことは、貨幣流通による媒介を捨象して考察する、年間生産物の使用価値が示すリアルな関係（素材的な関係）というものは、それが生産的消費に入っていくものか、それとも個人的消費に入っていくものかを示すものである。だからそれらの価値・素材の両面からの補填関係は、そうした補填関係を現実に媒介している商品世界の再生産と資本・賃労働の階級関係の再生産（あるいはその維持）、あるいは総生産過程の資本主義的性格の再生産を含んでいる（前提している）のだ、ということである。つまりマルクスが言いたいのは、こうした価値・素材の補填関係を考察することは、商品世界や資本主義的世界を考察するための前提であり、そうしたものへと発展する内容を含んでいるのだ、ということなのである。それを早坂氏は、あたかも貨幣流通抜きで述べた直接、資本主義的生産の関係そのものが問題になるかに早とちりされて理解されたように思えるのである。

あるいはまた、そのあとで早坂氏は〈マルクスは、さらに方法上の枠組みについても触れています〉として、マルクスが述べていることを要約して説明されているのであるが、この部分は、知人からの知見によれば、エンゲルスが編集段階で取り入れなかった次のような第2稿の敘述の要約なのだという。

《諸困難が見出されると、人は、ポンティウスからピラトスにたらい回す一連の処置によって、最終的にはどっちみち計算は割り切れなければならないのだという表象に満足している。この言い逃れは、社会的資本とそれゆえ社会的生産物価値とかかわり合わねばならなくなるとなくなる。各個の個別資本にとっては、商品世界は外部に存在する。しかし社会的資本とその生産物は全商品世界をそれ自身のうちに包含している。さらに、単純再生産の考察は、たとえばその中で生産された生産手段は新たに蓄積された資本の一形態であるという言い逃れをはばむのである。単純再生産の限界の内部で、単に消費された不変資本のための補填が可能なのである。》（M E G A.Ⅱ/11S.390.24・34）

これがもし本当なら、早坂氏は問題をかなり自分風アレンジして拡大解釈されているような気がする。いずれにせよ、ここでマルクスは何を問題にしているのであろうか。マルクスが《各個の個別資本にとっては、商品世界は外部に存在する。しかし社会的資本とその生産物は全商品世界をそれ自身のうちに包含している》と述べている部分で問題にしているのは、やはり《社会的総資本とその生産物》、つまりその使用価値は、《全商品世界をそれ自身のうちに包含している》。つまり《社会的総資本とその生産物》の諸使用価値は、その社会における社会的分業を表しており、それらがどのように交換されて補填しあわなければならないかを表すものであり、

だからその限りではそれは《全商品世界をそれ自身のうちに包含している》のだということなのである。つまりこれも早坂氏が最初に取り上げている第2稿の冒頭の部分と同じように、貨幣流通による媒介を捨象した考察は、貨幣流通を媒介にしている資本主義的生産の流過程を《包含している》、つまりその基底にあるものであり、それを前提にしており、それへと発展する内容を含んでいるということ以上ではないのである（もちろん〈方法上の枠組み〉といったことでもない）。

マルクスは第2稿における貨幣流通による媒介を捨象した単純再生産の考察において、次のように述べている。

《仮に生産が資本主義的でなく社会的であるとすれば、明らかに、部門Iのこれらの生産物はこの部門の色々な生産部門の間に、再生産のために、同様に絶えず再び生産手段として分配され、一部分は、直接に、自分が生産物として出てきた生産部面にとどまり、反対に他の一部分は他の生産場所に遠ざけられ、こうしてこの部門の色々な生産場所の間に絶えず行ったり来たりが行なわれることになるであろう。》（現行全集版522-523頁）

上記の一文は現行版の第6節の最後の部分であるが、現行版に取り入れられなかったが、「貨幣流通を考慮しない単純再生産の補足的な論述のように思われる」部分が草稿の154-158頁にあり、その部分が前掲の水谷・名和両氏によって要約・紹介されているが、そこには次のようなものがある。まずマルクスは次のような表式を書き、そしてそのあとで、次のようにその表式を説明をしているのだという(以下は、前掲の水谷・名和両氏の前掲論文から)。

《 I消費手段  $400C + 100V + 100m$   $C 400 + V 100 + M 100$

II生産手段  $800C + 200V + 200m$   $C 800 + V 200 + M 200$ 》（前掲論文164頁）

《前掲の表式は、単純再生産を前提していると同時に、計画的な均衡した社会的生産をあらわすべき表式でもある。》（同165頁）

このようにマルクスは貨幣流通による媒介を捨象した考察では、それが《生産が資本主義的でなく社会的である》場合ならどうであるとか、《前掲の表式は、単純再生産を前提していると同時に、計画的な均衡した社会的生産をあらわすべき表式でもある》というように対象の一般性、すなわちそれが階級社会に固有のものではないことを示唆しており、やはりこの点では、早坂氏のように〈特殊資本主義的な階級関係の再生産をも含んでいる〉ものとしてではなく、大谷氏が指摘するように、〈超歴史的な補填関係を把握する〉ものとしてマルクス自身も捉えていると解釈する方が正しいように思えるのである。

また、早坂氏はエンゲルスが編集の段階でマルクスが「貨幣抜き」の敘述の構想的（体系的）意義を確認していた多くの章句を削除した」とも指摘し、そうしたものの一つを次のように紹介し

ている。

《最後に、問題をもっとも単純な諸条件に還元するために、貨幣流通を、したがってまた資本の貨幣形態をまったく捨象しなければならない。流通する貨幣量は、明らかに、それを流通させる社会的総生産物の価値の構成要素をなすものではない。したがって、総生産物の価値がいかにして不変価値等々に配分されるのかということが問題であるならば、この問いそれ自体は、貨幣流通とは無関係である。問題が貨幣流通を顧慮することなく扱われた後に、はじめて貨幣流通に媒介されたものである現象がいかに関われるかを理解することが出来る》（『経済』09年2月号155頁）。

実はこの部分は、先に紹介した水谷・名和両氏の論文でも早くから紹介されていたのである。ただそれは要約としてであったが、次のように書かれている。

〈エンゲルスは現行版を編集するさいに、貨幣流通をさしあたり捨象する理由を述べている段落を省略している。プレイアード版『資本論』第2部にその部分がリュベルによって解読されて仏訳されて収載されているのでその要旨を紹介しておこう。すなわち、再生産をもっとも単純な条件で考察するためには貨幣流通、資本の貨幣形態が捨象されねばならない。なぜなら、流通貨幣量は社会的生産物の価値要素をなさないし、社会的生産物がどのように不変資本価値等々へと分かれるかという問題は貨幣流通から独立した問題であるからである。〉（前掲153頁）

なおついでに参考のために指摘しておく、この早坂氏が引用している一文は新日本新書版の『資本論』（資本論翻訳委員会訳）第7分冊628頁にも、また上製版2巻632頁にも訳者注として紹介されている。

● 〈第Ⅰ部門の資本家と労働者とのあいだでの労働力の売買によって媒介される両部門間の相互補填〉は第Ⅱ部門の〈第Ⅰ部門からの生産手段の購買によって開始される〉というのは本当だろうか？

これは先に検討した【第2稿第3章における二段構えの敘述方法による制約】と大谷氏が題して論じている部分のなかにある大谷氏の一つの主張の批判的検討である。だから本来なら先の項目で論じても良かったのであるが、しかし若干問題が異なると思い、別項目として論じることにした。

ここで大谷氏は貨幣流通による媒介を捨象する方法の〈難点〉が、〈とりわけ第Ⅰ部門と第Ⅱ部門とのあいだでの諸変態の絡み合い、とりわけ、第Ⅰ部門の資本家と労働者とのあいだでの労働力の売買によって媒介される両部門間の相互補填の把握において明らかとなる〉（上156頁）と述べて、次のように書かれている（下線は大谷氏による傍点による強調）。

〈この相互補填は、第Ⅱ部門の商品資本の不変資本価値の一部の生産資本（生産手段）への転化、すなわちこの部門の資本家による第Ⅰ部門からの生産手段の購買によって開始される(2)。これによって第Ⅰ部門の商品資本の可変資本価値が貨幣形態に転化する。すなわち、前年度に前貸されたこの部門の可変資本が貨幣形態で還流するのである。そこで第Ⅰ部門の資本家は、生産過程の進行とともに次第に（たとえば週ごとに）労働者に労働力の対価である賃金を後払いしていく。これは、貨幣形態での生産過程への可変資本の前貸である。労働者は、後払いで次第に（たとえば週ごとに）受け取る賃金によって、第Ⅱ部門の消費手段を購買し、これを消費することによって労働力を再生産する。つまり労働者のもとでは、労働力→貨幣→消費手段という変態を経て、労働力が再生産される。第Ⅱ部門では、これによって、商品在庫として手持ちしている商品資本（消費手段）のうちの不変資本価値の一部分が次第に（たとえば週ごとに）貨幣形態に転化する。すなわち、第Ⅰ部門からの生産手段の購買に前貸した貨幣額（流通手段）が、年度末までにすべてふたたび貨幣形態で還流するのである。〉（上156頁）

つまりこの相互補填は、部門Ⅱが追加貨幣をまず最初に流通に投じることから開始されるというのである。もちろん、こうした捉え方が間違いだと主張するわけではない（そればかりかそれはまったく正当な主張のように私にも思える）。しかしマルクスは、単純再生産における当該部分の相互補填については、実際には、次のように述べているのである（下線はマルクスによる強調箇所）。

《こうして、部門Ⅰでは、総資本家は、生産物Ⅰすなわち労働者が生産した生産手段の価値のうちのv部分としてすでに存在する部分の代わりに、1000ポンド（私がポンドというのは、ただ、それが貨幣形態にある価値だということを表わすためでしかない）=1000vを労働者に支払った。労働者たちはこの1000ポンドで同じ価値の消費手段を資本家Ⅱから買い、こうして不変資本Ⅱの半分を貨幣に転化させる。資本家Ⅲはまたこの1000ポンドで1000の価値ある生産手段を資本家Ⅰか

ら買う。こうして、資本家Ⅰにとっては、彼らの生産物の一部分として生産手段の現物形態をとっていた可変資本価値=1000v が再び貨幣に転化していて、今では資本家Ⅰの手でまた新たに可変資本として機能することができ、この可変資本が労働力に、つまり生産資本のもっとも重要な要素に、転換されることになる。こういう仕方、資本家Ⅰの可変資本は、彼らの商品資本の一部分が実現されることによって、彼らの手に貨幣形態で帰ってくるのである。》（全集版491頁）

この部分はいうまでもなく、エンゲルスは第8稿から採ってきているのである。これを読めば、どう読んでも、マルクスは少なくとも単純再生産では、大谷氏がいうように、部門Ⅱの不変資本の生産資本への転化から開始していないことは明らかではないだろうか。なぜ、大谷氏は、このマルクスの単純再生産の敘述を取り上げず、無視したのであるだろうか。

もちろん、大谷氏は上記の引用箇所につけられている注(2)で、次のようにも主張されている。

〈(2)第Ⅰ部門と第Ⅱ部門とのあいだの転態がここから始まらなければならないのは、第一に、両部門とも各年度に、なによりもまず、商品資本の一部を生産手段に転化しなければならないからであり、第二に、可変資本の前貸は一挙にではなく、次第に（たとえば週ごとに）行なわれなければならないからである。〉（上157頁）

しかし少なくとも単純再生産の上記のマルクスの敘述は、こうした大谷氏の二つの理由に基づいたものにはなっていない。もちろん「第一に」上げられている理由はマルクスの敘述でも前提されているのであろうが、「第二に」上げられているものは、必ずしもマルクスはそうした前提に立っているとは言えないのではないだろうか。《労働者たちはこの1000ポンドで同じ価値の消費手段を資本家Ⅱから買い、こうして不変資本Ⅱの半分を貨幣に転化させる》と書かれており、それが「一挙に」かそれとも「次第に」かというようなことは問題にもされていない。

大谷氏は、同じ注(2)のなかで拡大再生産の場合は、マルクスは大谷氏のというような計算方法を取っているのだと言われるのであるが、しかし拡大再生産の場合を例に上げて、単純再生産でもマルクスがそうしているという論拠にはならないのではないだろうか。これはまあ、ある意味では大したことではないが、疑問として提示しておきたい。

## ● 「Ch.III) b.II. ) (第2部第3章)」はどう理解したらよいのか？

いよいよ、ここから『経済』09年4月号掲載分(中)に入る。以下、大谷氏の論文からの引用文の頁数はすべて(中119頁)というように略して記すが、『経済』4月号の119頁ということである。

ここからは「4 第2部第5－7稿における資本循環論仕上げのための苦闘」が最初に問題になっている。その最初のところで、大谷氏は次のように書かれている。

〈彼(＝マルクスー引用者)は、1872年の『資本論』第1巻第2版で、初版での7章編成を7篇編成に組み換えたが、この先例に合わせて、これ以降は第2部も、3章編成から3篇編成に変更した。〉(中119頁)

しかしこうした大谷氏の主張とは必ずしも整合しない事実がある。それは大谷氏も後に取り上げているが、マルクスは第8稿の最初の頁に「Ch.III) b.II. )」の書き込みをしているからである(市原健志《『資本論』に関する若干の新事実について》〔『商學論纂』第28巻第5・6号〕615頁、および同《『資本論』第2部の諸草稿とエンゲルスの編集について》〔『商學論纂』第27巻第2号〕69頁他参照)。これはそのまま素直に読めば、「第2部第3章」である。つまりマルクスは第8稿の段階でも、ここで表題を書いた時には、依然として「章」を使っているのである。これは一体どうしてなのかについて、大谷氏としての説明が必要ではないだろうか。市原氏は、これはスミスの『国富論』の第2部第3章「資本の蓄積について、すなわち、生産的および不生産的労働について」を指しているのではないか、などという議論を展開されているが、こうした議論は私としてはなかなか受け入れ難いのだが、果たして大谷氏はどう説明されるのであろうか。

大谷氏はこの後、第8稿が〈時期を隔てた二つの時期に書かれた〉(中126頁)と指摘し、最初のを「第一層」、後のものを「第二層」とされている。そして「第一層」は1877年に着手されたとされている。しかしもし第8稿の最初のページの上記の記入が「第2部第3章」を意味するならば、「第一層」の着手はあるいはもっと早まる可能性はないのだろうか。もしそうでないとするならば、第2部が3章編成から3篇編成に変更されたのは、1872年ではなく、もっと後の1877年以降だった可能性もないことにはならないだろうか。いずれにせよ何故、マルクスは第8稿の最初の書き出しの段階で「第2部第3章」と書いているのかについて、何らかの説明が必要ではないかと私には思えるのである。

大谷氏御自身は、この書き出しを次のように説明されている。

〈なお、この第8稿の1ページの行頭には、「第2部第3章〔Ch. III, b. II〕」(S. 698.1)という見出しがあとから書き込まれているが、マルクスはおそらく、このノートに書きつつあるもの

が第2部第3篇にかかわるものであることがはっきりしたどこかの時点で、これを書き込んだのであろう(5)。〉(中128頁)

このように大谷氏は言われているのであるが、大谷氏は「Ch. III, b. II」を「第2部第3章」と訳されながら、なおかつ「マルクスはおそらく、このノートに書きつつあるものが第2部第3篇にかかわるものであることがはっきりしたどこかの時点で、これを書き込んだのであろう」(下線は引用者)と書かれて、御自身が矛盾したことを書かれていることを自覚されているのかいなのか分からないが、いずれにせよ、それについてなんの説明もされていないのである。おまけに注(5)では、これをスミスの『国富論』の「第2部第3章」を指すのではないか、という市原氏の主張を意識しながら(市原氏の名前は書かずに)、そうではなくて、〈「第2部第3篇」を指すことは確実である〉(中135頁)とまで書かれているのに、どうしてそう断定できるのかについても何も詳しいことは述べておられない。

市原氏がそもそもなぜスミスの『国富論』のものではないかというような推測をたてなければならなかったのかは、いうまでもなく、この第8稿執筆の時点ではマルクス自身は「部・篇」の編成にすでに変えている筈なのに、「部・章」で書いているのはおかしいと考えているからである。ところが大谷氏はくさまざまの箇所でのそれ以前のマルクスの指示の仕方から見ても、この見出しが、スミスの『諸国民の富』の第2篇第3章(「第2部第3章」の間違い?—引用者)を指すものではなくて、『資本論』第2部第3篇を指すことは確実である〉(中135頁)とまで断定されているだけなのである。ではどうして、それが「第2部第3篇」とは書かれずに、「第2部第3章」と書かれているのだろうか。これではまったく謎は解けないのである。

そこで、もし勝手な類推が許されるなら、私なら、次のように考えたいのである。つまり大谷氏は〈1872年の『資本論』第1巻第2版で、初版での7章編成を7篇編成に組み換えたが、この先例に合わせて、これ以降は第2部も、3章編成から3篇編成に変更した〉と断定されているのであるが、しかしマルクス自身は1872年の段階では第1巻のことしか頭になく第2巻(確かマルクスは現行の第2・3巻を一つに考えて、第2巻と考えていたと思うのだが)のことまでまだ具体的には考えていなかったということであろう。

そして第8稿の大谷氏が言われる「第一層」に着手した1877年には、マルクス自身はこれから書いてゆく予定の諸草稿(第5稿の下半分、第6-7稿、第8稿の残り)については、「ノートII」が「基礎に置かれなければならない」と考えていたから、だから第8稿の書き出しも、やはり「ノートII」の表紙に書かれているプランにもとづいて、「第2部第3章」と書いたということなのである。つまりこの第8稿を書き出す段階でも、依然として「第2部第3章」とマルクスが書きたいということこそ、第8稿も第2稿の表紙に書かれているプラン(目次)をベースにして、第2稿に欠けている部分や第2稿ではいまだ不十分とマルクス自身が考えている部分を補足するものとして、マルクス自身は考えていたことを示すものではないのか、と私は推測するのである。

少なくともマルクス自身は第2部の「3篇編成」にもとづいたプランのようなものは何も残しておらず、第2部全体の構成について、マルクス自身が一番最後に書き残したと考えられるのは

、第2稿の表紙に書かれているものだけだからである。だからマルクスが「利用すべき諸個所」で「ノートII」とタイトルをつけたところに、「この第2の敘述が基礎に置かれなければならない」と書いたとき、「ノートII」の最初に書かれた目次が頭にあったので、だから第8稿の冒頭にもそのプラン（目次）にもとづいて「第2部第3章」と書いたのであろう、と。このように私は類推したいのだが、どうであろうか（もっとも、こうした類推は、直ちに次のような疑問を生じさせる。すなわち第5稿本文では「第1篇」と「篇」を使って書いているという事実である。だから大谷氏が指摘されるように、第5稿の初原稿が1877年1月末以前に書かれ、第8稿の「第一層」が1877年2月に書きはじめられたことが確実なら、こうした類推は根拠を失うであろう）。

●第4稿は第2稿より先に書かれたのにどうして「形式が完全」なのであろうか？

大谷氏は第5－7稿が1876年の10月ごろから書きはじめられ、1880年まで、特に第1篇の資本循環論を仕上げる作業が行なわれたことを指摘されている。特に第5稿については、1876年秋に書きはじめられ、1877年の春に一旦中断したこと、そしてこれを付属資料の「成立と来歴」では「原初稿」と呼んでいることを紹介されたあと、次のように述べておられる。

〈この原初稿の特徴は、すでに第1稿、第4稿、第2稿と、繰り返し行なった以前の叙述をほとんど見返すことをしないままにその大部分が書かれたと思われることである。〉（中120頁）

この叙述をみると、大谷氏は第1章（篇）に関しても、第4稿は第2稿より先に執筆されたと考えておられるようである。前の説明では第4稿について次のように説明されていた。

〈この時期に書かれたものにもう一つ、この第3稿とは異なり、第2部のテキストとして書き始められた草稿がある。マルクスが表紙に「IV」と書き付け、のちにエンゲルスがこれによって第4稿と呼んだこの草稿は、第1章と第2章の二番目の項目までを含む**58**頁のものである。この草稿は、その一部がのちに見る第2稿の執筆と並行して、あるいは絡み合いながら執筆されたもので、その執筆時期を正確に確定することが困難であるため、いまのところ大まかに**1868**年に書かれたものと推定されているだけである。目下フォルグラーフのもとで進められている第II部門第4巻第3分冊の編集作業のなかで、もっと正確な推定がなされるかもしれない。この草稿は、手稿を見るかぎり、エンゲルスが彼の序文で書いているように、「第2稿よりも形式が完全」であって、「印刷できるまでに仕上げられている」という印象を与えるもので、エンゲルスはこれを彼の版の第1篇と第2篇とに利用した。〉（上150頁）

見られるように、第4稿の執筆次期ははっきりとは断定できないとここでは書かれているが、しかし上記の叙述を見ると、やはり大谷氏もエンゲルスと同様に、第4稿は第2稿より先に書かれたものと判断されているようなのである。確かにエンゲルスは序文で次のように述べている。

《第4草稿は、第2部の第1篇と第2篇の最初の諸章との印刷に付しうるばかりの論稿であり、それぞれ該当する個所で実際に利用された。これは、第2草稿よりも先に書かれたものと判明したが、形式においていっそう完全なので、第2部の当該部分のために有益に利用することができた。これは、第2草稿から若干の補足をするだけで十分であった》（全集版7-8頁）

このように、エンゲルスは第4稿は、《形式においていっそう完全》なのに、《第2草稿よりも先に書かれたものと判明した》と述べている。しかし私にはこの部分が以前から疑問だったのである。エンゲルスは自身の編集方針として《とにかくできる限り、私は、自分の仕事をさまざま改稿からただ選択することだけに限定した。しかも、常に、現存する最後の改稿を以前のものと比較して基礎に据えるようにした》（全集版9頁）と述べているのに、この《第1篇と第2篇

《最初の諸章》については唯一の例外になっているわけである。だからどうして第4稿は、先に書かれたのに、《形式においていっそう完全》で《印刷に付しうるばかりの論稿》にまで仕上げられていたのか、という疑問がどうしても生じるのである。本来なら、そうした仕上げる作業というのは、やはり執筆順序としては、後になると考えるのが自然と思えるからである。残念ながら、今回の大谷氏の論文を読んでもその謎は解けなかったのである。

## ● 「ノート」と「草稿」をことさら区別する意味

大谷氏は1877年の春に、マルクスはそれ以前に書いたものを一切見ずに書いた第5稿の上半分（これを「成立と来歴」は「原初稿」と呼んでいる）を中断して、それ以前に書いたもの（ノートⅠ～Ⅳ）で利用できる記述を確かめる必要を感じ、1877年3月末ごろから4月半ばにかけて「まず私の古い諸ノートへのたんなる指示」と冒頭に書きつけた〈以前の諸草稿のなかの利用すべき諸箇所への指示ないし摘要を作成した〉（中120頁）と紹介されたあと、次のように書かれている。

〈マルクス自身は、「利用すべき諸箇所」でもそのあとでもこれらを「ノートⅠ—Ⅳと呼んでいて、第2部草稿のⅠ—Ⅳ考えていたわけではなかったが、のちにエンゲルスがこれらを第1稿—第4稿と呼び、そのあとに続く草稿と見られるものを第5稿—第8稿と呼んだので、ふつう、第2部草稿としては第1稿から第8稿までである、と考えられてきている。〉（中121頁）

大谷氏はこのように書かれて、マルクス自身はあくまでもⅠ～Ⅳと番号を打ったものを「ノート」と考えていたのであって、「草稿」とは考えていなかったのだと言いたいかである。しかし大谷氏自身も、その前では、〈マルクスは、冒頭に「まず私の古い諸ノートへのたんなる指示」と書き付けた、以前の諸草稿のなかの利用すべき諸箇所への指示ないし摘要を作成した〉（下線は引用者）と書かれており、それは草稿として「利用すべき諸箇所」を示すものだと書かれている。だから実際には、内容的に考えてもそうしたものと思われるものなのであろう。だからやはり、それぞれのノートは、そのうちのマルクスが指示した諸箇所から第二部の草稿を仕上げるためのものと考えても決して間違いではないのではないだろうか。単に改めてもう一度草稿を書くときに、参照にすべき諸箇所をメモ書きしたというようなものではなく、最終的な完成した草稿に仕上げるために「利用すべき諸箇所」を示したものならば、それらもやはり「草稿」と考えてもよいように私には思えるのである。

実際、大谷氏はこの「利用すべき諸箇所」を書きおえたあと、マルクスは第5稿の下半分を仕上げたと次のように書かれている。

〈彼は**1877**年の4月下旬から7月末にかけて、この「利用すべき諸箇所」を参照しながら、空白となっていた第5稿の各ページの下半部に、以前の叙述から多くの箇所を、「原初稿」への「追補」または「注」のかたちで書き加えた。この作業は、多少の置き換えや書き換えがあるものの、きわめて多くの異文を含む「原初稿」とは異なり、ごくわずかの異文を含むだけの、書き写しを主体とするものであった。このように、第5稿は、「利用すべき諸箇所」よりもまえに書かれた「原初稿」と、それよりもあとに書かれた「追補」および「注」という、二つの層からなっているのである。〉（中121頁）

つまりこの大谷氏の説明によると、第5稿の下半分には「利用すべき諸箇所」の指示にもとづ

いて、「追補」や「注」が書き加えられたが、それらは〈書き写しを主体とするものであった〉と書かれている。つまり第5稿の上半分を「成立と来歴」は「原初稿」と呼んだと大谷氏は紹介され、それについては大谷氏もなんの異論も出しておられない。その限りでは大谷氏もそれは最初の「草稿」だったとの判断に立っておられるのであろう。とするなら、その下半分にほとんど〈書き写しを主体とする〉形で以前のノートⅠ～Ⅳが利用されたということは、その以前のノートもやはり草稿として利用すべきとマルクス自身は考えていたことを示すものではないだろうか。だからこそマルクスはほとんど書き写すことによって草稿を仕上げて行こうとしたといえるからである。だから大谷氏のように草稿とノートをことさら区別する意味はないのではないだろうか。

実際、この第5稿について、エンゲルスは次のように書いている。

《これははじめの4章を含んでいるが、まだほとんど仕上げられてはいない。本質的な諸論点が本文の下の注で取り扱われている。素材が集められているだけで選別されてはいないが、しかしこれが第1篇のこの最も重要な部分の最後の完全な叙述である。――これから印刷に付しうる原稿をつくろうとする最初の試みが、第6草稿（1877年10月以後、1878年7月以前）にある。これは、第1章の大部分を含んでいるが、四つ折り判で17ページにすぎない。第二の――最後の――試みは「1878年7月2日」〔付〕の第7草稿にあるが、これは二つ折り判で7ページにすぎない》（全集版8頁）

つまりエンゲルスは第1篇を主要にはこの第5稿をもとに編集しており、そのうち第1章の前半部分を第7稿や第6稿から、また第5・6章は第2稿から採用したが、残りは主要には第5稿から採ってきている。その編集の仕方について市原氏は次のように述べている（下線は市原氏の強調）。

〈すなわち、第5稿が第1篇の最も重要な部分の最後の完全な叙述であることを重視したエンゲルスは、第5稿の、集められているだけでえり分けられているとはいえない、注（ノート）で取り扱われている重要な点を、えり分け、それらを本文に組み込んで仕上げたということであった。実際、現行版の第5稿を利用した部分は、本文と「本文の下の注（ノート）」とが激しく交差して仕上げられている。まさにこの部分は第2部全体の中で「はさみとのりでまとめられている」という表現がぴったりする部分であるということが出来る。〉（《『資本論』第2部の諸草稿とエンゲルスの編集について》『商學論纂』第27巻第2号54頁）

ここで「本文」と書かれているのが、第5稿の上半分に書かれている「原初稿」のことであり、「注（ノート）」と書かれているのが、その下半分に書かれているものであろう。ご覧の通りエンゲルスは両方をまさに交差して「はさみとのりでまとめられている」ような形で切り貼りして編集しているということである。つまりノートⅠ～Ⅳから採ってきた第5稿の下半分もその意味では草稿として立派に通用していることをこれは意味しているのではないだろうか。

●第2稿が基礎に置かれなければならないというマルクス自身による指示は重要

---

さらに大谷氏は「利用すべき諸箇所」について、次のように説明されている。

〈なかほどの「ノートⅡ」というタイトルをつけたところに、マルクスは「この第二の叙述が基礎に置かれなければならない」と書き付けている（S. 539.2）。「この第二の叙述」というのは「ノートⅡ」を指しているものと考えられるが、あるいは、第1稿と区別して、そのあとの諸草稿、とりわけ第4稿および第2稿の全部を指しているとも見ることもできるかもしれない。いずれにしても、この一文が書き付けられたのは、目の前に、第1稿—第4稿および、まだ「原初稿」だけが書かれている第5稿および後述の第8稿第一層の冒頭部分があるだけのときであって、第1稿—第8稿のすべてが書き終えられたあとではなかったことに注意が必要である。第8稿を含むすべての草稿を目の前に置いて、第2稿を基礎にすべきだとマルクスが書いたわけではないのである。〉（中121頁）

このように大谷氏は書かれることによって、だから第8稿の段階では、第2稿の段階でマルクスが考えていた叙述プラン（すなわちまずは貨幣流通による媒介を考慮せずに叙述し、そのあとそれを考慮して叙述するという、いわゆる「二段構えの構成」）は放棄されたという自己の主張（エンゲルスの理解でもある）を反証する根拠には、このマルクスの指示はならないのだと言いたいようなのである。しかしマルクスがこの時点でこのように書いたということこそ重要であろう。というのはその後の諸草稿の様相は、むしろここでこのようにマルクスが書いた指示にもとづいたものであることを端的に示しているとも考えることができるからである。つまりこれ以降の諸草稿は、すべて部分的、断片的であって、第二部全体にわたるような草稿はもはやまったく見られなくなるということ、これこそがマルクスのこの時点でのこうした指示が、後々まで一貫して変わらなかったことを示しているのではないだろうか。その意味では、第8稿も一後にわれわれはさらに詳細に検討することになるのだが――、まさしくそうした特徴と性格を歴然と示しているといえるのである。

大谷氏はわざわざ、〈第1稿—第8稿のすべてが書き終えられたあとではなかったことに注意が必要である。第8稿を含むすべての草稿を目の前に置いて、第2稿を基礎にすべきだとマルクスが書いたわけではないのである〉と断っておられるが、しかしすべての草稿を書きおえてからこうした指示を書くのは、むしろおかしいのであって、マルクスがこうした時点でこうした指示を書いたのは、これから書く諸草稿への自身の方針として書いたと考えるべきであろう。何よりも第2部全体にわたるプランを明らかにしたものとしては、最後に書かれたのは第2稿（その表紙に書かれている目次）だけであるということ、だからこそマルクスは常にその第2稿（とその目次）を意識して、それ以降の諸草稿を書いて行ったと考えることができるのである。そしてすでに指摘したが、第8稿を書き出す段階においても、マルクスは第2稿の表紙にあるプランに基づいて「Ch.III) b.II. ) (第2部第3章)」と書いたとわれわれとしては推測する（したい）のである。

## ●第1篇第1章の「書き出し」にどうしてマルクスは拘ったのか？

---

マルクスは「利用すべき諸箇所」にもとづいて、第5稿（これは現行の第1篇の第1章から第4章ぐらいまでを含んだものだったようである）の下半分を書きおえたあと、この第5稿から「[印刷用の原稿をつくろうとする最初の試み](#)」（エンゲルス）として、1877年10月26日の日付の付いた断稿Ⅲを書き、そのあとすぐに同10月末から11月にかけて第6稿を、さらに1878年7月2日づけの第7稿を書いたが、これらはすべて第1篇第1章の「書き出し」を「試みた」ものだったと説明されている。エンゲルスはこの第7稿と第6稿（一部は第2稿・第5稿）を使って、現行の第1篇第1章を編集している。しかしどうしてマルクスはこの第1篇第1章の「書き出し」を何度も書き直す必要があったのかが今一つよく分からないのである。その後で大谷氏は、【資本循環論における理論的前進】として、「第5稿－第7稿における資本循環論との格闘」があったとされているが、これは「書き出し」の何度もの推敲とどのように関連しているのかが今一つよく分からないのである。

●【資本循環論における理論的前進】も今一つ納得がいかない

これは上記の疑問と密接に関連しているが、どうやら大谷氏は第6稿—第7稿でマルクスが第1篇第1章の「書き出し」を何度も推敲しなおした理由として、〈資本循環論との格闘〉のためだったと考えておられるようなのである。しかしここで大谷氏が【資本循環論における理論的前進】の一つとして上げている〔a 貨幣資本が果たす貨幣機能と資本機能との明確な区別〕なるものは今一つ納得が行かないのである。というのはこうした区別が果たして、この時点まで（つまり第6稿や第7稿が執筆されるまで）、マルクスにとって不明確な問題だったなどということはおよそ考えられない話だからである。そこで大谷氏がこの問題をどのように説明しているのかを詳細にわれわれとしては検討しなければならない。

まず大谷氏は〈第七稿でマルクスは次のように書いた〉（中122頁）として次のような一文を紹介されている。

〈貨幣資本がもろもろの貨幣機能を果たすことができるという能力は、貨幣資本が貨幣であることから生じるが、**G**\_\_**W**における**G**の貨幣機能を資本機能にするものは、資本がその循環のなかで貨幣機能を果たす段階と他の諸段階、とりわけ資本が生産過程で価値増殖する段階との関連である。つまり、**G**\_\_**W**が労働力および生産手段への貨幣の転換であるかぎり、貨幣機能は同時に資本機能となることができる。しかし、貨幣が労働力を購買できるのは、買い手が生産手段の所持者である資本家であり、売り手が生産手段から切り離された労働力しかもたない労働者であるという、「買い手と売り手とが相対するときの両者の経済的根本条件の相違」すなわち「彼らの階級関係」があるからである。「この関係の定在こそが、たんなる貨幣機能を資本機能に転化させることができる」（S. 693.12-26）。〉（中122頁）

これと同じ文章は後半部分にかぎ括弧に入ってるもの以外は現行版のなかに探すことは出来なかった。だからこれは恐らく大谷氏による第7稿の内容の要約ではないかと思う。だからまた次の第6稿についても、大谷氏がその内容を要約されたものであろう。

〈他方、**W'**\_\_**G'**については、第六稿でマルクスは、資本価値プラス剰余価値という価値関係を表わしている**W'**の貨幣への転化は同時に商品資本の貨幣資本への転化であって、商品の貨幣への転化である商品流通の単純な過程**W**\_\_**G**に資本機能の刻印を押すものは、この価値関係なのだ、と述べた（S. 677.13-678.32.）。〉（中122-123頁）

このように大谷氏は第7稿における貨幣資本と貨幣との区別、第6稿における商品資本と商品との区別についてマルクスの主張を要約されたあと、その注目点として次のように述べておられる。

〈以上の叙述で注目されるのは、ここではマルクスは徹底して、個別資本の自立的な循環運動

そのものに注目し、貨幣と商品との位置変換によってそれと絡み合う商品流通の側での形態運動を度外視していることである。のちに触れるように、ここに、資本循環論における古典派の貨幣べール観の最終的な脱却を見ることができる。〉（中123頁）

しかし果たしてこのような主張は正しいのであろうか。〈個別資本の自立的な循環運動そのものに注目し、貨幣と商品との位置変換によってそれと絡み合う商品流通の側での形態運動を度外視している〉と大谷氏は主張されるのであるが、これで氏は一体何を言いたいのであろうか。〈商品流通の側での形態運動を度外視している〉と言われるのであるが、そんなことはマルクス自身は何も述べていないように思えるからである。だからわれわれは、マルクスが主張していることを、もう一度、現行版にもとづいて確認してみよう。

マルクスは「第1章 貨幣資本の循環」の「第1節 第一段階 G-W」（ここから第7稿である）の冒頭、次のように書きはじめている。

《G-Wは、ある貨幣額がある額の諸商品に転換されることを表わし、買い手にとっては彼の貨幣の商品への転化であり、売り手たちにとっては彼らの諸商品の貨幣への転化である。一般的商品流通のこの過程を、同時に一つの個別資本の自立的循環の中の機能的に規定された一部分にするものは、さしあたり、この過程の形態ではなく、その素材的内実であり、貨幣と席を換える諸商品の独自の使用の性格である。これらの商品は、一方では生産諸手段、他方では労働力であり、商品生産の物的要因および人的要因であって、これらの要因の特殊な性質は、もちろん、生産されるべき物品の種類に照応しなければならない。》（全集版36-37頁）

そして《Gが転換される商品総額のこの質的分割の他に、もう一つのきわめて特徴的な量的関係》（同37頁）があるとして、その量の考察に移り、その後、次のように述べている。

《貨幣資本としては、資本は、貨幣諸機能、いまの場合には一般的購買手段と一般的支払手段との機能を果たしうる状態にある。……この能力は、貨幣資本が資本であることから生じるのではなく、貨幣資本が貨幣であることから生じる。

他方では、貨幣状態にある資本価値もまた、貨幣諸機能を果たしうるだけで、他の機能は果たし得ない。この貨幣諸機能を資本諸機能にするものは、資本の運動の中での資本諸機能の一定の役割であり、それゆえまた、貨幣諸機能が現われる段階と資本の循環の他の諸段階との連関である。たとえば、さしあたりいまの場合には、貨幣が諸商品に転化されるのであって、それら諸商品の結合が生産資本の現物形態をなし、したがって、この形態は、潜在的に――可能性から見て――すでに資本主義的生産過程の結果を自己のうちに包蔵しているのである。》（同39頁）

《貨幣がどんな種類の商品に転化されるかは、貨幣にとってはまったくどうでもよいことである。貨幣はすべての商品の一般的等価形態であり、すべての商品は、それらが観念的に一定額の貨幣を表わし、貨幣への転化を期待し、そして貨幣との場所変換によってのみ、商品所有者

にとっての使用価値に転化されうる形態を受け取るということ、すでにそれらの価格において示している。それ故、労働力がひとたびその所有者の商品として市場に現われ、その販売が労働に対する支払いの形態で—労働の姿態で—行なわれるやいなや、労働力の売買は、他のどの商品の売買と比べても、奇異な感を与えるような点はまったく見られない。商品である労働力が買いうるものであるということが特徴的なのではなく、労働力が商品として現われることが特徴的なのである。》（同41-42頁）

《それ故、G—Aという行為では、貨幣所有者と労働力所有者とは、買い手および売り手として関係し合い、貨幣所有者および商品所有者として相対するにすぎず、したがってこの面から見れば互いに単なる貨幣関係にあるにすぎないとはいえ—それにもかかわらず、買い手は、最初から同時に生産諸手段の所有者として登場するのであって、この生産諸手段は、労働力の所有者が労働力を生産的に支出するための対象的諸条件をなしている。言い換えれば、この生産諸手段は、労働力の所有者に対して他人の所有物として相対する。他方では、労働の売り手は、その買い手に対して他人の労働力として相対するのであり、この労働力は、買い手の資本が現実には生産資本として自己を発現するために買い手の支配下に移り、彼の資本に合体されなければならない。したがって、資本家と賃労働者との階級関係は、両者がG—A（労働者の側から見ればA—G）という行為で相対する瞬間に、すでに現存し、すでに前提されている。それは、売買であり、貨幣関係であるが、しかし、買い手は資本家として、売り手は賃労働者として、前提される売買であり、この関係は、労働力の具現のための諸条件—生活諸手段および生産諸手段—が他人の所有物として労働力の所有者から分離されるとともに、与えられている。》（同42-43頁）

《資本関係が生産過程中出现してくるのは、ただ、この関係自体が流通行為のうちに、買い手と売り手とが相対し合う異なる経済的基本諸条件のうちに、彼らの階級関係のうちに、実存するからにすぎない。貨幣の本性とともにこの関係が与えられているのではない。むしろ、この関係の定在こそが、単なる貨幣機能を資本機能に転化させうるのである。》（同43頁）

ながながと引用したが、要約ではなく、マルクス自身の言葉としてその内容を確認したかったからである。これがほぼ第1節でマルクスが貨幣資本と貨幣との区別について述べている主要内容である。ここでマルクスが述べていることで重要なことは二つだけである。（1）G—Wは一般的な商品流通としては、たんなる貨幣の商品への転換（たんなる購買）である。（2）だからG—Wを貨幣資本の生産資本への転換にするのは、この一般的な商品流通そのものではなくて、それ以外の関係による。それは資本制的生産関係である、以上。貨幣と貨幣資本との区別としては、マルクスはこれ以外のことは述べていないのである。

つまり「資本の流通過程」も、その流通過程だけを取り出せば、つまり資本制的な生産関係を捨象して流通過程だけを見るなら、それは単純な一般的な商品流通の過程としてわれわれの前に現われる。だからそこでは貨幣資本や商品資本も、たんなる貨幣であり、たんなる商品として現われ、そのようなものとして振る舞う（機能する）のである。そもそも単純な商品流通というのは、資本の流通過程を資本関係を捨象して、そうした抽象的なレベルでみたものなのである。単純な商品流通は、資本制的生産関係の表面に現われているもっとも抽象的な関係なのであり、

歴史的にも論理的にも資本主義的生産様式に先行するものなのである。だからこそ、『資本論』の第1部の冒頭（第1篇）は単純流通にある「商品と貨幣」の分析から始まっているのである。だからこんなことが第6稿や第7稿の執筆段階までマルクスにとって不分明であったなどということはおよそ考えることは出来ない。そればかりかマルクスが『経済学批判』を彼の経済学批判体系の「第一分冊」として構想した時点で、すでにそんなことはマルクスにとって明らかだったといえるだろう。

だから大谷氏が〈マルクスは徹底して、個別資本の自立的な循環運動そのものに注目し、貨幣と商品との位置変換によってそれと絡み合う商品流通の側での形態運動を度外視している〉などというのは見当違いも甚だしいように思える。マルクスは単純流通としての貨幣の抽象的な諸機能が資本制的関係のなかでより具体的な内容規定を受け取る条件を考察しているのである。そしてそれが資本の運動、その循環なのである。そもそも商品流通という抽象的な契機を「度外視」するなどということは出来ないはずである。貨幣の抽象的な諸機能は、それがどんな具体的な内容規定を受けようとも変わることはなくそこに貫いているからである。問題は事態を抽象的な契機として考察するか、より具体的な資本関係のなかでさらに具体的な内容規定を受けたものとして考察するかの相違に過ぎない。後者を捨象して前者だけで、問題を抽象的に考察することは可能であるが、しかし前者を捨象して後者だけで問題を考察するというのは、現象主義者や経験主義者ならともかくマルクス主義者なら不可能なことである。

マルクスは『経済学批判』のなかで、銀行学派のトゥックが《商品価格の歴史の良心的な分析》にもとづいて《貨幣は、現実の生産過程では、流通手段の形態規定性とはまったく別な諸形態規定性をなおまたうけとることを》を理解したが、貨幣と資本との区別で混乱していると次のように批判している（下線はマルクスによる強調）

《すべてこれらの著述家（銀行学派のこと——引用者）たちは、貨幣を一面的にではなくそのさまざまな諸契機で把握してはいるが、しかしたんに素材的に把握しているだけで、それらの諸契機相互のあいだや、これらの諸契機と経済学的諸範疇の全体系とのあいだの生きた関連を把握してはいない。だから彼らは、流通手段と区別しての貨幣を（つまり支払い手段を——引用者）、誤って資本と混同し、または商品とさえ混同する。もっとも他方では、ときおり、貨幣と両者との区別をまたもや主張せざるをえなくなっているが。……総じてこれらの著述家たちは、まづもって、単純な商品流通の内部で展開されるような、そして、過程をへる諸商品それ自体の関連から生じてくるような抽象的な姿で、貨幣を考察することをしない。だから彼らは、貨幣が商品との対立のなかでうけとる抽象的な諸形態規定性と、資本や収入〔revenue〕などのような、もっと具体的な諸関係をうちにかくしている貨幣の諸規定性とのあいだをたえずあちこちと動揺するのである。》（全集13巻161-162頁）

この引用文の最後でマルクスが述べていることは特に重要である。要するに銀行学派は貨幣の抽象的な機能とより具体的な形態規定性とを区別できず、それらを混同しているということだ

ある。そして今われわれが「貨幣資本の循環」で、貨幣の諸機能と貨幣資本としての規定性とその運動諸形態で問われている問題もまさに同じ問題なのである。実際、この第7稿のなかにも銀行学派の混乱を意識したと思われる記述もみられる。例えば次のような一文。

《ここでわれわれが関心をもつのは次のことである。すなわち、G-Aが貨幣資本の一機能として現われるとしても、すなわち、貨幣がここで資本の存在形態として現れるとしても、それは、決して、単に、貨幣がここではある有用効果をもつある人間活動すなわちある勤労に対する支払手段として登場するからではない——したがって、決して支払手段としての貨幣の機能によってではない——ということである。》（全集版43頁）

ここではマルクスは、貨幣の一機能である支払い手段を理由に銀行学派がそれを資本と捉えたことを意識してこのように述べているのである。ほぼ同じ内容をマルクスは次のようにも述べている。

《貨幣資本……の把握においては、通常、二つの誤りが並立または交錯している。第一には、資本価値が貨幣資本として果たす——そして資本価値が貨幣形態にあるからこそ果たしうる——諸機能が、誤って資本価値の資本性格から導き出される。それらの機能は、ただ資本価値の貨幣状態、資本価値の貨幣としての現象形態のせいにはすぎないののである。また、第二にはその逆に、貨幣機能を同時に一つの資本機能にする貨幣器のの独自の内実が貨幣の本性から導き出される（それ故貨幣が資本と混同される）。この資本機能は、ここでG-Aが遂行される場合にもそうであるが、単なる商品流通およびそれに照応する貨幣流通では決して与えられていない社会的諸条件を前提しているののである。》（同44頁）

われわれは第6稿や第7稿が執筆される以前、第1稿とほぼ同じ次期に執筆された、第3部の草稿の現行の第28章該当部分にも、冒頭、次のようなマルクスの明確な指摘を見ることができ（しかしこれは現行版ではエンゲルスの編集によって混乱した記述になっているので、大谷氏が翻訳された草稿から紹介する）。

《トゥック、ウィルソン、等々がしている、Circulation〔通貨——引用者〕と資本との区別は、そしてこの区別をするにさいに、鑄貨としての流通手段と、貨幣と、貨幣資本と、利子生み資本（英語の意味での moneyed Capital）とのあいだの区別が、乱雑に混同される。》（『経済志林』61巻3号212頁）

このようにマルクスは述べることによって、第1部第1篇で取り扱われている「鑄貨としての流通手段と、貨幣」と第2部の「資本の流過程」で取り扱われている「貨幣資本（Geldcapital）」と、第3部第5篇で取り扱われている「利子生み資本（英語の意味での moneyed Capital）」との諸区別、すなわち《経済学的諸範疇の全体系とのあいだの生きた関連を

把握》する重要性を指摘しているのである。

だから最後にもう一度確認するが、こうした貨幣と貨幣資本との区別がマルクスにとって、第6稿や第7稿が執筆されるまであいまいであったかにいう大谷氏らの主張は、途方もないことだということである。

だからまた大谷氏が続けて次のように述べているのもわれわれとしては納得が行かないのである。

〈また、一般的商品流通の事象を資本循環における機能的に規定された一部分にする諸契機ないし諸関係が明確にとらえられたことによって、同時に他方では、資本循環の部分を成していない一般的流通の諸過程がそれとして明確にとらえられた。すなわち、生活手段の個人的消費によって労働力の再生産を媒介する $W\_G\_W$ も、資本家が貨幣形態にある剰余価値を個人的消費のために支出する $g\_w$ も、ともに一般的商品流通のうちの資本の循環の外部にある部分であることが明確にされた。これによって、社会的総資本の総再生産過程におけるそれらの過程と資本循環との絡み合いを厳密に分析する前提が作りだされた。こうしてここでマルクスは、労働者の生活手段を可変資本と見たり、賃金の支払いを資本の収入への転化と見たりするという、古典派の残滓を完全に払拭するのである。〉（中123頁）

ここで大谷氏は第6稿や第7稿の段階でマルクスは初めて〈資本循環の部分を成していない一般的流通の諸過程がそれとして明確にとらえられた。すなわち、生活手段の個人的消費によって労働力の再生産を媒介する $W\_G\_W$ も、資本家が貨幣形態にある剰余価値を個人的消費のために支出する $g\_w$ も、ともに一般的商品流通のうちの資本の循環の外部にある部分であることが明確にされた〉かに述べているのであるが、こうしたこともわれわれとしては信じがたいことなのである。というのはマルクスはすでに第1稿で次のように述べているからである。

《再生産過程の全体を考察すれば、個人的消費は生産的消費として現われる――個人的消費は、過程の人的諸前提を、つまり資本家と労働者どを再生産するから――という先に示された仮象を別とすれば、個人的消費過程それ自体は、形態的には、資本の循環のなかに含まれていない。》（大谷他訳・大月書店刊47頁）

ご覧の通り、マルクスはすでに第1稿の段階でも、労働者や資本家の個人的消費過程は資本の循環のなかに含まれていないことをはっきりと明言している。そしてこうしたことはある意味ではこれまでのわれわれのそれ以前のマルクスの論述から考えるなら、当然のことなのである。

また大谷氏は〈こうしてここでマルクスは、労働者の生活手段を可変資本と見たり、賃金の支払いを資本の収入への転化と見たりするという、古典派の残滓を完全に払拭するのである〉とも述べている。

しかしわれわれはこうした大谷氏らの主張には多分に問題の一面化があることをすでにみてきた。そして同じことはここでも指摘することができる。というのは、マルクス自身は第8稿の

段階でも、なお次のように述べているからである。

《ⅠがⅡの《追加》不変資本を自分の剰余生産物のなかから供給しなければならないのと同様に、Ⅲはこれと同じ意味でⅠのための追加可変資本を供給する。可変資本にかんするかぎりでは、Ⅲは、自分の総生産の、したがってまたとくに自分の剰余生産物のより大きな部分を必要消費手段の形態で《再》生産することによって、Ⅰのために、また自分自身のために蓄積するのである。》（大谷前掲訳下55頁）

このように、マルクスは第8稿の段階でも《Ⅲは……Ⅰのための追加可変資本を供給する》などと述べている。“Ⅱが供給するのは、Ⅰの追加労働者の生活手段であって、決してⅠの追加可変資本ではない”、と大谷氏なら直ちにその“間違い”を指摘されるかも知れない。しかしではなぜ、第8稿の段階では、大谷氏よれば、当然、〈労働者の生活手段を可変資本と見たり……するという、古典派の残滓を完全に払拭している〉はずのマルクスが、こうした書き方をしているのだろうか。その理由について、マルクスは次のように説明している。

《資本家Ⅰは、奴隷所有者でもあればしなければならないように、自分が使用する追加労働力のためにⅡから必要生活手段を在庫として買ったりためこんでおいたりはしない。Ⅱと取引するのは、労働者自身である。しかしこのことは、資本家の立場から見れば追加労働力の消費手段は彼が《必要な場合に》追加する労働力を生産し維持するための手段でしかなく、したがって彼の可変資本の現物形態でしかないということを、妨げるものではない。資本家自身がさしあたって行なった操作、ここではⅠが行なったそれは、追加労働力を買うために必要な新たな貨幣資本を貯えたことだけである。彼がこの追加労働力を取り入れてしまえば、この貨幣はこの労働力にとっての商品Ⅱの購買手段となるのであり、したがって、Ⅲには労働力のための消費手段がみいだせるようになっていなければならないのである。》（同48－9頁）

だからこういう理由から、先のような言い方もまた意義がある、とマルクス自身は第8稿の段階でも考えているのである。こうした事実を大谷氏たちは、果たして確認されているのだろうか。

● [b 商品資本の循環の独自性の明確化] についても疑問がある

これは先に検討した [a 貨幣資本が果たす貨幣機能と資本機能との明確な区別] と同様に、大谷氏が第5—7稿において、マルクスが勝ち取った【資本循環論における理論的前進】の一つとして論じているものである。大谷氏は次のようにその内容を述べておられる。

〈まえに触れたように、商品資本の循環は、第二稿ではすでに最初から資本の三つの循環形態の一つとされていたが、他の二つの循環形態にたいするこの形態の独自性はまだ完全にはとらえられていなかった。マルクスが、ケネーの経済表の基礎を成しているのは生産資本の循環と商品資本の循環だ、と述べていた (S. 33.20-23) のも、その一つの表現であった。〉 (中123頁)

このように大谷氏は主張されているのであるが、しかし根本的な疑問を禁じえない。というのは、第2稿の第3章では、すでに社会的な総資本の「流通過程および再生産過程の現実的諸条件」として、再生産表式を使った考察が行なわれているからである。再生産表式というのは、いうまでもなく、 $W'-G'-W...P...W'$  の商品資本の循環として社会の総資本の運動を考察することである。もし第2稿の段階でこうした商品資本の循環の独自性が十分にマルクスによって把握されていなかったのなら、どうしてその第3章で総資本の再生産過程を表式を使って考察することが出来たのであろうか。

ここでは大谷氏は、第2稿でマルクスは〈ケネーの経済表の基礎を成しているのは生産資本の循環と商品資本の循環だ〉と考えていたから、商品資本の独自性を〈いまだ完全にはとらえられていなかった〉理由とされているのであるが、しかしそれは不完全な捉え方の理由としてはあまりも根拠薄弱と思えるのは、私の偏見であらうか。

では、実際には、マルクスは第2稿の第1章で、商品資本の循環の独自性について、どのように述べているのであろうか。それを見てもみることにしよう。第2稿の第1章については、すでに八柳良次郎氏による翻訳がある (『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』No.4~10)。マルクスは、貨幣資本の循環 (図式I) と生産資本の循環 (図式II) のそれぞれの特徴を上げたあと、それと比較して、商品資本の循環 (図式III) について、次のように述べている。

《これにたいして、図式III,  $W'-...-W'$  では、商品資本の運動、すなわち資本主義的に生産された総生産物の運動は、資本価値の自立的循環の前提としても現われ、またその運動がこの循環によって条件づけられるものとしても現われる。それゆえ、この図式がその独自性において理解され、考察されるならば、円運動を行なう資本価値の2つの流通局面  $W'-G'$  および  $G-W$  は、一方では資本変態の機能的に規定された諸断片をなし、他方では一般的商品流通の諸環をなすことに触れるだけでは、もはや十分ではない。個別資本の変態のもとでの価値の運動と他の個別諸資本の諸変態との [関連]、および社会的総生産物のうち個人的消費にあてられる部分の流通との [関連] を解明することが必要になる。けれども、循環の形態だけを問題にしているここでは、このことはまだ解明されないであらう。われわれは、この問題を本書の第3章で考察することになる。と同時に、たとえば次章のように、個別諸資本の自立的循環が問題になるところではど

こでも、なぜわれわれは図式Ⅰ、Ⅲに立脚するかが明らかである。個別資本ということで理解されなければならないのは、社会的総資本のうち個別資本家たちの資本として分離され機能している部分である。社会的資本はそのような個別諸資本からなるにすぎず、それゆえ社会的資本の運動は個別諸資本の諸運動の複合体からなるにすぎない。けれども、この複合体そのものを描くことと、この複合体を構成する孤立的諸運動を描くこととは、別問題である。》（No. 7（1989.7）59-60頁）

ここではマルクスは、商品資本の循環について、〈資本主義的に生産された総生産物の運動は、資本価値の自立的循環の前提としても現われ、またその運動がこの循環によって条件づけられるものとしても現われる。それゆえ、この図式がその独自性において理解され、考察されるならば、……個別資本の変態のもとでの価値の運動と他の個別諸資本の諸変態との〔関連〕、および社会的総生産物のうち個人的消費にあてられる部分の流通との〔関連〕を解明することが必要になる。……われわれは、この問題を本書の第3章で考察することになる〉と明確に語っている。われわれはここにすでに十分に商品資本の循環の独自性をとらえた説明を見いだすことができるのではないだろうか。マルクスは商品資本の循環は社会の総資本の再生産過程を考察する第3章で考察されることになると明確に語っているのである。確かに第5稿から採用されている現行版ではこれよりもよりはるかに詳しい説明を見いだすことができるが、しかし第2稿でも十分に商品資本の循環の独自性がとらえられているのではないだろうか。だからこそマルクスは第2稿の第3章で社会的総資本の再生産過程を総商品資本の再生産表式として考察することができたといえるのではないだろうか。

いずれにせよ、大谷氏はケネーの経済表の評価での進展を根拠に、商品資本の循環の独自性の把握についても、第2稿では〈いまだ完全にはとらえられていない〉とし、第5－7稿で初めてそれは〈明確化〉されたと言われるのであるが、果たして第2稿の第3章（篇）の敘述そのものから、そうした不明確であるところの論拠を、つまり社会的総資本の再生産過程を商品資本の循環として明確に捉え切れていないとする部分を、示すことができるのであろうか。それこそが問題ではないだろうか。

## ●「あとに置くべきものの先取り」とは？

さて、いよいよ「5 第2部第8稿について」である。大谷氏はまず、「(1) 第8稿の第一層」について、紹介しながら、マルクスは〈すでにこの部分で、第2部草稿の一部を書きつつある、という意識をもっていた〉(中127頁)のではないかとの推測をたてておられる。そして次に「(2) 第8稿の第二層」の説明に移り、この第二層は草稿の12頁にある前後を区切る横線があるところから始まると推測されたあと、この第二層全体には大きな見出しといえるものが二つあるとし、次のように説明されている。

〈一つは16ページにある、「あとに置くべきものの先取り〔Anticipirtes für das Spätere〕」(S. 728.31)であり、もう一つは46ページにある、「先取り〔Anticipirt〕。II 蓄積または拡大された規模での生産」(S. 790.14-15)である。〉(中127頁)

「II 蓄積または拡大された規模での生産」に対応し、それに先行する、「I 単純再生産」という見出しはみられないが、それはどこから始まっているのかを、第2稿の構成を例に推測し、〈「あとに置くべきものの先取り」のところから(おそらくはそれよりも二つ前からのパラグラフ(S. 727.28-728.30)を含めて)単純再生産の分析が始まっているということになる〉(中128頁)とされている。

つまり「I 単純再生産」は、ほぼ「あとに置くべきものの先取り」と書かれているあたりから始まっているわけである。しかしではどうして、単純再生産が始まるところに、マルクスは「あとに置くべきものの先取り」など書いているのであろうか。その理由について、大谷氏は次のような推測をされている。

〈それでは、内容から見て明らかに単純再生産の分析にすでに取りかかっていると考えられる部分の冒頭に、なぜ、「あとに置くべきものの先取り」という見出しが書かれているのであろうか。考えられるのは、マルクスはスミスの見解の検討のあとに、さらにスミス以降の論者たちの見解の検討を書くべきだと考えていたが、それを飛ばして単純再生産の叙述にとりかかったが、結局、その諸学説批判に戻らないままに終わった、ということである。〉(中128頁)

しかしこれについては、すでに以前にも指摘したが、そのままではなかなか受け入れがたい解釈である。だからこの問題については少し詳細に検討してみる必要があると考えている。

幸い、この「あとに置くべきものの先取り」の前後の草稿については、市原健志氏のかなり詳しい研究がある(《『資本論』に関する若干の新事実について》『商學論纂』第28巻第5・6号)。市原氏が草稿のこの部分の前後をかなりの部分にわたって詳しく紹介されているのは、氏ご自身の解釈の論拠を示すためなのであるが、しがしわれわれは市原氏ご自身の解釈そのものには残念ながらあまり興味はない。しかし氏がこのあたりの草稿を詳しく研究されていることは大

変ありがたいことなので、その成果を利用させて頂くことにしたい。その前後の草稿を復元すると、次のようになる（下線はマルクスによる強調。なお本文中に括弧つきで出てくる数字は市原氏によるもので、草稿のページ数と行を表している。なお市原氏は現行版に採用されている部分は省略されているので、その部分を現行版から補った）。

《さらに、産品価値のうち収入として機能する部分の全体が、社会的消費財源に向けられた年間労働生産物と一致するということは、したがって年間の収入が、年間の商品価値のうちあらゆる階級の手へ帰する分けまえが消費のために向けられる年間生産物で存在する分け前と等しいということは、スミスが彼の著書の諸論のなかで明言しているところである。（15.38－15.42）

『大多数の国民の収入とはなんであったか、すなわち……彼らの年間の消費を充足してきたこれらの財源の性格はなんであったか、これを説明するのがこの最初の4つの篇の目的である。

』（12ページ）それゆえ年間労働をとおして生産される商品価値は2つの部分に分けることができる。そのうちの一部によって労働者は彼の労働力のための等価を作り出し、他の部分によって労働者は資本家のための剰余価値を生産する。第一番目のものは労働者の収入として、労賃として機能し、第二番目のものは資本家の収入として機能する。だからこの2種類の収入は、収入であるがゆえに、〔そしてこの観点は単純再生産の説明では正しい〕年間の消費財源の相対的な分けまえを表わしており、またこの財源で実現されるので、こういうわけで、不変資本価値のための、すなわち生産手段の形で機能する資本の再生産のための、余地はどこにもない。（15.43－15.48,16.1－16.3）

しかしA. スミスが年間の労働（あるいは商品）生産物の総価値と年間の労働をとおして新たに作り出される価値生産物——それは年間の労働生産物価値の一部を形成するにすぎないのだが——を同一視したことは、彼が、価値を形成するかぎりでの労働と労働の有用的性格とを区別しえないがゆえに、必然的であった。『各国民の年間の労働は国民が1年間に消費するすべての生活手段を各国民に本源的に供給する〔自然財源が与えられ労働の対象化された要素が移転することによって〕財源である。そして、この生活手段は、つねに、この労働の直接的生産物から成っているか、またはこの生産物で他の諸国民から買った諸対象かち成っている。』（緒論、11ページ。『諸国民の富』の最初の一文）（16・4-16・10）

年間の生産物——つまり年間の商品生産物あるいは年間の商品資本——の運動、すなわち流通形態  $W' - G - W \dots P \dots W'$  ( $W' - G' - W \dots P \dots W'$ )

＼  $g - w$

の視点から社会的再生産過程を考察すれば、ここでは必ず消費が一役を演ずるのである。なぜならば、出発点の  $W' = W + w$  という商品資本は不変資本価値と可変資本価値と剰余価値とを含んでいるからである。だから商品資本の運動は、生産的消費とともに個人的消費をも含んでいるのである。  $G - W \dots P \dots W' - G'$  および  $P \dots W' - G' - W \dots P$  という循環では、資本の運動が出発点であり終点である。それには確かに消費も含まれている。というのは、この商品、この生産物は、売られなければならないからである。しかし、この販売が行なわれるものと前提すれば、それから先この商品がどうなろうと、個別資本の運動にとってはどうでもよいのである。これに反して、

W'...W'という運動では、まさにこの総生産物W'の各価値部分がどうなるかが示されなければならないからこそ、それによって社会的再生産の諸条件が認識できるのである。総再生産過程は、ここでは、資本そのものの再生産過程を含んでいるのと同じように、流通に媒介される消費過程をも含んでいるのである。(16.11-16.21)

〔単純再生産または不変な規模での再生産は、1つの抽象として現われる。すなわち、一方では、蓄積または拡大された規模での再生産が全く行なわれないということは資本主義的基礎の上では奇妙な仮定であり、他方では、生産がそのもとで行なわれる諸関係がどの年にも絶対に変わらないというようなことはない（だがそれが変わらないことが前提されているのだ）という限りで、単純再生産は抽象なのである。前提は、商品の形態は再生産過程で変わることがあるにしても、与えられた価値の社会的資本は、今年も去年と同じに再び同じ量の商品価値を供給し同じ量の必要を満たす、ということである。とはいえ、蓄積が行なわれる限りでは、単純再生産は常にその一部分をなしており、したがってそれ自体として考察されることができるのであり、蓄積の現実の要因なのである。年間生産物の価値は、使用価値の量が変わらなくても、減少することがありうる。この価値は、使用価値の量は減少しても、同じままでありうる。価値量と再生産される使用価値の量とが同時に減少することもありうる。全てこのようなことは、再生産が以前よりも有利な事情のもとで行なわれるか、それとも以前よりも困難な事情のもとに行なわれるかということに帰着するのであって、後の方の場合は、不完全な――不足な――再生産という結果に終わることもありうるのである。全てこのようなことは、ただ再生産の色々な要素の量的な面に影響することがありうるだけで、これらの要素が、再生産をする資本かまたは再生産される収入として、総過程で演ずる役割を動かすことはできないのである。〕(16・22-16・34)

----- (区切りの線)

後のための先取り。

われわれはたとえば次のように見なそう。〔 $k$  = 前貸された総資本 :  $C$  = 不変資本,  $V$  = 可変〈資本〉 (〈 〉は市原氏の補足、以下同じ),  $m$  = 剰余価値]

I) 生産手段の生産.  $4000c + 1000v$  | :  $k = 5000$ , 価値増殖率 = 100パーセント ; だから  $k = 5000$  ;  $= 4000c + 1000v$ 。生産手段で存在する商品生産物 =  $4000c + 1000v + 1000m$  年間の商品生産物の総価値 = 6000

II) 消費手段の生産.  $2000c + 500v + 500m$  (= 商品生産物の価値 = 3000.  $k = 2500$  〈 〉)

生産手段の現物形態で商品生産者のもとにある  $v + m$  (I) は、消費手段の現物形態にある  $c$  (II) と交換される。II) の資本家階級は自分の不変資本を消費手段の形態から再び消費手段の生産手段の形態に転換している。すなわち、それがまた新たに労働過程の要因としても――価値増殖過程との関連で言えば――不変資本価値としても機能することのできる形態に転換している。他方では、(I) の労働力の価値  $v$  (I) と資本家 (I) の剰余価値とが消費手段に実現されており、生産手段の現物形態から収入として消費される現物形態に転換されている。(16.35-16.47

) 》 (619-622頁)

これを見ると、《後のための先取り。》とあるのは、現行版(全集版)でいうと、「第2節 社会的生産の二つの部門」の488頁にある区切り線のすぐ後にそれが書かれていることが分かる。エンゲルスはこの節の前半部分を第2稿から採ってきたわけである。そして大谷氏が〈(おそら

くはそれよりも二つ前からのパラグラフ (S. 727.28-728.30) を含めて) 単純再生産の分析が始まっている) (中128頁) とされているその二つのパラグラフを、エンゲルスは第1節の第2パラグラフと最後のパラグラフに持ってきているわけである (それ以外は第2稿から)。また《後のための先取り。》と書いたあとに続く文章のうち単純再生産の表式を示している3つのパラグラフは現行版の区切り線 (全集版488頁) のあとに続く文章になっているが、エンゲルスによってかなり内容的にまとめられている。そして第8稿に該当するのは、現行版の488頁の終わりまでであり、489頁と490頁の最初の行、つまり第2節の終わりまではエンゲルスによって加筆されたものだとし原氏は推測されている。だから上記の草稿の《生産手段の現物形態で商品生産者の手もとにある  $v + m$  (I) は、……》以下の部分は、現行版の「第3節 両部門の転換 I ( $v + m$ ) 対IIc」の冒頭に来ている部分なのである (しかしこの部分もエンゲルスによって少し書き換えられている)。

さて、草稿の内容と現行版との関係は大体分かったとして、そもそもの問題は、この「あとに置くべきものの先取り」を如何に理解すべきかということであった。その問題にもどることにしよう。すでに大谷氏の解釈は紹介したが、私が大谷氏のような解釈に根本的な疑問を抱くのは、第8稿全体の次のような構成を考えるからである。市原氏によると、この第8稿の「断り書き」 (以下、われわれは「あとに置くべきものの先取り」を「断り書き」と略す) 以降の内容は、次のようなものだという (《『資本論』第2部第3篇第19・20章と第2部第8稿 (上・下) 》の上の136-7頁)。

- (1) 「第3節 両大部門間の変換 — I ( $v + m$ ) 対IIc」
- (2) 「第4節 大部門IIの内部での変換。必要生活手段と奢侈品」
- (3) 「第5節 貨幣流通による諸変換の媒介」
- (4) 「第11節 固定資本の補填」
- (5) 「第12節 貨幣材料の再生産」
- (6) 「第10節 資本と収入 — 可変資本と労賃」

もちろんここで書かれている表題はすべてエンゲルスによるものであるが、それはそこに書かれている内容を大まかにでも表している。つまりマルクスは第8稿の内容からみて単純再生産について書いていると思われるところで、断り書きを書いたあと、単純再生産の表式を示し、すぐに「両大部門間の変換」の考察に移り、そのあと上記のような順序で問題を考察しているということである (だからエンゲルスは編集の段階で一部順序を入れ替えているわけだ)。

これを第二稿の単純再生産の部分の敘述と比較してみる必要があるのではないだろうか。今回刊行されたMEGAⅢ/11にもとづいて第2稿を直接検討されている早坂啓造氏の前掲論文 (『経済』09年2月号《『資本論』第Ⅱ部第3篇のエンゲルス編集稿とマルクス第Ⅱ稿、第Ⅷ稿の構成とを比較すると》) を参照してみると、それは次のようになっているという。

〈この第Ⅱ稿では、消費手段の部門を第Ⅰ部門、生産手段部門を第Ⅱ部門と定め、それぞれの属性

を確定することによつて、素材補填と価値補填についての議論の順序が結果として定まっています。つまり、**(1) 消費手段部門内部の価値補填と素材補填、(2) 両部門間の交換、(3) 生産手段部門内部の補填**という序列です。マルクスは、第II稿では、この序列に沿つた記述に続けて、はじめて両部門間の相互関係を把握する表式的な叙述を行なっています。〉 (156頁)

つまり第2稿では、消費手段部門の価値・素材補填⇒両部門間の交換⇒生産手段部門内部の補填、という順序だったというのである。第8稿では、今度は生産手段部門が第I部門とされ、消費手段部門が第II部門と第2稿とは逆にされたために、叙述がどういう順序でなされるべきかが改めて問題になる筈であるが、エンゲルスにはそうした問題意識はそもそも無かったと早坂氏は指摘されている。だからエンゲルスは第8稿の叙述にしたがって、そのまま上記のように(1)~(3)と編集したわけである。しかしもし第2稿の叙述にアナロジーさせて、叙述しようとするなら、生産手段部門の価値・素材補填⇒両部門間の交換⇒消費手段部門内部の補填とすべきだったのではないかと思える。そして実際、拡大再生産では、マルクスは「部門Iでの蓄積」から初めて部門Iの不変資本の蓄積、さらに同部門の可変資本の蓄積の考察を行い、そして「部門IIでの蓄積」に移っている。だから当然、本来は、単純再生産でもそうした順序で展開すべきだったと思われるのである。マルクス自身は、あるいはそうした展開を考えていた可能性は大いにあると思われるのである。

もし、マルクス自身にそうした叙述上の展開が頭にあったとすれば、区切りの横線以降の叙述は、二重の意味での「先取り」だったといえるのではないだろうか。第一に、第8稿の叙述では最初から貨幣流通による媒介を入れた考察になっているが、マルクス自身の当初のプランでは、まず最初に貨幣流通による媒介を捨象した考察が先行しなければならなかったからである。そして第二に、上記の叙述の「順序」から考えるならば、マルクスとしては、まず最初に「生産手段部門の価値・素材補填」を書いてから、「両部門間の交換」に移る予定なのに、いきなり「両部門間の交換」から入っているからである。こうした意味でもそれは〈あとに置くべきものの先取り〉だったのではないだろうか。

ところでついでに早坂氏のこの単純再生産部分の「先取り」の理解は私の理解と共通するところがあるのではあるが、若干、私の理解とも違っているので、それも検討しておくことにしたい。

早坂氏の理解が私の理解と多少違うのは、そもそもこのマルクスの「断り書き」の翻訳が大谷氏のものと微妙に違っているからでもある。二つを比べてみよう（括弧内は、先に紹介した市原氏の翻訳である）。

大谷訳＝「あとに置くべきものの先取り〔**Anticipirtes für das Spätere**〕」

早坂訳＝「後段のために先取りしたもの（**Anticipirtes für das Spätere**）」

（市原訳＝「後のための先取り」）

この二つの訳は微妙に違っており、実際、二人のこの断り書きそのものの理解も違っているのである。大谷訳だと、“これから記述するものは、本来はあとに置かれるべきものを「先取り」したものだ”という断り書きと理解できる（私もこの大谷氏の訳にもとづいてこれまで考えてきた）。ところが早坂訳だと、“これから記述するものは後で記述するもののために、先取りしたのだ”と断っているように理解できるのである(市原氏の訳もそれに近い)。そして実際、早坂氏はそのように理解されている。

早坂氏のように理解すると、まずここでマルクスが「後段のために」と述べている「後段」とは何かという問題が生じてくる。早坂氏はそれについて次のように述べておられる。

〈第8稿で「後段」に取り上げられているのは、「固定資本の更新」とそれに結びついた貨幣の自立的運動、つまり一方的販売と一方的購買、および「拡大再生産」です。これらは、第2稿ではまったく論議されなかったか、ないしはその議論が留保されていたものでした。マルクスは、これら「後段」部分を優先させて書いておきたいと思い、そのことを念頭において、まず社会的再生産で貨幣の媒介を伴った価値補填と素材補填、貨幣の出発点への還流、さらに両部門間および第II部門（消費手段生産部門）内の貨幣のさまざまな運動を探求しています。つまり貨幣の運動の解説が、主題となっているのです。〉（152-153頁）

つまり早坂氏の理解だと、「後段」で取り上げられているというのは、先に紹介した第8稿の単純再生産部分全体の構成のうち「(4)「第11節 固定資本の補填」」と「拡大再生産」だということである。そしてそのために「先取り」されて考察されているのが、どうやら(1)~(3)の部分（これらの貨幣の媒介を伴った運動の考察）だと考えておられるようである。とするなら奇妙なことに、早坂氏の視野には〈(5)「第12節 貨幣材料の再生産」(6)「第10節 資本と収入—可変資本と労賃」〉がないことになってしまう。いずれにせよ、こうした早坂氏の断り書きの解釈にはやはり納得行かないものがあり、ドイツ語の解釈論は別にして、やはり大谷訳の方が適切ではないのかとの思いがある。

いずれにせよ、早坂氏は、他方で〈（「先取りしたもの」）より前に本来は書かれるはずであったのに抜けているものとは何か〉という問題も取り上げ、〈当然のことながら、第8稿にはない「貨幣流通抜き」の敘述が浮かび上がってきます〉（153頁）とも述べておられる。だから早坂氏の主張が、先取りされたものの論点が〈貨幣の運動の解説が、主題となっている〉という点にあり、それが「貨幣流通抜き」よりも「先取り」されているのだ、という主旨であるならば、その限りでは、私の理解とも一致するわけである。

## ●【スミスのドグマについての最終的な総括】に関して

大谷氏は「(3) 第2稿第3章にたいする第8稿第3章の理論的前進」(※)の最初の項目としてこの問題を取り上げておられる。ここではマルクスは労働の二重性からスミスのドグマを最終的に批判しただけでなく、スミスが区別していないさまざまな流過程および生産過程がどのように絡み合っているかを明らかにして、そのドグマのたえず再生産される原因をも明らかにしたことが指摘されている。そしてさらに大谷氏は〈マルクスはこの第八稿で、スミスの分析の方法の根本的な欠陥を突いて、スミスの価値論を次のように総括的に批判している〉(中129頁)として次のマルクスの一文を紹介されている。

《A・スミスが問題にする商品は、はじめから商品資本……であり、つまり、資本主義的に生産された商品であり、資本主義的生産過程の結果である。だから、この過程が(したがってまたそれに含まれている価値増殖・価値形成過程が)前もって分析されなければならなかったであろう。この過程の前提そのものがまた商品流通なのだから、この過程の説明はまた、それから独立な、それに先行する商品分析を必要とするのである。A・スミスが「深奥に」たまたま正しい点を射当てているかぎりでも、いつでも彼はただ、商品分析のついでに、すなわち商品資本の分析のついでに、価値生産を考慮するだけなのである。》(S.726.27-38.) (中129-130頁)

そしてこれについて〈これはまさに、マルクスのスミス価値論批判の理論的な到達点と言うべきものであった〉(中130頁)と評価されているのであるが、しかし引用されているマルクスの一文の内容は何か第8稿で初めて「到達」したようなものといえるのであろうか、との疑問を禁じえない。なぜなら、ここで言われていることは、スミスが問題にする商品は、はじめから商品資本、つまり資本主義的に生産された商品だから、資本主義的生産過程を前提するものであり、まずその分析が必要とされる。しかも資本主義的生産過程は、さらにそれに先行する商品分析を必要とするのであって、それが前提される。そうした考察がスミスには欠けている。つまり抽象的な商品の分析や貨幣の分析が彼らには欠けているということに過ぎない。これは以前にも紹介したが、『経済学批判』の銀行学派に対する批判がそのまま当てはまる。それをもう一度紹介しておこう。

《総じてこれらの著述家たちは、まずもって、単純な商品流通の内部で展開されるような、そして、過程をへる諸商品それ自体の関連から生じてくるような抽象的な姿で、貨幣を考察することをしない。だから彼らは、貨幣が商品との対立のなかでうけとる抽象的な諸形態規定性と、資本や収入〔revenue〕などのような、もっと具体的な諸関係をうちにかくしている貨幣の諸規定性とのあいだをたえずあちこちと動揺するのである。》(全集13巻161-162頁)

だからこうしたスミス批判が、第8稿の段階でのマルクスの最終的な「到達点」だとされる大谷氏の評価には首をかしげざるをえないのである。そもそも『資本論』の構成を振り返れば、マルクスがここでスミスを批判して述べていることは、自身の『資本論』の構成をそのまま対置し

ていると言ってもよいようなものである。だからそうしたものが『資本論』の草稿の最終段階でようやく到達したかに言われる大谷氏の主張には納得が行かないのである。

さらに大谷氏は上記の評価に続けて、次のようにも述べておられる。

〈のちに述べるように、マルクスは第8稿で、第2稿の第3章でもまだ残っていた、社会的総再生産過程をまずなによりも商品と商品との転換と見る、古典派の貨幣ベール観を最終的に脱ぎ捨てた。これは、スミス批判を理論的な実践によって完遂したことを意味していた。〉（中130頁）

〈のちに述べる〉とされているのだから、その時に問題にすればよいのであるが、しかし〈社会的総再生産過程をまずなによりも商品と商品との転換と見る、古典派の貨幣ベール観を最終的に脱ぎ捨てた〉と言われるのであるが、しかし社会的総再生産過程を商品資本の循環過程（ $W' - G' - W \dots P \dots W'$ ）としてみるマルクスの立場は、いわばそれを（ $W' - \dots W'$ ）としてみることであり、それは〈商品と商品との転換〉として見ることでもあるのである。要するに大谷氏は貨幣流通による媒介を捨象した再生産過程の考察の意義を認めないから、そうした考察を〈古典派の貨幣ベール観〉だと揶揄しているに過ぎないのである。しかし、マルクスが果たして本当にそうした立場に、つまり貨幣流通による媒介を捨象した考察の意義を否定する立場に立ったのかどうかという点については、すでに述べてきたように根本的な疑問を持たざるをえないのである。

さらにこれは大した問題ではないので、ついでに指摘するのであるが、大谷氏は〈マルクスは、スミスが区別していない労働そのものの二重の性格を、商品流通の表面に現われる単純な商品の分析によってつかみだした〉（中129頁）と言われるのであるが、〈商品流通の表面〉ではなく、〈ブルジョア社会の表面〉ではないのだろうか。なぜなら、マルクスは次のように述べているからである。

《われわれは、最も単純な経済的關係・ブルジョア的富の基素（エレメント）・としてブルジョア社会の表面に現われるような商品から出発した。》（草稿集第4巻54頁）

《この単純な流通はブルジョア社会の表面であって、それが出てくるところの、もっと深い所で行われる諸操作は、そこでは消え去っているのだが、このようなそれ自体として考察された単純な流通は、交換のいろいろな主体のあいだの相違を、ただ形態的で一時的な相違のほかには、なにも示していない。》（全集29巻249頁）

単純な商品流通そのものが資本主義的生産の「表面に現われている」ものではないのかと思うのである。

(※) ここで大谷氏は表題を「(3) 第2稿第3章にたいする第8稿第3章の理論的前進」とされている。確かに大谷氏は、先に〈この第8稿の1ページの行頭には、「第2部第3章〔Ch. III, b. II〕」(S. 698.1)という見出しがあとから書き込まれている〉(中128頁)と指摘されていた。しかし他方で、大谷氏は〈彼(=マルクス—引用者)は、1872年の『資本論』第1巻第2版で、初版での7章編成を7篇編成に組み換えたが、この先例に合わせて、これ以降は第2部も、3章編成から3篇編成に変更した〉(中119頁)とも述べておられたのである(だから私はその矛盾を指摘したのであったが)。つまり大谷氏の理解では、第8稿の段階では第2稿で「第3章」であったものは、「第3篇」でなければならないはずである。にも関わらず、この表題では、相変わらず「第8稿第3章」とされているのはいかがなものであろうか。マルクスの草稿どおりにしたといわれるならそれまでであるが。

●【「実体的諸条件」の解明から社会的総再生産過程の考察への課題の転換】についても疑問

これは「(3) 第2稿第3章にたいする第8稿第3章の理論的前進」の二つ目の項目であるが、ここで大谷氏は、それを次のように説明されている。

〈第8稿では、第3篇の課題について、さきに第2稿で獲得された「e 第3章の課題についての新たな視点」として述べた観点が、考察の全体を貫くようになった。ここにはもはや、第2稿までの、社会的再生産における「実体的素材変換」にかかわる「実体的諸条件」という文言はどこにも見ることができない。〉(中130頁)

しかし大谷氏は第8稿が貨幣流通による媒介を顧慮した社会的総再生産過程(単純および拡大)の考察に、マルクス自身は限定して、それを「先取りして」論じているということが理解され得るなら、すなわち第8稿がそうした限定され性格のものであることが分かっておられるなら――そしてわれわれはすでに「利用すべき諸箇所」の「ノートII」のところで、マルクスが《この第二の叙述が基礎に置かれなければならない》と書いたこと、そしてこの指示のあとに書かれたマルクスの諸草稿は、まさにそうした指示にもとづいた性格を持っていること、すなわちそれらすべてが部分的・断片的なものにすぎず、第8稿もその例に洩れないことを指摘した――、そこで〈社会的再生産における「実体的素材変換」にかかわる「実体的諸条件」という文言はどこにも見ることができない〉ことは、何ら不思議でもなんでもないことに、大谷氏も気付かれたのではないだろうか。というのはすでに問題の重点はそうした問題にはないからである。しかしそのことは「実体的素材変換」や「実体的諸条件」がどうでもよいものであるということでは決してない。事実、マルクス自身も第8稿の《II 蓄積または拡大された規模での生産》でもそうした考察を行なっているからである。その一例を次に紹介してみよう。

マルクスは蓄積にはそれに先行する潜勢的可変資本である貨幣の蓄蔵が不可欠なことを指摘して、その蓄蔵貨幣が如何に形成されるかを論じているところで、次のように述べている(下線はマルクスによる強調)。

《この剰余生産物を次々に売っていくことによって、資本家たちは蓄蔵貨幣、《追加的な》潜勢的貨幣資本を形成する。いまここで考察している場合には、この剰余価値ははじめから生産手段の生産手段というかたちで存在している。この剰余生産物は、B, B', B'', 《等々》(I)の手のなかではじめて追加不変資本として機能する。しかしそれは、可能的には、それが売られる以前から、貨幣蓄蔵者A, A', A''等々(I)の手のなかで追加不変資本である。これは、Iの側での《再》生産の価値の大きさだけを見るならば、単純再生産の限界の内部でのことである。というのは、この可能的な追加不変資本(剰余生産物)を創造するのに追加資本が動かされたわけでもなく、また単純再生産の基礎の上で支出されたのよりも大きい剰余労働が支出されたわけでもないからである。違う点は、ここではただ、充用される剰余労働の形態だけであり、その特殊な役立ち方の具体的な性質だけである。この剰余労働は、IIのために機能すべき、またそこで

c II) となるべき生産手段の生産にではなくて、生産手段（I）の生産手段に支出されたのである。  
。……

したがって、単純再生産——《たんに》価値の大きさ《だけ》から見れば——の内部で、拡大された規模での再生産の、現実の資本蓄積の、物質的土台〔Substrat〕が生産されるということになる。それはまさにとりもなおさず（当面の場合には）、《直接に》生産手段の生産に支出された剰余労働I、すなわち可能的剰余不変資本の創造に支出された、労働者階級（I）の剰余労働である。だから、IのA、A'、A"、等々の側での可能的な新追加貨幣資本の形成……は、生産手段（I）の追加的生産の単なる貨幣形態なのである。

したがって、可能的追加貨幣資本の生産は、ここでは……、生産過程そのものの一現象、すなわち生産資本の一定の形態の、あるいは実体的に言えば〔realiter〕その諸要素の一定の形態の生産という現象のほかにはなにも表現していない。》（大谷訳『経済志林』54-58頁）

ここではマルクスは、蓄積の本質、その概念を解明しているのであるが、蓄積に必要な貨幣蓄積は剰余価値を実現して入手した貨幣を蓄積するのであるが、しかしその販売される剰余生産物そのものがすでに追加的な生産手段として生産されていなければならないこと、だから蓄積というのは剰余生産物を生産する労働者の《充用される剰余労働の形態だけであり、その特殊な役立ち方の具体的な性質だけ》が問題なのであり、だから蓄積というのは——そしてそれに必要な潜勢的貨幣資本の形成というのは——、《生産過程そのものの一現象、すなわち生産資本の一定の形態の、あるいは実体的に言えば〔realiter〕その諸要素の一定の形態の生産という現象のほかにはなにも表現していない》と述べている。つまりここでマルクスが問題にしているのは、資本の蓄積の一契機である蓄積貨幣の形成という問題の背後にあるまさに「実体的諸条件」そのものである。そしてこれが資本家Aから資本家Bに生産手段の生産手段として販売されるのであるから、それが「実体的素材変換」でもあることはいうまでもないであろう。だから第8稿では〈社会的再生産における「実体的素材変換」にかかわる「実体的諸条件」という文言はどこにも見ることができない〉などという大谷氏の主張はまったく正しくないであろう。

そしてだからまたエンゲルスの第3篇の表題の変更は〈適切なものであった〉とは必ずしも言えないであろう。やはりそれは問題を一面化し、マルクスの問題意識を十分理解したものとは言えなかったと評価すべきであろう。

マルクスは第3篇の表題を、第2稿では、《流過程および再生産過程の現実的（実在的）諸条件》としている。これは、まずは直接的な表象として捉えられる、現実の貨幣流通を媒介して行なわれている社会的な総再生産過程を前提し、そこから、その背後にあって、その基礎となっている実体的な諸条件を、まずは貨幣流通による媒介を捨象して掴み出し、そうした上で、今度は貨幣流通による媒介によって行なわれている現実の総再生産過程を、その抽出した本質的諸関係から展開して説明することによって、その特殊歴史的な諸特徴を浮き立たせようという、マルクスの方法論的な意図を示す表題でもあるのである。エンゲルスが変更した表題はそうしたマルクスの方法論的な意図を理解しないものといわざるをえない。

また大谷氏が第3篇の課題を次のように言われるのもエンゲルスを擁護するためであろうが、やや問題の一面化のような気がする。

〈第8稿の第3篇の課題は、個別諸資本の諸変態相互間の、またそれらと一般的商品流通との絡み合いを論じることによって、社会的総商品資本の循環を、さまざまの個別資本の総計すなわち資本家階級の総資本である社会的資本の運動形態としても、また社会的資本によって生産される剰余価値または剰余生産物の運動形態としても、考察すること、そしてこの考察のなかで、年々の再生産のさまざまな要素の転換を分析して社会的再生産の諸条件を抽出する、というところにある。約言すれば、社会的総商品資本の流過程としての社会的総再生産過程を分析することである。この点から見て、エンゲルスが彼の版の第3篇に与えた「社会的総資本の再生産と流通」というタイトルは、この第8稿の内容を表現するのに適切なものであったと言える。〉（中130頁）

マルクスは第2稿の表紙に書いたプランで、第3章（篇）の項目（1）の内容を《社会的に考察された可変資本、不変資本、および剰余価値》とし、それを《（A）単純な規模での再生産》と《（B）拡大された規模での再生産、蓄積》とに分けている。大谷氏の視点には《社会的に考察された不変資本、可変資本、および剰余価値》という項目が抜け落ちている。大谷氏がここで言われていることは、ただ個別資本の運動をその総計としての社会的総資本の運動として捉えるという、あまりにも当たり前の単純化された課題意識でしかないといえる。つまりエンゲルスの表題はそうした問題意識をただ表すだけのものだけということ、大谷氏は図らずもここで暴露しているとさえいえるのである。

## ●【社会的生産の二つの部門の呼び方の変更】について

ここでは大谷氏は、第2稿までは、マルクスは消費手段生産部門を部門Ⅰとし、生産手段生産部門を部門Ⅱとしていたが、第8稿ではそれを逆転したこと、その理由については、日本ではいろいろな研究者からさまざまな見解が披露されているが、〈ここでは、この新しい順序が、もとの順序よりもはるかに合理的であることを述べるにとどめる〉（中131頁）として次のような理由を上げておられる。

〈第一に、商品資本の循環では、商品資本の諸要素によって生産資本の諸要素を、すなわち生産手段の形態にある不変資本および労働力の形態にある可変資本を、補填することが問題である。生産資本が $c + v$ で表わされ、商品資本の価値が $c + v + m$ で表わされるのであれば、資本の構成諸部分の補填を論じるさいにも、まず生産手段生産部門の生産物による両部門の $c$ の補填を論じ、次に、消費手段生産部門の生産物による労働力の再生産を通じての両部門の $v$ の補填を論じるのが納得のいく順序である。

第二に、第8稿での拡大再生産の表式を展開するさいに、生産の出発点で不変資本はすでに必要な生産手段の形態に転換されているのにたいして、可変資本は貨幣形態にあって、次第に前貸しされるものと想定されている。つまり、なによりもまず、両部門で不変資本が現物形態で補填されなければならないのである。この点から見ても、新たな順序はまったく事態相応的である。

第三に、同じことを別の面から見ることになるが、拡大再生産の場合、両部門での蓄積の物質的基礎である追加生産手段が生産手段生産部門で生産されていなければならない。この点からも、生産手段生産部門を第Ⅰ部門とすることは合理的なのである。〉（中131頁）

まず最初の理由であるが、生産資本が $c + v$ で表され、商品資本の価値が $c + v + m$ で表されるのだから、問題の考察もこの順序でなされるのが合理的と言われるのであるが、これはさほど根拠のあるもののように思えない。第2稿では、「Ⅰ) 消費手段の生産」から「Ⅱ) 生産手段の生産」へと、この順序で考察されており、また可変資本、不変資本の順序で考察されているが、商品資本を表す表式は $c + v + m$ で表されており、だからと言ってそこにどんな不合理もみられないからである。

第二の理由も首をかしげざるをえない。確かに可変資本は生産過程と並行して前貸されるという想定は可能であるが、しかし不変資本（生産手段）だけが現物形態で補填されていけばよいというようなものではない。やはり可変資本も現物形態で、すなわち労働力に転換されて生産過程に存在しないと、そもそも現実の生産あるいは拡大再生産は始まらないからである。もちろん、労賃後払いの場合は、現実に労働が支出されてから支払われるが、しかしそのことは生産の開始時点で、可変資本も労働力に転換されている必要があるということとまた別の問題であろう。確かに労働力は日毎に再生産される必要があり、だから可変資本は独特の循環形態をとるが（そのような想定は可能だが、常にそうした想定が必要というわけでもない。問題の簡単化のためにはそうした想定は不要であろう）、しかし常に生産過程には不変資本（生産手段）だけでなく、可変資本（労働力）も現物形態で存在しなければならない（そうでないと現実の生産が出来ない）

という点では両者に何ら異なる点はないのである。だからこうしたことは部門逆転の理由にはならないのではないだろうか。

この第三の理由も了解しがたい理由である。マルクスの拡大再生産の考察過程を考えるなら、蓄積の物質的基礎が追加的生産手段だけであるなどということは出来ないからである。マルクスは、最初の問題を限定して考察しているケースを除いては、常に部門Ⅰの蓄積と同時に部門Ⅲにおける蓄積も行なわれるものと想定して考察し、計算しているからである。だからその限りでは、追加生活手段の生産も拡大再生産の物質的基礎と言いうるからである。だからこうした理由も納得しがたいのである。

このように大谷氏があげる理由は余り「合理的」なものとはいえない。では、マルクスは第2稿の想定を第8稿でどうして変更したのであろうか。残念ながら、私にはマルクス自身の文言にもとづいてその理由を説明することは出来ない。しかしもし勝手な類推が許されるなら、次のような理由が考えられるのではないかと思っている。

もちろん、大谷氏も指摘されているように、マルクスの総再生産過程の考察は、スミス批判を通じて理論的には深められてきたということが、その理由の一つとしてあげられるように思う。しかしそれだけが理由とも思えない。もっと本質的な問題がそこにはあるように思えるのである。すなわち、人間の社会的な生産（社会的な物質代謝活動）は本源的には彼らの社会的生活の維持と再生産を目的にしている。つまり衣食住の基本的な諸手段を生産しその生活を維持することである。その意味では消費手段の生産こそ、社会的生産の目的なのである。しかし人間の社会的生産活動においては、そうした消費手段を生産するための諸手段をも生産する必要がある。そしてさらにそうした消費手段の生産のための生産手段を生産するためにも、やはり生産手段が必要であり、それらも常に再生産される必要があるのである。そして人間の生産活動の歴史的な発展が進めば進むほど、直接には個人的な消費には役立たないそうした生産諸手段の生産により多くの社会的労働を配分するようになってきた。しかしどんなに社会が発展しようと、個人的な消費手段の生産のための生産手段の生産や、さらにはそうした生産手段を生産するための生産手段の生産も、究極的には直接的な消費手段を、われわれが自然から入手し、われわれ自身の生活の再生産、すなわち社会的物質代謝を維持するために存在しているわけである。だからその意味では個人的な消費手段の生産部門こそ、社会的生産の基底的部分であり、なければならず、だから、マルクスは当初はそれを部門Ⅰとし、生産手段生産部門を部門Ⅱとしたのではなかったと思える。

しかし翻って、資本主義的生産様式は、決して使用価値の生産を直接に目的にした生産ではない。利潤を唯一の推進動機とも規定的目的ともする生産様式なのである。だからこそ、資本主義的生産様式においてはすべてが逆立ちして現われてくる。先の本源的な関係においてもそうである。「生産のための生産」あるいは「蓄積のための蓄積」が資本主義的生産様式の標語となる。だからそこでは、生産手段の生産こそが第一義的なものとして現われてくるのである。だからマルクスは第8稿では、資本主義的生産様式における社会的総資本の再生産の考察としては、生産手段の生産部門こそ部門Ⅰに、そして消費手段の生産部門を部門Ⅱとすべきだと考えたのではないだろうか。私にはそのように思えるのである。

●【二重の叙述方法の放棄と貨幣運動の全面的な組み入れ】も受け入れられない

---

これも大谷氏によれば、「第2稿第3章にたいする第8稿第3章の理論的前進」なのだそうであるが、すでに何度も指摘しているが、こうした評価は大谷氏らの独断でしかないと言わざるをえない。ここでも大谷氏はエンゲルスの「序文」をそのまま踏襲されて、次のように述べておられる。

〈いまでは、社会的総再生産過程の分析を、「貨幣流通を捨象した叙述」と「媒介する貨幣流通を伴う叙述」との二段構えで行なうという以前の叙述方法で遂行できないことは、マルクスにとって明らかであった。第8稿の第3章では、マルクスは最初から貨幣の運動を組み入れて再生産過程の進行を観察している。〉（中131頁）

しかし、こうした主張にはどれほどの根拠があるのだろうか。大谷氏は何の根拠も示さずに〈マルクスにとって明らかであった〉などと述べておられるが、もし本当にそうだとするなら、どうして第8稿のなかに、マルクス自身の文言として、そうした「二段構えの叙述方法」を「否定」し「放棄」するという一文が、あるいはそれをほのめかすようなものでもよいが、そうした一文がまったく見い出されないのであろうか。その理由を大谷氏らは説明されるべきではないだろうか。あれだけ第1稿でも第2稿でも、「二段構えの叙述方法」の意義を強調してきたマルクスなのだから、もしマルクス自身にそれまでの叙述方法を放棄する意図があったのなら、当然、それを何らかの形で述べたり、示唆したりする文言があつて然るべきではないだろうか。それがまったくない事実をどのように大谷氏らは説明されるのであろうか。

すでに何度も指摘したが、〈第8稿の第3章では、マルクスは最初から貨幣の運動を組み入れて再生産過程の進行を観察している〉という事実自体は、何もそれを論証することにはならないのである。なぜなら、それはマルクスが第8稿では、最初から問題を限定して論じているからそうになっているだけのことだからである。しかもマルクスは問題を限定して論じる自身の意図を「先取り」という断り書きで明確に示していることはすでに指摘した通りである。

● [a 可変資本の貨幣形態での前貸および還流の重要性の強調] について

さて、大谷氏は先の項目、【二重の叙述方法の放棄と貨幣運動の全面的な組み入れ】に関連して、〈ここでの、社会的総再生産過程における貨幣の運動ないし役割についての分析では、とくに次の諸点が重要である〉（中131-132頁）として、a～eの項目を立てて論じておられる。これはその最初の項目aである。大谷氏は次のように言われる。

〈マルクスは第8稿で、資本主義的生産では貨幣形態での可変資本の前貸とそれの貨幣形態での還流とが決定的な契機をなすこと、だからまた、社会的総資本の再生産過程の考察でも、この前貸および還流の分析が決定的に重要であることを強調した（S. 731.15-33）。だから生産手段、消費手段、労働力という商品の相互間の「素材的転換」を考察することで満足しているわけにはいかない。貨幣を媒介にしたこれらの転換が、可変資本の貨幣形態での前貸および還流とどのように絡み合っているのか、ということがつかまなければならないのである。だから、総再生産過程の分析が商品資本の循環にもとづいて行なわれるとしても、そのさい貨幣資本の形態にある可変資本の循環が、総じて貨幣資本の循環が考慮に入れられなければならないということになる。貨幣資本の循環と商品資本の循環とは時間的にずれており、しかも不変資本の前貸および還流と可変資本の前貸および還流とは、これまた時間的にずれているのだから、これが——のちに拡大再生産のところで現われてくるように——事態を複雑にし、叙述に一連の難しさをもたらすことになる。〉（中132頁）

〈マルクスは第8稿で、資本主義的生産では貨幣形態での可変資本の前貸とそれの貨幣形態での還流とが決定的な契機をなすこと、だからまた、社会的総資本の再生産過程の考察でも、この前貸および還流の分析が決定的に重要であることを強調した〉ということはまあよいとしましょう。確かにマルクスは「第20節 単純再生産」の「第3節 両部門間の転換 I (v + m) 対IIc」（この部分は第8稿）のなかで次のように述べているからである。

《しかし、この相互転換は貨幣流通によって成立するのであって、貨幣流通はそれを媒介するとともにその理解を困難にするのであるが、しかしそれは決定的に重要である。というのは、可変資本部分は絶えず繰り返し貨幣形態で現れなければならないからである。すなわち貨幣形態から労働力に転換される可変資本として現れなければならないからである。》（全集版490頁）

しかしこのマルクスの文言を金科玉条にして、貨幣資本の還流の決定的意義なるものをあまりにも強調しすぎることは正しくないであろう。なぜなら、マルクスがここで強調しているのは、可変資本の場合は常に貨幣形態でそれが労働力に転換されなければならないからだとの理由によるからである。労賃は例えそれが後払いであろうが、先払いであろうが、常に現金で支払われる必要がある。だから可変資本は常に貨幣形態で資本家の手許に還流する必要がある。マルクスが指摘しているのはこの事実である。しかしこうした理由は事態の具体的な側面である。そして具体的には不変資本部分の場合には資本家たちは相互に信用を与え合うことによって、貨幣を媒介

せずに商品資本を相互に補填し合うケースが多く、だから必ずしも貨幣形態で還流する必要はないのである。しかし注意が必要なのは、われわれが考察している社会的な総再生産過程では、そうした信用など具体的な諸契機は捨象されているのである。だから可変資本部分だけではなく、不変資本部分も剰余価値部分も、資本家たちはそれらすべての商品資本を一旦は貨幣資本に転換すると仮定されているのである。それゆえ、可変資本が常に貨幣形態で労働力に転換されなければならないということだけをことさら強調することは、われわれが考察している抽象レベルを考慮しないことであり、それ自体が誤りに転ずる可能性を持っているのである。

だから大谷氏らが、可変資本部分が常に貨幣形態で還流する必要があるということを強調するあまり、〈だから生産手段、消費手段、労働力という商品の相互間の「素材的転換」を考察することで満足しているわけにはいかない〉などというのはおかしい議論なのである。一体、誰が満足しているのか分からないが、このように言うことは、大谷氏は少なくとも〈生産手段、消費手段、労働力という商品の相互間の「素材的転換」を考察する〉意義そのものは認めておられるのであろうか。それは必要な考察の一つの段階ではあるが、それだけに〈満足して〉留まっているのはダメだということなら、まったくそのとおりであり、誰も文句は言わないであろう。誰もそれに満足せよとか、そこに留まっておるべきだなどは主張していないからである。しかしその前では大谷氏はその意義さえも認めずに、「二段構えの敘述方法」をマルクスは放棄したと言われたのではなかったろうか。それとも〈満足しているわけにはいかない〉というのは、それ自体を否定するための単なるレトリックなのであろうか。

確かに〈資本主義的生産では貨幣形態での可変資本の前貸とそれの貨幣形態での還流とが決定的な契機をなす〉ことは認めることにしよう。しかしだからといって、〈貨幣を媒介にしたこれらの転換（＝商品相互の素材転換）が、可変資本の貨幣形態での前貸および還流とどのように絡み合っているのか、ということがつかまなければならないのである〉というなら、それは行き過ぎであり、問題の一面化である。なぜなら、単に問題は〈可変資本の貨幣形態での前貸および還流とどのように絡み合っているのか〉ということだけが問題ではないし、それだけが解明されればよいという問題でもないからである。不変資本や剰余価値もそれぞれが貨幣流通に媒介されてどのように補填され合うのかも解明される必要があるからである。

さらに〈貨幣資本の循環と商品資本の循環とは時間的にずれており、しかも不変資本の前貸および還流と可変資本の前貸および還流とは、これまた時間的にずれているのだから、これが——のちに拡大再生産のところで現われてくるように——事態を複雑にし、敘述に一連の難しさをもたらすことになる〉というのは、まったくわれわれの理解を超えている。なぜ、総商品資本の循環として考察される社会的な総再生産過程の考察に貨幣資本の循環が入ってくるのか訳が分からないからである。

まず大谷氏は〈貨幣資本の循環と商品資本の循環とは時間的にずれて〉いるとおっしゃる。もし大谷氏が個別諸資本の現実の循環や回転を問題にしているのなら確かにそうである。しかしわれわれが今問題にしているのは、社会的な総再生産過程である。とするなら、こうした過程の考察においては、マルクスは常に流通期間をゼロと仮定していることは大谷氏もご存知であろう。もし流通期間がゼロならば、貨幣資本の循環と商品資本の循環とに時間的ズレなど生じるはずが

ないではないか。

また〈不変資本の前貸および還流と可変資本の前貸および還流とは、これまた時間的にずれている〉というに至ってはまったく混乱以外の何ものでもない。〈不変資本の前貸〉とか〈可変資本の前貸〉などと述べているのは、あるいは大谷氏は問題をただ貨幣資本の循環としてしか考えておられないのではないかと疑わせるところがあるが、しかし、まあそれはおいておこう。問題を“善意に”解釈して、商品資本の循環のうちの流通過程、すなわち $W'-G'-W$ のうち、 $W'-G'$ を終えて、 $G-W$ の過程を大谷氏は問題にしているのだとわれわれも考えることにしよう。そこで大谷氏は〈不変資本の前貸〉と〈可変資本の前貸〉とは〈時間的にずれている〉とおっしゃる。大谷氏がそのように考えているのは、おそらく労賃の支払は後払いであり、例えばそれは一週間ごとに週末に支払われ、それに対して、不変資本、つまり生産手段（われわれは固定資本を捨象しよう、そうするとこれは労働対象である）については、生産を開始する期のはじめに資本家はそれを購入しなければならない。だから不変資本の前貸は期の最初になされるが、しかし可変資本の前貸はそれから一週間遅れてなされる、つまり時間的にずれると言いたいのであろう。

しかしこんな捉え方は果たして正しいのであろうか。すでに以前にも指摘したが、大谷氏も生産を開始する期の最初に労働力も資本家によって購入されていなければ、生産がまったく進まず、労働対象が生産的に消費されるはずもないことは認めるであろう。《資本家が労働力を買うのは、それが生産過程に入る前で》（全集版490頁）なければならないのである。ということは大谷氏は労働力は生産を開始する期のはじめに購入されるが、しかしその賃金の支払は一週間後だから、だから可変資本の前貸も一週間後になされるのだ、とどうやら考えておられるようなのである。しかしもしそれが正しいとするなら、一体、その賃金が支払われるまでの一週間、生産過程で働いている労働力とは一体なんであろうか？ 大谷説だとまったく無規定な代物になる。それは生産資本ではない。なぜなら、可変貨幣資本はまだ前貸されておらず、よってそれはまだ現物形態に、すなわち労働力に転換していないはずだからである。こんなバカな話はないことは誰でも分かるであろう。例え労働者に対する賃金の支払が一週間後であろうが、一カ月後であろうが、しかし可変資本は生産を開始する期のはじめに前貸され（つまり労働力は購入され）、それは現物形態に（すなわち労働力に）転換されなければならない。そうでないと生産資本は必要な条件を満たさない。そして考えてみれば、例えば不変資本の前貸にしても、大谷氏の理屈だと、資本家が生産材料を信用で購入し、一週間後に支払う約束で購入したなら（そして資本の取り引きとしてはそうした信用取引は一般的ですらある）、不変資本の前貸も一週間後に行なわれることになる。とするなら、その一週間分の生産過程で生産的に消費される労働対象は一体何なのか、という疑問がまた生じることになる。それは大谷説では生産資本でないことになるからである。これではまったくチンプンカンプンではないだろうか。これを混乱といわずして何を混乱というのであろうか。

それにしても、大谷氏は、先に検討した〔b 商品資本の循環の独自性の明確化〕（中123頁）のところでは、第2稿では、マルクスにあっては、いまだ社会的総再生産過程を商品資本の循環として捉えるという視点が不十分であったかに述べていたのであった。ところが、第8稿では、いつのまにか、総再生産過程を商品資本の循環として捉える視点そのものを飛び越えて、もはや商品資本の循環として捉えることそのものがすでに不十分であって、今度は、それに〈貨幣資本

の循環が考慮に入れられなければならない〉とおっしゃるのである。第2稿では〈商品資本の循環の独自性〉を十分明確化していない理由として、大谷氏は、〈マルクスが、ケネーの経済表の基礎を成しているのは生産資本の循環と商品資本の循環だ、と述べていた〉（中123頁）からだと指摘していた。ところがいまでは大谷氏は第8稿では、商品資本の循環だけでなく、貨幣資本の循環も考慮に入れる必要があるのであり、そうしたものにマルクスの視点は移っているかにおっしゃるのである。しかしこれは以前の指摘からするなら、むしろマルクスの視点の後退ではないのだろうか。

大谷氏は、商品資本の循環に加えて〈貨幣資本の循環が考慮に入れられなければならない〉とおっしゃるのであるが、では、「生産資本の循環」はどのようなのであろうか。どうして生産資本の循環は問題にはならないのであろうか。〈時間的にずれて〉いるというのなら、生産資本の循環だってそうではないのだろうか。こうして大谷氏は自身が主張される第2稿の〈不完全〉状態へと後退し、ますます混沌のなかにはまり込んで行くことになる。

● [b 資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流との区別および関連の分析]  
について（その1）

---

これも先の「a」と同様、大谷氏が「第2稿第3章にたいする第8稿第3章の理論的前進」の一つとして上げた、【二重の叙述方法の放棄と貨幣運動の全面的な組み入れ】に関連して、〈ここでの、社会的総再生産過程における貨幣の運動ないし役割についての分析では、とくに次の諸点が重要である〉（中131-132頁）としている二つ目の項目である。ここで大谷氏が論じている問題は、これまでも日本の多くのマルクス経済学者のなかでも議論され論争されてきた問題の一つである、“いわゆる資本の前貸か、流通手段の前貸か”という問題なのである。この問題については私も正直いろいろと頭を悩ませたが、最終的な結論は、大谷氏らが依拠している久留間健氏の諸説は受け入れられないというものであった。だからここでは大谷氏の主張を踏まえながら、久留間健氏の諸説をもとに論を展開している人たちの意見も参考にしながら、問題を少し詳細に、また私自身の思考過程も紹介しながら、検討して行きたいと考えている。よって、大谷氏の論文の分量（それは『経済』の上下2段組1頁強程度）に比べて、批判的検討がかなりの分量になってしまうが、その点をご容赦ねがいたい。

まずわれわれは内容を詳細に吟味する手続きとして、大谷氏の論述に沿ってその内容を逐一検討することから開始しよう。まず大谷氏は次のように述べておられる。

〈貨幣資本の循環における最初の段階であるG—Wは、それ自体としては一つの「流通行為」であるが、なによりもまず、価値増殖を目的として貨幣資本を生産資本の諸要素に転態する流通行為であり、のちのW'—G'によって還流すべき資本の「前貸〔Vorschuß〕」である。この、生産過程への不変資本および可変資本の前貸が、「資本の前貸」の「範疇的規定」であって、マルクスは、ケネーおよび重農学派が「前貸〔avance〕」をそのようなものとして規定したことをきわめて高く評価している（S. 717.21–26, 721.40–722.9, 796.41–797.11 und 789.33–36）。〉（中132頁）

ここでは大谷氏は貨幣資本の循環のG—Wは、〈それ自体としては一つの「流通行為」である〉と述べておられる。これの意味するところを正確に理解されておられるのかどうか問題なのである。以前にも指摘したが、そこらあたりが大谷氏にはあいまいな気がするからである。これは資本の流通過程を資本関係を捨象して見るなら、それは単純流通として現われてくるということなのである。つまりそれは単なる商品流通の過程だ、すなわち貨幣の商品への変態、貨幣による商品の購買、として現われるということだ。しかしその単純流通はより具体的な資本関係のもとでは貨幣資本の商品資本への転換であり、貨幣資本の「前貸」になるとマルクスは指摘している。なぜなら貨幣は、この場合、価値を増殖させて手許に還流してくることを期待して投げられるからである。これこそ「前貸〔Vorschuß〕」の真の意味だ、とマルクスは次のように述べている。

《資本家が労働力を買う貨幣は、彼にとっては価値増殖のために投じた貨幣、つまり貨幣資本である。それは、支出されたのではなく、前貸しされているのである。（これが「前貸」——重農学派の *avance* ——の真の意味であって、資本家がこの貨幣そのものをどこからもってくるかには何の関係もないのである。資本家が生産過程の目的のために支払う価値は全て資本家にとっては前貸しされているのであって、この支払が前になされようと後からなされようとそれに変わりはないのである。その価値は生産過程そのものに前貸しされているのである。）》（第2部第19章全集版466頁）

大谷氏が〈マルクスは、ケネーおよび重農学派が「前貸〔*avance*〕」をそのようなものとして規定したことをきわめて高く評価している〉と述べておられるのはこの一文を指すのであろう。いずれにせよ重要なのは過程を抽象的なレベルで見ると、より具体的なレベルで見ているかの相違であることをしっかり理解することである。続く大谷氏の一文をさらに検討しよう。

〈ところが、この同じ流通行為 **G\_W** が、同時に、「資本の前貸」とは区別されるべきもう一つの「前貸〔*Vorschuß*〕」でもありうるところから、「難問〔*perplexity*〕」（III/4.1, 151.29）が生じる。もう一つの「前貸」とは、社会的総再生産を媒介する流通手段を資本家階級のうちのだれかが流通過程に前貸しなければならない、という意味での「前貸」、すなわち流通過程への流通手段の前貸である。〉（中132頁）

まずわれわれはこの場合の「前貸」はマルクスが「真の意味」での「前貸」と述べていたものと異なることを踏まえておこう。というのは、この場合、貨幣を流通に投じる資本家はそれによって何も儲けないとマルクス自身も述べているからである。そしてこれはある意味では当然であって、というのは前にも述べたように、資本の流通過程を資本関係を捨象して考察するなら、単純流通として現われ、単純流通の過程としては同じ価値がその姿態を変態させるだけなのだから、そこには増殖などありえないからである。大谷氏は〈もう一つの「前貸」とは、社会的総再生産を媒介する流通手段を資本家階級のうちのだれかが流通過程に前貸しなければならない、という意味での「前貸」、すなわち流通過程への流通手段の前貸である〉といわれる。しかしここで重要なのは、社会的総再生産を媒介する貨幣一般を「流通手段」という場合は、それを抽象的なレベルで見ているからそういえるのであって、具体的な形態規定性から捉えるなら、それらも場合によっては「貨幣資本」でもありうるという視点が果たして大谷氏にあるかどうかである。マルクス自身はこうした〈社会的総再生産を媒介する〉するために資本家が投じる貨幣のことを「**追加貨幣**」と述べている（全集515頁）。確かにマルクスもそれを「**流通手段の前貸**」とも述べている場合もあるが（同517頁）、しかしその場合は部門Iの資本家が自身の個人的消費のために自分の収入を目当てに投じる貨幣だから、それを「**流通手段の前貸**」としているだけであることに気付く必要がある。だから〈社会的総再生産を媒介する〉貨幣だから「流通手段」だとするのは早計なのである。それはあくまでも〈社会的総再生産を媒介する〉貨幣を単純な商品流通のレベルでみるなら、それは「流通手段」になるのであり、もし〈社会的総再生産を媒介する〉貨幣であっても、具体的な資本関係のなかで見るとすれば、それは「貨幣資本」として現われる場合もあるし

、収入を媒介する場合は「流通手段」として機能する場合もあるのである。例えば資本家Iが自身の不変資本の補填のために、生産手段の現物形態で存在している商品資本の実現を目当てに、まず最初に手持ちの貨幣を流通に投じるなら、その場合は、抽象的なレベルでは、単なる貨幣の手放し、つまり流通手段を流通に投じたのであるが、より具体的な資本の形態規定性から見れば、彼は貨幣資本を前貸したのである。そしてこの場合も彼が「追加貨幣」を投じる役割を果たした当事者であることには何ら変わりはない。だから大谷氏が続けて次のように述べておられるのは、マルクスが「追加貨幣」と述べているものの説明でなければならないのである。

〈社会的総生産物すなわち総商品資本の諸転換あるいは相互補填を媒介する流通手段としての貨幣は、総商品資本の持手である個別資本家たちの手もとにあるほかはない、つまり、彼らは商品資本のほかに、準備貨幣資本または鑄貨準備の形態で貨幣をもっているのである。彼らのこの貨幣が再生産の諸要素の諸転換あるいは補填を媒介し始めるのは、彼らがこの貨幣で商品を買うこと、すなわち $G \rightarrow W$ を行なうことによってである。この $G$ による購買が、彼による流通過程への流通手段の前貸である。けれども、彼らのこの購買すなわち $G \rightarrow W$ は、じつは、彼らの商品資本の総変態すなわち $W \rightarrow G \rightarrow W$ のうちの第二の変態をなす $G \rightarrow W$ なのであり、彼らはこれを、第一の変態 $W \rightarrow G$ に先行させて行なうのである。だから彼らは、そのあとに行なわれる第一の変態 $W \rightarrow G$ によって、前貸したのと同額の貨幣額を回収する。これが、彼が前貸した流通手段の彼のもとへの還流であり、彼はこれによって、ふたたび手もとに前貸したのと同額の準備貨幣資本または鑄貨準備を取り戻すことになる。〉（中132-3頁）

つまり〈社会的総生産物すなわち総商品資本の諸転換あるいは相互補填〉を貨幣流通による媒介を考慮して考察する場合に一つの困難にわれわれは突き当たる。総商品資本の補填関係を商品資本の循環として考察するということは、 $W' - G' - W \dots P \dots W'$ の過程として考察することである。しかし社会の総資本が総商品資本としてわれわれの前に前提されている場合、それらがまず $W' - G'$ の過程をとろうとしても不可能であること気付く。なぜなら、一つの個別資本の $W' - G'$ （商品資本の貨幣資本への転化）は他の個別資本の $G - W$ （貨幣資本の商品資本への転化）か、あるいは労働者や資本家の個人的消費のための単なる $G - W$ を前提するからである。だからすべての商品資本が同時に $W' - G'$ の過程を行なうというわれわれの想定には、もともと無理があるのである。

それにそもそも社会の総資本が総商品資本（ $W'$ ）として、われわれの前に前提されている場合、この $W'$ には当然、貨幣あるいは貨幣資本は含まれていない。つまりわれわれが社会的な総再生産過程の考察の出発点として前提している単純再生産の出発表式には（もちろん拡大再生産の出発表式でも同じであるが）、貨幣や貨幣資本は現われていない。だから貨幣流通による媒介によってそれらの総商品資本（総生産物）の相互補填を考察するためには、どうしてもそれを媒介する貨幣を何処からか持ってくる必要がある。つまり個別の諸資本の循環や回転を考察する場合には、ただ流通過程に存在すると前提するだけで良かった貨幣を、社会的総再生産過程を考察する場合には、誰がその貨幣を最初に流通に投じるかという問題が新たな問題として生じてくるの

である。そしてそれは結局、資本家しかいない。だから社会的な総資本のうち、一部の資本家は  $W' - G'$  ではなく、 $G - W$  の過程から開始するしかないのである。つまり彼らは  $W' - G' \cdot G - W$  の過程を、後半部分から開始するわけである。すなわち彼らは  $W' - G'$  を目当てに、 $G - W$  をまずやり、そのあと  $W' - G'$  をやって、彼が最初に流通に投じた貨幣  $G$  を回収するのである。その貨幣をマルクスは「追加貨幣」と述べている。ところがどうしたことか、大谷氏はこのマルクスが論じている「追加貨幣」という範疇を無視されている（あるいは見落とされている）。そして彼らはそれを、ただ貨幣をその抽象的な機能で見た場合の規定性に過ぎない「流通手段」とし、その「流通手段」に、そうした社会的総資本の流通を媒介するために一部の資本家によって追加的に最初に流通に投じられる貨幣という意味を付加するために、問題が混乱してくるのである。彼らはそうした社会的総商品資本の貨幣流通による媒介による補填関係の考察から生じる貨幣の新たな形態規定性と貨幣の抽象的な機能規定とを明確に区別できずに、それらを混同しているのである。これが大谷氏（そして同じ問題を論じている多くの学者たち）の“躓きの石”である。それは次のような大谷氏の説明に現われている。

〈ここで注意が必要なのは、 $G\_W$  がつねに、同時に流通手段の前貸であるわけではない、ということである。資本家が自己の商品資本の一部である商品の販売  $W\_G$  によって入手した貨幣で商品を買う購買  $G\_W$  は、流通手段の前貸にはならない。この貨幣のなかに含まれる彼の収入すなわち剰余価値の支出である  $g\_w$  もそうはならない。また、労働者の労働力の変態  $W(A)\_G\_W$  では、労働力の販売が必ず先行するのであって、労働者が流通手段を前貸することはありえない。だから、 $G\_W$  が同時に流通手段の前貸となるのは、 $W\_G\_W$  の第二の変態  $G\_W$  が第一の変態  $W\_G$  よりも前に行なわれ、あとから  $W\_G$  によって補われる場合だけなのである（S. 766.18-25, 795.18-21, 800.27-32, 801.25-28 und 809.37-810.5）（8）。〉（中133頁）

これが「追加貨幣」の説明なら問題はない。しかしそれが「流通手段の前貸」として説明されていることが問題なのである。「追加貨幣」の概念が明確に掴まれているなら、それが〈資本家が自己の商品資本の一部である商品の販売  $W\_G$  によって入手した貨幣〉でないことは明らかであろう。なぜなら、それは資本家たちが彼らのすべての商品資本の補填を媒介させるために、彼らの商品資本とは別個に保持していて、「追加的」に流通に投じる貨幣なのだからである。それは《売れた商品の代金ではな》い（全集版515頁）。

ところが大谷氏はそれを〈流通手段の前貸〉として定式化されている。しかし流通手段というのは、貨幣の抽象的な機能の一つであり、貨幣を単純流通で捉えたときの一つの機能なのである。だからそうした抽象的なレベルでみるかぎりでは〈資本家が自己の商品資本の一部である商品の販売  $W\_G$  によって入手した貨幣で商品を買う購買  $G\_W$ 〉もやはりそれは流通手段としての貨幣の機能でもあることには違いはないのである。だから大谷氏が次のように述べておられることも正しいとはいえない。

〈このように、社会的総再生産過程では資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流とが複雑な仕方で絡み合っているのです。両者を概念的に区別したうえで、その絡み合いを明晰に把

握するには抽象力の弛みない緊張が必要である。マルクスは第8稿で、貨幣流通によって媒介された資本の運動と資本の運動との絡み合い、資本の運動と収入の運動との絡み合い、収入の運動と収入の運動との絡み合いを分析しているが、そのさいの一つの力点は、資本の前貸・還流と流通手段の前貸・還流とを明確に区別したうえで、両者が絡み合って現われる複雑な過程を明らかにするところに置かれていたのである（9）。>（中133頁）

重要なことは、〈社会的総再生産過程では資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流とが複雑な仕方で絡み合っているので、両者を概念的に区別したうえで、その絡み合いを明晰に把握する〉ことではない。必要なことは、「追加貨幣」の概念とその独自性を明確につかむことである。それさえできれば、その「追加貨幣」が具体的な資本の形態規定性としては「貨幣資本の前貸」として把握される場合もありうるし、単純な流通過程の一契機としては単なる「流通手段の前貸」である場合もありうるのである。同じ過程が抽象レベルの相違によってわれわれに違った様相と規定性を与えるのはありふれたことである。

-----

これはついでに指摘しておくことだが、ここで大谷氏は〈マルクスは第8稿で、貨幣流通によって媒介された資本の運動と資本の運動との絡み合い、資本の運動と収入の運動との絡み合い、収入の運動と収入の運動との絡み合いを分析している〉と述べておられる。われわれはこうした表現を見て、「おや？」と思わざるをえない。というのは、大谷氏は以前、〈「第2部第2稿」の【第1稿に対する理論的な前進】〉の一つとして、〈[c 資本と資本との、資本と収入との、収入と収入との交換、という考え方の放棄]〉（上152頁）と題して次のように述べておられたからである。

〈第一稿の第三章の最初に置かれた二つの項目は、「1 資本と資本との交換、資本と収入との交換、および、不変資本の再生産」および「2 収入と資本。収入と収入。資本と資本。（それらのあいだの交換）」である（III/4.1, S. 301-344）。この表題からも読み取れるように、マルクスはここでは、社会的総再生産過程の運動の核心を、商品形態を取った資本および収入が持ち手を変える三つの「交換」に見ていた。こうした把握には、少なくとも、三つの難点がある。〉（上152-3頁）

そして大谷氏は〈三つの難点〉なるものを示されていたのであるが（そしてもちろん、それらに対して私は根拠がないことを指摘したのであるが）、ところがここでは、マルクス自身が第8稿の段階でも、〈資本の運動と資本の運動との絡み合い、資本の運動と収入の運動との絡み合い、収入の運動と収入の運動との絡み合いを分析している〉と述べておられる。一方は「交換」であり、他方は「運動」の「絡み合い」だから問題はないというのだろうか。しかし「運動」の「絡み合い」は「交換」し合うことによって生じるのだから、こんなことは言い訳にはならないだろう。明らかに大谷氏はここでは以前ご自身が述べたことと矛盾したことを言っておられるの

である。

---

(こ項目は字数制限の関係で三分割せざるを得ず、  
以下は「その2」に続きます。)

● [b 資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流との区別および関連の分析]  
について (その2)

さて、やや脱線したが、本線に戻そう。問題は次のようなことであった。社会的総再生産過程を総商品資本の循環として考察するさいに、総商品資本を価値・素材の両面から補填・転換させるために、資本家が彼の商品資本とは別個に保持していて、追加的に流通に投じる貨幣が必要だということである。それが大谷氏らによると、貨幣資本の循環のさいに、最初に前貸される「貨幣資本の前貸」とは異なり、それとは区別される「流通手段の前貸」というのであった。しかし果たしてそうした主張は正しいのか、それをさらに検討することにしよう。

大谷氏は「流通手段の前貸」を説明して次のように述べておられた。

〈G—Wが同時に流通手段の前貸となるのは、W—G—Wの第二の変態G—Wが第一の変態W—Gよりも前に行なわれ、あとからW—Gによって補われる場合だけなのである〉 (中133頁)

大谷氏はこうした区別を最初に論じたのは久留間健氏だと注9で指摘されているが、われわれは前畑雪彦氏がやはり久留間健氏の所説にもとづいてそれを定式化しているものを検討して、この問題を考えることにしよう。前畑氏によると、次の〈二つの種類の貨幣の還流運動〉があるのだという (前畑雪彦「流通手段の前貸と資本の前貸」『立教経済学研究』34巻4号253頁)。

### 1、資本の前貸

- (1) 還流形態  $G - W \dots P \dots W' - G'$
- (2) 還流根拠 資本としての価値の自己増殖による
- (3) 還流期間 流通時間プラス生産時間

### 2、流通手段の前貸

- (1) 還流形態  $G - W - G$
- (2) 流通根拠 資本家が商品形態で所有している資本及び所得以上に追加的に貨幣を、従ってまたそれだけ追加的に価値を投下したことによる。
- (3) 還流期間 流通期間

果たしてこうした区別が正しいのかどうかである。

こうした区別の無意味さは、まず2の還流形態の書き方を変えてみれば分かる。これは内容から書き直すと次のようであればならない。

$G_2 - W_2 \quad W_1' - G_1'$

つまり最初のG—Wは、第二年目の再生産の出発のためのG—Wなのである。だからそれが分

かるように、 $G2-W2$ と書いて見ると、その循環は次のようになる。

$[G2-W2] \dots P2 \dots W2'-G2'$

だからこの $G2$ の還流形態は、1とまったく同じ還流形態をとっているし、だからやはり彼らの理屈からすれば、「貨幣資本の前貸」なのである。

それに対して、 $G2-W2$ のあとに行なわれる $W-G$ というのは、内容から書き直すと、 $W1'-G1'$ となる。つまりそれは初年度の循環

$G1-W1 \dots P1 \dots [W1'-G1']$

の最後の商品資本の貨幣資本への転換なのである。

だからこれもやはり1の還流形態と同じ還流形態をとっているのであって、やはり彼らの理屈からいえば「貨幣資本の前貸」なのである。

しかしでは1と2とでは何が異なるのであろうか。

もう少し彼らが注目しているこの二つの貨幣の還流形態の相違を考察してみよう。1の還流形態はいうまでもなく、貨幣が貨幣資本として前貸される場合の循環を見ているのである。そして同じ貨幣資本の循環として見るなら、2もまったく同じ循環をしていることをわれわれは確認したわけである。しかしそうだとするなら、2の還流形態 $G-W-G$ は何を意味するのであろうか。それは貨幣だけに注目し、その貨幣が持っている資本の形態規定性を捨象して、たんなる貨幣として見るなら、それは最初に流通に投じた資本家の手ともにすぐに還流するものとして現われるのである。だから問題は、貨幣を資本の形態規定性において見るか、たんなる貨幣としてより表面的・抽象的に見るかの相違なのである。確かに貨幣資本も単純な商品流通のレベルで見ると、それは流通手段としてわれわれに観察されるわけである。だから彼らは2を流通手段、1を貨幣資本と区別したわけである。しかしそのことは、決して、貨幣の還流形態の相違によってあるものは流通手段になったり、別のものは貨幣資本になるわけでは決していない。それは同じ貨幣をより抽象的なレベルで見ると、それともより具体的に資本の形態規定性を帯びたものとして、すなわち資本の循環として見るかによる相違にすぎないわけである。それは例えば1の場合も最初に前貸される貨幣資本も抽象的なレベルで観察するなら、われわれにはたんなる貨幣として、流通手段の手放しとして見えることから明らかである。彼らは1では資本としての形態規定性というより具体的な規定性を見て、2ではより抽象的に見ているだけなのである。そしてもしより具体的な規定性で見ると、1も2も貨幣資本の循環過程としては同じものとして観察できるのであり、ただその循環のどの部分を見るかの相違でしかない、すなわち1の場合、二つの循環期間を連続して考えてみると、 $G1-W1 \dots P1 \dots W1'-G1' \cdot G2-W2 \dots P2 \dots W2'-G2'$ となるのに対して、2の場合は、 $G2-W2 \cdot W1'-G1'$ であるから、これは $[G2-W2] \dots P2 \dots W2'-G2'$ と $G1-W1 \dots P1 \dots [W1'-G1']$ という二つの循環期間を一部順序を逆にしていることになる。つまり第一の循環期間の最後の $W1'-G1'$ が、第二の循環期間の最初の $G2-W2$ のあとになされるということである。だから二つの循環の相違を見るなら、ここにこそその相違があるので

ある。そしてこうした循環過程をなぜ一部の資本家がとる必要があるのかについては、すでに述べたように、総商品資本 $W'$ がすべて同時に $G'$ に転換しようとしても、それは不合理だからである。個別資本の循環では可能であったものが、総資本の循環としては不合理になるからである。

だから問題は次のようにいえるだろう。要するに、社会的総商品資本の流通を媒介する貨幣は、資本家が彼らの総商品資本とは別個に、追加的に流通に投じるしかないということである。だからその貨幣は、少なくともいま問題にしている総再生産過程の流通（その総商品資本の循環期間）においては、商品の実現形態として登場しえないということである（だからこそ、それは「追加」貨幣なのだ）。そしてその追加貨幣が、再生産に必要な生産手段や労働力を購入するために前貸されるなら、それは資本にとっては「貨幣資本の前貸」であるが、しかしそれは資本関係を捨象して単純流通として見るなら、やはりその追加貨幣もただ流通手段として機能するだけであり、あるいはまた資本家自身の個人的な消費手段の購入のために支出されるなら、それは彼にとっては単なる流通手段でしかないということである（だから言いたければ「流通手段の前貸」と言ってもよいわけである）。それ以上の「困難」な問題は何もないのである。だから久留間健氏とそれに追従する人たちが考えるように、貨幣の還流形態の相違によって、一方は「貨幣資本の前貸」であり、他方は「流通手段の前貸」だなどという区別はありえないのである。同じ貨幣がある資本家にとっては貨幣資本であるものが、別の資本家にとっては単なる流通手段でしかない場合もあるわけだから。

ただ総商品資本を価値と素材において補填し合う関係を貨幣流通による媒介を顧慮して考察する場合に登場するこうした貨幣（追加貨幣）には、確かに奇妙な性格があり、それを理解するには多少の「困難」が伴うことも事実である。それがどうしてそうなのかについてももう少し吟味してみよう。

マルクスが第2部第3篇第20章「単純再生産」の第5節「貨幣流通による諸変換の媒介」で取り扱っている「貨幣」というのは、確かに一見すると奇妙な性格を持っている。それが奇妙であるのは、この節の次の一文を見れば明らかである（しかしわれわれは全集版で示すことしか出来ないが）。

《前述の転換(4)で、IIではなくIが買い手として現われ、したがって500ポンドの貨幣を同じ価値量の消費手段に支出するとすれば、その場合には転換(5)ではIIが同じ500ポンドで生産手段を買い、(6)ではIがその500ポンドで消費手段を買い、(7)ではIIがその500ポンドで生産手段を買う。そこで、結局、500ポンドは、前の場合にIIに帰ったように、Iに帰ってくる。この場合には、剰余価値はその資本家的生産者自身が個人的消費に支出する貨幣によって貨幣化されるのであるが、この貨幣は、予想収入すなわちこれから売られる商品に含まれている剰余価値からの予想収入を表わしている。この剰余価値の貨幣化は、500ポンドの還流によって行なわれるのではない。なぜならば、Iは、商品Ivでの1000ポンドの他に、転換(4)の終わりに貨幣で500ポンドを流通に投じているが、この貨幣は追加されたもので、――われわれの知る限りでは――、売れた商品の代

金ではなかったからである。この貨幣がIに還流しても、これによってIは自分の追加貨幣を回収しただけで、Iの剰余価値を貨幣化したのではない。Iの剰余価値の貨幣化は、この剰余価値が含まれている商品Imの販売によってはじめて行なわれるのであり、この貨幣化が持続するのは、いつでも、ただ、この商品の販売によって得られた貨幣がまたあらためて消費手段に支出されていない間だけのことである。》（『資本論』第2部全集版515頁）

この一文はそれまでの展開を理解しないとなかなか分かりにくい、ここでマルクスが述べていることで奇妙に思えるのは、前半部分では《剰余価値はその資本家的生産者自身が個人的消費に支出する貨幣によって貨幣化される》と述べているのに、後半部分では《この貨幣がIに還流しても、これによってIは自分の追加貨幣を回収しただけで、Iの剰余価値を貨幣化したのではない》とまったく逆のことを述べているように見えることである。前者では《剰余価値が貨幣化される》と述べ、後者では《剰余価値を貨幣化したのではない》という。一体、マルクスは何を言いたいのであろうか。しかも後者の場合、明らかに資本家Iは彼の剰余価値をIIに販売して500ポンドを回収したのに、この500ポンドはIの剰余価値を貨幣化したのではない、というのである。どうしてこうしたことになるのか、それを考えてみよう。

一般に貨幣というのは、誰かが――それが例え資本家であろうと――、何らかの価値あるものを他者に販売して入手したものと想定されなくてはならない（もちろん、金生産者は別であるが）。ただし資本家が常にそうした形で貨幣を手にするかといえば必ずしもそうではなく、彼らは詐取することもあれば、強奪もするわけであるが、経済学的には、金生産者以外は、常に対価を与える代わりに得るものが貨幣なのである。ところが社会的総資本の流通を考察する場合には、こうした前提が崩れるのである。社会的総資本の流通を、われわれは総商品資本の循環として考察するのであるが、そこには資本の流通のみならず、個人的消費のための流通、すなわち一般的な商品流通も資本の流通と絡み合って登場する。つまり社会的総資本の流通の過程というのは、社会の総流通を対象としているのである。再生産表式（これは単純再生産でも拡大再生産でも同じである）の出発式で表されている社会の総商品資本というのは、これからそれらが流通して、それぞれ必要なところに配分され、且つ消費されて、社会の再生産が行なわれることを示している（このなかには労働力の再生産も資本家個人の再生産も、よってまた資本と賃労働の関係の再生産も含まれる）。再生産表式の出発式というのはその過程の出発点を示すものである。ところがこの出発式には貨幣は登場していない。しかし社会の総資本が総商品資本として示され、まず最初に $W-G$ の過程を通過することが前提されている。しかしよくよく考えてみると、社会のすべての商品資本が貨幣資本に転換しようとしても、それは不可能事であることが分かる。なぜなら、すべての資本家が同時に彼らの商品資本を販売して貨幣資本に転換しようとしても、誰もそれを買う人がいないからである。なぜなら、 $W-G$ の過程は、同時にそれを反対側からみれば、 $G-W$ の過程だからである。つまりある資本家が $W-G$ の過程を行なうためには、あるいはそれが行なえるということは、別の資本家（あるいは個人）が同時に $G-W$ の過程を行なうからに他ならないのである。だからすべての資本家が同時に $W-G$ の過程を行なうという仮定そのものは背理なのである。だから社会的総資本の流通を、総商品資本の循環として、貨幣流通の媒介を入れて考察する場合は、単純には考えることはできないことになる。今、社会的総資本の流

通をもう一度、商品資本の循環で示してみると、次のようになる。

$$W1' - G1' - W1 \dots P1 \dots W1' = W2' - G2' - W2 \dots P2 \dots W2'$$

・ ----- ・ (貨幣資本の循環サイクル)

ここで1、2の番号は商品資本の循環の年度を表している。つまり第一年度の最後の商品資本は第二年度の出発式の商品資本になるわけである。われわれが再生産表式の出発式として考えているのは、この最初のW1'かW2'なのである。だからそれはW'-G'-Wの流過程をこれから辿る社会の総商品資本を表しているのである。しかしすべての資本家が彼らの商品資本を同時に販売することは不可能である。だからそのうちの一部の資本家はW'-G'-Wの過程のうち、あとの方のG'-Wを先にする必要があるのである。大谷氏が述べているのはこうしたことである。しかも彼らが最初に流通に投じるG'（このGに「'」がついているということは、単純再生産では資本家が彼らの個人的消費のためにも最初に流通に追加貨幣を投じることを表している）というのは少なくとも今考察しようとしている年度の総商品資本の転換において、何らかの商品価値が転化した貨幣ではないことになる。なぜなら、その社会のすべてのこれから貨幣に転換しなければならない商品資本のすべてが表式には表されているのだから、それを媒介するために登場する貨幣は、少なくともその表式で示されている総商品資本の例えその一部でも転化したものではないことになるからである。だから最初に流通に投じられる貨幣は、その表式に示されている総商品資本の実現した貨幣ではない。それは理由はともかく、とにかく資本家が商品資本とは別に手許に持っていて流通に投じたと仮定するしかないような貨幣なのである。

いや、それならそれは、前年度の循環の終わりに商品資本を実現した貨幣だから、やはり何らの価値あるものを販売して入手したものだとの貨幣の最初の想定はその貨幣にも成立しているのではないのか、と思うかもしれない。しかしそうではないのである。なぜなら、前年度の流通を媒介する貨幣も、やはり今年度と同じ条件にあるのであり、それはやはり総商品資本とは別個に、いわばその外部から追加的に投じられたものだから、ただその追加貨幣が年度の最後にただ回収されただけに過ぎないのであり、だからそれは商品資本の貨幣化した貨幣とは言えず、ただ資本家がもともと商品資本とは別個に保持していた貨幣を回収しただけになるからである。

だからこそこの貨幣は奇妙な存在としてわれわれの前に現われるのである。とにかくもう一度、単純再生産の表式を書いてみよう。

$$I \ 4000 \ c + 1000 \ v + 1000 \ m = 6000$$

計9000

$$II \ 2000 \ c + 500 \ v + 500 \ m = 3000$$

社会の総資本（総商品資本）は9000となっているが、この出発式に表されていないものが二つある（もちろん捨象されている固定資本は論外とする）。一つは労働力商品であり、もう一つは、これらのすべての商品（商品資本と労働力商品）の流通を媒介する貨幣が、すなわちそれなのである。だから社会のすべての総商品、あるいは総価値をいうなら、総商品資本9000+総労働力

商品1500+流通に投じられる流通貨幣総額（これは額としては仮定のとりようによってさまざまである）となるのである。この流通貨幣総額というのは、一国に存在する貨幣総額（それは蓄蔵貨幣と流通貨幣の合計である）のうち、流通過程に留まっている貨幣の総額と考えることができる。単純な商品流通や個別資本の流通過程(循環や回転)では、われわれは常にそれらは流通にあるものと仮定してきたのであるが、社会の総商品資本の流通を考察する場合には、それを誰かが最初に流通に投じるものとして想定する以外に考えることはできないのである。そして誰が投じるかといえば、結局、それは資本家以外にはありえないわけである。労働者が彼らの労働力商品とは別個に貨幣を持って登場するという仮定は不可能だから（なぜなら労働者が貨幣を持っているのなら、労働力を売らずにその貨幣を使って必要なものを買うだろうから）、資本家がそれを投じるしかない。これがすなわち「社会の総資本の流通を媒介する貨幣」なのである。だからそれは何らかの商品の価値が実現したものとして登場するわけにはいかないのである。というのは、これからすべての商品（商品資本と労働力）の流通を媒介するものとして登場しているのだから、この貨幣がすでに別のある商品の実現形態として登場するわけにはいかないからである。だからこの貨幣は、これまで単純流通や個別資本の循環・回転を対象としてきた意識からすると、奇妙な性格を帯びざるをえないことになるのである。

先に紹介した第5節の引用文で、マルクスがそうした500ポンドを回収しても、それは剰余価値を貨幣化したのではない、と述べていたのはこのことなのである。つまりその貨幣というのはもともとそうした何らかの価値の実現したものではないということなのである。それに対して、引用文の前半で、マルクスがIは彼の個人的消費のために追加的に流通に投じる貨幣で彼の剰余価値を貨幣化すると述べているのは、彼が追加的に投じる500ポンドで、とにかく彼の剰余価値1000ポンドとIIの不変資本1000IIcとの転換が行なわれるのであり、その限りでは彼の剰余価値1000ポンドは彼が流通に投じた500ポンドで貨幣化されたといえるのである。というのは彼は彼の剰余価値1000を彼自身の個人的消費手段に転換し、それを消費したのだから、IIの1000c（生活手段）を購入するのに支出した1000ポンドは明らかに彼の剰余価値の貨幣化したものであることは明らかだからである。それに対して、彼が最終的に回収した500ポンドが彼の剰余価値の貨幣化でないことは、彼はその500ポンドを回収しただけで、それを彼自身の消費にさらに支出するわけではないことを見れば、明らかである。それが剰余価値の貨幣化であるなら、単純再生産の前提では、それは資本家の個人的消費として支出されるのに、それはそうではないからである(すでに資本家の個人的消費は終わっている)。それは実は彼が最初に流通に投じた追加貨幣をただ回収しただけなのである。このように、一見すると矛盾しているように見えた先のマルクスの論述は、こうしたことを述べているのである。

こうしたこの追加貨幣の意味するものを理解すると、先に、マルクスが第2稿で次のように述べていた意味が明確になっていくのである。

《最後に、問題をもっとも単純な諸条件に還元するために、貨幣流通を、したがってまた資本の貨幣形態をまったく捨象しなければならない。流通する貨幣量は、明らかに、それを流通させる社会的総生産物の価値の構成要素をなすものではない。したがって、総生産物の価値がいかに

して不変価値等々に配分されるのかということが問題であるならば、この問いそれ自体は、貨幣流通とは無関係である。問題が貨幣流通を顧慮することなく扱われた後に、はじめて貨幣流通に媒介されたものである現象がいかに現われるかを理解することが出来る》（前掲早坂論文『経済』09年2月号155頁、新日本新書版第7分冊628頁、上製版2巻632頁も参照）。

この引用文でマルクスは《流通する貨幣量は、明らかに、それを流通させる社会的総生産物の価値の構成要素をなすものではない》と述べている。これは総商品資本の転換を媒介する貨幣の奇妙な性格について検討してきたわれわれならば、この一文でマルクスが何を言おうしているのかは明瞭に理解できるであろう。そしてこの貨幣がそうしたものであるからこそ、社会的総資本の価値と素材における補填関係だけを考察する場合には、それを考慮する必要がないこと（なぜなら、そもそもその貨幣は社会的総資本の一部を構成しないのだから）、それを捨象して考察する必要があること、少なくともそうした考察の重要な意義が、分かつというものである。

大谷氏らは、この貨幣の奇妙な特性に注目して、これを「貨幣資本の前貸」と区別して、「流通手段の前貸」だと主張されているわけである。しかし何度も繰り返すことになるが、例え資本家が最初に投じる追加貨幣であっても、彼が生産に必要な諸手段（生産手段と労働力）を購入するために投じるのなら、それは彼にとっては貨幣資本の前貸以外の何ものでもないのである。ただその貨幣は再生産表式の考察では、必ずそれを手放した資本家の手許に直ちに還流するものとして現われるので、その奇妙な還流形態に着目して、それがその貨幣に特有の還流形態を示すものと考え、それがマルクスが第3部第33章で述べている《流通手段の支出と資本の貸出との区別は、現実の再生産過程ではもっともよく現われている》（全集25b680頁）と述べている、その区別を意味するのではないかと考えたのが、久留間健氏なのである。しかしマルクスが第33章で述べているものは、そうしたのではなく、貨幣市場と商品市場との区別が理解できず、絶えず資本（貨幣資本、ただし moneyed Capital）と通貨（流通手段）とを混同して混乱している銀行学派を批判するために論じているものなのである。

少し私自身のこの間の、それこそ“苦闘”の一端を紹介させて頂きたい。正直にいうと、この「追加貨幣」とは何か、という問題は私にとっても長く悩ましい問題の一つであった。当初はその「追加貨幣」という独特のタームにも私も特に注意を払っていたわけではない。

なぜこのような「不合理な」（としか私には思えなかった）貨幣が登場するのか、それが、私にとってはなかなか解けない謎だったのである。こうした貨幣は第1篇の「資本の循環」や第2篇の「資本の回転」を考えている限りは、不合理な存在以外の何ものでもなかったからである。例えば  $G - W \dots P \dots W' - G'$  の貨幣資本の循環を考えた場合、最後の流過程である、 $W' - G'$  の過程をこれから辿ろうとする資本家が、 $W'$ 、つまり生産過程の結果である商品資本とともに、同時に同額の  $G$ （貨幣資本）を持っているなどという想定は不合理以外の何ものでもないように思えるからである。もちろんこの場合、条件のとり方によっては、必ずしも「同額」でなければならないわけではないが、しかし例え同額でなかったにしても彼の商品資本とは別個にただ彼らの商品資本を流通させるためだけに、彼らの商品資本とは別個に貨幣を所持し、それを流通に投じな

ければならないという想定そのものは、個別資本の循環を考える限り、不合理以外のなにものでも無かった。なぜなら、そんな貨幣を持っているのなら、どうして最初のG-Wの貨幣資本の前貸のときにその貨幣資本も一緒に投じなかったのか、と思うからである。なぜわざわざ、自分の商品資本の流通のためだけに、そうした彼らにとっては遊休しているに過ぎない貨幣資本を持ち続けなければならないのか、これはあらゆる資本から最大限の利潤を得ようとする資本の本性から考えても、不合理以外の何ものでもないではないか。しかし「追加貨幣」というのは、まさにこうした貨幣なのである。

当初の私の考えでは、これはマルクスが社会的な総商品資本の転換の考察において取っている、極端な仮定からくるものではないか、というものであった。社会的総資本の流通を商品資本の循環として考察する場合、社会のすべての資本は年一回転すると仮定される。しかもすべての資本が周期を同じくして年一回転すると仮定されるのである。例えば単純再生産の場合、出発表式として示されている総商品資本は、その年再生産の過程で生産された社会のすべての商品資本をその価値と素材とによって区別し配列したものなのである。そしてこの社会のすべての商品資本がまず最初に同時にW'-G'-Wの流通過程を辿り（但し流通期間は通常ゼロと仮定されている）、それぞれ社会の必要な諸部門にその流通過程を通じて配分され、そしてそれぞれの生産過程で生産的に消費され、あるいは労働者や資本家個人にも配分されて、やはりそれぞれの諸個人においても個人的に消費され、そうして社会の総再生産が行なわれる、よってまた同時に労働者や資本家個人も再生産される、だからまた資本-賃労働の社会的な関係も再生産される。すなわちW...P...W'の生産過程を経て、再び出発点の表式である総商品資本のW'に戻ってくると考えられている。つまり社会の総資本を構成するすべての個々の資本がその回転期間がすべて同じ1年で、しかもまったく同じ周期によって回転するといった極端な仮定だからこそ、この奇妙な貨幣が登場するのではないか、と考えたのである。

というのは実際の社会的な総資本の流通を考えるなら、こうした追加的な貨幣は不要のように思えるからである。社会の総資本を構成する個々の資本はその回転期間も循環の周期も多種多様であろう。マルクスは第2篇の「資本の回転」では、資本の流通期間中は、資本の生産過程が休止せざるを得ないことから、それを避けるために、一つの資本をいくつかの構成部分に分けて、それぞれが異なる回転を行なうことによって、生産が継続して行なわれる諸条件を考察したりしている。だから社会的に考えるなら、一層、ある資本がその商品資本を実現しようとしているときには、他の資本はその貨幣資本を商品資本に転換しようとしていると考えることは十分根拠のあることであり、だからそこには「追加貨幣」というような不合理な貨幣が存在する余地はないように思えるからである。だからこうした貨幣はあくまでも社会的総資本の流通を再生産表式によって考察するために行なっている極端な仮定そのものからくるものであろうと考えたのである。そこでこうした不合理が生じない工夫はないかと色々と考えたりもしたのである。例えば、こうした追加貨幣を銀行が前貸すると仮定すれば、たちまちその不合理性がなくなることは明らかであった。そうすれば資本は自身の商品資本とは別個に、ただ彼らの商品資本を流通させるために貨幣を持たねばならないというような仮定は不要になるからである。しかし第2部第3篇では、当然、信用は捨象されており、銀行の介在を前提することは許されないのである。それなら在庫形成を導入すれば、こうした追加貨幣の不合理性は少なくとも在庫形成から不可避に生じる遊

貨幣資本として説明可能であり、その不合理性は除去できるのではないかと考えたりしたのであるが、しかしそれも十分納得できる説明ができなかったのである。こうしてこのような追加貨幣の不合理性は単に極端な仮定からくるものではなく、むしろそれは社会的な物質代謝を商品流通によって行なっている資本主義的生産様式そのものに根ざす、だからまたその商品流通を媒介する貨幣そのものの本質に根ざすものであることによく気付いたのである。

先にも紹介したが、マルクスは次のように述べている。

《最後に、問題をもっとも単純な諸条件に還元するために、貨幣流通を、したがってまた資本の貨幣形態をまったく捨象しなければならない。流通する貨幣量は、明らかに、それを流通させる社会的総生産物の価値の構成要素をなすものではない。したがって、総生産物の価値がいかにして不変価値等々に配分されるのかということが問題であるならば、この問いそれ自体は、貨幣流通とは無関係である。問題が貨幣流通を顧慮することなく扱われた後に、はじめて貨幣流通に媒介されたものである現象がいかに関わるかを理解することが出来る》（前掲早坂論文『経済』09年2月号155頁、新日本新書版第7分冊628頁、上製版2巻632頁も参照）。

以前にも指摘したが、《流通する貨幣量は、明らかに、それを流通させる社会的総生産物の価値の構成要素をなすものではない》というマルクスの指摘は重要である。われわれの生活する社会の物質代謝はどのようにして行なわれているのかを少し考えてみよう。単純再生産を想定すると、それは次のように行なわれている（単純再生産の表式を考えてみよう）。まずこの社会は1500の可変資本によって必要なものを生産している。1500の可変資本というのは、現物形態としては1500の価値ある労働力である。それが最終的には3000の価値ある消費手段を生産して、それを労働者と資本家がそれぞれ半分ずつを個人的に消費して社会の物質代謝を形成しているのである。しかしこの社会はこの3000の価値ある消費手段を生産するために6000の生産手段を必要としており、よってこの社会は6000の生産手段を使い、1500の労働力によって、3000の生活手段を生産して、その社会の物質代謝を支えているわけである。1500の労働力のうち1000の労働力は6000の生産手段をただ再生産するためだけに使われ、生活手段を直接生産しているのは500の労働力である。そしてこの社会が生み出している3000の価値ある消費手段というのは、1500の労働力が一年間に新たに生み出した価値そのものなのである。つまりこの社会はその一年間に新たに生み出した価値をその次の一年間にはすべて個人的に消費してしまうことによって、その物質代謝を行なっている社会なのである。

（以下は「その3」に続きます。）

## ● [b 資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流との区別および関連の分析] について (その3)

ところで貨幣というのは、この社会的な物質代謝を媒介するには必要不可欠なものではあるが、しかし社会的物質代謝の構成部分そのものではないのである。マルクスは第8稿の第21章該当箇所で「貨幣は何も生み出さない」と何度も強調しているが、貨幣自体は社会の物質代謝を支えているものでは決してないのである。だからこそ、われわれが社会の物質代謝を社会的総資本の流通過程として考察する場合に、貨幣はその社会的総資本の外部から、それらを媒介するものとして、よって追加的に投じられるものとして、登場する必要があったのである。追加貨幣のある種の奇妙な性質はまさに貨幣のこうした本質から来るものだったのである。それが一定の不合理性をもつなら、まさにそうした貨幣の、物質代謝には何らの寄与もしないのに、この社会では必要不可欠な存在でもあるという不合理性そのものから来るものだったといえるであろう。つまり個別資本の循環や回転を考察していたときには、貨幣(資本)は資本の循環や回転の必要不可欠の契機であり、資本がとる諸形態の一つの形態であるのに、社会的総資本の転換を考察するとたちまちその不可欠の契機としての特性が消え失せてしまうのである。だからこうした追加貨幣の本質は、個別資本の循環や回転を考察している段階では、いまだ明確ではなかったのである。しかし、社会的総再生産過程の考察になると、その本質、社会的物質代謝における“余計者”としての存在は際立って現われてくるというわけなのである。それがすなわち「追加貨幣」の奇妙な特性なのである。

だからこの追加貨幣を、ただ「流通手段の前貸」などと説明したのでは、そうした追加貨幣の本質について理解が深められることは期待できないのである。

さらに、やや本筋からずれて“道草”をすることになるが、われわれは、これまで考察した「追加貨幣」に関連して、“貨幣とはそもそも何か”という問題を考えてみることにしよう。

流通する貨幣量は――実は、これは別に流通するものに限らず、一国にある貨幣量全体についても言いうるのだが――、社会的総生産物の価値の構成要素をなしていないという先のマルクスの言明は、貨幣の本質について、極めて重要なことを示唆している。もちろん、年々新しく生み出される金生産物は、その限りでは社会的総生産物の価値の構成要素をなしているのであるが、われわれはこれを取りあえずは除外しておく。この社会的生産物のうち年価値生産物の全体〔これはおなじみの単純再生産の表式であらわすと、 $I(1000v+1000m)+II(500v+500m)=3000$ である〕は、毎年毎年生産されると同時にそれは消費されてしまうものなのである(もちろん、ここではとりあえず新価値生産物のうちの固定資本も捨象しておこう。固定資本はただ年々消費されるのではなく、一定の長い期間を通じて消費される点が異なるだけで消費されるという点では基本的には変わらないのである)。つまりそれらは生まれると同時に無くなってしまふものである(形成された商品価値は交換を通じて消費者に譲渡され、その使用価値の実現とともに価値も無くなる。もちろん、新価値生産物のうち生産手段の価値は部門IIで生産的消費の過程で生産物に移転するが、しかしその移転分も年度を越えて、最終的には個人的に消費されるとともに無く

なる)。ところが一国の貨幣というのは、常に流通過程にあるか、あるいは蓄蔵されており、昔から、それが磨滅して（金貨の場合）消滅する部分を除けば、社会のなかに存在し続けてきたものだということである。つまり年々生産される商品価値は新しい価値であり、すぐにあるはいつかは無くなってしまふものであるが、貨幣（流通貨幣も蓄蔵貨幣も）は古い価値のまま社会にあり続けているものなのである。これは当たり前のことではないかというかも知れないが、貨幣とはそもそも何かを理解する上でこれは重要な視点であることは強調しておきたい。

それを理解するために一つの思考実験をすることにしよう。今、貴方が100万円の価値のある商品を生産してそれを誰かに販売して、100万円という貨幣を手に入れたとしよう。貴方は自分が生産した価値を今は100万円の貨幣という形態で手にもっていると考えている。しかし問題を社会な再生産の観点から考えてみると、奇妙なことに気付く。今、この時点で、商品を生産したのは貴方一人だけだったと仮定しよう。すると、貴方が生産した商品価値100万円だけ社会は新しい価値を生み出したのである。社会は新価値100万円を生み出した。ところが貴方がそれを他の誰かに販売し、その他の誰かがそれを個人的に消費したとすると、社会全体でみると、貴方の生産した価値100万円はなくなってしまうわけである。ところが貴方はまだ手許に100万円の貨幣を持っている。貴方は自分が生産した価値100万円をまだしっかり手許に確保していると確信しているのだが、しかし、社会的にみると、そうではなく、貴方がこの世に生み出した価値100万円はすでにゼロになっているのである。では、貴方がしっかり握って離さない自分が生み出した価値だと思い込んでいる100万円の貨幣は一体何であろうか？ 実は、それはこの世に昔からずっとあり続けて多くの人たちの手垢で汚れた価値であって、それがたまたま貴方のところに今は来ているだけなのである。その価値はアチコチ場所を変えて移動し、あるときは一カ所に長くとどまったりしているが、しかしその価値は昔から徐々に積み重ねられてきたものであり、一部は徐々に磨滅して消滅しているが、しかし社会はその消滅した分は絶えず新たに生み出して補充し、また社会が必要とするその量が増大するのに応じてまた追加補充しているような性格の価値なのである。その一部がたまたま今は貴方の手のなかに一時的にあるだけなのである。誰もそれを手にしたからといって、それを何か自分の生活に役立たせられるような代物ではなく、せいぜい、金庫のなかに積んでおくぐらいしか出来ないまったく役立たずな代物なのだが、しかしこの社会ではそれをありがたがる人が多いのもまた事実である。

貴方は自分が生み出した100万円の価値をまだ自分でしっかり持っていると思っているが、しかし実は、貴方の生み出した100万円の価値はすでにこの世からなくなってしまい、ゼロになっているのである。だから、貴方が、そのように思っているのは、単なる錯覚でしかないわけである。では、貴方が握っている確かな100万円という貨幣は何を表しているのでしょうか？ それが問題なのである。それこそ貨幣とは何かを物語っているものなのである。

貴方が握っている100万円の貨幣は、貴方以外の誰かが新たに生産した100万円の価値ある貴方が必要とする使用価値を、貴方が優先的に手に入れ、それを消費する権利を表しているのである。それは社会を構成する人々がとにかくその行為によって互いに認め合ってきたことである。だからもし貴方以外に誰も新しい価値を生産しないなら、貴方はただババ抜きゲームで最後にババを抜いた人となり、せつかく、貴方は社会に一定の有用なものを与えたのに、社会から何の有用な効果をもつものも得られないということになってしまうであろう。

つまり貨幣というのは、将来の生産に対する請求権を表しているのである。だからこうした貨幣の性格から考えるなら、それは金というそれ自体に価値をもつものに限る必要性もないわけである。それは金以外のものによっても代理することが出来る。社会のすべての人々がそれを認め合うなら、それは紙切れでもよいし、単なる電磁的な信号でもよいわけである。もちろん、それが金貨幣ならある意味絶対的な権利を表しているが、しかしそれに類似するものなら、それをある程度の不確かさで表していると言えるであろう。つまり貴方は100万円の価値ある商品を社会に与え、それを証明するものとして100万円の価値ある金を持っているとしよう。その場合は、次に貴方の番になると確実に100万円の価値ある使用価値を得ることが可能である。しかしそれが紙切れで代理されていると、その紙切れは実は貴方が持っているあいだに、100万円ではなく、80万円の価値しか代理していないようになる可能性もあるのである。あるいはその紙切れが、単なる信用にもとづくものなら、その信用が破綻するとただの紙屑になってしまう可能性もある。そうした不確かなものである。これが貨幣を社会の総再生産の観点から考察したもう一つの本質なのである。

#### 【補論】

大谷氏は次のように書かれていた。

〈ここで注意が必要なのは、 $G\_W$ がつねに、同時に流通手段の前貸であるわけではない、ということである。資本家が自己の商品資本の一部である商品の販売 $W\_G$ によって入手した貨幣で商品を買う購買 $G\_W$ は、流通手段の前貸にはならない。この貨幣のなかに含まれる彼の収入すなわち剰余価値の支出である $g\_w$ もそうはならない。また、労働者の労働力の変態 $W(A)\_G\_W$ では、労働力の販売が必ず先行するのであって、労働者が流通手段を前貸することはありえない。〉（中133頁）

それを私は、こうした主張は明らかにマルクスの貨幣論からすればおかしいと指摘した。なぜなら、「前貸」という表現はともかく〈資本家が自己の商品資本の一部である商品の販売 $W\_G$ によって入手した貨幣で商品を買う購買 $G\_W$ は、流通手段の前貸にはならない〉などというが、その $G$ は単純流通のレベルで見れば、明らかに単なる貨幣でしかなく、だからそれは流通手段という抽象的な機能を果たすであろう（もちろんこの場合の「流通手段」は支払手段も含めた広義の意味である）。だからまた〈労働者が流通手段を前貸することはありえない〉というのもおかしいのであって、労働者が賃金で生活手段を購入する場合は、彼が支払う貨幣は流通手段として機能するのであるからである、と。

だから大谷氏らは、明らかに「流通手段」という語に、それが本来持っている意味以上の意味を付加していること、すなわち〈 $G\_W$ が同時に流通手段の前貸となるのは、 $W\_G\_W$ の第二の変態 $G\_W$ が第一の変態 $W\_G$ よりも前に行なわれ、あとから $W\_G$ によって補われる場合だけなのである〉（中133頁）と。つまり社会的総再生産過程において第二の変態が第一の変態より先に

行なわれ、そのあと第一の変態が行なわれる場合の貨幣という独特の意味である。しかしそれはマルクスの貨幣論にはない「流通手段」の内容規定である、と批判したのであった。

ところがこうした批判に対して、大谷氏の主張のポイントは、「前貸にはならない」というところにあるのであって、「流通手段にはならない」ということではないのだ、と大谷氏を擁護する人たちからの反論があった。その反論について少し考えてみたい。

果たしてそういう反論者の理屈は成り立つのだろうか。もしそういう理屈を並べるのなら、〈資本家が自己の商品資本の一部である商品の販売 $W \rightarrow G$ によって入手した貨幣で商品を買う購買 $G \rightarrow W$ は、流通手段の前貸にはならない〉だけでなく、その場合は、「貨幣資本の前貸にもならない」といわなければならないであろう。なぜならそれは〈前貸にはならない〉というところにポイントがあるのだから、つまり「還流しない」ということなのだから。その $G$ がもし還流しないなら、当然、それが貨幣資本としても還流しないことになり、だから〈貨幣資本の前貸にもならない〉ことになるであろう。しかし大谷氏ご自身はもちろん、同氏を擁護する人たちもそれが〈貨幣資本の前貸〉であることは認めるのである。とするならそれはやはり〈流通手段の前貸でもある〉ということではないだろうか（もし彼らのように「流通手段」に独特の意味を付加しないならばであるが）。というのはそれを貨幣資本の前貸だということは、それがゆくゆくは再び貨幣資本として（もちろん一定の増殖をして）還流してくることを見越して手放すからであろう。しかしそうであるなら、その還流してきた貨幣資本は、やはり商品流通のレベルで見ると、単なる貨幣として還流してくるのであり、その限りではそれは流通手段（広義の）としても還流してきたということでもあるだろうからである。貨幣資本としての手放しは、同時に単純流通のレベルでは単なる貨幣、だからまた流通手段としての手放しでもあることを認めるなら、貨幣資本としての還流は、同時に同じ単純流通レベルでは流通手段としての還流でもあることも認めなければならないわけである。だからどうしてこの場合だけ〈同時に流通手段の前貸であるわけではない〉などといえるのであろうか。それはやはり〈流通手段〉に独特の意味を加えているからそう言えるのではないのだろうか。もちろん、この場合、還流に一定の期間が必要だというなら、そうである。しかし還流にかかる期間の長短によって、それが「前貸」でないというのなら、そもそもそれは「貨幣資本の前貸」でもないといわなければ辻褃が合わないであろう。貨幣資本の場合は一定の期間を通じて還流してきても前貸といえるが、しかし流通手段として捉えるときには、そうはいえない、流通手段の場合には、すぐに還流して来ないと「前貸」とは言わないのだというのは理屈には合わないのである。

確かに大谷氏が指摘するケースは、 $W \rightarrow G$ を見越して、 $G \rightarrow W$ をするケースであり、すぐに自分が手放した $G$ は、 $W \rightarrow G$ で帰ってくると想定した $G$ の手放しである。だからそれは「前貸なのだ」というのであろう。しかしそうであるなら、例えば労働者が $G \rightarrow W$ で貨幣を支出したからといって、彼は自分の労働力をすぐに販売して、すなわち $W \rightarrow G$ を見越して、 $G \rightarrow W$ をして悪いこともないわけである。そればかりか大谷氏が強調するように、労働力の価値への支払は常に後払いである。例えば週給なら、労働者は一週間働いたその末にやっとその一週間分の賃金を支払って

貰えるわけである。しかしその一週間で労働者は何も食わずに働くわけには行かない。だから労働者がその一週間分の生活費に支出する貨幣は、まさに週の末に得られる賃金を見越して支払うのではないのか。とするなら、大谷氏の理屈からすれば、労働者こそ「流通手段の前貸」をしているということにはならないか。もし大谷氏らの主張のポイントが「前貸になるかどうか」にあるという反論者の主張の前提に立つなら、労働者こそが、まず流通手段を前貸して、そのあと自分の労働力への支払を受けてその還流を得るのではないだろうか。だから労働者の場合だけなぜそれがありえないのか、皆目分からないことになってしまう。

もっとも、単なる商品流通のレベルで見ると、貨幣資本の前貸、すなわち貨幣資本の商品資本への転換も、単なる貨幣による単なる商品の購買である。だからこの単なる貨幣による単なる商品の購買を、「流通手段の前貸」などとはいえないというなら、それはその通りであり、正しい。単純な商品流通では、貨幣はそれを手放した人からどんどん遠ざかるだけであるとマルクスも指摘している。だから単純流通のレベルでみるなら、貨幣の手放しを「前貸」と表現することは正しくないのだ、というのなら、私もそれに異論はない。しかしそれならそれはすべての資本家による貨幣の手放しについていえるのであって、ある特別な場合だけに限定する必要もないわけである。

結局、私にはやはり大谷氏らは「流通手段」というタームに独特の意味を持たせているように思えるのである。そしてそれは明らかにマルクスの貨幣論から逸脱しているのである。大谷氏らは「流通手段」というタームに、社会的な総商品資本の転換を媒介するために、最初に流通に投じられる貨幣という意味を込めて「流通手段の前貸」と称しているのである。だからこの場合の「流通手段」は、マルクスがその貨幣論で述べている狭い意味での流通手段（鑄貨としての流通手段）でもないし、広い意味での流通手段（通貨としての流通手段、すなわち狭義の流通手段と支払手段）でもないのである。それは大谷氏らが勝手に作り上げた独特の意味・内容を付加された「流通手段」なのである。こうした「流通手段」がマルクスの貨幣論からの逸脱であるというのは、マルクス自身はそういう意味での「流通手段の前貸」などという問題をまったく論じていないからである。

ではマルクスはそうした場合の貨幣について、どのような言葉を使っているのでしょうか。先に紹介した第2部第20章第5節「貨幣流通による諸変換の媒介」ではマルクスは次のように論じていた。

《この貨幣は、予想収入すなわちこれから売られる商品に含まれている剰余価値からの予想収入を表わしている。……この貨幣は追加されたもので、――われわれの知る限りでは――、売れた商品の代金ではなかったからである。この貨幣がIに還流しても、これによってIは自分の追加貨幣を回収しただけで、Iの剰余価値を貨幣化したのではない。》（全集版邦訳515頁）

つまりマルクス自身は、《追加貨幣》というタームを使っているのである。それはなぜ「追加」貨幣というかということ、社会的総資本の流通を貨幣流通による媒介を顧慮して考察する場合に

、資本家は彼らの商品資本とは別個にその貨幣を持っていて、ただ彼らの商品資本の転換を媒介するために最初に流過程に投じるものとして現われてくるからである。だからその貨幣は社会の総商品資本の構成部分をなしていないのであって、それとは別に追加的に投じられるものだから、マルクスは《追加貨幣》という厳密な規定を与えているのである。それを大谷氏らは〈流通手段の前貸〉という独特な規定に変えているわけである。だから彼らのいう「流通手段」はその限りでは、明らかにマルクスの貨幣論にはないタームなのである。われわれが知っている流通手段は、第1部第3章で展開されている貨幣の抽象的な諸機能の一つであるが、大谷氏がいう「流通手段の前貸」は、第2部第3篇の社会的総資本の流通というより具体的な資本の流過程で初めて現われるものであり、貨幣資本の還流形態とは異なる独特な還流形態によって規定されていることから考えても（もっともそうした区別の無意味さはすでに指摘したが）、それはマルクスの貨幣論にはない規定であることが分かるのである。

### 【追記】

この「b 資本の前貸および還流と流通手段の前貸および還流との区別および関連の分析」についての項目の考察において、私は大谷氏らの主張の批判として、彼らの「流通手段の前貸」というタームに、「追加貨幣」というタームを対置し、このタームの独自性を理解することこそが重要だと指摘してきた。ところが、この項目をすべてアップした後に、この「追加貨幣」というタームそのものはエンゲルスの創作であり、マルクス自身は（草稿では）使っていないことを知った。マルクス自身はただ「貨幣」としているだけである。これは不勉強の至りであるが、しかし、いまさらすべてを書き直すわけにも行かないので、このままアップしておくことにする。そしてこれまでこの項目をお読み頂いた読者なら、「追加貨幣」がエンゲルスの創作であり、マルクス自身はただ単に「貨幣」と書いているだけだということを知ったとしても、別段驚かれることはないだろうと思うのである。というのは、これまでの私の一連の考察の結論は、このエンゲルスが「追加貨幣」と述べているものは、実は、一国の流通貨幣そのものであること、しかもそれは貨幣とはそもそも何かを明らかにするような根源的な内容を明らかにするものですらあることを知っているからである。だからマルクス自身は、「追加貨幣」ではなく、ただ単に「貨幣」と述べていると知っても、なるほど「追加貨幣」の何たるかを知っている今では、それはむしろ納得できると了承されるだろうからである。だから私はこの項目をそのまま掲示しておくことにした。もちろん、「追加貨幣」がエンゲルスの創作だということを前もって知っていたなら、全体の展開はまた違ったものになったかも知れないが、しかし結論は変わらないし、論じている内容は本質的には何ら間違ったことを言っているとは思わないからである。しかし、「追加貨幣」がエンゲルスの創作だったという、ある意味では根本的なことを知らなかったのは、私の不勉強の至りであり、その点はお詫びしたい。

なおこれはついでに述べておくのであるが、マルクス自身が同じ第2部第20章第5節「貨幣流通による諸変換の媒介」において「流通手段を前貸しする」と述べている部分（全集版517頁）、この大谷氏らの主張を裏付けるものであるかのように思われる部分、の原文は以下ようになって

いる。

Er schießt sich selbst (ob aus eignr oder per Kredit aus fremder Tasche, ist hier ganz gleichgültiger Umstand) Geld auf erst zu ergattenden Mehrwert vor ; damit aber auch zirkulierendes Medium zur Realisation später zu realisierenden Mehrwert.

つまり全集版で「流通手段」と訳されているのは「zirkulierendes Medium」である。しかし一般にいう「流通手段」というのは（例えば第1部第1篇第3章に出てくる）、「Zirkulationsmittel」である。だから全集版のように「流通手段を前貸する」と訳すより、新日本新書版のように「流通媒介物をも前貸する」と訳す方が適切であるように思える。

以上、ながながと論じてきたが、この項目の検討は終えることとする。

● [e 社会的総再生産過程における金生産の分析] も今一つハッキリしない

これもこれまで考察してきた a、b と同じように、項目【二重の叙述方法の放棄と貨幣運動の全面的な組み入れ】に関連して、特に〈ここでの、社会的総再生産過程における貨幣の運動ないし役割についての分析では、とくに次の諸点が重要である〉（中131-132頁）とされて、a～e の項目を立てられた、最後の問題なのである。

そこでは大谷氏は、マルクスは〈第八稿で、貨幣材料となる金の社会的再生産を分析した〉（中134頁）ことを指摘されながら、貨幣材料としての金の生産は資本主義的生産の社会にとっては流通費にあたり、商品生産一般の空費であること、それは資本家たちが彼らの剰余価値の一部をたえず貨幣に転化して、それを流通界に抛出するという仕方、負担しなければならないこと、そうした問題を、〈マルクスはここではじめて、金生産部門とその他の生産諸部門とのあいだの転換運動を分析した〉（中135頁）と指摘されたあと、最後に次のように述べておられる。

〈そのさい彼は、金生産をいわば「流通機械」としての貨幣の原料を生産する生産部門として第Ⅰ部門に含めたために、一方では、補填関係の説明に舌足らずの部分を残したけれども、他方では、そうすることによって、生産手段生産部門における拡大再生産のための潜在的な追加貨幣資本の本源的な源泉を確定することができたのであった。〉（中135頁）

金生産部門を第Ⅰ部門に含めたことについて、大谷氏の評価はあいまいなように思える。それは一方では、〈補填関係の説明に舌足らずの部分を残した〉という。確かに現行の「[第12節 貨幣材料の再生産](#)」では、部門Ⅰに属するとされた金生産部門を  $I(20c + 5v + 5m)$  として、そのうちの  $5v$  だけが、如何にして部門Ⅱc の一部と転換するかを論じているだけである。マルクスはまずⅡc と転換したあと、それは部門Ⅱの内部でさらに転換されてⅡm の一部と転換されて、それは最終的には蓄蔵貨幣になるとしている。確かに金生産部門の  $Iv$  の転換だけを論じているという点では〈舌足らず〉と言えるが、それは結局は、部門Ⅱの剰余価値の負担になることは指摘しており、その限りでは正しい結論になっている。つまり金生産部門の  $I(5v + 5m)$  はⅡm に帰着しなければならないこと、また  $I(20c)$  は、だから部門Ⅱm に帰着することを示唆しているのである。大谷氏の指摘はこうしたことだと理解する。しかしこれが果たして金生産部門を部門Ⅰに含めたが故にそうなった、つまり最後まで  $c$  や  $m$  の転換まで論じずに終わった原因なのだ、と言えるのかが問題であろう。

金生産部門を部門Ⅰに含めると言っても実際には、マルクスはそれを別個に  $I(20c + 5v + 5m)$  として考察しており、その限りでは同じことなのである。マルクスを批判する人たちは、金生産部門を部門Ⅰにも部門Ⅲにも属さない、部門Ⅲにすべきであるとか、あるいは部門Ⅱの亜部門にすべきだとか色々と主張されているが、要するに金生産部門をそれ自体として区別して論じるということでは、結局は、同じことになるのであり、貨幣材料としての金生産部門の産物全体が社会的には追加補充される貨幣であり、よって他の生産諸部門の剰余価値から負担されて（単純再生産なら他の諸生産部門の資本家の消費の一部がそれだけ削られることになる）、一旦は蓄蔵さ

れること、だから金生産部門の不変資本を補填するのは第Ⅰ部門の剰余価値であり、金生産部門の可変資本と剰余価値を補填するのは第Ⅱ部門の剰余価値であることは明らかなのである。それさえハッキリしていれば、それを部門Ⅰに入れようが部門Ⅲに入れようが、あるいは部門Ⅲにしようが、同じことであり、要するに金生産部門をそれ自体として取り出して考察する（マルクスがやっているように）ことが一番肝心なことなのである。

もう一つ大谷氏は、金生産部門を部門Ⅰに含めることによって、マルクスは〈生産手段生産部門における拡大再生産のための潜在的な追加貨幣資本の本源的な源泉を確定することができたのであった〉とも述べておられる。これがよく分からない。これは第21章該当部分における考察を述べておられるのであろうか。確かにそこでは、マルクスは金生産部門を蓄積のための貨幣蓄蔵の本源的源泉として述べてはいるが、しかしそれは決して〈生産手段生産部門における拡大再生産のための潜在的な追加貨幣資本の本源的な源泉〉だけを論じているのではない。第Ⅱ部門における本源的な貨幣源泉についても論じているのである（エンゲルスが「補遺」とした部分で）。こうした問題は別途、その部分で詳しく論じることになると思うので、ここでは深入りは避けるが、しかもそうしたことが金生産部門を部門Ⅰに含めることによって可能になったかに大谷氏は主張されるのであるが、果たしてそれは正しいのであろうか。

マルクスはむしろ「第12節 貨幣材料の再生産」では次のように述べている。

《ここで分かることは……単純再生産の場合にも、そこでは言葉の本来の意味での蓄積すなわち拡大された規模での再生産は排除されているとはいえ、貨幣の積み立てまたは貨幣蓄蔵は必然的に含まれていることということである。》（全集版583頁）

マルクスは金生産部門からの本源的な蓄蔵貨幣の形成は、言葉の本当の意味での蓄積、すなわち拡大された規模での生産のために行う蓄蔵貨幣の形成とは異なることを明瞭に理解している。これは第21章該当部分の考察を踏まえれば、われわれにとっても、極めて明らかである。以前、すでに一部紹介したが、マルクスは《ⅠのA、A'、A"、等々の側での可能的な新追加貨幣資本の形成……は、生産手段（Ⅰ）の追加的生産の単なる貨幣形態なのである》（大谷訳『経済志林』上57頁）と述べていた。すなわち蓄積のために行なわれる潜勢的貨幣資本としての貨幣蓄蔵は、追加的生産手段（あるいは部門Ⅱの場合は追加的生活手段）を貨幣化したものでなければならないのである（そうでないと現実に蓄積する資本家はその物的対象を市場に見いだせない）。だから金生産部門にもとづく蓄蔵貨幣を単純には拡大再生産のための貨幣蓄蔵と同列には論じられないのである。そこまで理解して問題を論じなければならないであろう。

## ● 5月号掲載分の論文の全体の見通し

---

さて、いよいよここからは、5月号掲載分の検討である。以後、大谷氏の論文からの引用は、特に断りがない限りは、『経済』2009年5月号（No.164）からのもので、（下169頁）等と略して記すことにする。ここからは第8稿の最後の部分である「拡大再生産の分析」部分が考察対象になっている。この部分は、すでにこのブログで段落ごとに解説を試みた箇所であり、よって当然、以前の私の考察を踏まえた批判的検討を行なうことになり、以前の考察が再び取り上げられることにならざるをえない。だからどうしても重複は避けられないのであるが、今回の連載を読まれている方が、すべて以前の段落ごとの解説を読まれているとは限らないから、重複を恐れずに、論じていくことにしたい。とりあえず、読者の便宜のために、最初に大谷氏の論文のこの部分全体の見通しを紹介しておこう。まずこの部分は「6 第8稿における拡大再生産の分析の内容と特色」という大項目が立てられ、それが全体として次のような構成になっている。

### 〈 6 第8稿における拡大再生産の分析の内容と特色

#### (1) 第8稿の拡大再生産論展開の筋道とポイント

【1-4での問題提起ととりあえずの解答】

【「5 第II部門での蓄積」での考察の歩み】

[a 「困難」の確認]

[b 表式を利用した蓄積の進行過程の考察]

[c 1回目の試み――「一つの新しい問題」と解決の挫折]

[d 2回目の試み――追加労働者の賃金支出についての新たな想定。「資本主義的生産の進行とは矛盾している」→中断]

[e 3回目および4回目の試み――「病状の重圧にたいするむりやりな挑戦」]

[f 5回目の試み――  $l(v + 1/2 m) > llc$ ]

[g コメント――拡大再生産の展開についての総括]

[h これまでの考察からの帰結]

[i 「貨幣源泉」問題への最終的コメント]

#### (2) 第8稿における貨幣べール観の最終的克服

【再生産過程の分析におけるマルクスの苦闘の意味】

【第8稿におけるマルクスの厳しい自己批判】〉

以上のような内容になっている。これらを一つ一つ批判的に検討していくことにしよう。

## ● 「Ⅱ 蓄積または拡大された規模での生産」の冒頭にある「先取り」を如何に理解すべきか

大項目、「6 第8稿における拡大再生産の分析の内容と特色」の、いわば前文にあたる部分である。大谷氏は、ここで「蓄積または拡大された規模での生産」とマルクス自身によって表題がつけられた部分（エンゲルスが「第21章 蓄積と拡大再生産」と表題をつけた部分）に、表題の冒頭に《先取り。》とマルクスが書いていることについての、氏の解釈を展開されている。

その解釈は、要するにマルクスは単純再生産を敘述するさいに、ノートの46-47頁を飛ばして誤って紙を2枚めくってしまったので、単純再生産の敘述を終えて、拡大再生産の敘述に移るときに、遡って、その空白になったノート部分（46頁～47頁）からその敘述を開始したので、それが分かるように表題の前に《先取り。》と書いたのだというものである。大谷氏はそれを次のように述べておられる。

〈この飛ばされた46—47ページはノートの見開きの2ページだから、彼はたぶん、誤って紙を2枚めくってしまったのである。彼はおそらく、すぐにはこのことに気づかないまま書き続け、単純再生産の記述を50ページのなかばで終わらせた。そしてそのあと彼は、この飛ばされた46—47ページを「蓄積または拡大された規模での生産」の書き出しに使った。このことを分かるようにするために、46ページ冒頭の見出し「蓄積または拡大された規模での生産」のまえに「先取り」と書き（S. 790.14）、47ページの末尾には「この先は51ページ」、そしてその51ページの先頭には「47ページからの続き（47ページを見よ）」と書いた（S. 794.3）。だからここでの「先取り」という語は、さきの16ページに見られた、「あとに置くべきものの先取り」における「先取り」の場合とは違って、ノートページが前後していることを示すためのものでしかなく、敘述の内容についてのものではないと考えられるのである。〉（下170-1頁）

つまり単純なミスからくるもので、〈敘述の内容についてのもの〉ではないと言われるのである。しかし果たしてそうであろうか。そんな単純な理由なら、わざわざ表題の前に《先取り》と書く必要はなかったと考えられないだろうか。なぜなら、46頁の冒頭には《Ⅱ 蓄積または拡大された規模での生産》という表題が書かれているのだから、そこからは45頁まで論じてきた単純再生産の敘述の続きではないことは一目瞭然であり、間違えることはないからである。そして45頁まで単純再生産の敘述を追ってきた場合も、その敘述が途中で切れており、46頁に続いていることもまた一目瞭然だから、わざわざ《先取り》などと断る必要もないと思えるからである。しかし47頁末尾と48頁冒頭とは、ともに文章の途中で切れていると推測できるので、文章の続き具合が一見しただけは判然としない。だからマルクスは47頁の末尾に《この先は51ページ》と書き、また50頁と51頁とのつながりも、分かりにくいから、51頁の冒頭に《47頁からの続き（47頁を見よ）》と書いたと推測できるのである。

つまりもう一度確認すると、46頁の冒頭には表題が書かれていて、そこから別のテーマが開始されていることがハッキリしているのだから、それが45頁まで論じてきたものの続きでないことは歴然としているから、だからわざわざ《先取り》などと書く必要はまったくなかったというこ

とである。にも関わらず、マルクスが《先取り》と書いたのは、やはりわれわれとしては、単純再生産の敘述を開始する時に、彼がそれ以後の敘述が《後におくべきものの先取り》であるとの断りを書いたのと同じ含意のもとに、今回も、これから述べる《蓄積または拡大された規模での生産》は、本来はもっと後で展開すべきものの《先取り》であると断るために書いたとしか考えられないのである。

そして、マルクスにとって、なぜこれが《先取り》であるかは明らかである。マルクスは、《利用すべき諸箇所》で、《ノートII》（第2稿）のところに《この第2の敘述が基礎におかれなければならない》と書きつけたことから明らかなように、彼が第2稿を書き終えて、もう一度、第2部全体の構成を考えて、第2稿の表紙に書いた目次（全体のプラン）では「B 拡大された規模での再生産。蓄積」も「a）貨幣流通のない敘述」と「b）媒介する貨幣流通のある敘述」に分けられる予定であったからである（八柳前掲論文参照）。だからこれから敘述する「蓄積または拡大された規模での生産」は、本来はa）のあとに展開されるべきb）を《先取り》して、最初から貨幣流通による媒介を入れた考察を行うとの考えであったからに他ならない。つまりマルクスは、第2稿で考えていた、いわゆる「二段階の構成の敘述のプラン」を、第8稿の段階でもまったく放棄などしていなかったことを、むしろこの《先取り》という断り書きは（そして先の単純再生産の敘述が始まる場所に書いた《後におくべきものの先取り》という断り書きとともに）、明らかに証明しているのである。

## ● 1で論じていることは、現実の拡大再生産の直接的な規定である

ここからは〈第八稿の拡大再生産論展開の道筋とポイント〉について、大谷氏の理解されるところが紹介されている。すなわち〈マルクスがここでなにをしようとしたのか、なにをつかんだのか、なにを明らかにしたのか、を述べる〉（下170頁）というわけである。

まず大谷氏はマルクス自身が1～4の番号を打っている部分について、それぞれでマルクスは何を問題にしているのかについて論じている。最初は1の部分である。

〈ここでは、拡大再生産がまだ始まっていないところで、それが始まるために存在すべき前提はなにか、を論じているのだ、ということである。言い換えればここで、単純再生産のもとで、どのようにして、この二つの前提条件が先行的につくりだされうるのか、という問題が立てられたのである。〉（下171頁）

これをみると、大谷氏によれば、マルクスはまず単純再生産を前提し、その上で、そこから拡大再生産を開始するための、それを始めるために存在すべき前提を論じているといわれるのである。

しかし私の理解するところによれば、マルクスはまず拡大再生産そのものを前提し、その上で、まず蓄積のもっとも直接的な規定をあたえるところからはじめていると理解している。実際、マルクスは1を次のようにはじめている。

《1）第1部では、蓄積が個々の資本家については次のように現われる[sich darstellen]こと、すなわち、彼の商品資本を、貨幣化するさいに彼はこの商品資本のうち剰余価値を表示する（つまり剰余生産物によって担われている）部分をそれによって貨幣に転化させるが、それを彼はふたたび彼の生産資本の現物諸要素に再転化させるというように現われること、つまり、実際には現実の蓄積とは拡大された [vergrößert] 規模での再生産であることを明らかにした。しかし個別資本の場合に現われる [erscheinen] ことは年間再生産でも現われざるをえない》（大谷訳上32頁、下線はマルクスによる強調）。

つまり、まずマルクスは蓄積は第1部、つまり「資本の生産過程」では、個々の資本家について《次のように現われる》と述べている。それは剰余価値を貨幣化したものを再び生産資本の現物諸要素に再転化させるというように《現われる》と。そしてだから《実際には現実の蓄積とは拡大された [vergrößert] 規模での再生産である》と述べている。だからマルクスはあくまでも《現実の蓄積》を問題にし、そこから出発しているのであり、これがマルクスの与えた蓄積のもっとも直接的な規定なのである。そしてその上で、マルクスは《個別資本の場合に現われることは年間再生産でも現われざるをえない》と結論している。だからこの直接的な蓄積の規定は、年間再生産における蓄積の規定でもあるわけである。だからここでわれわれは社会的総資本の再生産における蓄積（拡大再生産）のもっとも直接的な規定――現実の蓄積とは拡大され

た [vergrößert] 規模での再生産である――が与えられていることを知るのである。後にわれわれは「蓄積の概念」で重要なのは、単に「規模」、すなわち「量」の拡大ではなく、「質」的な飛躍であることを知るのだが、しかし「蓄積または拡大再生産」のもっとも表面的な、だからまたわれわれの表象に直接《現われる》――この《現われる》という文言こそ、この規定の直接性を示している――ものは、拡大された規模で再生産が行なわれているという事態なのである。これは誰が見ても了解できるありふれた事実でもある。マルクスの考察はまさにこうしたありきたりの事実から開始されているのである。

だからマルクスは決して蓄積を、すなわち〈拡大再生産がはじまっていないところで、それが始まるために存在すべき前提はなにか、を論じているの〉ではない。すでに〈はじまってい〉る《現実の蓄積》を前提して、そのうえで問題を論じていることは明らかなのである。つまり現実の蓄積を前提し、それを観察しながら、蓄積が行なわれるためには何が前提されるのかを、これからマルクスは分析していくのである。現実の年間再生産における蓄積を前提し、その観察と分析を通じて、現実の蓄積には何が前提されるのかを考察していこうとしているのである。だから大谷氏の捉え方はまったくマルクスの方法とは逆としかいいようがないわけである。

マルクスは決して、単純再生産を前提してその考察を行なっているなどということはいえない。例えば1の次のパラグラフ（第2パラグラフ）を見ても分かる。

《ある個別資本が500で、年間剰余価値が100（つまり商品生産物は $400c + 100v + 100m$ ）だとすれば、600が貨幣に転化され、そのうちの400cはふたたび前貸不変資本の現物形態に、100vは労働力に転換され、そして――蓄積の場合には（蓄積だけが行なわれるものとすれば）、それに加えて、100mが商品形態から貨幣形態に転換された《のちに》、さらに生産資本の現物諸要素への転換によって追加不変資本に転化させられる。そのさい次のことが前提されている。第1に、年間に100mが次々に貨幣として積み立てられるが、機能している不変資本の拡張のためであろうと、新たな産業的事業の創設のためであろうと、この額で十分である（技術的諸条件に対応している）ということである。しかしこの過程が行なわれうるようになるまでには、つまり現実の蓄積――拡大された規模での生産――が始められうるようになるまでには、もっとずっと長いあいだにわたる剰余価値の貨幣への転化と貨幣での積み立てとが必要だということもありうる。2）拡大された規模での生産が事実上すでにあらかじめ始められているということが前提されている。というのは、貨幣（貨幣で積み立てられた剰余価値）を生産資本の諸要素に再転化させるためには、これらの要素が商品として市場で買えるものとなっていることが前提されているからである。》（同上32-33頁、下線はマルクス）

ここでもまだ個別資本のケースを考察しているが、もちろん、マルクスはすでに見たように、個別資本で生じたことは《年間再生産でも現われざるをえない》ことを確認した上で、こうした考察をしているのである。マルクスは明確に《蓄積だけが行なわれるものとすれば》と述べている。つまり剰余価値のすべてを蓄積に回すとすれば、と仮定しているのである。しかもその条件を考察して、《2）拡大された規模での生産が事実上すでにあらかじめ始められているという

《ことが前提されている》とも述べている。つまり蓄積（拡大再生産）とは何か、その概念を明らかにするためには、すでに現実に蓄積（拡大再生産）が行なわれていることを前提しなければならない、と明確に述べているのである。これを読んで、マルクスは単純再生産を前提して、その上で拡大再生産のための前提を分析しているなどとどうして理解できるのだろうか。それはただ何らかの偏見や思い込みをもってマルクスの文章を読んだとしか言いようがないのである。以上が1の内容である。

因みに、私自身は、マルクスが1と番号を打った部分で何を論じているかについて、次のように考えている。その内容を表題として表してみよう。

1 個別資本の蓄積で現われたことは、年間再生産での蓄積でも現われざるをえない

(1)蓄積（拡大再生産）の直接的表象、直接的規定

《現実の蓄積とは拡大された規模での再生産である》

(2)現実の蓄積（拡大再生産）の直接的反省関係

《蓄積には蓄積が前提される》

つまり1でマルクスが述べていることは、こうした二つの問題なのである。これは現実に蓄積が年々繰り返されている資本主義的生産の現象を前にして直接に得られるものである。年々蓄積が繰り返されている現実を見れば、まずそれは拡大された規模での生産を繰り返しているものとして、われわれには現われ、だからまた蓄積には蓄積が前提されるものとして現われてくるのである。これが1でマルクスが考察している内容なのである。つまり現実に行なわれている蓄積を前提し、そのうえでそれを観察し、そのもっとも直接的な、われわれの意識に現われる表象から得られる規定を与え、その上で、今度は、蓄積の直接的な反省規定を与えているのである。これはこれまでの『資本論』のあらゆる篇や章や節や等々の諸項目の冒頭で見られる敘述の共通した特徴でもあり、マルクスの唯物論的な方法にも合致するものなのである。

### ● 3、4でマルクスは何を問題にしているのか

---

次に大谷氏は2について、次のように説明される。

〈つまり、この2は、蓄積のための潜勢的貨幣資本の積立とそれについての外観上の困難を指摘している。〉（下171頁）

この2の理解については、別に異論はない。しかし、引き続いて3、4について、次のようにまず概観を明らかにされている。

〈続いて、第Ⅰ部門の剰余生産物の一方的販売による可能的貨幣資本の形成がどのようにして行なわれるかを、3でまず、この販売が第Ⅰ部門の内部で行なわれる場合について、次の4で、それが第Ⅱ部門への販売によって行なわれる場合について論じる。〉（下171頁）

しかしこれは不正確であるし、重要なポイントを見ていないように思える。マルクス自身は実際にはどのように言っているのかをわれわれは確認しよう。

《われわれは、この外観上の困難をさらに詳しく解決するまえに、まず部門Ⅰ（生産手段の生産）での蓄積と部門Ⅱ（消費手段の生産）での蓄積とを区別しなければならない。部類Ⅰから始めよう。》（大谷訳上40頁）

このようにマルクスは2の最後に述べたあと、段落を変えて3を始めているのである。つまりマルクス自身は、部門Ⅰでの蓄積と部門Ⅱでの蓄積に分けて考察するのは、《この外観上の困難をさらに詳しく解決する》ためであることを明確に語っているのである。だから次に始まる3以下が《部門Ⅰでの蓄積》であり、さらにそのうちの3は部門Ⅰでの不変資本の蓄積、そして4が同部門での可変資本の蓄積であること（しかし実際には《追加可変資本の考察》の開始は三つ前のパラグラフから始まっている）、そしてさらに5が《部門Ⅱでの蓄積》（これはマルクス自身が表題を書いている）となっていることを知るのである。つまりマルクス自身は《5 部門Ⅱでの蓄積》と表題を書いた部分もあくまでも《外観上の困難を詳しく解決する》ためのもの、つまり一方的な販売による蓄積のための貨幣蓄蔵を行なおうとすると陥る困難を解決する一環であると考えていたということである。

そしてこうした困難を解決するということは、すなわち如何にして社会的な年間の再生産における蓄積がなされるのかを明らかにすることであり、そのことはすなわち《蓄積あるいは拡大再生産》の概念を明らかにすることでもあるのである。

次に大谷氏は3のより詳しい説明に移られるのであるが、その中で次のように述べておられる（下線は大谷氏による強調箇所）。

くしかし、彼がここではじめて解明した最大の問題は、単純再生産の内部で、どのようにして拡大再生産のための物質的土台が生み出されうるのか、ということである。生産を現実に拡大するためには、なによりもまず、蓄積される剰余価値が、現実の蓄積に必要な現物形態をもつ生産手段に転化できなければならない。それは、第Ⅰ部門で、可能的貨幣資本を形成するために一方的に販売される剰余生産物の現物形態が、そのように変化することによって、単純再生産の内部で可能となるのである。〉（下171-2頁）

くこのように、マルクスは拡大再生産の考察を、どのようにして拡大再生産の開始——エンゲルスはこれをきわめて適切に「単純再生産から拡大再生産への移行」（Ⅲ/12, S. 458.34-35; Ⅲ/13, S. 461.31-32）と表現した——が行なわれうるか、そのさいに生じる困難はなにか、ということから始めているのである。拡大再生産の開始とは蓄積率がゼロからプラスに転じることであるから、第一に、諸要素の配置の変更が必要だということと、第二に、この変更は第Ⅱ部門での過剰生産をもたらすということとは、必要な変更を加えれば、すでに蓄積が進行しているさいに蓄積率が上昇する場合にも妥当するのであって、マルクスは3および4での分析によって、蓄積率が変動する場合一般についても示唆を与えているのである。〉（下172頁）

しかしこれはまったく問題を読み誤っているとしか言いようがない。マルクスの意図は単純再生産と比べながら、拡大再生産の特徴、すなわちその概念を明らかにすることなのである。あるいはむしろ大谷氏が述べていることとはまったく逆に、単純再生産から拡大再生産には「移行」できないこと、「移行」しようとするなら、不合理や矛盾に陥ることを明らかにして、両者には質的な相違・飛躍があることを示すことなのである。

すでに紹介したように、マルクスは1で最初に「蓄積」の直接的な規定として《現実の蓄積とは拡大された規模での再生産である》（強調引用者）との規定を与えた。しかし拡大再生産の概念は、決して量的な（規模の）問題ではなく、その前にまずは質的な問題として捉える必要があるということを示そうというのが、1～5全体を貫くマルクスのメインテーマなのである（だからこうした視点の強調は5と番号を打ったところまで——但しこの5に該当する部分は、草稿の最後まで続いているという大谷氏らの理解とは異なり、草稿の61頁にある区切りの横線までである——貫している）。そしてそのために、マルクスは規模としては単純再生産と同じかあるいはそれよりも小さいケースをわざわざ選んで、しかしこうしたケースでも蓄積が可能であること、だから蓄積は単に量的に拡大すること、あるいは量的拡大を前提するものではないこと、重要なのは単純再生産と拡大再生産とは質的な相違があり、前者から後者への「移行」には質的飛躍が必要であること、だから拡大再生産のためには単純再生産とは質的に異なる機能配置が必要であり、それを前提しなければならないこと、を明らかにしているのである（そしてそれが最終的には拡大再生産の機能配置にもとづく表式——a表式——の提示に帰結している）。そしてこうした考察の過程そのものが、まさに拡大再生産とは何か、その概念を明らかにすることでもあったのである。その詳しい検証はこの「マルクス研究会通信」における段落ごとの解説を見て頂きたい。そこでは大谷氏らが主張される、いわゆる「移行」論の間違いもとことん批判したつもりである。

この2や3、4において、マルクスが課題とするものが、大谷氏やエンゲルスが主張されるような、〈単純再生産の内部で、どのようにして拡大再生産のための物質的土台が生み出されるのか〉というようなことではないのは、次のような事実を確認すればたちどころに明らかとなる。すなわち、マルクスは外観上の困難を解決するために、次のような考察から開始している。

《部門Ⅰを構成している多数の産業部門での諸投資も、それぞれの特殊な産業部門内部でのさまざまな個別投資も、{それらの規模、技術的諸条件、等々、市場関係、等々をまったく度外視すれば} それぞれの年齢、すなわち機能期間に応じて、それぞれ、剰余価値が《次々に》潜勢的な貨幣資本に転化していく過程のさまざまな段階にあるということは明らかであって、この転化がそれらの資本の機能資本の拡大のためであろうと新たな産業的事業における貨幣資本の投下のためであろうと――「拡大された規模での生産」の2つの形態――、このことに変わりはない。そこから出てくるのは、それらのうちの一部分は適当な大きさに成長した《自分の》潜勢的な貨幣資本をたえず生産資本に転化させているが、すなわち積み立てられた、剰余価値の貨幣化によって積み立てられた貨幣で生産手段――不変資本の《追加的》諸要素――を買っているが、他方、他の1部分はまだ自分の潜勢的な貨幣資本の積立てをやっている、ということである。つまり資本家たちは、この2つの部類のどちらかに属して、一方は買い手として他方は売り手として――そして両方のそれぞれがどちらか一方だけの役割を担って――互いに相対しているのである。》（大谷訳上40-1頁、草稿47頁、下線はマルクスによる強調）

こうした想定のもとに、マルクスは潜勢的な貨幣資本の積立をやっている資本家群をA、他方、それまで剰余価値の貨幣化によって積み立てた貨幣で生産手段を買って、現実の蓄積を行なおうとしている資本家群をBとして、一連の考察を行なっていることは周知のことである。

ところでエンゲルスが断りなくマルクスの一文を変更して、「移行論」を展開している部分の直前でも、マルクスは次のように論じている。

《この剰余生産物を次々に売っていくことによって、資本家たちは蓄蔵貨幣、《追加的な》潜勢的貨幣資本を形成する。いまここで考察している場合には、この剰余価値ははじめから生産手段の生産手段というかたちで存在している。この剰余生産物は、B, B', B'', 《等々》(I)の手のなかではじめて追加不変資本として機能する。しかしそれは、可能的には、それが売られる以前から、貨幣蓄蔵者A, A', A''等々(I)の手のなかで追加不変資本である。これは、Iの側での《再》生産の価値の大きさだけを見るならば、単純再生産の限界の内部でのことである。というのは、この可能的な追加不変資本(剰余生産物)を創造するのに追加資本が動かされたわけでもなく、また単純再生産の基礎の上で支出されたのよりも大きい剰余労働が支出されたわけでもないからである。違う点は、ここではただ、充用される剰余労働の形態だけであり、その特殊な役立ち方の具体的な性質だけである。》（大谷訳54頁、草稿52-53頁、下線はマルクス）

このすぐあとに続く括弧内の文章をエンゲルスは括弧を外して、その一部を次のように書き換えているのである。

《単純再生産の場合には、全剰余価値Ⅰが収入として支出され、したがって商品Ⅲに支出されるということが前提された。したがって、剰余価値Ⅰは、不変資本Ⅱcをその現物形態で再び補填すべき生産手段だけから成っていた。そこで、単純再生産から拡大再生産への移行が行なわれるためには、部門Ⅰでの生産は、Ⅱの不変資本の諸要素をより少なく、しかしそれだけのⅠの不変資本の諸要素をより多く生産できるようになっていなければならない。この移行は必ずしも困難なしに行なわれるものではないが、しかし、それは、Ⅰの生産物のあるものがどちらの部門でも生産手段として役立つことができるという事実によって、容易にされるのである。》（全集版615頁）

このようにエンゲルスはマルクスの問題意識が文字どおり「単純再生産から拡大再生産への移行が行なわれるためには」何が問題なのかということであるかに理解している。そして先に見たように、大谷氏もそうしたエンゲルスの修正を「きわめて適切」なものとされているのである。

しかしエンゲルスも大谷氏もマルクスはその前の考察で部門ⅠでA、B二つの資本家群を想定して問題を論じている意味を深く考えておられない。考えてみよう。これから潜勢的可変資本を蓄蔵しようとしている資本家群Aはまだよいとしても、すでにこれまで剰余価値を貨幣化した貨幣を蓄蔵して、必要な額に達したのでそれをこれから現実の蓄積のために不変資本の購入に投じようとしている資本家群Bというのは、果たして単純再生産を想定して可能であろうか。決して否である。なぜなら、彼らはそれ以前までは、資本家群Aとして剰余価値を一方的に販売して、それを実現して入手した貨幣を流通から引き上げて、蓄蔵してきた資本家たちであり、彼らが一方的に販売してきた剰余生産物は、まさに追加的生産手段以外の何ものでもなかったからである。彼らが彼らの剰余生産物（生産手段の生産手段）を一方的に販売できたのは、まさに現実に蓄積を行なう資本家たちがいたからに他ならないのである。だからそもそもマルクスがA、B二種類の資本家群を想定しているということ自体が、マルクスがすでに一般に年々拡大再生産が行なわれている過程を想定して問題を考察していることを示しているのである。問題はあくまでも《再生産の価値の大きさだけを見るならば、単純再生産の限界の内部でのことである》というにすぎない。つまり価値の大きさだけを見るなら、単純再生産の場合とまったく変わらないとマルクスは述べているのであって、それをエンゲルスや大谷氏はあたかも単純再生産そのものについてマルクスは述べているかに読み誤っておられるのである。だから彼らはマルクスがあたかも単純再生産から拡大再生産への「移行」を論じていると捉えられたのである。しかし何度もいうが、マルクスがA、B二つの資本家群を想定しているということ自体が、それは単純再生産では不可能なことであり、単純再生産とは相いれない想定なのである。マルクスはあくまでも現実に年々拡大再生産を繰り返している過程を、ただ前提して、それを観察・分析しているにすぎないのである。拡大再生産の概念を解明するためには、それはまったく正しい方法論的立場である。ただマルクスは拡大再生産が単純再生産とは異なる質的内容を持っていることを明らかにするために、単純再生産との比較によって拡大再生産の諸特徴を明らかにし、その概念を解明しようとしているのであり、そのために規模においては単純再生産と同じか、またはそれよりも小さいケースを敢えて選んで、問題を考察しているだけなのである。



## ● 《5）部門Ⅱでの蓄積》はどこまで含まれるのか？

ここからは【「5 第Ⅱ部門での蓄積」での考察の歩み】と題して、マルクスが5と番号を打った部分以下の説明が行なわれるのだが、すでに指摘したように、大谷氏らは、この5以下の部分全体が一だからエンゲルスが「補遺」とした草稿の最後の部分までをも含んだ全体が一、5の中に入ると考えておられる。こうした捉え方にはすでに疑問を提示しておいた。しかしそれを問題にする前に、まずこの項目を大谷氏は次のように書き出されている点を問題にしなければならない。

〈マルクスは、このように第Ⅰ部門での蓄積を、正確には、現実の蓄積のために行なわれるここでの準備過程とそれがもたらす諸結果とを、考察したのち、次に、「5 第Ⅱ部門での蓄積」に移る。〉（下172頁）

これまでのマルクスの考察が、決して〈正確には、現実の蓄積のために行なわれるここでの準備過程とそれがもたらす諸結果〉といったものでは無かったことはすでに指摘したが、大谷氏には、マルクスにとって《部門Ⅱでの蓄積》の考察も、《外観上の困難》を《詳しく解決》する一環である、との認識が欠けておられるわけである。これはある意味では致命的である。そもそもマルクスが《部門Ⅰでの蓄積》と《部門Ⅱでの蓄積》とにわけて考察しているのは、何のためかというもっとも根本的なことが抜け落ちているのである。マルクスはすべての資本家が一方的販売によって蓄積のための潜勢的貨幣資本、すなわち蓄蔵貨幣の形成を行なおうとしたら困難に陥ること、だからそれを《詳しく解決》するなかで、つまり蓄積のための貨幣蓄蔵が如何になされるかを解明することによって、《蓄積または拡大再生産》の概念を明らかにしようとしているのである。すなわち、《蓄積または拡大再生産》は、単純再生産とは質的に異なること、そしてその質的相違とは剰余価値を形成する剰余労働の具体的形態の相違であり、剰余生産物の物的形態の相違であること、だから蓄積というのは生産過程そのものの一現象であり、だからそれは生産過程を通して流通過程に現われてる総商品資本の素材的内容そのものが単純再生産とは質的に違っていること、だからわれわれは拡大再生産のためには、最初から単純再生産とは異なる機能配置にもとづく表式が必要であること、等を明らかにしようとしているのである。そしてまた、マルクスがそうした拡大再生産の概念を《部門Ⅰでの蓄積》と《部門Ⅱでの蓄積》にわけて、それぞれにおいて考察し、そのなかでさまざまな困難や不合理を導き出しているということは、同時に、拡大再生産とは、部門Ⅰだけの蓄積や部門Ⅱだけの蓄積として考察することには限界があること、拡大再生産のためには常に両部門が同時に蓄積することが前提されなければならないことを明らかにためでもあったのである。5はその意味では、拡大再生産の概念を解明する一連の考察を締めくくる位置を占めているのである。

だからそれは一つまり拡大再生産の概念の解明は一、決してこの草稿の最後まで続いているわけではない。それだとマルクスは最後まで拡大再生産の概念を明らかにするだけに終わり、実際の拡大再生産における諸法則やそれに伴うさまざまな諸問題を何一つ解明しなかったということになってしまう。こうした理解が間違っているのは、例えば大谷氏が詳細に研究された第3

部第5篇の「利子生み資本」の全体の構成を見ても分かるであろう。第5篇は第21～24章で「利子生み資本」の概念が解明され、第24～35章で「利子生み資本」の運動諸形態が解明され、そして第36章で「利子生み資本」の歴史的考察がなされていたのである（もちろん、これらの章は、エンゲルスが編集の過程で設けたものであるが、とりあえず便宜的にそれを利用した）。こうしたマルクスの展開はある意味では普遍的であって、だから《蓄積または拡大再生産》の敘述でもそれは概ね妥当するし、しなければならない。もちろん実際には拡大再生産の歴史的な考察といったものが必要かどうかは別途検討される必要はあるが、少なくともそうした問題を検討するまで、マルクスの命はもたなかったことは確かである。しかし私は少なくとも「拡大再生産の概念」と「拡大再生産の諸法則」、およびその「まとめと残された課題」とについては、マルクスは不十分ながらも解明していると考えている。

さて、しかし大谷氏は、この5が草稿の最後まで含んでいると考えておられる。だから項目【「5 第II部門での蓄積」での考察の歩み】を、さらにa～iの九つの項目にわけて、5以降のマルクスが拡大再生産の表式を使って計算している部分も含めて一連のものとして、論じておられるのである。すなわち、次のように言われる。

〈これ以下（5以下――引用者）の敘述は、第8稿のなかでもとくに、エンゲルスが彼の序文で書いている「病状の重圧にたいするむりやりな挑戦の痕跡」（II/13, S. 8.5-6; MEW, Bd. 24, S. 12）がきわめて顕著に見られるところで、「論理的な連続はしばしば中断され、所々に論述の切れたところがあり、ことに終りのほうはまったく断片的である」（II/13, S. 8.26-28; MEW, Bd. 24, S. 12）。このなかに含まれる表式の展開のところでは、数字の書き誤り、見間違い、誤った計算などがいたるところに見られる。しかし、エンゲルスが言うように、たしかに、「マルクスの言おうとしたことは、あれこれの仕方でのなか述べられている」（III/13, S. 8.29-30; MEW, Bd. 24, S. 12）と云うる〉（下172頁）

ただエンゲルス自身は、大谷氏らのように、マルクスが5と番号を打った以下の部分全体が5に、つまり《部門IIでの蓄積》に含まれているとは考えなかったようである。それは現行版の次のような目次をみれば明らかである。

## 《第21章 蓄積と拡大再生産

### 第1節 部門Iでの蓄積

### 第2節 部門IIでの蓄積

### 第3節 蓄積の表式的敘述

### 第4節 補遺》

ただエンゲルスはマルクスが《5）部門IIでの蓄積》と表題を書いた場所をまったく無視して、それをマルクスが「4）」と番号を打ったパラグラフの前に持ってきている。しかも実際には《

部門IIでの蓄積》が論じられているかなりの部分を次の「第3節 蓄積の表式的敘述」の中に含めてしまっている。ただエンゲルスはマルクスが《云々。云々。》という形で敘述を打ち切ってしまっている部分（実はここまでが5に含まれている部分なのであるが）を補足するために、草稿の最後の部分（エンゲルスが「補遺」とした部分）が書かれたと判断している（これはこの限りでは正しい！）。実際、このマルクスの敘述の中断こそ、実は、5の部分の考察が終わるところであり、その考察の中断を示しているのである。そしてエンゲルスが考えているように、その中断された考察は、最後の部分（エンゲルスが「補遺」とした部分）で、もう一度、同じ問題が今度は結論的に論じられているのである。だから確かにエンゲルスの編集にはさまざまな問題があるが、しかし少なくとも5以下がまったく同じ問題が論じられているなどと解釈している大谷氏らに比べれば、まだしも《マルクスの言おうとしたこと》（エンゲルス）をなんとか理解しようとの努力のあとが伺えるものとなっているといえるのである。

いずれにしても、大谷氏らの5以下の捉え方が誤りであることは、その都度、それぞれの項目でそれらの本来の課題を明らかにするなかで説明していくことにしよう。

## ●何のための〈[a 「困難」の確認]〉なのか？

さて、大谷氏の最初の項目は[a 「困難」の確認]というものである。大谷氏はそれについて次のように述べておられる。

〈この5では、まず、4の末尾でつかみ出された「困難」、すなわち、「諸要素が——たとえば来年といった将来の拡大を目的として——違うように配列ないし配置されているだけ」であるような、Ⅰでの生産規模拡大のための過程が、Ⅱでは、それと同じ大きさの過剰生産をもたらす、という困難が確認される。〉（下172-3頁）

これが項目「a」で書かれていることのすべてである。これでは、大谷氏は5の冒頭における考察は、〈4の末尾でつかみ出された「困難」〉が、ただ再び〈確認される〉だけだと考えておられるとしか捉えようがない。しかし大谷氏は4や5における「困難」の確認が何のためになされているのかがお分かりではないように思える。そもそも4の考察と5の冒頭の考察とには明らかに異なる点があることにも、大谷氏はまったく気付かれていないようである。それは次のような点で違っている。

(1) 4ではその冒頭の《これまでわれわれは、A, A', A'', 等々(Ⅰ)が彼らの剰余生産物をB, B', B'', 等々(Ⅰ)に売ることを前提してきた。しかし、A(Ⅰ)が、B(Ⅱ)への販売によって自分の剰余生産物を貨幣化する、と仮定しよう》という文言から始まっているように、A(Ⅰ)はB(Ⅱ)に剰余生産物を販売して貨幣化すると前提されている。それに対して、5では《剰余生産物Ⅰの半分がふたたびそれ自身不変資本として部類Ⅰに合体される》という仮定である。つまり4ではⅠの蓄積は追加可変資本の蓄積であることが想定されているのに、5ではそれは追加不変資本の蓄積が想定されているのである。

(2) 5ではその「困難」が《cⅢについての第一の困難》と説明されているが、4ではそうした説明はない。

(3) 4では部門ⅠにA群の資本家とB群の資本家が想定され、それと同時に部門ⅢにもB群の資本家(とA群の資本家)の存在を暗示しているが、5ではA、B二種類の資本家群の存在については言及されていない。

(4) これも重要な相違であるが、4ではA(Ⅰ)が剰余価値をそれまではB(Ⅰ)に販売すると仮定されていたのを、今度はB(Ⅱ)に販売するという仮定であった。しかし具体的な数値にはまったく触れていない。ところが5ではⅠの剰余生産物の半分([1000/2]m)が部類Ⅰに合体されるとされており、しかも部門Ⅰと部門Ⅱの単純再生産における部門間の関係表式—— $1000v + 1000m(Ⅰ)$ と $2000c(Ⅱ)$ の関係表式——が示されている。

これだけの相違があるのである。この相違について若干の補足をしておこう。

まず(2)の相違については、あまり大したことではないように思えるが、しかし考えてみれば、マルクスは5の冒頭を《cⅢについての第1の困難》という文言ではじめているが、しか

し「第2の困難」については、何も述べていない。マルクスが「b）」と項目を打ったところからは、「一つの新しい問題」が考察され、それも一つの「困難」であるかに思えるのだが、しかしでは、それが「cⅢについての第2の困難」と言えるのか、ということそうではない。それはⅡの剰余価値の一部が追加不変資本として蓄積される場合の困難について論じているのだからである。だから5で、Ⅰにおける追加不変資本の蓄積におけるⅡcの困難が「第1の困難」とされていることを考えるなら、Ⅰにおける追加可変資本によるⅡcの困難が、つまり「4）」と項目を打ったところで考察している「困難」が、あるいは「第2の困難」とマルクスは考えていたかも知れないということである（しかしこれでは順序が逆転してしまいおかしいことになるのではあるが）。

次に（3）で指摘したことは非常に重要なことである。不破哲三氏などは、「4）」以前からのマルクスの一連の「困難」や「不合理」、「矛盾」の確認は、マルクス自身がさまざま「困難」や「不合理」、「矛盾」に突き当たっているのであり、マルクスの「試行錯誤」を示すものと捉え、大谷氏もそれ以前はともかく、「5）」の「a）」で拡大再生産の表式を提示して以降は、マルクス自身がさまざまな「試行錯誤」を繰り返していると捉えておられる。しかしこうした捉え方は、マルクスの敘述上の工夫をそのまま馬鹿正直に（失礼！）真に受けた誤解としか言いようがないのである。例えばマルクスが《だが、待て！ ここにはなにか儲け口はないものか？》（草稿60頁、大谷訳下15頁）と、わざとおどけた書き方をして、そうした一連の困難の模索が、敢えてそうした困難という形で当面する問題を提起しているだけなのだということを示唆しているのに、多くの人たちは、あたかもマルクス自身が《儲け口》を捜して「暗中模索」し、「試行錯誤」を繰り返しているかに捉えているのである。マルクスもまさか自分のこうした敘述上の工夫が真に受けられて、誤解されるとは思わなかったであろう。

しかし、マルクスが「4）」と番号を打った段階でも、すでに部門Ⅲにもこれからそれまで蓄蔵してきた潜勢的貨幣資本を投じて現実の蓄積しようとしている資本家群Bを想定していることを見ても、マルクスにとっては初めから問題は明瞭であり、最終的な問題の解決や結論は明らかであったことが分かるのである。マルクスが実際に部門Ⅰと同様に、部門ⅢにおいてもA群の資本家とB群の資本家を想定するのは、実は、この草稿の一番最後の部分、エンゲルスが「補遺」とした部分においてである。つまりマルクスがそうしたわざとおどけた表現を使ったりして論じてきて、最後に「云々、云々。」という形で途中で敘述を打ち切ってしまった（草稿の61頁、大谷訳下21頁）部分で取り上げた問題を、もう一度取り上げて、今度は同じ問題を結論的に論じている部分、すなわち部門Ⅲにおいて蓄積のための潜勢的貨幣資本の蓄蔵が如何になされるのかを論じているところにおいてである。だから不破氏や大谷氏らのように（そして伊藤武氏も同類であるが）、マルクス自身が部門Ⅲにおいて「蓄積のための貨幣源泉」を捜してアチコチと試行錯誤を繰り返しているなどという捉え方は、全くもって「噴飯もの」なのである。マルクスはすでに「4）」と番号を打ったところで、部門ⅢにおいてB群の資本家の存在を想定して論じている事実こそ、マルクスにとって最初から問題は明瞭であったことをハッキリと示しているからである。つまり部門ⅢにおけるB群の資本家たちというのは、それまで潜勢的貨幣資本を蓄蔵してきて、これからそれを投じて現実の蓄積を開始しようとしている資本家たちである。そうしたB群の資本家を想定するということは、部門Ⅲにおいて蓄積のための貨幣源泉を捜すことなど初めから不要だと

いうことを示している。それは部門ⅠにおいてB群の資本家を想定したときにそうであったのとまったく同じなのである。つまりマルクスは、「4）」と番号を打った部分の考察の時点で、「b）」の項目で論じている「貨幣源泉」の問題の解決を示唆していたのである。だからマルクスは最初から問題をハッキリと見通した上で論じていることはあまりにも明らかであろう。それをあたかもマルクス自身が「試行錯誤」を繰り返しているかに考えておられる大谷氏らは、ただただご自身らの無理解を棚に上げて、こともあろうにマルクスを“愚妹の徒”に貶めていると非難されてもしょうがないであろう。

さて、「4）」と「5）」とでは同じ「困難」でも、これだけの相違があることが分かった。では、マルクスの問題意識は、「4）」と「5）」とではどういう点で異なるのか、それを考えてみよう。「4）」までの一連の「困難」の確認や「不合理」や「矛盾」の確認は、蓄積または拡大再生産は単純再生産とは質的に異なること、だから単純再生産を前提してその一部を拡大させようとしても「困難」や「矛盾」に陥ることを論証して、両者の質的相違、単純再生産から拡大再生産への「移行」には質的飛躍が必要であること、また拡大再生産の場合は、その一部だけの蓄積を想定して考察すると不合理に陥ることを確認して、拡大再生産のためにはⅠ、Ⅱ両部門が同時に蓄積すると想定する必要があることを確認してきたのである。だからこうした一連の考察において、拡大再生産のためには、Ⅰ、Ⅱ両部門において、単純再生産とは最初から異なる機能配置にもとづく表式が必要であることを示すことがマルクスの本来の意図なのである。それに対して「5）」における同じような「困難」の確認は、具体的に以前の単純再生産の表式（エンゲルス版の第20章で取り上げた表式）を想定した上で、では単純再生産のどの部分の機能配置をどのように変える必要があるのかを探ることが今回の課題なのである。だから「4）」と「5）」とでは同じ「困難」の確認といっても、目的はハッキリと異なることが理解されなければならない。

少し「a）」の部分の敘述を追ってみよう。マルクスは部門Ⅰの剰余価値1000mの半分500mが《ふたたびそれ自身不変資本として部類Ⅰに合体される》と想定する。だからこの部分は部門Ⅱの不変資本の現物形態として補填されるわけには行かないのである。だから2000c（Ⅱ）の一部500c（Ⅱ）が現物形態に転換できないことになる。それをマルクスは次のように述べている。

《だから、2000(v + m)(Ⅰ)ではなくてただ1500(v + m)(Ⅰ)だけが、つまり(1000v + 500m)Ⅰだけが、2000(c)Ⅱと転換可能である。すなわち、500c(Ⅱ)は、その商品形態から生産資本（不変資本）Ⅲに再転化できないのである。したがって、Ⅱでは過剰生産が生じることになり、その大きさはちょうどⅠで行なわれた、生産Ⅰの規模の拡大のための過程に対応することになる。》

ここでマルクスは1000v + 500m（Ⅰ）がⅡcと転換されるためには、Ⅱcは2000ではなく、過剰になる500c（Ⅱ）が削減されなければならないこと、つまり1500c（Ⅱ）でなければならないことを示唆しているのである。しかしマルクスは直ちにその考察に移らずに、次のパラグラフからはこうした《cⅢについての第一の困難》を部門Ⅲにおける商品在庫の存在を想定して《回避》する

試みを検討している。そして次のパラグラフでは、こうした試みが、三点にわたって反証され、そうした試みの不可が論証されているのである（こうしたマルクスの特徴的な論じ方にわれわれは注意を促したい。というのは「b）」以降でもまったく同じような論じ方をマルクスはやっているのだからである）。そしてその三つ目の理由として次のように結論している。

《3）いま避けようとしているこの困難が単純再生産の考察では生じなかったという事情は、とりもなおさず、ここでの問題がIの諸要素の再配列、違った配置（再生産にかんしての）だけに起囚する一つの独自の現象にあることを証明している。この別の配置なしには、およそ拡大された規模での再生産は行なわれえないのである。》

これがすなわち困難の考察の帰結なのである。そしてマルクスはその次のパラグラフから《さて、次の表式によって再生産を考察しよう》と、最初からI、II両部門とも拡大再生産の機能配置になっているいわゆる表式「a）」を提示するのである。大谷氏らの解釈だと、この拡大再生産の表式の提示は、あまりにも唐突のように思われるかも知れないが、マルクスにとっては、それ以前のすべての考察は、いわばこの表式を提示するためのものだったといっても過言ではないのであり、実際、その直前の「困難」の考察では部門IIの2000cが1500cにされる必要があることまで明らかにしたのである。そしてその上での表式「a）」の提示なのである。そして「a）」表式では、部門IIのcは1500にされ、それに対応する形で、同じ部門のvとmの数値も設定されていることが分かるのである。

大谷氏の説明では、なぜ、マルクスは「a）」と項目を記している部分で、拡大再生産の表式（a表式）を提示しているのかがまったく説明がつかない。何度も言うが、それはまさにそれまでの一連の「困難」の考察――それは拡大再生産の概念の考察そのものである――の帰結として提示されているのである。そこらあたりの関連が大谷氏にはまったく掴まれていないように思える。マルクスはそれまでの一連の考察で、単純再生産を前提して、その一部の蓄積を仮定するというようなやり方では不合理や困難に陥ることを論証し、だから拡大再生産には単純再生産とは異なる機能配置にもとづくものが必要であることを何度もややしつこいほどに論証してきたのである。その最後のものが、すなわち「a）」と項目が書かれている部分の前半において考察されているものなのである。そこでは具体的に単純再生産の表式のどこをどのように変えるべきかまで考察されているのである。だからそれまで何度も拡大再生産には単純再生産とは異なる機能配置にもとづくものが必要であることを論証した結果として、ではそれでは、それはどういう機能配置にもとづくものなのかを具体的に示したものが、この「a表式」なのである。だからこそa表式は「a）」と項目が書かれた最後の困難の考察の帰結として「a）」の項目のなかで提起されているのである。こうしたa表式の提起の意味も大谷氏には何一つ理解されていないことはすぐに見るであろう（大谷氏は、それを何かマルクス自身が、いまだ模索途中の不十分な認識のもとに提起した「第一回目の試み」であるなどという捉え方をされているのである！）。マルクスの草稿を忠実に辿るなら、いわゆる「a表式」は項目「a）」のなかで提示され、その「a表式」にもとづく考察は「b）」の最後まで（と私が考えている横線で区切られた部分まで――大谷訳で

は下21頁まで――) 続き、そこで終わっているのである(なぜなら、その次からはまた新しい「B式」が提示されているから)。そしてだから何度も言うが、《5) 部門IIでの蓄積》の考察そのものも、すなわち「部門Iでの蓄積」と「部門IIでの蓄積」に分けて考察されてきた「拡大再生産の概念」の解明そのものも、実はこの横線で区切られたところで終わっているのである。

●同じような拡大再生産の表式の提示でも、その目的や役割、位置づけには決定的な相違がある

---

次に大谷氏は「b 表式を利用した蓄積の進行過程の考察」に移る。そして次のように書き出しておられる。

〈続いてマルクスは、両部門で蓄積の準備が行なわれ、両部門で現実の蓄積が進行する過程を、表式を利用しながら考察する。この表式展開の試みは5回繰り返されている。〉（下173頁）

このように大谷氏はマルクスが「a）」と項目を打ったところで提示している表式（いわゆるa表式）と、そのあと《貨幣源泉はIIのどこで湧き出するのか》を論じた一連の考察を途中で打ち切って提示しているB表式（草稿61頁、大谷訳下21頁）以下とを、同じ〈表式展開の試み〉（下173頁）と捉えておられるのである（この点に限れば、大谷氏にはエンゲルスのこの部分の編集を批判する資格はないであろう）。もちろん、大谷氏は続けて〈この5回の展開の試みは、それぞれ異なった仕方で行なわれており、引き出されている結論も異なっており〉（同）とも述べておられるが、しかし、a表式とB表式以降との拡大再生産の表式の提示の目的や意義の決定的な相違というものにまったく気付かれていないのである。それらはa表式も含めて、〈マルクスがここでやろうとしたのは——エンゲルス版がわれわれに与えてきた印象とは違って——何年にもわたって進行する拡大再生産の過程を表式の形態で記述しようとする試みだったのではなくて、表式の助けを借りてそのような過程の進行を分析しようとする試みだった〉（同）といわれるのである。しかしこれまで論じてきたことからすでに明らかなように、こうした捉え方は極めて問題があると言わざるをえない。

なぜなら、マルクスがa表式を提示したのは、それまでの一連の「拡大再生産の概念」の考察において、拡大再生産のためには単純再生産とは異なる機能配置にもとづき表式の提示が必要であることを論証してきた、いわばその帰結として、具体的に拡大再生産の表式を例示したものである。それに対して、B表式は、すでにそれまでの一連の考察で「拡大再生産の概念」が解明されたことを踏まえて、表式を使って拡大再生産にはどのような法則性があるのかを解明することが課題なのである。そしてそのために、マルクスは、拡大再生産の表式の機能配置の数値にさまざまな具体的な数値当てはめながら、年次を重ねて表式を計算して、部門Iと部門IIとの相互的な制約関係等を探っているのである。だからa表式の提示とB表式以降の表式の提示とその計算の試みとでは、その目的や意義付けがまったく異なるのである。何度も言うが、a表式はそれまでの拡大再生産の概念の考察の帰結として、最初から機能配置が単純再生産とは異なる拡大再生産の表式の具体例を提示することが目的である。それに対して、B表式以降は、拡大再生産の表式を使って、拡大再生産の法則性を解明していくことが課題なのである。

ただついでに指摘しておくが、大谷氏が、ここでエンゲルス版が与える印象、つまり〈何年にもわたって進行する拡大再生産の過程を表式の形態で記述しようとする試み〉に対して、対置しているものは〈表式の助けを借りてそのような過程の進行を分析しようとする試みだった〉というものである。しかし、この二つの対立点というものは極めて分かりにくい。エンゲルスの編集

だとただ「記述」するだけで、「分析」がないとどうやら大谷氏は言いたいらしいのだが、そんなことが果たして断定できるのであろうか。エンゲルス版でも、「[第一例](#)」「[第二例](#)」のあと「[蓄積が行なわれる場合のIIcの転換](#)」として、それまでの一連の考察がまとめられているのだから、それまでの考察がただ「記述しようとする試み」だけで、「分析しようとする試み」では無かったなどとは言えないのではないだろうか。要するにエンゲルス版と大谷氏の理解とにはさしたる相違はないと言えるのである。

これもまあ大して重要な問題ではないが、もう一つつけ加えると、こうした大谷氏の説明は、以前の同氏の説明とも若干違っているということである。大谷氏はこの論文の最初のあたりで、次のように述べおられた。

〈マルクスはこの「5」のなかで、エンゲルス版でそう見えるのとは違って、両部門間の過不足のない相互補填のもとで順調に進行する拡大再生産の過程を示すような表式を描こうと苦心惨憺したのではまったくなかった。マルクスは、浮上した困難を打開する道を探るために表式を利用しただけだった。〉（上143頁）

このように大谷氏は最初は〈浮上した困難を打開する道を探るために表式を利用しただけだった〉と説明されていたのである。ところが今回は〈表式の助けを借りてそのような過程の進行を分析しようとする試みだった〉と説明されている。つまり今回は〈浮上した困難〉の〈打開〉についてはまったく問題にされていない。この両者の説明には、かなり違ったものを私は感じるのであるが、どうであろうか。

さて、やや横道にそれだが、だから大谷氏が次のように書かれているのも納得できないのである。

〈そのような観点に立って、この5回の表式展開を見ると、マルクスは1回目の試みを行なうなかで、それまで彼にまだはっきりとは見えていなかった重要な内的関連に気づき、それを生かす仕方で2回目の試みを行なうが、勘違いや計算の誤りから、表式の展開が思いがけない結果をもたらしたために展開を中断したこと、3回目および4回目のスムーズに進められない展開もそれぞれ中断したのち、5回目の表式展開を3年度の期首まで進めたところで、得られた結果を一般化して記述したことが分かる。〉（下173頁）

しかしこうした問題も続く一連の考察のなかで具体的にその誤りについては指摘していく予定なので、ここではこれ以上、この問題について論じることはやめておこう。

●表式 a は何のために提示されているのか、「一つの新しい問題」としてマルクスは何を論じようとしているか（その1）

次は「c 一回目の試み——「一つの新しい問題」と解決の挫折」というものである。これは一般には「a 表式」と言われている表式のことであり、それに関連して、マルクスが「b）」と項目をつけている部分で言及している「一つの新しい問題」を如何に理解するか、という問題である。この a 表式の提示を、「一回目の試み」などと位置づけることそのものが、a 表式の評価として間違っていることは、すでに指摘した。a 表式がそもそもどうしてここで—5の a) と項目が打たれたところで—提示されているのか、という肝心なことが理解されていないために、それ以降のマルクスの説明についても、まったく正しい理解は望めないのである。いずれにせよ、大谷氏の説明を紹介していこう。大谷氏は a 表式を紹介されたあと、次のようにそれを説明されている。

〈草稿の59ページで、マルクスは、「われわれは次の表式によって再生産を考察する」(S. 806.13) と言って、次の「表式 a」を示し、両部門での蓄積についての検討を始める。

$$I) 4000c + 1000v + 1000m = 6000$$

$$a) \qquad \qquad \qquad = 8252$$

$$II) 1500c + 376v + 376m = 2252$$

このすぐあとで、マルクスは拡大再生産の開始について、さきに3および4で明らかにしたことを一般化して、きわめて重要な確認を行なっている。すなわち、拡大再生産の開始は、「与えられた生産物量のさまざまな要素の違った配列あるいは機能規定を前提するだけ」であり、ここで変化するのは再生産の諸要素の「質的規定」であって、この変化がそのあとに続いて行なわれる拡大再生産の「物質的前提」だ、ということである(S. 806.25-34)。そして、単純再生産のための配列をもった表式と拡大再生産の出発のための表式(いわゆる出発表式)とを比べて、「一方のbの場合には、年間生産物の諸要素の機能配置がふたたび同じ規模での再生産が開始されるようになってきているのに、他方のaでは、その機能配置が拡大された規模での再生産の物質的基礎をなしているだけである」(S. 807.5-8)と言ひ、続けて、「このことは、『資本論』第一部で別の諸観点から検討したジェイムズ・ミルとS・ベーリとのあいだの資本の蓄積にかんする争い、すなわち産業資本の大きさが不変な場合のその作用の拡張可能性にかんする争いに、きっぱりと決着をつけるものである」(S. 807.9-12)と書き、この最後の章句の欄外に線を引いている。これによって、さきに1のところ立てられた、現実の蓄積すなわち拡大再生産が開始されるための前提が、どのようにして単純再生産のもとで作りだされることができるのか、という問題に明快な解答が与えられたことになる。〉(下173-4頁)

大谷氏の説明では、なぜ、この時点で、マルクスは a 表式を提示したのかがまったく分からない。とにかくマルクスはここから突然、拡大再生産の表式を使った「分析」を開始するので

あり、その「一回目の試み」が開始されるというわけである。しかしこの表式のすぐあとに続くマルクスの説明は、どうやら大谷氏の理解では、〈3および4で明らかにしたことを一般化〉したり、〈1のところを立てられた……問題に明快な解答〉を与えたりしているというのである。しかしそれは「一回目の試み」としては若干違和感が否めない。というのは大谷氏が「二回目の試み」と考えている、B表式、つまりマルクス自身によって《[拡大された規模での再生産のための出発表式](#)》と名付けられている表式においては、すぐに部門Iからの蓄積の計算に入っているのに、「一回目の試み」ではそうではないからである。こうした表面的な相違だけでも、a表式とB表式とでは提示している目的が異なることが分かりそうなものではないだろうか。

ところで大谷氏によると、このa表式のあとのマルクスの説明は、〈3および4で明らかにしたことを一般化〉して、単純再生産から拡大再生産に如何に「移行」するかという〈問題に明快な解答〉を与えたのだといわれるのである。もちろん、〈3および4で明らかにしたこと〉や〈1のところを立てられた〉問題が〈現実の蓄積すなわち拡大再生産が開始されるための前提が、どのようにして単純再生産のもとで作りだされることができるのか〉というようなものではなかったことはすでに詳しく論証した。そうした理解が間違いであるのと同じように、a表式のあとに展開されているマルクスの一連の説明をそうしたものとして理解することもまたまったく間違っているとしか言いようがない。実際のマルクスの説明にもとづいて、それを検証してみよう。

マルクスは上記のa表式を提示したあと、表式の計算などにとりかかるのではなく、《[まず第1に気がつくのは、年間の社会的再生産の総額が8252で、表式I\)で9000だったのに比べて小さくなっているということである](#)》と全体の「規模」を問題にしている。ここで《[表式I\)](#)》と述べているのは、単純再生産で論じた表式を指しているのである。つまりここでも、すなわち拡大再生産の表式を提示したあとも、マルクスはまず「規模」としては単純再生産より小さいことを指摘し、拡大再生産はだから規模の問題（量の問題）ではなく、質的な問題であることをふたたび確認しようとしていることが分かるのである。実際、マルクスは《[表式Iよりもはるかに大きい額を取ることもできる、とa表式の規模を10倍にした表式を示したあと、次のように述べている。](#)》

《〔[しかしながらa\)で](#)〕[表式Iでの額よりも小さい額を選んだのは、次のことが目につくようにするためにほかならない。すなわち、拡大された規模での再生産（これはここでは、より大きな資本投下で営まれる生産のことである）は生産物の絶対的大きさとは少しも関係がないということ、この再生産は、与えられた商品量について、ただ、与えられた生産物のさまざまな要素の違った配列あるいは違った機能規定を前提するだけであり、《したがって》\[価値の大きさから見れば単純再生産にすぎない\]\(#\)、ということである。単純再生産の与えられた諸要素の量ではなくてそれらの質的規定が変化するのであって、\[この変化が、そのあとに続いて行なわれる拡大された規模での再生産の物質的前提なのである。\]\(#\)》（大谷訳下8頁）](#)

注意が必要なのは、ここでもマルクスは《[価値の大きさから見れば単純再生産にすぎない](#)》と

述べている。これは決して単純再生産そのものを問題にしているのではないのである。これは以前（草稿53頁、大谷訳上57頁）においても《単純再生産—《たんに》価値の大きさ《だけ》から見れば—の内部で、拡大された規模での再生産の、現実の資本蓄積の、物質的土台〔Substrat〕が生産される》と述べていたのと同じである。これは決して〈現実の蓄積すなわち拡大再生産が開始されるための前提が、どのようにして単純再生産のもとでつくりだされることができるのか〉ということと同じではないのである。マルクスが言っているのは、拡大再生産というのは量の問題ではなく、質の問題であるということである。だからそれが分かるように、敢えて価値の大きさから見れば単純再生産と同じ規模にしたり、それよりも小さくとったりしてるのだ、ということである。マルクスはさらにそれが分かるように、a表式と全体の規模が同じで、単純再生産の機能配置になっているb表式まで提示して、次のように念を押している。

《表式a)で現われようとb)で現われようと、どちらの場合にも年間生産物の価値の大きさは同じであって、ただ、一方のb)の場合には年間生産物の諸要素の機能配置がふたたび同じ規模での再生産が開始されるようになっているのに、他方のa)ではその機能配置が拡大された規模での再生産の物質的基礎〔Basis〕をなしているだけである。》（大谷訳10頁）

われわれが気付くのは、マルクス自身はa表式について、すぐにその計算にかかるのではなく、あくまでも拡大再生産の概念をもう一度、今度は表式を使って念を押していることである。こうしたマルクスの説明を見ても、これが決して大谷氏が言われるように〈一回目の試み〉などというものでは決してないこと、それはマルクスがそれ以前の拡大再生産の概念を解明するための一連の考察の一つの帰結として、最初から機能配置が単純再生産とは違って拡大再生産のものになっている表式を、一つの具体例として提示したものであることが分かるのである。

ところで大谷氏は先の説明で、マルクスは〈単純再生産のための配列をもった表式と拡大再生産の出発のための表式（いわゆる出発表式）とを比べて、「一方のbの場合には、年間生産物の諸要素の機能配置がふたたび同じ規模での再生産が開始されるようになっているのに、他方のaでは、その機能配置が拡大された規模での再生産の物質的基礎をなしているだけである」（S. 807.5-8）と言ひ、続けて、「このことは、『資本論』第1部で別の諸観点から検討したジェイムズ・ミルとS・ベーリとのあいだの資本の蓄積にかんする争い、すなわち産業資本の大きさが不変な場合のその作用の拡張可能性にかんする争いに、きっぱりと決着をつけるものである」（S. 807.9-12）と書き、この最後の章句の欄外に線を引いている。これによって、さきに1のところを立てられた、現実の蓄積すなわち拡大再生産が開始されるための前提が、どのようにして単純再生産のもとでつくりだされることができるのか、という問題に明快な解答が与えられたことになる〉と述べておられた。ここで〈『資本論』第1部で別の諸観点から検討したジェイムズ・ミルとS・ベーリとのあいだの資本の蓄積にかんする争い、すなわち産業資本の大きさが不変な場合のその作用の拡張可能性にかんする争い〉なるものが、果たして〈現実の蓄積すなわち拡大再生産が開始されるための前提が、どのようにして単純再生産のもとでつくりだされることができるのか〉というような内容をめぐる争いだったのかどうか、それが問題である。それ

を検討してみよう。実はこれについては、すでに21章該当部分の段落ごとの解読のなかで説明しているの、それをほぼそのままここに転用することにする。それは次のようなものである。

【マルクスはここでは『資本論』第1部のジェイムズ・ミルとサミュエル・ベーリとのあいだの資本蓄積にかんする争い、なるものを取り上げている。つまり上記のマルクスの論述は、この両者の争いに〈きっぱりと決着をつける〉ものだといふのである。この両者の争いとはどういふものであろうか？

この両者の争いについては詳しくは知るよしもないが、マルクスが第1部で論じていることは（これは現行版では22章第5節にある注64、フランス語版では24章第5節の注56に関連しているのだが、この第5節は現行版とフランス語版とでは大きく異なっており、マルクス自身はドルゲに宛てた英語版への指示から見て、第8稿では、恐らくフランス語版を想定して論じていると考えてよいであろう）、経済学者たちは社会資本を固定的なものとして（そこには労働財源も固定的なものとして低賃金を正当化する底意があった）、それをドグマとしていたが、ベーリはそれを批判していたようである。注では次のベーリの一文が引用されている。

「経済学者たちは、一定量の資本および一定数の労働者を、一様な力を持つ生産用具として、またある一様な強度で作用するものとして取りあつかう傾向が強い。……商品が生産の唯一の動因であると主張する人々は、総じて生産というものは拡大されえない、というのは、そのような拡大のためには、生活手段、原料、および道具が前もって増加されていなければならないからである、というように論証するのであるが、これは事実上、いかなる生産の増大も、前もって生産が増大しなければ起こりえない、言いかえれば、いかなる増大も不可能であるということになる」（S・ベイリー『貨幣とその価値の転変』、五八、七〇ページ）

こうした論争に〈きっぱりと決着をつける〉とマルクスはいうのだが、それは要するに問題は蓄積のために必要なのは、〈与えられた生産物のさまざまな要素の違った配列、あるいは違った機能規定を前提する〉だけなのだということなのである。ベイリーが「いかなる生産の増大も、前もって生産が増大しなければ起こりえない、言いかえれば、いかなる増大も不可能であるということになる」というのに対して、マルクスはそうでなく、問題は与えられた生産規模においても、そこにおける生産物のさまざまな要素の配列如何、機能如何によるのだと反論しているわけである。だから「蓄積のためには蓄積が前提される」という主張を、マルクスは一方でその正当性を認め、自らも前提しているのに、他方で、それを否定しているかに見える場合もあるのは、それを否定しているときは、まさにここでベイリーが述べているような意味で、つまり「いかなる生産の増大も、前もって生産が増大しなければ起こりえない」といった主張の批判として（「増大」には「増大」が前提するという同義反復に対して、「同じ規模」でも蓄積は可能だという批判として）述べていると解すべきであろう。蓄積のためには蓄積が前提されるというのは、蓄積に必要な追加的生産手段や追加的生活手段が市場に見出される必要があるということであり、そのためには前年度の剰余生産物がそうしたものとして生産されていなければならないこと、すなわちそれらを生産した前年度の再生産の機能配置がすでにそうしたものになっていな

なければならないこと（これ自体は必ずしも生産の「増大」を前提せずとも、「同じ規模」でも可能である）、すなわちすでに単純再生産ではなかったこと（つまり拡大再生産＝蓄積のための機能配置であったこと）を前提するという意味で言われていると解すべきであろう。】

このようにマルクスが、[《ジェイムズ・ミルとS・ベアリとのあいだの資本の蓄積にかんする争い、すなわち産業資本の大きさが不変な場合のその作用の拡張可能性にかんする争い》](#)と述べている問題は、決して〈現実の蓄積すなわち拡大再生産が開始されるための前提が、どのようにして単純再生産のもとでつくりだされることができなのか〉というような問題ではなく、それに[《きっぱりと決着をつける》](#)というものではないことが分かるであろう。なぜなら、この場合も単純再生産そのものが問題なのではなく、ただ規模の点で単純再生産と同じであっても、すでに機能配置が拡大再生産になっているなら、蓄積は可能だということだからである。例え規模は単純再生産と同じでも機能配置が拡大再生産のそれになっているなら、それは拡大再生産であって、そうした機能配置の商品資本が生産されたということはすでにそれを生産した生産過程が単純再生産ではなかった（剰余生産物が単純再生産とは違ったものとして生産されている）ことを意味するからである。だから大谷氏らが理解されるように、マルクスは決して単純再生産から如何にして拡大再生産に「移行」するかなどということの問題にしているのではないのである。

以下、大谷氏はマルクスが「b）」と項目を書いた部分の説明に移るのであるが、その主張はただ混乱としかいいようがない問題点が含まれているように思える。それをこれから見ていくことにしよう。

マルクスの敘述を辿ると、マルクス自身は、項目「a」において、「困難」の最後の帰結として単純再生産の表式のどの部分の機能配置を変える必要があるかを明らかにしたあと、ではそれがどういうものでなければならないかを、実際に機能配置が拡大再生産になっている表式（a表式）を提示して、さらにもう一度、拡大再生産の本質が単純再生産との量的相違にあるのではなく、質的相違にこそあることを、今度は表式を使って再確認するとともに、今度は拡大再生産では、では以前の単純再生産の表式の考察を前提するなら、何が新しく考察の対象になるのか、何が新たな問題として考察されなければならないのかを、つまり考察の対象を限定し、明確にすることも、この項目「a」での課題の一つとして考えていたことが分かる。そして項目「b」では、拡大再生産の表式を前提して、部門Ⅲにおける蓄積のための貨幣蓄蔵が如何に形成されるのかという「[一つの新しい問題](#)」を、蓄積のための[《貨幣源泉が部門Ⅱのどこで湧き出するのか》](#)という困難として提起して、しかしそれも「[部門Ⅰでの蓄積](#)」と同様に、そうした困難は単なる外観上のものに過ぎないことを明らかにして、部門Ⅱでの蓄積のための貨幣源泉も、結局は、部門Ⅰでのそれと同じように解決されうることを、されなければならないことを確認することが「b」の課題だったと思われるのである。こうしてマルクスは最初に提起した――2と項目を打った最後の部分で提起した――[《外観上の困難》](#)を[《部門Ⅰでの蓄積》](#)と[《部門Ⅱでの蓄積》](#)に分けて[《詳しく解決する》](#)という課題（草稿47頁、大谷訳上40頁）を、最終的に解決し終える予定だったのである（そしてそれは何度もいうように[拡大再生産の概念の解明](#)を終えることでもあった）。し

かし、マルクス自身はこの「b」を最後まで仕上げることなく、途中で《云々、云々。》という形で打ち切ってしまうているのである（草稿61頁、大谷訳下21頁）。だからこの「b」で提起されている問題に対して、さまざまな解釈や憶測を生み出し、混乱をもたらしているともいえるのである（その意味では、その混乱の責任の一端はマルクス自身にもある）。しかし全体の流れを正確に読み取れば、この「b」で提起されている問題が何であるのかは明確であり、間違えることはないのである。

ところで大谷氏はマルクスが項目「b」で提起している問題に移る前に、次のように書かれている。

〈そのうえでマルクスは、両部門とも剰余価値の半分を蓄積するものとし、両部門間の転換のうち、 $I(1000v + 500m)$ と $II1500c$ との転換と、第I部門内部での $I4000c$ の転換とを、研究済みとして度外視し、残る、 $I500m$ と $II(376v + 376m)$ のそれぞれの内部での、また両者の間での、蓄積のために必要な転換を研究する。その結果、彼は、第II部門は第I部門の剰余生産物から、蓄積のための追加不変資本として140の生産手段を買うが、第I部門が、受け取った貨幣を蓄積を準備する可能的貨幣資本として流通から引き上げるので、第II部門はその剰余生産物のうちの140を貨幣化することができない、という事態を見いだす。そこで、彼は言う。〉（下174頁）

これはマルクスが項目bにうつる直前のパラグラフの説明として大谷氏が行なっているつもりなのであろう（というのは、〈そこで彼は言う〉として、それに続いて引用されている一文―それはすぐに紹介する―はbと項目が打たれたパラグラフの冒頭から引用されているからである）。しかしその内容は決してbの直前のパラグラフの内容とは合致していない。そこには大谷氏の勝手な解釈によるものが混入されている。マルクスが実際に書いているパラグラフは次のようなものである（しかしマルクスが計算間違いをしている数値はそのままにしてある）。

《したがって、ここで研究しなければならないものとして残っているのは、 $500m(I)$ と $376v + 376m(II)$ とであって、《それらが》一方では両方のそれぞれの側での内部関係に関わるかぎり、他方では両方の側のあいだでの運動に関わるかぎり、研究する必要があるのである。IIでも同じく剰余価値の半分が蓄積されることが前提されているのだから、ここでは188が資本に転化することになり、そのうちの1/4(1)の47が可変資本で、これを概数計算のために48とすれば、不変資本に転化されるべき $188 - 48 = 140$ が残る。》（大谷訳下12頁）

このようにマルクス自身は、IIでの蓄積額が188であり、そのうち可変資本に48、不変資本に140が転化されると述べているだけである。だから大谷氏が〈その結果、彼は、第II部門は第I部門の剰余生産物から、蓄積のための追加不変資本として140の生産手段を買うが、第I部門が、受け取った貨幣を蓄積を準備する可能的貨幣資本として流通から引き上げるので、第II部門はその剰余生産物のうちの140を貨幣化することができない、という事態を見いだす〉などと述べているのは、

ただ大谷氏が後のマルクスの敘述をもとに勝手に自身の憶測を並べているだけなのなのである。というのは後のマルクスの敘述を見ても、ここで大谷氏が言っているような〈第Ⅰ部門が、受け取った貨幣を蓄積を準備する可能的貨幣資本として流通から引き上げる〉というようなことはマルクス自身は一言も述べていないからである。マルクスが言っているのは、ただ部門Ⅰは500mをすべて蓄積に回すということだけである。その蓄積に回す500mの具体的な内容についてはまったく不問にしているのである。ここにはマルクスの敘述上の工夫があると思われるので、その点は厳密に読む必要があるのである。

さて、大谷氏は上記の一文に続けて、項目bの冒頭の一文を引用している。われわれもそれを重引しておこう。

《われわれはここで一つの新しい問題にぶつかるのであるが、ある種類の諸商品が他の種類の諸商品と交換されるのが常だ、同じように、商品と貨幣とが交換され、その貨幣がまた別の種類の商品と交換されるのが常だ、という日常的な理解(3)にとっては、このような問題があるということだけでも奇妙だと思われるにちがいない》(S. 807.35-38) (下174頁)。

そして大谷氏は、この引用文のなかにある一文に注(3)をつけて、次のようにそれを説明されている。

〈(3) この、「ある種類の諸商品が他の種類の諸商品と交換されるのが常だ、同じように、商品と貨幣とが交換され、その貨幣がまた別の種類の商品と交換されるのが常だ、という日常的な理解」とは、貨幣をもっぱら流通手段とみなす、古典派経済学以来の貨幣ベール観にほかならない。〉(下190頁)

これはこの限りではまったく正しいように思える。しかし大谷氏はなぜマルクスはここでそのことを指摘しているのかについて、その意味を理解されているとは言い難いのである。なぜなら、この引用文に続けて、大谷氏は次のように書かれているからである。

〈この問題は、なぜ、「新しい問題」なのであろうか？ まず、これまですでにマルクスは、単純再生産の分析で、固定資本の償却および更新から必至となる一方的販売および一方的購買を見ただけではなく、直前の拡大再生産の分析の3で、蓄積ファンドの形成および解消から必至となる一方的販売および一方的購買を見ていたのだから、ここでの問題は、単なる、一方的販売による貨幣蓄積と一方的購買による現実的蓄積との量的不一致という問題でないことは明らかである。〉(下174頁)

しかし先のように、マルクスが古典派経済学の貨幣ベール観にたっている限りは、《このような問題があるということだけでも奇妙だと思われるに違いない》とわざわざ書いているとするなら、マルクスがそれによって何を問題にしようとしているかは明瞭ではないだろうか。すなわ

ちそれは資本の流通においては、貨幣は単なる流通手段としての機能だけで捉えるだけでは不十分であること、貨幣は蓄蔵貨幣においても、資本の流通を媒介する上で必然的な契機として入ってきて、それに固有の諸条件をもたらすこと、それがすなわち資本の流通では貨幣は流通手段だけでなく貨幣資本でもあることからくる条件だとマルクスは述べていたのではなかったのか。そのように、貨幣べール観の立場に立てば問題にもならない問題を、これからマルクスは「一つの新しい問題」として提起すると言明しているのだから、その「一つの新しい問題」が何であるか明らかであるように思えるのである。だから、どうして大谷氏のような結論が引き出されるか、まるで理解できないのである。マルクスが以前はどのように述べていたのかをわれわれはもう一度確認しておこう。

《しかし、単に一方的な諸変態、すなわち一方では大量の単なる購買、他方では大量の単なる販売が行なわれるかぎり――そしてすでに見たように資本主義的な基礎の上での年間生産物の正常な転換はこれらの一方的な変態を必然的にする――、均衡はただ、一方的な購買の価値額と一方的な販売の価値額とが一致することが前提されている場合にしか存在しない。商品生産が資本主義的生産の一般的形態だということは、貨幣が流通手段としてだけでなく貨幣資本として資本主義的生産において演じる役割を含んでいるのであり、またそのことは、単純な規模のであれ拡大された規模のであれ再生産の正常な転換の、正常な経過の、この生産様式に特有な一定の諸条件を生み出すのであるが、均衡は――この生産の形成は自然発生的であるので――それ自身一つの偶然だから、それらの条件はそっくりそのまま、不正常的経過の諸条件に、恐慌《の諸可能性》に一転するのである。》（草稿51頁、大谷訳上49頁）

ここでマルクスが《商品生産が資本主義的生産の一般的形態だということは、貨幣が流通手段としてだけでなく貨幣資本として資本主義的生産において演じる役割を含んでいる》と述べているのは、現実の蓄積のために必然的な契機として入ってくる貨幣蓄蔵について述べていること、一方における蓄蔵貨幣の形成のための一方的販売と、他方における蓄蔵貨幣が現実の蓄積のために投下される一方的購買との価値額の一致という条件について述べていることは明らかである（なおついでに指摘しておく、マルクスが《単純な規模のであれ》と述べているのは、いうまでもなく、単純再生産における固定資本の補填においても、同じような問題が均衡の条件として入ってくることを示唆しているのである）。

（この項目も、字数制限の関係で三分割せざるをえず、以下は、「その2」に続きます。）

●表式 a は何のために提示されているのか、「一つの新しい問題」としてマルクスは何を論じようとしているか（その2）

大谷氏は、マルクスが古典派経済学の貨幣ベール観にたっている限りは問題にもならない問題を「一つの新しい問題」として取り上げようとしているのだ、ということを理解されているのであるが、残念ながらその正しい理解から逸れてしまわれているのである。実は、マルクスは以前にも同じような問題を論じていたのである。それは次のような一文である。

《ついでに、ここでふたたび、次のことを述べておこう。以前（単純再生産の考察《のところで》）と同様に、ここでふたたびわれわれは次のことを見いだす。年間生産物のさまざまな構成部分の転換、すなわちそれらの流通 {これは同時に、資本の構成部分の回復—単純な規模でのまたは拡大された規模での、資本の再生産、しかもさまざまな規定性における資本（不変資本、可変資本、固定資本、流動資本、貨幣資本、商品資本）の再生産—でなければならない} は、われわれが1) [単純再生産] のところで、たとえば固定資本の再生産のところで見たのとまったく同様に、けっして、あとから行なわれる販売によって補われる単なる商品購買、またはあとから行なわれる購買によって補われる販売を前提していない。したがって、経済学、ことに重農学派やA. スミス以来の自由貿易学派が前提しているような、実際にはただ商品対商品の転換が行なわれるだけだということを経済学を前提してはいないのである。たとえば、単純再生産のところで見たように、たとえば不変資本IIcの固定成分の《周期的》更新 {—（その総資本《価値》は $(v+m)$  (I) 《の諸要素》に転換される）、それは、固定資本の最初の出現〔と更新〕との中間期間には、つまりその機能期間の全体にわたって、《まだ》更新されないで以前の形態のまま働き続けるが、他方ではその価値がだんだん貨幣として沈澱していく—} は、c IIのうち貨幣形態から現物形態に再転化する《固定》部分の単なる購買を前提するが、この購買にはm(I)の単なる販売が対応する。他方ではそれは、c IIの単なる販売、すなわちc IIのうち貨幣として沈澱する固定価値部分の販売を前提するが、この販売にはm(I)の単なる購買が対応する。この場合に転換が正常に行なわれるためには、単なる購買 (c IIの側からの) が価値の大きさから見て単なる販売 (c IIの側からの) に等しいということ、また同様に、m (I) からc IIのa) への単なる販売がc IIのb) からのm(I)の単なる購買に等しいということが前提される。同様にここでは、m (I) のうちの貨幣蓄蔵部分であるA, A'の単なる購買が、m Iのうちの、蓄蔵貨幣を追加生産資本の諸要素に転化させる部分であるB, B', 等々と均衡を保っている、ということが前提される。》（草稿51頁、大谷訳上46—47頁）

ここでマルクスが《したがって、経済学、ことに重農学派やA. スミス以来の自由貿易学派が前提しているような、実際にはただ商品対商品の転換が行なわれるだけだということを経済学を前提してはいないのである》と述べていることは、先に《われわれはここで一つの新しい問題にぶつかるのであるが、ある種類の諸商品が他の種類の諸商品と交換されるのが常だ、同じように、商品と貨幣とが交換され、その貨幣がまた別の種類の商品と交換されるのが常だ、という日常的な理解にとっては、このような問題があるということだけでも奇妙だと思われるにちがいない》と述べ

ていることとまったく同じことを言っていることはお分かりであろう。すなわち〈貨幣をもっぱら流通手段とみなす、古典派経済学以来の貨幣ベール観〉を批判してマルクスはこのように述べているのである。とするなら、マルクスは何をそれに対置しているのかといえば、まさに《[単なる販売](#)》による貨幣蓄蔵であり、《[単なる購買](#)》による《[蓄蔵貨幣を追加生産資本の諸要素に転化させる](#)》こととの対応関係なのである。

大谷氏は〈これまですでにマルクスは、……直前の拡大再生産の分析の3で、蓄積ファンドの形成および解消から必至となる一方的販売および一方的購買を見ていたのだから、ここでの問題は、単なる、一方的販売による貨幣蓄積と一方的購買による現実的蓄積との量的不一致という問題でないことは明らかである〉（下174頁）と述べておられる。確かに〈量的不一致〉そのものが問題になっているわけではない。しかしやはりここでも蓄積のための貨幣蓄蔵が問題になっているのである（ところで大谷氏は、ここでは「貨幣蓄積」などと述べておられるが、マルクス自身は第8稿では、貨幣が蓄蔵されている段階では、それはまだ「蓄積」ではないという解釈から、だから「貨幣蓄積」という文言は出来るだけ避けているように思える）。確かにその問題は、すでに部門Ⅰのケースとして論じられた。しかし今回は部門Ⅱでのそれが問題になっているのである（だからこそマルクスは《[貨幣源泉が部門Ⅱのどこで湧き出するのか](#)》という《[外観上の困難](#)》を新たに提起し、その解決策をアレコレと探し出して提示しながら、なおかつその不可を論証することによって、最終的にその《[詳しい解決](#)》を示そうとしているのである）。しかも今回の部門Ⅱでの貨幣蓄蔵は、部門Ⅰでのそれがそうであったように、単に資本家同士の直接的な取り引きにおいて如何にそれが形成されるかを考えればよいという問題ではなく、資本家同士の取り引きに労働者がそのあいだに介在してくるのであり、それがすなわち「[一つの新しい問題](#)」でもあるとマルクスは考えているのである。だからマルクスはその解決策の一つとして例えば資本家が労働者に労賃を労働力の価値どおりに支払いながら、あとからその一部を詐取するというような方法などをアレコレ検討したりしているのである（ただ一言つけ加えれば、マルクスがこの部分で試みた、「[一つの新しい問題](#)」を「[外観上の困難](#)」として提起し、その解決策をアレコレ提示して、その不可を論証するというやり方は必ずしもうまく出来ておらず、成功しているとは言い難い点があるということである。あるいはそうした思いが、マルクス自身にもあったが故に、その敘述を最後までやらずに途中で打ち切ってしまった理由の一つなのかも知れない。そしてそれが為に蓄積のための貨幣蓄蔵が部門Ⅱで如何になされるのかという肝心要の問題を論じずに終わってしまい、だからそれをエンゲルスが「[補遺](#)」としている草稿の一番最後で、再び今度はその問題を結論的に論じるという変則的な展開になってしまった理由とも考えることができるのである）。

さらに大谷氏が考えられる問題として提起されているのは、次のような問題である。

〈またこれは、すでに4のなかで論じられた、第Ⅰ部門が一方的販売によって手にした貨幣を流通から引き上げることによって、第Ⅱ部門の商品を売れなくする、という困難でもない。そこでは、第Ⅰ部門はまだ現実的蓄積を行なっておらず、第Ⅱ部門からの貨幣を可能的貨幣資本として貨幣沈澱させる、ということの結果として第Ⅱ部門で起こる「[困難](#)」が問題であった。こうした「

困難」は、再生産過程の進行のなかでなんらかの仕方で解消されていくほかはないし、実際に、第Ⅱ部門の縮小などによって解消されていくのである。〉（下174頁）

これも大谷氏が4のなかでマルクスがどうしてこうした「困難」を指摘しているのかについてまったく理解されていないことを暴露している。大谷氏はくこうした「困難」は、再生産過程の進行のなかでなんらかの仕方で解消されていくほかはないし、実際に、第Ⅱ部門の縮小などによって解消されていくのである〉などと述べておられるが、マルクスが「困難」が如何に「解消」されるかといったことを何一つ問題にもしていないことについて、何の反省もないのである。しかしこの4でマルクスが何を問題にしているのかについては、すでにかなり詳しく検討したので、ここではこれ以上の詮索はやめておくことにする。

さて、このように大谷氏はマルクスが「[一つの新しい問題](#)」として提起している問題を理解される直前まで行きながら、そこから逸れてしまわれ、では、それに代わってどういう解釈を示されているのかというのが、次の課題である。それは前畑憲子氏の問題提起を受け入れたもののようなのであるが、しかしそれもただ混乱としか言いようがないものなのである。今度はそれを検討していくことにしよう。まず大谷氏は次のように説明を始められている。

くじつは、ここでの問題が「新しい問題」であるのは、第Ⅰ部門がすでに現実的蓄積を開始しているなかで生じた問題だからである。すなわち、第Ⅰ部門が、剰余価値**500**を追加資本として現実的蓄積に前貸するという前提のもとで生じている問題なのである。第Ⅰ部門は**500m**のうちの一部（**360m**）を **I mc**すなわち追加不変資本として生産資本に転化している。そして、この追加不変資本と追加労働力とからなる追加生産資本によって、現実的に生産過程を拡大する。マルクスは、そのさいにこの問題が生じることを見いだして、「新しい問題」と呼んだのである。〉（下174-5頁）

実はここでも大谷氏はマルクスの敘述に忠実ではなく、勝手な類推を挿入されているのである。大谷氏は部門Ⅰが剰余価値500を追加資本として蓄積することを前提しているといわれる。それはまあそのとおりである。しかしそれをさらに説明して、〈第Ⅰ部門は**500m**のうちの一部（**360m**）を **I mc**すなわち追加不変資本として生産資本に転化している〉などと説明されている。しかし一体、マルクスはどこでそんなことを述べているのであろうか。マルクス自身は蓄積する500mがどういう割合で蓄積されるかについてはまったく何も論じていないからである。恐らく大谷氏は部門Ⅱが140を追加不変資本として蓄積するとマルクスは想定しているから、それに対応して、部門Ⅰでは追加可変資本として140が蓄積されるのだから、 $500 - 140 = 360$ が追加不変資本として蓄積されるのだらうと計算されたのであろう。しかしマルクス自身はこんな計算はまったくやっていないのである。マルクスはあくまでも部門Ⅰでは500mをすべて追加資本として蓄積に回すと前提しているだけである。なぜ、マルクスは500mの内容を問わないのか、それは次に提起する「[一つの新しい問題](#)」に関連しているからである。だからマルクスは敢えてそれを具体的には何も論じていないのである。しかしそうしたマルクスの意図を、ここで詳論すると余りに

も問題がそれになってしまう。だからその点については、私のこのブログで連載した第8稿の段落ごとの解説を参照して頂きたい（「その33」～「その40」を参照）。

ここから以下の大谷氏の論述はマルクスの草稿から大きく離れて、マルクスが何を論じているのかを草稿そのものにもとづいて、それを忠実に辿る代わりに、まったく勝手な類推をされるだけのものになっている。だからここからは逐条的にマルクスの草稿との異同を指摘するような批判をするわけにはいかない。ここからは大谷氏の主張されていることは、そもそも本当に内容的に検討に値するものであるのかという形で、れわれわれは問題にしていかなければならない。

まず大谷氏はくじつは、この一回目の試みでマルクスは、追加可変資本による追加労働力の購買について、労働者が今年度に支払われる賃金で買うのは第II部門の来年度の商品生産物だ、とする想定を置いていたのである。この想定は、ここで突然に現われたものではなくて、じつは、すでに先行する単純再生産の分析のなかに登場していた想定であって、それがここで追加労働力に適用されたのであった。彼は、単純再生産のところで次のように書いた（下175頁）と述べられ、第8稿の単純再生産の部分から取ってきた、次のような一文を引用されている（この一文は、現行版では第10節のs.443にあるが、草稿ではこの第10節は単純再生産の部分の一番最後に位置しているのを、エンゲルスがここに持ってきて「第10節」にしたのである）。

《年々の再生産のさまざまな要素の転換を研究しなければならないのであれば、過ぎ去った年間労働、終わっているこの年の労働の結果を研究しなければならない。この年間生産物という結果をもたらした生産過程は、われわれの背後にある（過ぎ去っており、その生産物になってしまっている）。だから、この生産過程に先行する、またはそれと並んで進む（並行する）流通過程、潜勢的な可変資本から現実の可変資本への転換、すなわち労働力の売買はなおさらのことである。労働市場は当面の商品市場の一部をなしていない。労働者はここではすでに、自分の労働力を売ってしまっただけでなく、剰余価値などのほかに自分の労働力の価格の等価を商品で供給してしまった。他方、彼は自分の労賃をポケットにもっており、転換が行なわれるあいだは、ただ商品（消費手段）の買い手として現われるだけである。》（S. 787.16-29.下線はマルクスの強調箇所、大谷氏の引用では傍点になっている）（下175頁）

そして大谷氏はこの引用文について次のような解説を行なわれている。

〈すなわち、マルクスは、年間生産物のさまざまな要素の転換のさいには、労働者は、前年の流通過程での労働力の販売によって得た「自分の労賃をポケットにもっており、転換が行なわれるあいだは、ただ商品（消費手段）の買い手として現われるだけ」だ、と言う。ここでは、労働者は前年の労働力の販売によって得た労賃で、今年、労働者の前年の労働によって生産された生産物の一部を買い戻す、と想定されているのである。

単純再生産の場合には、この想定のもとで年々の再生産が繰り返されるとしても、なんの「問題」も「困難」も生じることはない。だからマルクスはそこでは、この想定そのものについて

それ以上立ち入って論じることをしていなかった。

しかし、この想定が、拡大再生産のさいの資本家による追加労働力の購買と追加労働者によるその対価としての賃金による商品（消費手段）の購買とに適用されるならば、独自の「新しい問題」が生じることになる。〉（下175-6頁）

しかしこうした一連の説明を読んだだけでも、大谷氏の混乱は明瞭である。なぜなら、大谷氏は最初の問題の説明のときには〈じつは、この一回目の試みでマルクスは、追加可変資本による追加労働力の購買について、労働者が今年度に支払われる賃金で買うのは第Ⅱ部門の来年度の商品生産物だ、とする想定を置いていた〉とされているが、マルクスの引用文のあとの説明では〈ここでは、労働者は前年の労働力の販売によって得た労賃で、今年、労働者の前年の労働によって生産された生産物の一部を買い戻す、と想定されているのである〉と説明しているからである。つまり最初の説明では労働者が購入するのは〈来年度の商品生産物だ〉といい、あとの方では〈前年の労働によって生産された生産物〉だと述べておられる。これではまったくチグハグではないだろうか（もっとも、この部分については、大谷氏を擁護される方から、最初に大谷氏が〈来年度の商品生産物だ〉と述べているのは、“来年度に生産される商品”ということではなく、“今年度に生産されて来年度に流通に入る商品”という意味で述べているのであり、だから二つの説明には矛盾はないとのことである）。

それに大谷氏は〈じつは、この一回目の試みでマルクスは、追加可変資本による追加労働力の購買について、労働者が今年度に支払われる賃金で買うのは第Ⅱ部門の来年度の商品生産物だ、とする想定を置いていたのである〉などと述べておられるが、一体、それはマルクスのどういう文章にもとづいて、そう主張されているのであろうか。そもそも〈今年度に支払われた賃金で買うのは……来年度の商品生産物だ〉などという想定は可能なのであろうか（例えここでいう〈来年度の商品生産〉が“今年度に生産されて来年度に流通に入る商品”と理解してもである）。とするなら、今年度の労働者はどうして生活するのであろうか。来年度の商品生産物（あるいは来年度に流通に入る商品）は今年はまだ存在しないのだから、今年度の労働者は支払われた賃金で生活することも不可能になってしまう。こんなわけの分からない想定をマルクスがやっていると大谷氏は言われるのである。そうした想定をマルクスは単純再生産でもやっていたとして上げている例（先の引用文）は、果たしてそうしたものなのであろうか。われわれはそれをキッチリ検討しておくことにしよう。

先の引用文でマルクスが述べていることを詳細に検討してみよう。

マルクスが想定しているのは、いうまでもなく、社会的総資本の流通を商品資本の循環として考察する場合である。だから再生産表式に表されているW'から考察が開始されるわけである。そしてW'の生産過程は、表式として提示されている時点（つまり今年度なら今年度の流過程に登場している商品資本）から考えるなら《[過ぎ去った](#)》ものだと述べている。そして《[だから、この生産過程に先行する、またはそれと並んで進む\(並行する\)流過程、潜勢的な可変資本から現実の可変資本への転換、すなわち労働力の売買はなおさらのことである](#)》と書いている。この部分をどう理解するかが極めて重要である。これはどういうことかということ、資本の回転は年一回転

である。だからまず《だから、この生産過程に先行する》と書かれている《流通過程》というのは、前年度の期の初めに行なわれた流通過程を意味し、それは前年度の不変資本の補填を意味している。そして次に続けて書かれているもの、すなわち《またはそれ（生産過程――引用者）と並んで進む(並行する)流通過程、潜勢的な可変資本から現実の可変資本への転換、すなわち労働力の売買はなおさらのことである》というのは、いうまでもなく、前年度一年間のあいだ、継続して行なわれた可変資本の補填を意味するわけである。つまり可変資本の補填（潜勢的可変貨幣資本を現実の労働力に転換する過程）は年間を通じて生産過程と並行して行なわれたとマルクスはここでは考えているわけである。だからこれは引用文を見る限りではハッキリとは書かれてはいないが、労賃も週給なら週単位でその週末に支払われ、労働者はそれで消費手段（前々年度の生産物）を年間を通じて購入したと考えられているわけである。そして彼らはその一年間、《自分の労働力を売ってしまっただけではなく、剰余価値などのほかに自分の労働力の価格の等価を商品で供給してしまっただけ》わけである。その商品を資本家たちは今年度の期の初めの流通過程に商品資本W'として押し出しているわけである。ただ今年度のW'を考察する時点を考えると、それらの生産過程はすべて《過ぎ去った》ものであり、だから労働者は前年末に前年の最後の一週間分の週給を受けて市場に現われている（彼はこの一週間分の給与で、今年度の最初の一週間を働くわけだ）。また当面の流通過程はW' - G'（商品資本の貨幣資本への転化）であるのだから、ここには労働市場はなく、労働者はただ購買者として現われているわけである。マルクスが言っているのは、このことである。

ところが大谷氏は続けて次のように述べている。

〈単純再生産の場合には、この想定のもとで年々の再生産が繰り返されるとしても、なんの「問題」も「困難」も生じることはない。だからマルクスはそこでは、この想定そのものについてそれ以上立ち入って論じることをしていなかった。

しかし、この想定が、拡大再生産のさいの資本家による追加労働力の購買と追加労働者によるその対価としての賃金による商品（消費手段）の購買とに適用されるならば、独自の「新しい問題」が生じることになる。〉（下175-6頁）

つまり〈労働者は前年の労働力の販売によって得た労賃で、今年、労働者の前年の労働によって生産された生産物の一部を買い戻す〉という想定がである。しかしこれは当たり前ではないだろうか。追加労働者は、今年度に始めて雇用されるから「追加」労働者なのである。とするなら、彼らが前年度に何も生産していないことは前提されている。前年度に何も生産していない追加労働者が〈前年の労働によって生産された生産物の一部を買い戻す〉ことが出来ないことはあまりにも当然ではないだろうか。追加労働者は前年度の剰余価値の一部が追加可変資本に転換されることによって追加的に雇用されるから、「追加」労働者なのである。それがそもそも追加可変資本の内実ではないか。蓄積というのは、剰余価値の一部を実現した貨幣を消費にではなく、再び生産資本（追加的生産手段と追加的労働力）に転化するからこそ蓄積なのである。剰余価値の一

部を追加労働力に転化するという事は、追加労働者は前年度に生産された剰余労働の生産物、すなわち追加的生活手段によって雇用される（すなわち彼らの生活がそれによって補填される）ということの意味するのである。だから彼らは、前年度には何も生産していないのは当然ではないか。彼らは前年度に雇用された労働者の剰余労働の生産物を今年度に消費して働くのである。

もちろん、ここにも追加労働者に支払われる貨幣（労賃）は、誰が最初に流通に投じるのかという問題があることは確かである。先の引用文でマルクスが考察しているのは、単純再生産の表式における二つの部門の補填関係のうち、 $1000v(I)$ と $1000c(II)$ との補填関係である。だからそれに引きつけて考察してみるなら、剰余価値の半分が蓄積されるとするなら、蓄積に回される $500m(I)$ のうち追加可変資本として予定されている $100m(I)$ が如何に貨幣化され、それが追加労働者に労賃として支払われるかという問題である。この $100m(I)$ はIIIにおける蓄積のための追加不変資本として販売される（だからこの追加貨幣を最初に流通に投じるのは部門IIの資本家である）。これは期の最初に行なわれたとするなら、部門Iの資本家はその売り上げの一部を、最初の一週間の労働に対して、期の週末に追加労働者に支払うことになるであろう。彼は $100m(I)$ の売り上げ金100を一年間を通じて追加労働者に週末ごとに支払っていくわけである。そして追加労働者に $100m(II)$ の生活手段を販売する資本家IIIは、それによって彼が最初に投じた追加貨幣100を一年間を通じて回収することになる。労賃後払いの場合には、追加労働者は雇用された最初の一週間分の生活費を自分で負担しなければならないことになる。これは追加労働者に限らず、資本家が最初に事業を開始する場合には、もし同じ後払いの条件を前提するなら、同じことが言えるのであり、これは単純再生産の場合でも同じであろう。だから同じようなこの想定が、拡大再生産のさいの資本家による追加労働力の購買と追加労働者によるその対価としての賃金による商品（消費手段）の購買とに適用されるならば、独自の「新しい問題」が生じることになる」というようなことは何もないのである。

そこに大谷氏が〈独自の「新しい問題」が生じる〉かに思われたのは、大谷氏が先に引用された単純再生産の場合にマルクスが想定しているケースというものを正しく読み取られていないからに他ならない。単純再生産の場合の先の引用文（現行版の第10節からとってきたもの）を正しく理解されているなら、拡大再生産の場合と想定において何の問題も齟齬も生じないことがお分かりいただけたであろう。恐らく大谷氏は先の引用文でマルクスが一年間、労賃を週給で生産過程と並行して支払っていくと想定していることを十分読み取られなかったのではないかと思う。だから一年分の労賃をその一年の最後に資本家は労働者に支払うとマルクスは想定していると考えられたのであろう。つまり労賃後払いを一年の労働全体に適用して、労働者は一年間の労働のあとの年末にその一年分の労賃を受け取るとマルクスは想定していると考えられたのではないかと思う。だからそれを拡大再生産に適用すると追加労働者は最初の一年間は労賃を受け取らないので（彼らはその年末に一年分の労賃を受け取ると想定されているから）、資本家IIからはその一年を通じて彼らの剰余生産物（消費手段）を購入しないことになり、資本家IIIは $140m(II)$ を販売できないというマルクスが指摘している「一つの新しい問題」が生じると考えられたのであろう。しかしこれは大谷氏の先の引用文の読み間違いであるとしか言いようがない。

そもそも、拡大再生産では単純再生産とは想定は違っているのかということそうではないので

ある。大谷氏らはそのように主張されるのではあるが。なぜなら、追加労働者は単純再生産で想定されているように自分自身の前年度の生産物を今年度に支払われた賃金で買い戻すということはないが（もっとも単純再生産でもこうしたことが直接言えるのは部門Ⅱのほんの一部の労働者に対してだけであって、部門Ⅰの労働者はもちろん、部門Ⅱの労働者についても直接的にはそうしたことは言えないのであるが）、しかし彼らが今年度に支払われた賃金で前年度の生産物を購入するという想定は同じだからである。ただ拡大再生産の場合は、追加労働者が購入する前年度の生産物は、前年度に雇用された労働者の剰余労働の産物だという点が違うだけである（単純再生産の場合は、今年度の労働者が消費するのは、前年度の生産物のうちの可変資本部分か、可変資本を補填する生産物である）。今年度に消費する生産物が前年度の生産物であるという点では、単純再生産でも拡大再生産でもまったく同じ想定に立っているのである。

（以下は「その3」に続きます。）

●表式 aは何のために提示されているのか、「一つの新しい問題」としてマルクスは何を論じようとしているか（その3）

---

ところが大谷氏はさらに次のように述べておられる。

〈この想定のもとでは、追加労働者は、今年に資本家が追加労働者に支払った賃金で、翌年、今年の労働の結果である商品生産物の一部を買い戻す。だから、第Ⅰ部門が追加生産手段と追加労働力とによって、今年、現実の蓄積を開始したにもかかわらず、追加労働者は、賃金の支払いが行なわれた今年、その賃金で、前年度の労働によって生産された第Ⅱ部門の商品生産物は買わないのである。だからこそ、第Ⅱ部門から第Ⅰ部門に、追加生産手段の購買で支払われた**140**の貨幣は、第Ⅰ部門で追加労働力の購買で追加労働者に賃金として支払われたとしても、今年度中は、追加労働者はこの貨幣で第Ⅱ部門から消費手段を買わないのであり、したがってこの貨幣が第Ⅱ部門に還流してくることはないのである。他方で、その結果、前年度の労働によって生産された第Ⅱ部門の商品生産物のうち、剰余価値を表わす一部分が実現できないまま、第Ⅱ部門の手に残らざるをえない。〉（下176頁）

つまりこういうことでマルクスが「[一つの新しい問題](#)」として論じている事態が説明できると大谷氏は言われたいのであろうが、しかし、何ともおかしな話ではないか。大谷氏はマルクスが実際に論じているものを正確に読んでおられない。大谷氏は〈だからこそ、第Ⅱ部門から第Ⅰ部門に、追加生産手段の購買で支払われた**140**の貨幣は、第Ⅰ部門で追加労働力の購買で追加労働者に賃金として支払われたとしても〉などと述べておられるが、マルクス自身は何度もいうが、部門Ⅰで蓄積にまわされる500mについて、その一部140mが追加可変資本として追加労働者に支払われるなどということは何も述べていないのである（それは暗に前提されているというなら、そうかもしれないが）。マルクスが実際にやっていることは、ただ140m（Ⅰ）をⅡの追加不変資本として販売すると述べているだけである。だからⅡはその140m（Ⅰ）を購入するために貨幣を支出しなければならないと想定しているだけなのである。

確かに大谷氏の言われるような想定ならば、〈追加労働者はこの貨幣で第Ⅱ部門から消費手段を買わないのであり、したがってこの貨幣が第Ⅱ部門に還流してくることはない〉と言える。しかしそれではお聞きするが、それではⅠの追加労働者は一体、今年の間は何を食べて働くのであろうか。Ⅰの追加労働者は生活手段を手に入れるのは来年と想定されているのだから、今年は何も生活手段を入手できないことになる。彼らは今年のカスミでも食べて一年間を働くともいうのであろうか。こんなおかしな想定をして何の矛盾も不合理も感じないというのが何とも不可思議である。ましてや、そうした想定をマルクス自身がやっているというに至っては何をかいわんやである。大谷氏が先に引用された単純再生産の場合のマルクスの想定でも（先に紹介した現行版の第10節からの引用文を参照）、その内容を詳しく検討したように、大谷氏の主張されるような奇妙な想定をマルクスがやっているわけでは決していない。やはり大谷氏は先の引用文を正しく理解されていないのであり、それが躓きの元である。

さらに大谷氏が次のように述べておられるのは、以前にも指摘したが、マルクスの敘述上の工夫を読み取ることができずに、真に受けて、混乱されたものである。

〈マルクスはこの問題に答えようとして、第II部門のなかのどこかになにか貨幣源泉がないか、あちこち探し回ったのち、この一回目の試みを中断した。〉（下176頁）

これではマルクス自身が、まるで〈第II部門のなかのどこかになにか貨幣源泉がないか、あちこち探し回った〉かに大谷氏は解釈されているのであるが、これではあまりにも無理解に過ぎないではないだろうか。こうしたアチコチを探し回る一連の敘述はマルクスが意図的に行なっているものであることは、誰が読んでも分かりそうなものである。《だが、待て！ ここには何か儲け口はないものか？》（草稿60頁、大谷訳下15頁）といったわざとおどけた言い方をマルクスがわざわざやっているのも、それを知らしめるためである。こうした敘述上の工夫は、『資本論』のアチコチで見られるものである。われわれはその少し前に5のa)の冒頭部分で論じている《cIIについての第一の困難》についても、マルクスは《困難を回避する》方策として商品在庫を想定して、しかしそうした方策は不可であることを論証するという回りくどい敘述をしているのを見た。あるいはまた現行版の「第17章 剰余価値の流通」でも《剰余価値を貨幣化する貨幣はどこからくるのか？》（現行版403頁）という問題を提起し、《もっともらしい逃げ口上》（同405頁）をあれこれと上げて、その不可を論証しているが、こうした敘述と、今回問題になっているb)と項目が打たれた部分におけるマルクスの敘述は極めて類似しているのである。だからこうしたマルクスの一連の敘述は、部門IIで貨幣源泉として考えられうるものをすべて考え出して、しかしそれらはすべて不可であることを論証することによって、そうした貨幣源泉を見出すことの困難といったものが単に外観上のものにすぎないことを明らかにし、そしてその上で、ではどのようにして部門IIIにおいて蓄積のための貨幣蓄蔵がなされるのかを明らかにするための、いわばその導入部分であり、そのための敘述上の工夫なのである。しかし残念ながら、その結論を、実はマルクスは書かずにその導入部分の敘述の途中で打ち切ってしまうために、多くの人たちを惑わす結果になっているのである。しかしマルクスは、ちゃんとその結論を、草稿の一番最後で――エンゲルスが「補遺」としたところで――補足的に論じているのではあるが。

さらに大谷氏が次のように述べておられることは、何度も言うが、まったく“噴飯もの”である。

〈念のために言えば、表式aを利用して分析するとき、マルクスは、これ以後の展開とは違う、もう一つの独自の想定をしていた。それは、両部門の蓄積率をそれぞれ独立に50%として表式を展開しようとしたことである。こののちの考察のなかでマルクスがはっきりと確認するように、両部門のあいだでの転換が過不足なく進行するという想定、すなわち正常な経過の想定のもとで、与えられた前年度の商品生産物の諸要素の配置にもとづいて、再生産過程を表式として展開するためには、第I部門の蓄積率を先行的に決定し、それによる諸要素の配置の変更に合致するように第II部門の蓄積率を決定するほかはない。さきに見た、第I部門が蓄積を行なうために可能的貨幣資本を形成することによる第II部門での過剰生産というのも、単純再生産の状態から第I

部門がプラスの蓄積率を取るときには、両部門のあいだでの転換が過不足なく進行するためには、第Ⅱ部門ではマイナスの蓄積率、つまり生産規模の縮小が必至となるということだったのである。この最初の表式展開のさいには、マルクスはこの事実はまだ気づいていなかったのだから、両部門の蓄積率を任意に50%としたのであった。〉（31頁下段～32頁上段）

大谷氏は表式 a でマルクスが両部門の蓄積率を50%にしたのは、〈マルクスはこの事実はまだ気づいていなかった〉から、すなわちマルクスの認識が不十分であったからだといわれる。何と“傲慢な”言い方であろうか。大谷氏にもう少し謙虚な気持ちがあれば、マルクスがそんな簡単なことが分からないということはありませんか、自身のような軽はずみな判断をまず疑ったことであろう。こうした捉え方はあまりにもマルクスを軽んじるものではないだろうか。それはただ大谷氏がマルクスの草稿を正確に読み、忠実に辿っていないから、そうした誤った結論になっただけなのだからである。

大谷氏は〈こののちの考察のなかでマルクスがはっきりと確認するように〉などと述べておられるが、すでに何度も述べているが、表式 a が何のために提示されているのか皆目分かっておられないからこうしたことを言われることになっているのである。表式 a が〈このちの考察〉とは、つまり B 表式以降のものとは違って、拡大再生産の概念を明らかにする一環として提示されていること、だからマルクスの課題はさらにこの a 表式を使って、拡大再生産の概念を展開し尽くすことなのである。マルクスが蓄積率を50%にしたのは、決して何か認識不足とかにもとづくものではない。大谷氏は〈両部門のあいだでの転換が過不足なく進行するという想定、すなわち正常な経過の想定のもとで、与えられた前年度の商品生産物の諸要素の配置にもとづいて、再生産過程を表式として展開するためには、第Ⅰ部門の蓄積率を先行的に決定し、それによる諸要素の配置の変更に合致するように第Ⅱ部門の蓄積率を決定するほかはない〉などと主張されているが、そんなことを簡単に主張されてよいのだろうか。そうした大谷氏の主張が何の根拠もないことをわれわれはすぐに見るであろう。

さて、このようにマルクスを軽んずるという点では、不破哲三氏の方が大谷氏より上を行くのである。不破氏もこの同じ問題に、大谷氏とまったく同じように、マルクスをまるで何も分かっていない“愚者”でもあるかのように取り扱っている。それも紹介して、ついでに批判しておこう。

〈拡大再生産をめざして第一年度目から第二年度目に進むためには、mの一部を蓄積しなければなりません。どれだけの蓄積をするか、マルクスは何気なく次の想定をしてしまいました。

「さて、表式 a) を立ち入って分析してみよう。ⅠでもⅡでも剰余価値の半分は、収入として支出されないで蓄積される、すなわち追加資本の要素に転化されると想定しよう」

これが、新たな災いのもとでした。第二年度目についての計算をいくら進めても、部門Ⅰと部門Ⅱの関係をなりたせる合理的な数字がでてこないのです。マルクスは、ああでもない、こうでもないと考えをめぐらせ、「しかし、待て！ ここにはなにかちょっとした儲け口はないか？」とか、「突然、仮定をすり替えてはならない」とかの言葉をあちこちに書きつけますが、この行き詰まりからの出口はどうしても見つかりません。せつかく正常な軌道を見つけてそこへ乗り出

したはずなのに、なぜ数式的にうまくゆかないのか、あれこれと袋小路からの出口を探す模索には、あせりの調子さえ感じるものがあります。〉（『再生産論と恐慌』下196-198頁）

つまり不破氏もマルクスが両部門を「何気なく」50%にしたのが「新たな災いもと」だとし、〈第二年目についての計算をいくら進めても、部門Ⅰと部門Ⅱの関係をなりたさせる合理的な数字がでてこないのです。マルクスは、ああでもない、こうでもないと考えをめぐらせ、「しかし、待て！ ここにはなにかちょっとした儲け口はないか？」とか、「突然、仮定をすり替えてはならない」とかの言葉をあちこちに書きつけますが、この行き詰まりからの出口はどうしても見つかりません。せっかく正常な軌道を見つけてそこへ乗り出したはずなのに、なぜ数式的にうまくゆかないのか、あれこれと袋小路からの出口を探す模索には、あせりの調子さえ感じるものがあります〉などと述べておられるのである。

しかしこれほどマルクスを愚弄するものはないであろう。マルクスが恰も表式 a でこうした計算をやって何も分からずにウロウロするばかりであったかに不破氏は言われるのであるが（そして大谷氏もそういう前提のもとに論じておられるのだが）、しかしマルクス自身は表式 a についてそんな計算は一つもやっていないのである。そもそも表式 a はそうした目的のために提示されているわけではないからである。

そればかりか、不破氏や大谷氏もマルクスが想定しているとおりに計算をやることさえせずに、こうしたことを主張されているのである。特に大谷氏は部門Ⅰの追加可変資本は140であるという計算までやっておられるのにである。もし、大谷氏がマルクスが暗に示唆しているように、部門Ⅰの追加可変資本を140、追加不変資本を360として計算したなら、表式 a が決して年次を重ねても〈部門Ⅰと部門Ⅱの関係がなりたさせる合理的な数字がでてこない〉などということはありえないことがお分かりになったであろう。

マルクスが表式 a で想定しているのは、次のようなことである。

- (1) 両部門とも蓄積率は50%である。
- (2) 部門Ⅱの蓄積はその既存の有機的構成比（4：1）にもとづいて蓄積を行なう。
- (3) それによって部門Ⅰの蓄積の有機的構成比は規定される。

というものである。

この(3)の条件はもちろん、マルクス自身が明示的に論じているわけではない（これは当然である。なぜなら、マルクスにとっては、表式 a は、そもそもそうした計算をするために提示したわけではないからである）。しかし、部門Ⅲはその追加不変資本140m（Ⅰ）を貨幣を投じて購入するとマルクスは想定しているが、それはマルクス自身は明示的には述べていないが、大谷氏も計算しているように、部門Ⅰの追加可変資本は140であることを暗示しているのである。つまりこの場合、Ⅰの蓄積の有機的構成比はⅡの蓄積によって規定されているとマルクスは暗に想定していることになるのである。そしてもしこうした条件（(1)～(3)）のもとに表式 a を計算して行けば、年次を重ねても十分それは計算可能であり、だから表式 a は拡大再生産の表式の条件を“立派に”満たしていることを知るであろう。その計算の試みを私は先に連載した第8稿の段落ごとの解読で

行なったので、それをそのままここに紹介しておこう。

【さて、以下はまったくついでに論じるのだが、こうしてマルクスが本来問題にしているものを忠実に辿れば、いわゆる表式 a が多くの論者（例えば不破哲三氏）が考えるようなものでは決してないことがわかるのである。それを少し論証してみよう。

もう一度表式 a を概数を避けるために次のように書いて考えてみよう（もちろん言うまでもないが、概数でもよいならマルクスの数式のままでよいのである）。

$$I) 4000c + 1000v + 1000m = 6000$$

a)

合計=8250

$$II) 1500c + 375v + 375m = 2250$$

ここでマルクスは I、II 両部門ともその剰余価値の半分を蓄積すると仮定している。多くの論者はこうしたマルクスの仮定が間違っているのだというのである。しかし果たしてそうか。

マルクスは両部門の蓄積率を 50% とはしたが、それがどのような配分で、すなわちどのような有機的構成にもとづいて行われるかについては、第 II 部門についてだけ、旧来の有機的構成、すなわち 4 : 1 でなされると仮定しているだけで、第 I 部門については、まったくその蓄積分の構成については論じていない。ただ第 II 部門はその追加不変資本 150m (II) を第 I 部門から現金で購入すると仮定しているだけである。これは何を意味するかは明らかである。これは部門 I の蓄積は 500m (I) のうち、150m は追加可変資本に投下するということの意味するのである。とするなら、残りの 350m が追加不変資本に投下されるということではしかない。つまり部門 I の蓄積の有機的構成は、マルクスは直接には何も論じていないが、しかし、第 II 部門に生産手段をどれだけ販売するかという形で、その追加可変資本の蓄積量を明らかにしており、その結果、部門 I の蓄積の追加不変資本と追加可変資本の割合は 7 : 3 で行われるとマルクス自身は想定していることがわかるのである（ところが不破氏も含めて多くの論者は、マルクスが一つもそのように想定もしていないのに、第 I 部門も既存の有機的構成比 4 : 1 で蓄積するのだと暗黙のうちに前提して、マルクスが一つもやってもいない計算をして、だから表式 a でマルクスが両部門の蓄積率を「何気なく」50% にしたのが「新たな災いのもと」であり、「つまずき」だというのである。だからそれはマルクスがまだこの時点では、いまだ認識不足の状態であり、拡大再生産の正しい表式に到達していなかったことを示しており、マルクスが依然として「試行錯誤」の中にあることを示しているのだ、などと中傷して恥じないのである！）。

そうすると第 1 年度の蓄積のために配置転換された表式は次のようになる（但し、あらかじめもう一度断っておくが、マルクス自身は表式 a で拡大再生産の表式の年次展開の計算をやるつもりなどはなく、それがこの表式を提示した目的では無かったこと、課題は別にあったことはすでに何度も指摘してきたのであって、だから以後の計算はあくまでも、マルクスが表式 a では依然として試行錯誤の中にあり、混乱しているかに主張する馬鹿げた論者たち——不破氏はその典型だが——に対する反論のためにだけに論じるのだ、ということを確認しておいて欲しい）。

$$I) (4000c + 350c) + (1000v + 150v) + 500m = 6000$$

$$II) (1500c + 150c) + (375v + 37.5v) + 187.5m = 2250$$

だから第1年度の生産の開始は次式で行うことになる。

$$I) 4350c + 1150v$$

$$II) 1650c + 412.5v$$

今、剰余価値率を100%とすると、第1年度の末には次のようになっている。

$$I) 4350c + 1150v + 1150m = 6650$$

合計=9125

$$II) 1650c + 412.5v + 412.5m = 2475$$

ここでもやはり両部門とも蓄積率を50%とする。ただし第II部門だけ旧来の有機的構成（4 : 1）で蓄積を行うが、第I部門については、第II部門の蓄積に合う形で蓄積するという仮定しか存在しない。すると第2年度の蓄積のための配置転換は次のようになる。

$$I) (4350c + 410c) + (1150v + 165v) + 575m = 6650$$

$$II) (1650c + 165c) + (412.5v + 41.25v) + 206.25m = 2475$$

そして第2年度の末には次のようになる。

$$I) 4761c + 1315v + 1315m = 7390$$

合計

=10112.5

$$II) 1815c + 453.75v + 453.75m = 2722.5$$

以下、計算は不要であろう。つまりマルクスの仮定――(1)蓄積率は両部門50%、(2)第II部門の蓄積は旧来の有機的構成（4 : 1）で行う、(3)それにもとづいて第I部門の蓄積の構成比が決まってくるという仮定――にもとづけば、決して表式aが不破哲三氏などが言うような未完成なものではないことがわかるであろう。不破氏はこうしたマルクス自身が仮定していることさえも正確に読み取る努力を怠り、表式aでもマルクスは第I部門の蓄積を既存の有機的構成比の4 : 1で行うと仮定していると勝手に独断して、しかもマルクス自身は何一つやってもいない計算をやっ

ているかに論じ立て、「第二年目についての計算をいくら進めても、部門Ⅰと部門Ⅱとの関係をなりたせる合理的な数字が出てこないのです。マルクスはああでもない、こうでもないと考えをめぐらせ、……なぜ数式的にうまくゆかないのか、あれこれと袋小路からの出口を探すマルクスの模索には、あせりの調子さえ感じさせるものがあります」（前掲書198頁）など見てきたようなウソを並べているのである。しかし、上記の計算結果を見ても、マルクス自身が想定している条件をもとに計算しさえすれば、表式 a が決して、「数式的にうまくゆかない」といったものではないことが分かるであろう。これを見れば、不破氏もそうだが、大谷氏も、如何に自分自身のマルクスを理解する努力の無さを棚に上げて、マルクスを貶めているかが分かるであろう。】

だから大谷氏も不破氏も、マルクス自身が想定しているものを正確に読み取ることもせず、だからマルクスがやってもしないことをやったかに主張されて、だからマルクスの認識は不十分だったなどといわれるのである。これがマルクスに対する冒涇でなくて何であろうか！

この表式 a でマルクスが暗に前提している上記の(1)~(3)の想定について、もう少し考えてみよう。これは後に問題になる（大谷訳下21頁以下で取り上げられている）、《B 拡大された規模での再生産のための出発表式》でマルクスが行なっている想定と比較して検討してみよう。B表式—大谷氏が〈二回目の試み〉としている表式—における想定を同じように書き出してみると、次のようになる。

(1)部門Ⅰでの蓄積率は50%と仮定。

(2)1/2mを部門Ⅰでは既存の有機的構成（4：1）にもとづいて追加不変資本と追加可変資本に分割して蓄積する。

(3)部門Ⅱでも既存の有機的構成（2：1）にもとづいて蓄積を行なう。

(4)その結果、部門Ⅱでの蓄積率は部門Ⅰでの蓄積に規定される。

というものである。

これを先の表式 a の想定と比べてみよう。まず気付くのは、二つの表式の想定はまったく異なることである。しかし二つの表式はそれぞれの想定にもとづくなら拡大再生産の表式として十分条件を満たしていることである。そしてわれわれが先に大谷氏が〈両部門のあいだでの転換が過不足なく進行するという想定、すなわち正常な経過の想定のもとで、与えられた前年度の商品生産物の諸要素の配置にもとづいて、再生産過程を表式として展開するためには、第Ⅰ部門の蓄積率を先行的に決定し、それによる諸要素の配置の変更に合致するように第Ⅱ部門の蓄積率を決定するほかはない〉などと主張されているのに対して、「そんなことを簡単に主張されてよいのだろうか」と指摘したが、そうした大谷氏の断定が何の根拠もないことがこの二つの表式の比較検討によっても容易に知ることが出来たのである。そしてさらに重要なのは、だからこそマルクスが a 表式と B 表式とでは考察している対象が異なることを、この二つの表式における想定の違いは示しているということである。

マルクスが a 表式で部門Ⅱでの蓄積が既存のⅡの有機的構成にもとづいて行なわれると想定した

のに、部門Ⅰでの蓄積がどのような割合で行なわれるかは、部門Ⅱでの蓄積如何によって規定されると想定したのはどうしてであろうか。これは明らかに、このa表式が大谷訳下1頁から始まっている《5) 部門Ⅱでの蓄積》と題された枠内の考察だからに他ならない。つまりここで問題になっているのは、あくまでも《部門Ⅱでの蓄積》だからである。だからマルクスの想定は、両部門とも蓄積率を50%にしながら、部門Ⅱでの蓄積を優先して、部門Ⅰでの蓄積の有機的構成比はそれに従属して決まるとしているのである（もっともマルクス自身は部門Ⅰでの蓄積はただその剰余価値の半分を蓄積するという想定をしているだけで、その蓄積の具体的な割合そのものは一切問題にしていない。これはすぐあとに論じる《一つの新しい問題》の提起と関連しているためであるが、同時にここで問題になるのはあくまでも部門Ⅱでの蓄積だとマルクスが考えていたからでもあるだろう）。つまりa表式の想定は、あくまでもそれが「5)」と番号が書かれている範囲内の考察であることを示しているのである。

そしてそうであるなら、より重要なことにわれわれは気付かねばならない。つまりこのa表式とまったく異なる想定のもとに計算が行なわれているB表式というのは、すでに「5)」と番号が書かれている枠内（つまり「部門Ⅱでの蓄積」）の考察ではないということでもある。なぜなら、ここではすでに部門Ⅰでの蓄積が優先するように想定が変わっているからである。だからB表式が「5)」の枠内の考察の延長であるかに主張する、大谷氏（そして伊藤武氏）らの主張が正しくないことを、むしろこれらは示しているのではないだろうか。

そしてそうであれば、a表式とB表式とではまったく異なる問題意識にもとづいて、マルクス自身は提起していることが理解できるのである。マルクスがa表式で拡大再生産の表式として十分その条件を満たすものを提起しながら、その表式の計算そのものはほとんどしていないのは、すでに何度も強調してきたが、それは一つはあくまでも拡大再生産の概念を展開する一環であったからである。そして特にこの「5)」でマルクスが問題にしているのは、部門Ⅲにおいて蓄積に先行する貨幣蓄蔵が如何になされるのかを明らかにすることであり、それによって拡大再生産の概念の展開を締めくくる予定だったからにほかならない。

それに対して、B表式はまったく異なる目的にもとづいて提示されていることが分かる。つまりB表式では、すでに「部門Ⅱでの蓄積」だけが問題になっていないことは誰が見ても分かるであろうが、ここではすでに蓄積の概念を展開することではなく、拡大再生産すなわち蓄積には如何なる法則性が内在しているのかを実際の表式を使って解明していくことが課題だからである。だからここでは部門Ⅰでの蓄積が優先される形で計算が行なわれて、しかも年次を重ねてそれが展開されたり、また拡大再生産の表式の条件（機能配置）を変化させて、それによって蓄積の条件がどのように変化するかを考察したりしているのである。このように、両者の想定の違いを考えただけでも、これら大谷氏のように、〈第一回目の試み〉とか〈第二回目の試み〉等々として同じ表式展開（計算）の〈試み〉として捉えることは正しくないことが分かる。そして、やはり大谷訳下21頁にある区切りの横線が重要な意味を持っていることをわれわれは知ることができる。それは、われわれが考えているように、それまでの「拡大再生産の概念」の考察をひとまず終えて、今度からは「拡大再生産の諸法則」を展開するのだ、というマルクスの意志を示すものであり、そのための区切りを示す横線なのである。

そしてこれも重要なことであるが、B表式における上記の(1)~(4)の想定は、B表式以降の異な

るさまざまな機能配置にもとづく表式（大谷氏によればそれはB表式も含めて4例あることになる）においても基本的には変わらないということである（その意味では、それらは大谷氏がやっているように、同じような〈試み〉として捉えること自体は間違っていない）。そればかりが一連の表式の展開にもとづいて全体の総括を行なっているところでも、マルクスはやはり基本的には(1)～(4)の想定にもとづいて論じているのである。つまりわれわれが「拡大再生産の諸法則」としたところと、さらに「全体のまとめと残された課題」とした部分も、マルクスはこの想定のもとに論じていることが分かるのである。これが何を意味するかは自ずから明らかであろう。つまりこの(1)～(4)の想定にもとづいている部分は、全体としては同じ課題――拡大再生産の諸法則を解明しその総括的なまとめをするという課題――を対象にしているということなのである。

● [d 二回目の試み——追加労働者の賃金支出についての新たな想定。「資本主義的生産の進行とは矛盾している」→中断] の検討

さて、次は大谷氏の言われる〈二回目の試み〉なるものである。これは草稿の61頁、大谷訳では下21頁に掲げられている表式のことである。マルクスは単純再生産の考察のときに提示した表式を《A 単純再生産の表式》としてまず掲げ、それに並べる形で《B 拡大された規模での再生産のための出発表式》と題して新たな拡大再生産の表式を提示している。すでに何度も紹介してきたが、私の解読によれば、ここからマルクスはそれまでの【拡大再生産の概念】の考察をひとまず終えて（単純再生産のA表式の上に横線が引かれているのがその区切りを示している）、次に【拡大再生産の諸法則】の考察を始めている部分なのである。しかし大谷氏によれば、それもやはりマルクスの“試行錯誤”の一環でしかなく、〈二回目の試み〉ということになるのだそうである。

大谷氏は〈今回の試みで決定的に重要な〉こととして、次のように述べておられる。

〈マルクスが、追加労働者による消費手段の購買について、追加労働者は労働力の対価として今年受け取った賃金で、今年のうち、前年の労働によって生産された商品生産物の一部を買い戻す、という、前回の試みで取った想定とは異なる想定を取ったことである。この想定も、じつは、かつて第2稿における再生産の分析でマルクスがすでに取っていた想定であった。これは、マルクスが第2稿第3章の「b 媒介する貨幣流通の叙述」のなかで、消費手段生産部門（第2稿ではまだこれが第1部門であった）の内部での資本家と労働者とのあいだでの転換について、次のように書いたところから、誤解の余地なく読み取ることができる。〉（下177頁）

大谷氏は〈今回の試みで決定的に重要なのは、……追加労働者は労働力の対価として今年受け取った賃金で、今年のうち、前年の労働によって生産された商品生産物の一部を買い戻す〉などと述べておられるが、追加労働者が購入するのは、単に〈前年の労働によって生産された商品生産物〉ではなく、〈前年の剰余労働によって生産された商品生産物〉（下線は引用者）でなければならないこと、また追加労働者の場合は〈買い戻す〉というようなことは決してありえないこと（なぜなら彼らは前年には生産物を生産していないから）を忘れておられる。つまり大谷氏の述べておられる内容はこのようなあいまいさを含んでいるのである。

また〈マルクスが第2稿第3章の「b 媒介する貨幣流通の叙述」のなかで〉と述べておられるが、これは正しくは《第2稿第3章「b 貨幣流通による媒介を考慮した叙述」》ではないのだろうか（というのは以前紹介した水谷・名和前掲論文ではそうなっているし、八柳良次郎氏の翻訳でも《b 媒介する貨幣流通のある説明》となっている）。この両者ではやや意味が違ってくるのではないかと思うのである。大谷氏の訳では叙述の対象は貨幣流通になるが、水谷・名和両氏の訳では（八柳氏の訳も）、叙述の対象は単純再生産であり、それを貨幣流通による媒介を考慮して叙述する（説明する）ことになる。一体、マルクスの意図としてはどっちであろうかと考えるなら、やはり、後者ではないかと考えるのである。

さらに大谷氏は〈前回の試みで取った想定とは異なる想定を取った〉などと言われるが、しかし何度も言うが、前回（すなわち表式 a）では、マルクスは部門 I の追加可変資本については何も論じていないのである。大谷氏らが勝手にマルクスがそうしていると憶測しているだけなのである。

実際、大谷氏が主張されるように〈今回の試みでは〉、〈前回の試みで取った想定と異なる想定を取った〉と言えるのかどうかを検証してみよう。わわれわれは、もう一度、前回の想定と今回の想定とを引き比べて検証するのである（大谷氏が〈違った想定〉にあるという二つの例を便宜的に【想定 1】と【想定 2】と名付ける）。

大谷氏が前回（つまり表式 a で）マルクスが取っている想定といわれるのは、現行第 10 節にある次のような一文であった。

【想定 1】 《年々の再生産のさまざまな要素の転換を研究しなければならないのであれば、過ぎ去った年間労働、終わっているこの年の労働の結果を研究しなければならない。この年間生産物という結果をもたらした生産過程は、われわれの背後にある（過ぎ去っており、その生産物になってしまっている）。だから、この生産過程に先行する、またはそれと並んで進む（並行する）流通過程、潜勢的な可変資本から現実の可変資本への転換、すなわち労働力の売買はなおさらのことである。労働市場は当面の商品市場の一部をなしていない。労働者はここではすでに、自分の労働力を売ってしまっただけでなく、剰余価値などのほかに自分の労働力の価格の等価を商品で供給してしまった。他方、彼は自分の労賃をポケットにもっており、転換が行なわれるあいだは、ただ商品（消費手段）の買い手として現われるだけである。》（S. 787.16-29.下線はマルクスの強調箇所、大谷氏の引用では傍点になっている）（下 175 頁）

そして大谷氏が〈今回の試み〉で〈前回の試みで取った想定と異なる想定〉とされているのは、第 2 稿の次のようなものだという事である。

【想定 2】 《つまり、この取引の終りには、第 I 部門の資本は、ふたたび 100 ポンド・スターリングの貨幣を携えて第 I 部門の労働者に相対し、第 I 部門の労働者は、ふたたび 100 ポンド・スターリングの労働力の売り手として第 I 部門の資本に相対するのである。だから、ここでのように、消費手段を生産する第 I 部門の資本が毎年一回だけ回転する場合には、今年の、たとえば 1870 年の生産物は、来年の 1871 年の全年を賄うのに足りなければならない。他方、1871 年には 1872 年に必要なものが生産されることになるのであり、1870 年には 1869 年の生産物が消費されたのである。この想定では、すべての生産物について、ただ、農産物の一部分にとって現実に生じていることだけが前提されている。こういう状況のもとでは、たとえば 1870 年に、この年の経過中に、第 I 部門の資本家が労働者に 100 ポンド・スターリングを支払い、労働者がこれで、彼ら自身が前年の1869 年に生産した消費手段の一部を買い戻す。この購買によって 100 ポンド・スターリングは、1870 年のうちに第 I 部門の資本家に還流する。第 I 部門の資本家は、ふたたび 1871 年に、この 100 ポンド・スターリングで労働者に支払いを行なう、すなわち労働者は、ふたたび 1871 年に、この 100 ポンド・スターリングと引き換えに、彼らが 1870 年に生産した消費手段の一部

で支払いを受けるのである。今年に消費される消費手段の一部分は、実際には、つねに、前年から受け継がれた商品在庫として存在する。》(S.426.16-33.) > (下177-8頁)

果たしてこの二つのものは違った想定に立っているといえるのかどうか。

大谷氏がこの二つのものが違った想定に立っていると考えられるのは、すでに指摘したように、最初のもの(【想定1】)を正確に読み取ることが出来なかったからに他ならない。われわれが【想定1】をどのように解釈したのかを、それをもう一度、紹介しておこう。但し、【想定1】が【想定2】と同じ想定に立っていることが分かるように、先の解釈を【想定2】と同じ年代を入れて書き直しておく。つまり「今年度」を「1870年」として書き直すと、前回の解釈は次のようになる。

【マルクスが想定しているのは、いうまでもなく、社会的総資本の流通を商品資本の循環として考察する場合である。だから再生産表式に表されているW'から考察が開始されるわけである。そしてW'の生産過程は、表式として提示されている時点(つまり1870年の期の初めに流通過程に登場している商品資本)から考えるなら、それは1869年の生産過程であり、《過ぎ去った》ものだと述べている。そして《だから、この生産過程に先行する、またはそれと並んで進む(並行する)流通過程、潜勢的な可変資本から現実的可変資本への転換、すなわち労働力の売買はなおさらのことである》と書いている。この部分をどう理解するかが極めて重要である。これはどういうことかということ、資本の回転は年一回転である。だからまず《だから、この生産過程に先行する》と書かれている《流通過程》というのは、1869年の期の初めに行なわれた流通過程を意味し、それは1869年の不変資本の補填を意味している。そして次に続けて書かれているもの、すなわち《またはそれ(生産過程――引用者)と並んで進む(並行する)流通過程、潜勢的な可変資本から現実的可変資本への転換、すなわち労働力の売買はなおさらのことである》というのは、いうまでもなく、1869年の一年間のあいだに継続して行なわれた可変資本の補填を意味するわけである。つまり可変資本の補填(潜勢的可変貨幣資本を現実の労働力に転換する過程)は1869年一年間を通じて生産過程と並行して行なわれたとマルクスはここでは考えているわけである。だからこれは引用文を見る限りでははっきりとは書かれてはいないが、労賃も週給なら週単位でその週末に支払われ、労働者はそれで消費手段(前々年度のつまり1868年の生産物)を1869年の一年間を通じて購入したと考えられているわけである。そして彼らはその1869年の一年間において、《自分の労働力を売ってしまっただけでなく、剰余価値などのほかに自分の労働力の価格の等価を商品で供給してしまった》わけである。その商品を資本家たちは1870年の初めの流通過程に商品資本W'として押し出しているわけである。ただ1870年の期の初めの流通過程にあるW'を考察する時点から考えると、それらはすべて《過ぎ去った》ものであり、だから労働者は1869年末に1869年の最後の一週間分の週給を受けて市場に現われている(彼はこの一週間分の給与で、1870年の最初の一週間を働くわけだ)。また1870年の当面の流通過程はW'-G'(商品資本の貨幣資本への転化)であるのだから、ここには労働市場はなく、労働者はただ購買者として現われているわけである。だから1870年の一年間を通じて労働者が購入するのは、彼らが1869年に生産

した消費手段であるのは明らかである。】

このようにわれわれは【想定1】の内容を解読した。この解読を読んでから、もう一度【想定2】を読んで頂きたい。そうすれば両者が、まったく同じ想定に立っていることがお分かりになるであろう。【想定2】でも、マルクスは《[こういう状況のもとでは、たとえば1870年に、この年の経過中に、第1部門の資本家が労働者に100ポンド・スターリングを支払い、労働者がこれで、彼ら自身が前年の1869年に生産した消費手段の一部分を買い戻す](#)》と書いているように、資本家は一年間を通じて週給なら週末に賃金を支払い、それで労働者は毎日消費手段を第1部門（消費手段生産部門）の彼らが1869年に生産した消費手段の一部分を買い戻して労働力を再生産すると考えていることが分かる。だからこれは【想定1】とまったく同じ想定にマルクスは立っていることを意味するのである。

このように、大谷氏が、先にマルクスが《[一つの新しい問題](#)》として提起している問題を前畑憲子氏の問題提起を受け入れて、極めて“独創的な”（？）解釈を充てて理解されようとした根底にある前提――すなわちマルクスは単純再生産と拡大再生産とでは二つの違った想定をしているという前提――がまったくの誤解・誤読にもとづくものであることが今ではまったく歴然としたわけである。

しかも前回問題になったところは（つまり表式 a は）、第8稿の大谷氏の言われる「第2層」における、つまりマルクスの最晩年の段階における敘述である。ところが大谷氏はすでにそれを遡るに10年も前の草稿である第2稿でもマルクスは今回（B表式、大谷氏のいわれるところの「第二回目の試み」）の想定と同じ想定に立っていたといわれるのである（それが先に紹介した【想定2】の引用文である）。とするなら、マルクスは第2稿の段階でも、すでにそうした想定に立っていながら、第8稿の第2層というもっとも最後の段階になって、しかもまったく一時的に（なぜなら a 表式というケースにおいてだけだから）、それとは違った想定に立ったのだ、と大谷氏らは事実上主張されていることになる。どうしてマルクスはそうしたある特定のケースにおいてだけそれまでと違った想定に立ったのであろうか、そんな不可解な“謎”について、大谷氏らはまともに説明をされ得るのであろうか。

真実は、マルクスは単純再生産においても〈二つの異なった想定〉などはしていないこと、想定を変更するようなことはなかったこと、だからまた拡大再生産でも〈二つの異なった想定〉などはないし、想定の変更もなかったこと、表式 a と表式 B とには、どんな想定の違いもないということである（但し誤解して貰っては困るが、ここで「どんな想定の違いもない」というのは、あくまでも今年度に追加労働者が購入する消費手段は前年の剰余労働の生産物だという点では両者に違いがないということであって、すでに検討したように、a 表式と B 表式とでは想定そのものはまったく違っているのである）。

大谷氏らは、マルクスが一つも検討もしていない a 表式の部門 I の追加可変資本の内容について、まったく勝手な憶測を行なわれ、マルクスがやってもいない想定をまったく勝手に考えつかれ、それをマルクスがやっているなどとなすり付けておられるだけなのである。

そして大谷氏は先の引用文（【想定2】の引用文）に続けて、次のようにそれを説明されている（なおこの引用文の内容は、消費手段生産部門を第8稿と同じように部門Ⅲにした表式でいうなら、部門Ⅱの $v$ 、つまり $100v$ （Ⅱ）の転換を貨幣流通による媒介を考慮して論じていることになる。だからここでは第Ⅱ部門の資本家と第Ⅱ部門の労働者の間の貨幣流通によって媒介される相互転換の考察がなされているのである。だからまたマルクスは《買い戻し》といった表現も使っているであろう）。

〈要するに、労働者は、今年の生産のための労働力にたいして資本家が労働者に支払う賃金で、今年、前年の労働によって生産された商品生産物（消費手段）の一部を買い戻し、これによって翌年に売ることができる労働力を再生産するのである。〉（下178頁）

しかしこれも少しおかしい。なぜなら、今年の労働者は彼らの労働力に対して受け取った賃金で、去年彼らが生産した商品生産物（消費手段）を買い戻すというのは、そのとおりだが、しかしそのことは彼らは今年中においても、生産過程において消耗した労働力を常に再生産する必要があるからそうするのであって、決して〈翌年に売ることができる労働力を再生産する〉ためだけではないからである。確かに今年の最後に受け取った賃金をもって翌年の流通過程に登場する労働者は、翌年の期のはじめに自分の労働力を販売できるようになっているというなら、そのとおりであろう。しかし今年彼らが受け取る賃金で消費手段を購入して、それを消費するのは、今年の彼らの労働力を今年中においても常に再生産するがためであって、決して、大谷氏がいわれるように、ただ〈翌年に売ることができる労働力を再生産する〉ためだけではないのである。

さらに、それに続く次のような大谷氏の説明にも不正確なところがある。

〈この場合、第Ⅰ部門の資本家による追加労働者からの労働力の購買と、この追加労働者による第Ⅱ部門の資本家からの消費手段の購買とは、次のように進行する。(1)資本家は、生産過程が開始されてから、週等々の一定期間の労働が終わった時点で追加労働者に賃金を支払う。(2)生産過程の進行とともに、追加労働者は毎週等々に、賃金として受け取った貨幣を支出して消費手段を買い、その消費によって労働力を再生産する。(3)第Ⅰ部門の追加労働者は、労働力を再生産するために必要な消費手段を、生産過程の進行とともに次第に買っていくのだから、第Ⅱ部門の資本家は、当該年度の生産過程が終了するまでは、自分の商品資本Ⅱcのうちこの部分を次第に貨幣化するのであって、第Ⅱ部門の資本家の側では、生産過程が終了するまでは、つねにまだ売れていない商品在庫を抱えている。(4)このように、第Ⅰ部門の資本家の側では、準備資本の形態、貨幣の形態で言えば銕貨準備の形態にある可変貨幣資本を、生産過程の進行とともに次第に支払い、第Ⅱ部門の資本家の側では、商品在庫の形態を取っている商品資本を、生産過程の進行とともに次第に貨幣化していく、ということになる。〉（下178頁）

この一文を読んでいくつかのことに気付く。

1、まずこの説明における〈この場合〉というは、先のわれわれが【想定2】と名付けた引用文の〈場合〉であり、それを大谷氏が拡大再生産のケースに適用したものである。つまり大谷氏が〈二回目の試み〉とするB表式で、マルクスがとっているというもののことであろう。

2、しかしそうであるなら、これはわれわれが【想定1】と名付けたケース（大谷氏がa表式でマルクスがとっている〈異なる想定〉だと主張され、それがために《一つの新たな問題》が生じたとされているケース）とまったく同じであることが分かる。われわれの解読では、それは次のようになるからである。(1)資本家は生産過程と並行して週末ごとに労賃を支払う。(2)労働者は毎週末の賃金で、前年度に生産された消費手段を購入して労働力を再生産する。(3)だから当然、労働者に消費手段を一年を通して販売する資本家Ⅱはその前年の生産物を最初はすべて商品在庫として保持し、その一部分を徐々に年間を通して労働者に販売することは前提されている。(4)また当然、生産過程と並行して年間を通して可変資本を補填する資本家はそのため可変貨幣資本を最初はそのすべてを準備状態で保持し、一週間ごとにそれを労働者に支払うことも前提されている。このように前提はまったく同じであることが分かるであろう。もちろん、一方は拡大再生産、他方は単純再生産の相違はあるのではあるが。

3、その前のパラグラフで大谷氏は今年の労働者は今年受け取った賃金で前年の生産物を買戻して〈翌年に売ることができる労働力を再生産する〉などと述べておられたが、今回の敘述では、今年中にも労働者は毎週の賃金で毎日自身の労働力を再生産することになっている。だからこれはまあこれでよいわけである。

4、しかし、大谷氏は重要な問題を見過ごされている。マルクスはB表式で、まず最初に計算しているのは、大谷氏が問題にされているような部門Ⅰの追加労働者の問題ではなく、部門Ⅰの単純再生産部分の転換だからである。すなわちⅠ（ $1000v + 500m$ ）の転換なのである。常にマルクスが拡大再生産の表式の計算で、まず最初に、そこに含まれている単純再生産部分を区別し、それを計算してから、拡大再生産の部分の計算に移っているという、非常に重要な視点を大谷氏は見落されているのである。こうした視点は、この《Ⅱ 蓄積または拡大された規模での生産》と題された草稿全体（エンゲルス版の第21章全体）をも貫くものであって、これは単純再生産が拡大再生産のなかに含まれたその基体でもあるというマルクスの考えから来るものなのである。大谷氏はこの重要な観点を見落とされているのであるが、それがために氏がどれほどとんでもない間違いに陥っているかを、われわれは後に知るであろう。

5、大谷氏は(3)で〈第Ⅱ部門の資本家は、当該年度の生産過程が終了するまでは、自分の商品資本Ⅱcのうちこの部分を次第に貨幣化する〉と述べておられる。しかし大谷氏が問題にされるのは、B表式の部門Ⅰの追加労働者の労働力であろう。とするなら、Ⅰの追加労働者に資本家Ⅱが販売するのはⅡcではなく、Ⅱm c、つまりⅡの剰余価値から蓄積に回される追加不変資本部分に予定されている部分でなければならないのである。

以上のように、大谷氏の説明を詳細に見ていくと、非常に残念なことではあるが、大谷氏の理解のあいまいさが浮き彫りになってくるのは如何ともし難いのである。

さらに続けて大谷氏の述べておられることは、すでにこれまでこの批判を読んで頂いた人なら

、その問題点はすぐに見抜けるであろう。

〈この想定のもとでは、もはや、第Ⅱ部門の商品生産物を実現することの困難も、第Ⅱ部門が追加生産手段の購買に前貸した流通手段の還流の困難も生じないのであり、したがって、こうして一回目の試みでの「一つの新しい問題」そのものが消えたのであった(5)。

この二回の試みのなかでマルクスは、抽象的にはそれまですでに十分に承知していたはずの次の二つのことを、具体的に生じた困難を解決する過程であらためて痛感したにちがいない。すなわち、第一に、拡大再生産の分析では、単純再生産の分析のさいには問題とならなかったような、再生産過程におけるもろもろの関連を、新たに問題として設定し直し、立ち入って解明する必要がある、ということ、そして第二に、社会的総資本の再生産過程のなかでの、可変資本の貨幣形態での前貸とそれの貨幣形態での還流という、資本の循環における決定的に重要な契機を正確に把握するためには、もはや商品資本の循環という視点からの考察では十分ではなく、貨幣資本の循環の視点からの考察を必要とするのであって、この二重の視点からの分析が要求される、ということである。〉（下178頁）

われわれは重複を恐れず、もう一度、上記の引用文の問題点を箇条書で書き出してみよう。

(1) まず〈この想定のもとでは、もはや、第Ⅱ部門の商品生産物を実現することの困難も、第Ⅱ部門が追加生産手段の購買に前貸した流通手段の還流の困難も生じないのであり、したがって、こうして一回目の試みでの「一つの新しい問題」そのものが消えたのであった〉などと述べておられるが、そもそもそうした「困難」や「問題」も、ただ大谷氏らが間違っただけであって、勝手に考え出した想定をマルクスがあたかもやっているかに主張されているだけだということである。ついでに指摘しておくが、注5で紹介されている前畑憲子氏が想定しているものと大谷氏が想定しているものとは若干違っている。これは詳しくは述べないが（その必要性もないが）、前畑氏の論文を読めば分かるであろう。

(2) 〈抽象的にはそれまですでに十分に承知していたはずの次の二つのことを、具体的に生じた困難を解決する過程であらためて痛感したにちがいない〉などと大谷氏は言われるのであるが、大谷氏らは、マルクスが「一つの新しい問題」として論じているものは、マルクスにとっては一つの「**外観上の困難**」でしかないという事実を理解されていない。大谷氏らは、それがあたかもマルクス自身にとっても「一つの新しい問題」であり、「**困難**」であったかに理解されているのである。しかし項目「**b)**」のなかでマルクスが論じているものをつぶさに検討すれば分かることであるが、そこでのマルクスの狙いは、拡大再生産の概念を展開する一環として、部門Ⅱにおける蓄積のための貨幣蓄蔵が如何になされるのかを解明することである。それを部門Ⅰと部門Ⅱとの補填関係に部門Ⅰの追加労働者が介在することによって、部門Ⅱの貨幣蓄蔵が如何になされ得るのかということを《一つの新しい問題》として提起し、それを《詳しく解決》するために、まずはそれを「**外観上の困難**」＝《貨幣源泉が部門Ⅱのどこから湧き出するのか》として提起し、そしてそれを解決すると称する考えられ得るさまざまな諸方策を取り上げて、なおかつそれらの諸方策がすべて不可であることを論証することによって、そうした「**困難**」そのものが単なる「**外観上**」のものにすぎないことを明らかにした後、そしてその上で、その《詳しい解決》、つまり部門Ⅱ

において如何に蓄積のための貨幣蓄蔵がなされるのか、という問題を論じるつもりだったのである。それは、部門Ⅰでなされたのと同じ想定を部門Ⅱでもすることによって可能であること、すなわちこれから貨幣蓄蔵を行なう資本家群A、A'、A''等々と、これまで蓄蔵してきた貨幣額が現実の蓄積に必要な額に達したので現実の蓄積を行なおうとする資本家群B、B'、B''等々を部門Ⅰと同様に部門Ⅱでも想定することによって、問題が解決することを示すことであつたのである。もちろん、マルクス自身はそれを最後まで敘述せずに、その導入部分に該当するアレコレの解決策の不可を論証する途中で《云々、云々。》という形で敘述を切り上げてしまっているのであるが。大谷氏らは、そうしたマルクスの敘述上の工夫を、あたかもマルクス自身が困難に陥って右往左往しているかに誤解されているのである。しかしこれは余りにも無理解に過ぎるし、ましてやそうした自分たちの無理解を柵に上げて、あたかもマルクスが自分の認識の浅さを〈あらためて痛感したにちがいない〉などと書かれるに至っては思い上がりも甚だしいといわなければならない。

(3) 次に、マルクスが〈痛感したにちがいない〉として指摘されている二つのことについてである。〈第一に〉として述べておられること、〈拡大再生産の分析では、単純再生産の分析のさいには問題とならなかつたような、再生産過程におけるもろもろの関連を、新たに問題として設定し直し、立ち入って解明する必要がある、ということ〉は、ある意味では当たり前のことであり、マルクスが〈あらためて痛感し〉なければならないようなものではない。というのは、大谷氏らが勝手に憶測されているのは異なり、マルクス自身は単純再生産と拡大再生産とで想定を変えたというようなことは決して無かつたからであり、そればかりか、マルクスは《Ⅱ 蓄積または拡大された規模での生産》と題した草稿の冒頭から、拡大再生産の概念を明らかにするために、それを単純再生産と比較しながら、拡大再生産に固有の問題を解明してきたのだからである。だから〈拡大再生産の分析では、単純再生産の分析のさいには問題とならなかつたような、再生産過程におけるもろもろの関連を、新たに問題として設定し直し、立ち入って解明する必要がある〉などという、ある意味では拡大再生産の概念に該当するような内容は、すでにマルクスにとっては解決済みのことであり、いまさらそんなことを解明することがここでの（つまり拡大再生産の諸法則を究明する目的で提起されているB表式での）課題ではないからである。そして、すでに指摘したように、大谷氏らこそが拡大再生産の基底にある単純再生産の契機を見落とされているのである。

(4) そして〈第二に〉として述べておられること、〈可変資本の貨幣形態での前貸とその貨幣形態での還流という、資本の循環における決定的に重要な契機を正確に把握するためには、もはや商品資本の循環という視点からの考察では十分ではなく、貨幣資本の循環の視点からの考察を必要とするのであって、この二重の視点からの分析が要求される〉などというのは、もはや“無茶苦茶”としか言いようがないのである。これもすでに指摘したことであるが、可変資本が貨幣形態で常に還流しなければならないというのは、確かに資本主義的生産にとって重要なことではあるが、しかしそれは不変資本の場合は、そのほとんどが信用によって取り引きされ、必ずしも貨幣形態での還流を必要としないという事実から来るのである。それを大谷氏らは、その内容も十分に考えられもせずに、それが何か決定的なことであるかにあまりにも過大視しすぎておられるのである。再生産表式の抽象レベルでなら、可変資本部分に限らず、すべての商品資本は必ず貨

幣資本に転換すると仮定されるのであって、その限りでは可変資本部分だけを特別視する必要性はないのである。ましてやそのことを貨幣資本の循環として問題を捉えることであるかに考えられるのだから、まったくもって混乱以外の何ものでもないのである。なぜなら、商品資本の循環として捉えるべき社会的な総再生産過程の考察においては、可変資本も常に商品資本の可変成分（すわなち  $v$ ）として、その循環が考察されるし、されなければならないからである。 $v$ の循環（その補填関係）は商品資本の可変成分の循環（補填）であって、決して可変貨幣資本の循環（補填）そのものではない、という決定的なことが大谷氏にはお分かりではないようなのである。だから〈社会的総資本の再生産過程〉においては〈商品資本の循環という視点からの考察では十分ではな〉いなどと言われたり、〈二重の視点からの分析が要求される〉などと言われるのは、ただただ混乱としか言いようがないのである。

次に大谷氏は〈二回目の表式を使った拡大再生産の進行過程の展開で注目される〉ものをいくつかあげておられる。それらをすべて引用紹介すると煩雑になるので、大谷氏があげておられるものを箇条書き的に紹介しておこう。それは次のようなことである。

（１）表式のなかに「貨幣」が繰り返し登場し、「在庫」、「商品在庫」、「消費ファンド」等が書き添えられている。〈つまり、マルクスは資本の循環運動のなかのそれぞれの段階における諸要素を表式として書き表わし、それを使って循環運動を追っているのである〉。（下179頁）

（２）表式展開のなかで、〈現実の蓄積が開始されるさいの資本を、不変資本については、生産手段と、すでに生産資本の要素に転化された形態で示しているのに対して、可変資本については貨幣形態で示している〉。（下179頁）

（３）〈両部門の不変資本については、今年度の期首に完全に生産手段の形態に転換される〉。それに対して〈両部門の可変資本については、期首ではまだ貨幣形態にあるのであって、生産過程が、したがって現実の蓄積過程が開始され、進行していく過程で、それが次第に賃金として支払われ、その賃金で消費手段の形態にある商品生産物が次第に貨幣化されていく、と考えている〉。（下179-80頁）

（４）〈だから彼は、第Ⅰ部門の商品生産物は期首に行なわれる流通過程によってただちに買い取られて貨幣に転化されるのにたいして、第Ⅱ部門の商品生産物のうち、労働者の必要生活手段となる部分については、生産過程が始まる時にはそのすべてが商品在庫の形態を取っており、生産過程の進行とともに、それが次第に減少して、貨幣化されていく、と考えているのである〉。（下180頁）

そして大谷氏は次のように総括されている。

〈このように、ここでのマルクスの二回目の表式展開は、社会的総再生産過程の分析にとって、きわめて重要な新たなステップを刻むものであった。〉（下180頁）

しかし上記にあげたいいくつかの特徴は、果たして〈社会的総再生産過程の分析にとって、きわめて重要な新たなステップを刻むもの〉というようなものなのであろうか。というのはこれまで大谷氏によって紹介されたものを見ただけでも、マルクスは単純再生産の考察においても、すでに貨幣流通による媒介を考慮した場合には、同じようなことを論じていたからである。われわれが【想定1】、【想定2】と名付けた引用文をもう一度検討してみよう。例えば上記の(3)と(4)については、【想定1】でも、《この生産過程に先行する、またはそれと並んで進む(並行する)流通過程、潜勢的な可変資本から現実の可変資本への転換、すなわち労働力の売買》とマルクスは述べていた。これはわれわれの解釈によれば、【資本の回転は年一回転である。だからまず《だから、この生産過程に先行する》と書かれている《流通過程》というのは、1869年の期の初めに行なわれた流通過程を意味し、それは1869年の不変資本の補填を意味している。そして次に続けて書かれているもの、すなわち《またはそれ(生産過程——引用者)と並んで進む(並行する)流通過程、潜勢的な可変資本から現実の可変資本への転換、すなわち労働力の売買はなおさらのことである》というのは、いうまでもなく、1869年の一年間のあいだに継続して行なわれた可変資本の補填を意味するわけである。つまり可変資本の補填(潜勢的可変貨幣資本を現実の労働力に転換する過程)は1869年一年間を通じて生産過程と並行して行なわれたとマルクスはここでは考えているわけである。だからこれは引用文を見る限りでははっきりとは書かれてはいないが、労賃も週給なら週単位でその週末に支払われ、労働者はそれで消費手段(前々年度のつまり1868年の生産物)を1869年の一年間を通じて購入したと考えられているわけである。そして彼らはその1869年の一年間において、《自分の労働力を売ってしまっただけでなく、剰余価値などのほかに自分の労働力の価格の等価を商品で供給してしまった》わけである。その商品を資本家たちは1870年の初めの流通過程に商品資本W'として押し出しているわけである。ただ1870年の期の初めの流通過程にあるW'を考察する時点から考えると、それらはすべて《過ぎ去った》ものであり、だから労働者は1869年末に1869年の最後の一週間分の週給を受けて市場に現われている(彼はこの一週間分の給与で、1870年の最初の一週間を働くわけだ)。また1870年の当面の流通過程はW'-G'(商品資本の貨幣資本への転化)であるのだから、ここには労働市場はなく、労働者はただ購買者として現われているわけである。だから1870年の一年間を通じて労働者が購入するのは、彼らが1869年に生産した消費手段であるのは明らかである】。このように【想定1】でもすでに(3)(4)で指摘されていることはマルクスは述べていたことが分かる。そしていうまでもなく【想定2】はなおさらそう言えるのである。なぜなら、【想定2】ではマルクス自身が《こういう状況のもとでは、たとえば1870年に、この年の経過中に、第I部門の資本家が労働者に100ポンド・スターリングを支払い、労働者がこれで、彼ら自身が前年の1869年に生産した消費手段の一部分を買い戻す。この購買によって100ポンド・スターリングは、1870年のうちに第I部門の資本家に還流する》と述べているが、これは第I部門(消費手段の生産部門)の資本家が最初は100ポンド・スターリングを貨幣準備として持ち、1870年の《この年の経過中に》、つまり一年間かけて、それを週給なら一週間の末ごとに労働者に支払ってゆき、そして労働者はやはりその一年間のあいだ同じ第I部門の資本家から自分が1869年に生産した消費手段の一部分を購入し、100ポンド・スターリングは資本家Iのもとに還流するとマルクスは述べているのだからである。そして【想定2】では、マルクス自身が《今年に消費される消費手段の一部

分は、実際には、つねに、前年から受け継がれた商品在庫として存在する」とも述べているからである。

では（１）や（２）で指摘されているようなことはどうであろうか。確かにこれまで大谷氏によって紹介されたものには表式展開しているようなものはなかったから、表式のなかでマルクスが「貨幣」や「在庫」などの文字を書いていることや、不変資本は生産資本に転化されていても、可変資本は貨幣形態で示しているというような表式には、われわれはお目にかかっている。ではこれらはこの第８稿のＢ表式（大谷氏のいう〈二回目の試み〉）で初めて試みられたことなのであるか。ところが、われわれは第２稿のなかにも、すでに次のような表式を見ることができるのである。

## 《Ⅰ 消費手段

a 労働者の消費手段  $200c(a) + 50v(a) + 50\text{£}G + 50M(a)$

b 資本家の消費手段  $200c(a) + 50v(a) + 50\text{£}G + 50M(a)$  》（草稿176頁、水谷・名和前掲論文170頁）

これは全体の表式のうちの部門Ⅰ（消費手段の生産部門）の部分だけを取り出したものであり、マルクスは部門Ⅱ（生産手段の生産部門）については、生産手段aと生産手段bとに分け、さらにそれぞれを $\alpha$ 、 $\alpha\alpha$ と $\beta$ 、 $\beta\beta$ に分ける（だから生産手段生産部門だけで四つも生産部門がある）という非常に複雑な表式の計算を行なっているようなのであるが、ここで紹介した表式のなかに《 $50\text{£}G$ 》とあるのは、「50ポンドの貨幣」の意味であり、それがまず可変資本の貨幣形態として存在していることを表式のなかで表現しているのである。だから表式のなかに可変資本の貨幣形態を書き記すというやり方は、すでに第２稿の段階からマルクスによって試みられているということである。だからこうしたことも果たしてＢ表式で初めて試みられた、〈きわめて重要な新たなステップを刻むもの〉と言えるのかどうかを疑わせるものではないだろうか。

## ●単純再生産部分の転換を見落とす

さて、大谷氏はマルクスが自身の勘違いや計算間違いなどから〈二回目の試み〉が予想と違った傾向を示したために中断し、病状の重圧をおして〈三回目および第四回目の試み〉にも挑戦しながら、やはりいずれも中断したあと、〈五回目の試みで……最後の挑戦を試みる〉とし、その特徴を次のように述べておられる（これはエンゲルス版で「第二例」とされている表式のことである）。

〈この五回目の試みでの表式の特徴は、両部門の諸要素の価値について、このあとでのコメントや総括につながるような量的関係が意識的に設定されていることである。すなわち、第Ⅰ部門が50%の蓄積率で蓄積をするという前提のもとで、消費手段に転換すべき  $I(v+1/2m)$  が、生産手段に転換すべき  $IIc$  よりも  $I(v+1/2m) - IIc$  だけ大きい、という量的関係である。〉（下181頁）

すでに指摘したことであるが、このように大谷氏は肝心なことを見落とされているのである。マルクスが  $I(v+1/2m)$  と  $IIc$  の関係を問題にしているのは、部門Ⅰの単純再生産部分の転換をまず問題にしているからだという認識が大谷氏にはないのである。大谷氏は  $I(v+1/2m)$  を〈消費手段に転換すべき〉ものとのみ捉えておられる。しかし単に〈消費手段に転換すべきもの〉というだけなら、別に  $I(v+1/2m)$  に限らないのである。蓄積される  $1/2m$  のうち追加可変資本に投下される部分も〈消費手段に転換すべきもの〉であるからである。同じことは  $IIc$  を〈生産手段に転換すべき〉ものとのみ考えておられることについても言いうる。問題はそういうことではなくて、ここでマルクスが問題にしているのはⅠの単純再生産部分が転換するための条件なのである。マルクスは常に部門Ⅰの単純再生産部分をまずベースにして問題を考えているという認識が大谷氏にはない。先のB表式の場合は、部門Ⅰの単純再生産部分の転換は  $IIc$  と相互に転換されるだけであった（ $I[1000v+500m] = II1500c$ ）が、今回の場合は、部門Ⅰの単純再生産部分の転換のためには、 $IIc$  が不足し、その分だけ第Ⅱ部門で蓄積が必要となるケースとしてマルクスは問題にしているのである（実はB表式でも二年目からは同じ条件の表式になったのではあるが）。このように大谷氏にはマルクスが常に単純再生産を基礎にして考えているということが分かっておられないのである。それが後に見ることになるが、とんでもない間違いを犯されることに繋がっている。

● [g コメントー拡大再生産の展開についての総括] も混乱である

ここでは〈コメントー拡大再生産の展開についての総括〉と題して、マルクスが草稿65-67頁（但し、66頁は存在しない）、大谷訳下48-49頁で分析している部分についての大谷氏の解釈が紹介されている。しかしここで述べられていることもまったく混乱以外の何ものでもないのである。

まず大谷氏はフランス語版でマルクスが述べていたことを、ここで再び確認しているのだと言われるのである。それはどういうことかいうと、次のようなことらしい。

〈社会的総資本が生産する総剰余生産物について、それが追加生産手段と追加労働力のための追加生活手段とを含んでいなければならない〉〈社会的総資本が生産する総剰余生産物について、それが追加生産手段と追加労働力のための追加生活手段とを含んでいなければならない〉（下181頁）

しかし大谷氏と言われるようなことなら、別にフランス語版まで遡らなくても、マルクスがこの《蓄積または拡大された規模での生産》と題した草稿の最初のあたりで、つまりわれわれが拡大再生産の概念を考察していると理解しているところで、すでに展開していたことなのである。それを大谷氏らはマルクスが単純再生産から拡大再生産に如何に「移行」するかを論じているなどという間違った解釈をしたためにその内容を十分に理解されなかったに過ぎないのである。それは例えば、部門Iの資本家たちについて、次のように述べられていたことを振り返れば分かる。

《この剰余生産物を次々に売っていくことによって、資本家たちは蓄蔵貨幣、《追加的な》潜勢的貨幣資本を形成する。いまここで考察している場合には、この剰余価値ははじめから生産手段の生産手段というかたちで存在している。この剰余生産物は、B, B', B'', 《等々》(I)の手なかではじめて追加不変資本として機能する。しかしそれは、可能的には、それが売られる以前から、貨幣蓄蔵者A, A', A''等々(I)の手なかで追加不変資本である。これは、Iの側での《再》生産の価値の大きさだけを見るならば、単純再生産の限界の内部でのことである。というのは、この可能的な追加不変資本（剰余生産物）を創造するのに追加資本が動かされたわけでもなく、また単純再生産の基礎の上で支出されたのよりも大きい剰余労働が支出されたわけでもないからである。違う点は、ここではただ、充用される剰余労働の形態だけであり、その特殊な役立ち方の具体的な性質だけである。この剰余労働は、IIのために機能すべき、またそこでc II)となるべき生産手段の生産にではなくて、生産手段(I)の生産手段に支出されたのである。》（草稿52-3頁、大谷訳上54頁）

この一文はエンゲルスがマルクスの草稿に勝手に手を入れていわゆる「移行論」を展開している部分の直前にある一文である。だからエンゲルスの修正をマルクスの主旨を適切に表現するものだと持ち上げる大谷氏らはここでもマルクスは「移行」について論じていると捉えておられたのである。しかし、よく読めば分かるように、マルクスはIの剰余生産物はIにおける追加不変資

本の現物形態である、つまり「生産手段の生産手段」として生産されていなければならないことを明確に語っており、問題は《充用される剰余労働の形態だけであり、その特殊な役立ち方の具体的な性質だけである》と明確に述べていたのである。つまり剰余生産物の物的形態がすでに蓄積が可能な形態で生産されていなければならないというようなことは、むしろ拡大再生産の概念の最初のところで述べられていたことなのである。

だからまた、これまで考察してきた拡大再生産の諸法則を中間総括するような段階になって、やっとうこうした問題を再確認しているのだ、と言われる大谷氏の指摘はまったくトンチンカンなものでしかないのである。そんなことはマルクスにとっては、すでに十分、拡大再生産の概念のなかで展開済みだからである。マルクスがここで問題にしているのはそういうことではなく、拡大再生産の諸法則の一つとして、蓄積のための部門Ⅰ(v+m)と部門Ⅱcとの量的な相互関係を問題にしているのである。“質”の問題はすでに「概念」のなかで十分に解明された。ここでの課題は「法則」としての“量”の問題なのである。

だからまたマルクスがその量的関連を考察している部分についての大谷氏の説明もまったく的を外したものでしかないのである。大谷氏は次のように解説されている。

〈マルクスは、第一に、蓄積を前提すれば、 $I(v+m) > IIc$ であることは自明だと言ひ、その理由として、第Ⅰ部門の剰余生産物が両部門の追加不変資本となる生産手段を供給しなければならない、と言う。だから、第Ⅰ部門の剰余生産物が含まれている、両部門での追加生産手段となりうる価値額が、必然的に両部門の蓄積率を制約する。また、一方の部門の蓄積率が高くなれば、他方の部門の蓄積率は低くならざるをえない。マルクスはここで、第Ⅰ部門の剰余生産物に含まれる、両部門のための追加生産手段の価値額が、両部門での蓄積を制約していることを明確に指摘しているのである。この価値額は、わが国でしばしば「余剰生産手段」と呼ばれているものにほかならない。マルクスは、一回目の試みで両部門の蓄積率を50%としたうえで拡大再生産への移行を試みて行き詰まった、その原因をここで明示的に反省しているのである。〉（下181-2頁）

われわれはマルクス自身は実際にはどのように述べているのかをまず示しておこう。

《蓄積を前提すれば、 $v+m(I)$ は $c(II)$ よりも大きいのであって、単純再生産でのように $c(III)$ に等しいのではないということは、自明である。というのは、1)  $I$ はその剰余価値の一部分をそれ自身の生産資本に合体させ、それを不変資本に転化させるのであり、したがって、同時に消費手段 $II$ によって補填されることはできないからである。》（草稿65頁、大谷訳下48頁）

これがマルクスが、大谷氏がいわれる〈蓄積を前提すれば、 $I(v+m) > IIc$ であること〉の最初に上げている理由である。大谷氏の説明とマルクスのそれとを比べれば、如何に大谷氏が勝手な解釈を並べておられるかが分かるであろう。

大谷氏は〈その理由として、第Ⅰ部門の剰余生産物が両部門の追加不変資本となる生産手段を

供給しなければならない、と言う」と述べておられるが、マルクス自身は《Iはその剰余価値の一部をそれ自身の生産資本に合体させ、それを不変資本に転化させる》と述べているだけであって、第I部門の剰余生産物が両部門の追加不変資本になるなどということを経由しているのではないのである。

マルクスがこの一文で何を言いたいのかを、こうした考察を行なっている直接の表式と思われる、次のような表式（草稿65頁、大谷訳下44頁）を例に上げて、具体的に説明しておこう。

- a) I)  $5000c + 1000v + 1000m$   
II)  $1430c + 285v + 285m$

マルクスがこの「I)」で述べていることは次のようなことである。マルクスが行なっている想定では、部門Iの剰余価値1000mのうち半分500mを蓄積に回すのだが、これは当然すべて現物としては生産手段からなっている。しかしそのうちのIにおいて追加不変資本として蓄積に回される部分については、部門Iによって再び利用されるわけである（だからそれは大谷氏が指摘されるように、確かに生産手段のための生産手段として生産されていなければならないが、しかしそんなことはマルクスにとっては拡大再生産の概念の考察によって了解ずみのことなので、ここでことさら確認しなければならないようなことではないのである）。だからそれをIIに販売して、IIcの現物補填として利用することはできない、というのがまずその理由である。つまり少なくともIIcはIが蓄積する追加不変資本部分だけ単純再生産の条件である  $I(v + m) = IIc$  の場合のIIcより少なくななければならない、つまりa)式では  $I(v + m)$  は  $I(1000v + 1000m)$  だから  $2000c$  (II)よりそれだけ少なくななければならないというわけである。今、具体的にa)式で考えてみると、500m (I)の蓄積がIの有機的構成の比率5 : 1どおりに行われると仮定すると、追加不変資本は  $416 \frac{2}{3} = \text{約}416.67$  となり、その大きさだけIIcは小さくなければならないということになる。だからIIcは  $2000 - 416 \frac{2}{3} = 1583 \frac{1}{3}$  以下でなければならないことになるわけである。このようにマルクスはまずここでは蓄積の条件としてこのような量的な関係を問題にしているのである。だからマルクスが問題にしているのは、大谷氏が理解されるものとまったく違ったことなのである。

だからまた大谷氏は両部門の蓄積率のことをアレコレ述べておられるが、しかしそんなことはマルクス自身はまったく問題にもしていないことが分かるであろう（もしご不審なら実際にマルクスの草稿を確認して頂きたい）。

さらに大谷氏は「剰余生産手段」などというタームについても述べておられるが、もしこれが剰余労働によって生産された生産手段という意味なら、別に問題はないが（それならそれはただ「剰余生産物」と同じ意味である）、「生産手段」としての「剰余」、すなわち「余っている」というような意味に捉えるなら混乱も甚だしいことになる。拡大再生産を前提しているときには、こうした概念はありえないからである。それにもし「余っている」とか「不足している」ということなら、それは別に剰余労働の生産物に限定する必要もないからである。単に「余っている」というだけなら、部門I（生産手段の生産部門）全体の生産規模が大きすぎた場合もありう

るであろう。ところが、拡大再生産の概念のところで確認したように、蓄積で重要なのは、全体として生産手段が余っているか、余分に生産されたかどうか、というようなことではなく、部門Ⅰの（別に部門Ⅰだけではないのだが）剰余労働の具体的な形態が（だから剰余生産物の具体的な内容が）問われているのだからである。だから「余剰生産手段」などというタームを平気で使い、それが蓄積の条件だなどと主張されている人たちは（大谷氏もどうやらその一人のようであるが）、彼らには拡大再生産の概念が欠落していることを自ら暴露しているようなものなのである。

最後に大谷氏が〈マルクスは、一回目の試みで両部門の蓄積率を**50%**としたうえで拡大再生産への移行を試みて行き詰まった、その原因をここで明示的に反省しているのである〉などと述べておられるのを読むと、これまでこの批判を読んで来られた人なら、ただ苦笑するだけであろう。大谷氏らはマルクスが「a表式」で〈両部門の蓄積率を**50%**としたうえで拡大再生産への移行を試みて行き詰まった〉などと言われるのだが、まずマルクス自身はa表式を表式の計算をやるために提起しているのではないということが彼らにはお分かりではない。マルクスはあくまでも拡大再生産の概念を最終的に明確にするために、拡大再生産の具体的な表式の一つとしてa表式を提示しているだけなのである。だからそこで問題になったのは、やはり拡大再生産の概念でしかないということ（拡大再生産が単純再生産とは質的に違っていることの表式を使った最終的な確認と、拡大再生産で新たに考察の対象となる問題の確認、さらに部門Ⅱでの蓄蔵貨幣の形成が如何になされるかという問題の解明等）が大谷氏らには分かっておられない。それにそもそも〈拡大再生産への移行を試みた〉などと言われるが、a表式は、最初から拡大再生産の表式として提示されているのだから、そこでは「移行」など問題にもなりようがないこと、だから当然、マルクス自身はまったく〈行き詰まって〉などいなかったことはすでに何度も明らかにしてきたところである。

次にマルクスが「2）」として述べている理由についてである。これもわれわれはまず大谷氏の説明を紹介したあと、マルクスの実際の説明を並べて大谷氏の説明の是非を検討することしよう。大谷氏は次のように述べておられる。

〈マルクスは、第二に、第Ⅱ部門の剰余生産物が両部門の追加労働者のための追加生活手段を供給しなければならない、ということ述べる。そのさい、彼はまず、可変資本について言うかぎり、蓄積のために第Ⅰ部門がしなければならない操作は、追加労働力を買うための貨幣資本を蓄えることだけであって、生産過程が始まってから支払われた賃金で、第Ⅰ部門の労働者が消費手段を買っていくのだが、第Ⅰ部門の追加労働者が消費手段を買うことができるためには、第Ⅱ部門にそのための商品在庫がなければならない、と言う。続いて、この「商品在庫」が意味するのは、第Ⅱ部門が、第Ⅱ部門での追加労働力のための追加消費手段だけでなく、それに加えてさらに、第Ⅰ部門での追加労働力のための追加消費手段をも供給するのだ、と述べる。このように、マルクスはここで、第Ⅰ部門の剰余生産物が両部門の追加生産手段を供給しなければならないように、第Ⅱ部門の剰余生産物が追加労働力のための追加消費手段を供給しなければならない、というこ

とを指摘するとともに、とくに後者では、追加消費手段はまず商品在庫の形態を取り、生産過程の進行とともに次第に買われるという仕方で供給されるのだという「独自性」をも指摘しているのである。〉（下182頁）

次はマルクス自身の説明である。

《2）Ⅰは自分の剰余生産物から、Ⅱのなかでの蓄積に必要な不変資本を供給しなければならないのであって、それはまったく、ⅡがⅠに、Ⅰの剰余生産物のうちⅠ自身が追加資本（不変資本）として取得する部分のために、必要追加可変資本を供給しなければならないのと同様だからである。》（草稿67頁、大谷訳下48頁）

このように大谷氏の説明は、マルクスが説明しているものと大きくずれてしまっている。

マルクスが言っていることは次のようなことである。すなわちⅡの蓄積に必要な追加不変資本というのは、Ⅰの追加可変資本と一致する必要があるということ（もちろん、これは部門Ⅰと同時に部門Ⅱにおいても蓄積が行なわれるという前提において成り立つ条件であり、後のマルクスの考察で出てくるが、部門Ⅰが蓄積をしても、部門Ⅱが単純再生産を行なうだけの場合はこの限りではない）。つまりこれはⅠの追加可変資本がⅡcに新たに不変資本として追加される部分と一致する必要があるということであり、その部分だけⅡcはさらに小さくしなければならないということなのである。つまりここでも、マルクスはあくまでも蓄積の条件として部門Ⅰの $v + m$ とⅡcとの量的関係を問題にしているのである（特にⅡcの量的限度を確定しようとしている）。われわれが具体的に検討しているa)式では、その追加可変資本の蓄積分は $500 - 416[2/3] = 83[1/3]$ である。つまりそれを先の $1583[1/3]$ から差し引くと1500が残る。要するに $I(1000v + 500m) = 1500c$  (Ⅱ)の関係、一般式にすると、もしⅠの蓄積率を50%と仮定するなら、 $I(v + 1/2m) = IIc$ 関係を満たす値よりⅡcは小さくなければならないということである。これは結局は、次のことに帰着する。すなわちⅠの蓄積分 $500m$ を差し引いた資本家の消費分 $500m +$ 可変資本 $1000m$ 、つまり部門Ⅰの単純再生産部分の価値量がⅡc、第Ⅱ部門の不変資本の価値量より大きな値になっている必要があるということである。すなわち、 $I(v + 1/2m) \geq IIc$ である。だからこれはⅠが蓄積するためには、Ⅱcは、Ⅰの単純再生産の部分を補填するに必要な値より大きくなってはならないということでもある。このようにマルクスが問題にしているのは、あくまでもそれまでの考察を踏まえて、蓄積の条件を結論的に導き出そうとしているのである。

実は大谷氏はマルクスの説明をまったく誤読されているのである。大谷氏がくそのさい、彼はまず、可変資本について言うかぎり、蓄積のために第Ⅰ部門がしなければならない操作は、追加労働力を買うための貨幣資本を蓄えることだけであって、生産過程が始まってから支払われた賃金で、第Ⅰ部門の労働者が消費手段を買っていくのだが、第Ⅰ部門の追加労働者が消費手段を買うことができるためには、第Ⅱ部門にそのための商品在庫がなければならない、と言う。続いて、この「商品在庫」が意味するのは、第Ⅱ部門が、第Ⅱ部門での追加労働力のための追加消費手段だけ

でなく、それに加えてさらに、第Ⅰ部門での追加労働力のための追加消費手段をも供給するのだ、と述べる」などと述べておられるのは、マルクスが「2）」と上げた理由を、さらに説明している次のような一文を誤読されているのである。

《言うまでもなく、現実の《追加》可変資本は追加労働力から成っている。たとえばいまの場合、資本家Ⅰは、奴隷所有者でもあればしなければならないように、自分が使用する追加労働力のためにⅡから必要生活手段を在庫として買ったりためこんでおいたりはしない。Ⅱと取引するのは、労働者自身である。しかしこのことは、資本家の立場から見れば追加労働力の消費手段は彼が《必[48]要な場合に》追加する労働力を生産し維持するための手段でしかなく、したがって彼の可変資本の現物形態でしかないということを、妨げるものではない。資本家自身がさしあたって行なった操作、ここではⅠが行なったそれは、追加労働力を買うために必要な新たな貨幣資本を貯えたことだけである。彼がこの追加労働力を取り入れてしまえば、この貨幣はこの労働力にとっての商品Ⅱの購買手段となるのであり、したがって、Ⅲには労働力のための消費手段がみいだせるようになっていなければならないのである。》（草稿67頁、大谷訳下48-9頁）

ここでマルクスが言っていることは、次のようなことである。「2）」で説明した理由では、部門Ⅰの追加可変資本と部門Ⅱの追加不変資本とが密接に関連していることから、あたかも両資本家間で直接それらの取り引きが行なわれるかの誤解を与えかねないが、しかし実際は、Ⅱから追加不変資本（＝Ⅱm c、追加生活手段）を購入するのは、Ⅰに追加的に雇用された労働者である。しかし資本家の立場からみると、労働力も一つの特殊な生産手段に過ぎず、だから労働者が消費する生活手段は、その労働力を使用する資本家にとっては、自身の特殊な生産手段を維持するに必要な手段でしかない。だからⅠの追加労働者が手にする追加生活手段は資本家Ⅰにとっては彼の追加可変資本の現物形態でしかないのだ、だから「2）」のように追加可変資本（＝Ⅰm v、追加生産手段）と追加不変資本（＝Ⅱm c、追加生活手段）とを直接関連させて論じることができるのだ、というものなのである。大谷氏の解釈が如何にマルクス自身が述べているものと違ったものになっているかが分かるであろう。大谷氏が勝手に述べておられる内容は、ある意味では、すべて拡大再生産の概念に該当するものであり、マルクスにとってはそれをいまさら確認しなければならないようなものではないのである。だからこれ以上、われわれも詮索するのは無用であろう。

## ● [h これまでの考察からの帰結] における大変な勘違い

ここでは「これまでの考察からの帰結」について大谷氏の理解が述べられているのであるが、ここでも大谷氏はまったくの勘違いをされているのである。

しかしその勘違いの内容の検討に入る前に、大谷氏が最初に〈以上のコメントのあと、マルクスは、五回目の展開を、次年度の蓄積のための第三年度の資本の組み換えを行なったところで、表式を利用した拡大再生産の考察を終える。そして、「つまり、次のようないくつかのケースがあるわけである」(S. 822.23)と言って、両部門の諸要素のあいだの量的関係についてこれまでの考察のなかで得られた帰結をまとめている〉(下183頁)と述べられている部分について一言述べておきたい。大谷氏はこのように言われるのであるが、しかし私にいわせれば、この「まとめ」は「拡大再生産の諸法則」という大項目のなかで考察されてきたものの全体の「まとめ」であり、また同時に今後に残された課題についても言及している、一番最後の(三番目の)大項目にあたるものなのである。確かにマルクス自身は草稿のなかにそれらしい区切りを示すようなものは何も書いていない。前回の「拡大再生産の概念」から「拡大再生産の諸法則」へ移行する場合には、マルクスはそれ示す区切りとして横線を書いていたが、今回は何も書いていないのである。しかしこの《つまり、次のようないくつかのケースがあるわけである》という書き出しは、ノートの70頁の冒頭から始まっているのである(大谷氏訳下68頁参照)。つまりマルクスはそれまでの「拡大再生産の諸法則」の一連の考察を踏まえて、ここから改めて頁を変えて、書き出したのがこの一文以降のものなのである。その意味では、頁を改めたことが、そうした一つの区切りを表しているのではないかと私自身は推測しているのである。しかし、まあこれは私の勝手な推測かも知れないが……。

さて、肝心なのは、大谷氏の勘違いである。これはこれまでも指摘してきたが、大谷氏がマルクスが常に拡大再生産の基礎にある単純再生産をまず最初に問題にしてそれを基準に考えていることを見落とされていることからくる勘違いなのである。それは次の一文に示されている。

〈蓄積の場合について、マルクスは、「なによりもまず蓄積率が問題になる」(S. 822.27)と注意したうえで、Iの蓄積率をつねに50%と仮定して進めてきたこれまでの考察のなかで、第I部門と第II部門との商品生産物の価値額の量的関係に三つのケースがあったことを指摘する。第一は、 $I(v+1/2m)=IIc$ の場合で、この場合には、第I部門だけが蓄積し、第II部門では単純再生産が行なわれる。第二は、 $I(v+1/2m)>IIc$ の場合で、この場合には、第II部門で、 $I(v+1/2m)-IIc$ の価値額の追加不変資本の蓄積と、それに対応する価値額の追加可変資本の蓄積が行なわれる。第三は、 $I(v+1/2m)<IIc$ の場合で、この場合には、第II部門が単純再生産を行なうためだけでも、 $IIc-I(v+1/2m)$ の価値額の生産手段を第I部門から買わなければならない。しかし、すでに4でマルクスが述べていたように、第I部門はこの生産手段を供給できないので、「相対的過剰生産(IIにとっての)」と「再生産の不足(II)」が生じることになる(S. 803.29-30)。〉(下183頁)

この部分のマルクスの説明は実際はどうなっているのか、マルクスの文章をまず示しておこう（但し、マルクスが誤記している部分は正しく書き改めておく）。

《そのさい、次の3つのケースが生じた。

1)  $(v+1/2m) (I) = c(II)$  , この  $c(II)$  は  $(v+m)I$  よりも小さい。（これはつねにそうでなければならないのであって、そうでなければIは蓄積しないことになる。〔I〕）

2)  $(v+1/2m) (I) > cII$ . この場合には、IIが  $(c \cdot \text{プラス} \cdot m$  の一部分) IIIによって  $(v+1/2m) I$  を補填することによって、補填が行なわれる。したがってこの額は  $(v+1/2m)I$  である。この場合、この転換はII) にとってはその不変資本の単純再生産ではなくて、すでに、IIの剰余生産物のうちIIが生産手段Iと交換する部分だけの大きさの不変資本の蓄積であり、同時にまた、IIがそれに応じて自分の可変資本を自分自身の剰余生産物から補充することを含んでいる。

3)  $(v+1/2m) [I] < cII$ . この場合には、IIIはこの転換によっては自分の不変資本をすっかりは再生産していないのであって、不足分のためにIから買わなければならない。しかし一方では、そのために〔IIでの〕可変資本のそれ以上の蓄積が必要になるわけではない。というのは、IIの不変資本は、その大きさから見れば、この操作によっていまはじめて、すっかり再生産されるのだからである。》（草稿70頁、大谷訳下68-9頁）

確かに、この部分のマルクスの説明は、不親切であり、一部は不適切でさえもある。だからこの部分だけを読むと大谷氏のようなトンチンカンな理解をされても無辺なるかなと言えないこともない。しかしこれまでのマルクスの展開をつぶさに跡づけてきたものなら間違うことはないのである。

まず大谷氏の間違いは、マルクスがなぜ蓄積のパターンを  $I(v+1/2m)$  と  $IIc$  との関連において見ているのかということを理解されていないことである。これはすでに何度も指摘してきたが、マルクスは拡大再生産の基礎にある単純再生産を基準に問題を考えているから、こうしたことを問題にしているのである。すなわち  $I(v+1/2m)$  というのは、部門Iで蓄積率を50%にした場合の単純再生産の部分を意味するのである。それが部門IIの不変資本とどういう量的な関係にあるかによって、蓄積は三つのパターンに分けられるというのが、マルクスがここで言いたいことなのである。だから当然、マルクスにとっては、この単純再生産部分の転換だけではなく、それに加えて部門Iの蓄積分  $1/2m$  が既存の有機的構成にもとづいて一部は追加不変資本に他の一部は追加可変資本にそれぞれが転換され、それに対応して、部門IIではIの追加可変資本に等しい価値額だけ、追加不変資本と、さらにそのIIの追加不変資本に対応する追加可変資本の蓄積がなされることは前提されているのである。ただそれはこの三つのパターンでは共通しているから、マルクスはそれらをすべて捨象して三つのパターンを規定する核心部分だけを取り出して問題を論じているのである。それが大谷氏にはまったく理解されていないのである。

だから大谷氏が  $I(v+1/2m) = IIc$  の場合について、〈この場合には、第I部門だけが蓄積し、第II部門では単純再生産が行なわれる〉などと述べておられるのは、まったく間違っているのである。別に部門Iだけが蓄積するのではなく、あくまでも両部門とも蓄積することが前提され

ているからである。ただ部門Ⅰの単純再生産部分の転換のためには、Ⅱの不変資本だけで十分であり、だからこの場合はⅠの単純再生産部分とⅡの不変資本部分とが相互に転換されるのである。そしてまただからこそⅠの追加可変資本はⅡの追加不変資本と量的に一致しなければならない、だからまた当然、ⅡもⅠの追加可変資本に対応した追加不変資本とその追加不変資本に対応した追加可変資本を蓄積するのであって、決してⅢは単純再生産を行なうだけではないのである。この大谷氏の説明は、氏がまったく問題を理解されていないことを暴露しているのである。

具体的に見てみよう。これはいわゆるB表式といわれる表式のケースである。

$$I) \quad 4000c + 1000v + 1000m = 6000$$

$$II) \quad 1500c + 750v + 750m = 3000$$

この表式が  $I(v + 1/2m) = IIc$  の条件を満たしていることは、 $I(1000v + 500m) = 1500c$  (II) で明らかである。このケースで〈第Ⅰ部門だけが蓄積し、第Ⅱ部門では単純再生産が行なわれる〉などということがどれほど問題を間違えて捉えているかは明らかであろう。部門Ⅰは蓄積分の500mのうち400mを追加不変資本として蓄積するのに対応して、100mを追加可変資本として蓄積するのであり、それに対応して部門Ⅱも750mのうち100mを追加不変資本として蓄積し、その100mの追加不変資本に対応して50mを追加可変資本として蓄積するのである（だから合計150mを750mから差し引く必要がある）。だから部門Ⅰだけでなく、部門Ⅱも蓄積することは明らかであろう。

次に〈 $I(v + 1/2m) > IIc$ の場合〉であるが、もちろん、これについても大谷氏の説明は正しくないのである。大谷氏が〈この場合には、第Ⅱ部門で、 $I(v + 1/2m) - IIc$ の価値額の追加不変資本の蓄積と、それに対応する価値額の追加可変資本の蓄積が行なわれる〉と述べておられるのは、この限りではそのとおりである。しかしそれはⅠの単純再生産部分の転換のために、それが行なわれるという自覚が大谷氏にはまったくないのである。それが問題なのである。つまりこのケースは、Ⅰの単純再生産部分を転換するには、Ⅱの不変資本だけでは不足するので、ⅢはⅠの単純再生産部分を転換するためだけでも蓄積を余儀なくされるケースである。だからもちろん、Ⅰはこの単純再生産部分の転換だけではなく、さらに1/2mの蓄積分を追加不変資本と追加可変資本として蓄積するのであって、よってⅢにおいても、Ⅰの単純再生産部分の転換に対応した蓄積だけではなく、さらにⅠの追加可変資本に対応した追加不変資本の蓄積とさらにそれに対応した追加可変資本の蓄積を、Ⅰの単純再生産部分の補填に対応した蓄積分に加えて蓄積しなければならないのである。

これも具体的に見てみよう。これは草稿65頁、大谷訳下44頁に掲げられている次のような表式である（これはエンゲルス版では「第二例」とされ、大谷氏によって〈五回目の試み〉とされた表式である）。

$$I) \quad 5000c + 1000v + 1000m$$

## II) $1430c + 285v + 285m$

この表式が  $I(v + 1/2m) > IIc$  の条件を満たしていることは、 $I(1000v + 500m) > 1430c$  (II) から明らかである。この場合、 $I(1000v + 500m)$  の単純再生産の転換のためには  $IIc$  は  $1500 - 1430 = 70$  不足している。だから II はこれを  $285m$  から持ってくる。すなわち  $70m$  (II) を追加不変資本として蓄積しなければならない。そしてそれに対応して  $14m$  (II) を追加可変資本として蓄積するわけである。ここまでは大谷氏も説明されている。しかし問題はそれで終わったわけではないということが大谷氏は分かっておられないことである。つまり部門 I は  $500m$  を有機的構成比  $5 : 1$  にもとづいて、 $417m$  を追加不変資本として、 $83$  を追加可変資本として蓄積する。だからそれに対応して、II も  $201m (=285 - 84)$  から、さらに  $83m$  (II) を追加不変資本として蓄積し、それに対応して  $17m$  (II) を追加可変資本として蓄積する必要があるのである (だから II の剰余価値の残りは  $201 - 100 = 101m$  となる)。これ以上の詳しい計算は不要であろう。

こうした間違いは、三つ目のケース  $I(v + 1/2m) < IIc$  の場合の説明を見れば、もっとハッキリする。大谷氏は  $I(v + 1/2m) < IIc$  の場合には、第 II 部門が単純再生産を行なうためだけでも、 $IIc - I(v + 1/2m)$  の価値額の生産手段を第 I 部門から買わなければならない。しかし、すでに 4 でマルクスが述べていたように、第 I 部門はこの生産手段を供給できないので、「相対的過剰生産 (II にとっての)」と「再生産の不足 (II)」が生じることになる」と述べておられる。

こうした説明はある意味無茶苦茶である。大谷氏にはマルクスが問題にしているのは部門 I の単純再生産部分の転換であるという認識がない、だからこうした無茶苦茶な説明になってしまっているのである。この場合は、I の単純再生産部分の転換を行なっただけでは、II の不変資本が余ってくるケースである。しかしこのことは「相対的過剰生産」などを意味するわけでは決していない。というのは、部門 I は単に単純再生産部分を転換すればそれでよいというわけではないからである。さらに部門 I は  $1/2m$  を蓄積する必要がある。そしてそのうちの一部を追加可変資本として蓄積し、それに必要な追加的な生活手段を必要とするわけである (もちろん、必要とするのは追加労働者であるが、それはすでに以前説明したように、マルクス自身はそれは十分承知しながら、しかし資本家の立場から見れば、II が I の追加労働者に販売する生活手段は I の追加可変資本の現物形態として考えることができると述べていたことを想起せよ)。だからその追加可変資本として必要な生活手段を  $IIc$  の余剰分が賄うことができるわけである。だからこの場合は二つのケースがさらに考えられるのである。すなわち、 $IIc$  の余剰分 (I の単純再生産部分を転換してさらに残った部分) が I の追加可変資本に対応した額である場合である。この場合は、II では一切蓄積は不要となり、それこそただ単純再生産を行なうだけで、I での蓄積は可能となるであろう。しかしその余剰分が、I の追加可変資本を賄うには不足する場合には、やはり II でもその不足分に対応した追加不変資本の蓄積が必要となり、だからまたその追加不変資本に対応した追加可変資本も II の剰余価値から蓄積に回される必要があるのである。

実はこのケースは具体的には上記のいわゆる「第二例」とエンゲルスによって提示されている表式 (大谷氏のいわれる〈五回目の試み〉) をマルクスが計算間違いを行なって計算している過

程で偶然生じた下記のような表式なのである（草稿69頁、大谷訳下66頁）。

$$I) 5800c + 1160v + 1160m$$

$$II) 1800c + 348v + 348m$$

この場合、 $I(v + 1/2m) < IIc$  の条件は  $I(1160v + 580m) < 1800c$  (II) で満たしていることが分かる。この表式の詳しい計算は省略するが、上記に説明した手順で計算すれば二つ目のケースに該当することが分かるであろう。すなわちIIcの余剰分60c (II) が、Iが580m (I) を有機的構成比5 : 1で蓄積した場合の追加可変資本97m (I) より小さいケースであり、よってIIはその不足分37m (II) を追加不変資本として、そしてそれに対応して7m (II) を追加可変資本として蓄積するケースである。

だから、この三つ目のケースについても、大谷氏の説明はまったくチンプンカンプンであることが分かる。大谷氏は〈すでに4でマルクスが述べていたように〉などとマルクスが拡大再生産の概念として、それが単純再生産とは質的に異なるものであること、あるいは後者から前者への移行には質的飛躍が必要であることを論証するために論じていた部分を、今になって持ち出したりされているが、これはトンチンカンとしか言いようがない。

このようにマルクスが強調している問題、すなわち拡大再生産の基礎には単純再生産があり、だからそれを常にベースにして蓄積についても考えなければならない、という重要なメッセージを見落とされている大谷氏は、大変な間違いを犯しているのである。

## ● [ i 「貨幣源泉」問題への最終的コメント ] について

大谷氏のこの連載の「下」が始まる最初に、第8稿の拡大再生産の部分の全体の見通しで紹介したように、この部分は、「6 第8稿における拡大再生産の分析の内容と特色」という大項目の「(1) 第8稿の拡大再生産論展開の筋道とポイント」のさらに下の項目【「5 第II部門での蓄積」での考察の歩み】を a ~ i に分けて論じていた、その最後の項目なのである。つまり草稿の最後の部分の解説にもなっているわけだ。

この部分は現行版ではエンゲルスによって「第4節 補遺」と題されている。この部分の詳しい解説は、私は別途、《第2部第8稿の第21章該当部分の段落ごとの解説》のなかで行なったので、ここで大谷氏が説明されていることに、それを対置する必要性はあまりないと感じている（それを再び繰り返すのはあまりにも面倒だ！）。だから大谷氏のこの草稿の最後の部分の説明の内容については、もちろん、私なりの異論はあるが、特に論じないことにする（それに対する私の見解を讀んでみようと思われる方は、段落ごとの解説の「その74」～「その78」を参照して頂きたい）。ただ大谷氏がこの部分をどのように位置づけておられるのかということについてだけ、もう一度キッチリ論じておく必要があると思う。だからそれだけをここでは論じることにしたい。

さて、大谷氏はこの部分をどのように位置づけておられるかは、次の一文で示されている。

〈マルクスは、蓄積についてのこの叙述では、固定資本がもたらす独自の諸問題は捨象してきたので、これについては「正確には示されていない」(S. 824.18) ことを注意したあと、最後のまとめを行なっている。ここは、エンゲルスが彼の版の第二一章で「IV補遺」としている箇所当たる。内容的には、「5 第II部門での蓄積」で提起していた基本的な問題の一つ、すなわちII にとっての「貨幣源泉」はどこにあるのか、という問題についての最終的なコメントである。〉 (下184頁)

〈以上で、「5 第II部門での蓄積」の考察が、だからまた「II 蓄積または拡大された規模での生産」の分析が終わった。第8稿ではじめて行なわれたこの「II」でのマルクスの考察は、単純再生産での考察を踏まえながら、さらに多くの新しい発見を含み、より進んだ理論的な研究のための手がかりを与える、きわめて内容豊富なものであった。〉 (下185頁)

つまり大谷氏によるとこの部分は〈内容的には、「5 第II部門での蓄積」で提起していた基本的な問題の一つ、すなわちII にとっての「貨幣源泉」はどこにあるのか、という問題についての最終的なコメント〉 (下184頁) ということになる。だからこの叙述をもって〈「5 第II部門での蓄積」の考察が、だからまた「II 蓄積または拡大された規模での生産」の分析が終わった〉 (下185頁) ということにもなるのである。つまりマルクスの「5 第II部門での蓄積」の考察、だからまたその中の「a」と「b」に分けられたうちの、後半の「b」で取り扱われていた問題が、この部分まで継続して論じられてきたのだという考えなのである（いうまでもなく、これは伊藤武氏の主張でもあり、むしろ伊藤氏の主張を大谷氏が受け入れたのであろう）。

しかしわれわれはそうした理解には疑問を禁じえない。なぜなら、マルクスが拡大再生産の諸表式のなかで、年次を重ねて蓄積が進行する諸過程を計算によって求めたり、そうした一連の考察を踏まえて、拡大再生産がⅠ、Ⅱ両部門で均衡を維持しながら、進行するための諸条件を纏めている部分等を見る限り、そこではマルクスが「b」で提起した「一つの新しい問題」、すなわち「貨幣源泉がⅡのどこで湧き出するのか」といった問題が、まったく何一つ考察の対象になっていないことを知っているからである。そればかりか、マルクスは蓄積基金の問題は、拡大再生産の表式の計算過程では一切捨象しているのである。だからどうしてもそうした部分も含めて項目「b」の延長であり、その枠内における考察であるかに理解する大谷氏らの解釈（伊藤武の理解でもある）を受け入れることはできないのである。

しかし、今問題になっている部分については、確かに大谷氏が指摘するように、「b」で提起された問題が再び考察の対象になっているように思える。だからすでに何度か述べてきたように、私は次のように推測するのである。

すなわち、マルクスは項目「b」で追究した課題を十分に果たさずに、《云々、云々。》（草稿61頁、大谷訳下21頁）という形で途中で切り上げていることはすでに指摘したが、その中途半端な終わり方を、ここで補足していると考えられるのである。もちろん、今回取り扱っている問題は、前回切り上げた部分に直接結びついた敘述ではなく、むしろ「b」でマルクスが最終的に論じたいと考えていた問題、つまり部門Ⅲにおける蓄積のための貨幣蓄蔵は如何になされるのか、という問題そのものを直接取り上げて、ここでは論じているように思えるのである。マルクスの当初のプランではそうした問題を、最初は《外観上の困難》として提起し（それがすなわち「一つの新しい問題」である）、そしてそれを解決する諸方策をいろいろと例示しながら、しかしそれらがすべて不可であることを論証することによって、結局、その《困難》は《外観上》のものに過ぎないことを明らかにした上で、その《困難》を《詳しく解決》する、つまり部門Ⅲにおける蓄積のための貨幣蓄蔵が如何になされるかを明らかにするつもりだったのである。いうまでもなく、その《詳しい解決》として考えていたのは、部門Ⅰでなされたのと基本的には同じである。すなわち、部門Ⅰと同様に、部門Ⅲにおいても、これから蓄積のための貨幣蓄蔵を繰り返す資本家群A、A'、A"等々と、すでに貨幣蓄蔵が終わって現実の蓄積を行なおうとしている資本家群B、B'、B"等々を想定することによって、問題は解決するということだったのである。ただ部門Ⅰとの相違は、部門Ⅲにおいては、考察の対象は、資本間の直接的な取り引きだけではなく、追加労働者の追加的生活手段の消費がその間に入ってくることである。しかしそうした追加労働者の消費が媒介する場合も、基本的には部門Ⅰと同じように問題は解決されうることは、すでに私は別途段落ごとの解読のなかで解明した通りである。

しかしながら、マルクス自身は、そうした部門Ⅲにおける蓄積のための貨幣蓄蔵が如何になされるべきかを論じる前に、その導入部分として論じた、困難を解決する諸方策を例示し、それらの不可を論証してそれらの困難が単なる外観上のものに過ぎないことを明らかにする途中で敘述を打ち切ってしまっているのである（この敘述を中途半端な形で打ち切った理由はハッキリとはしないが、それについても私なりの推測は示してきた）。だから肝心の部門Ⅱで如何にして蓄積のた

めの貨幣蓄蔵がなされるのかについては、結局、まったく論じることなく終わっていたのである。だからマルクスは草稿の最後に、そうした中途半端な敘述を補足し、そこで一番論じようと考えていた問題を再び取り上げて、直接その問題を論じるために、この箇所を書いたのではないかと思えるのである。そうした意味では後に紹介するが、エンゲルスがこの部分を「補遺」としたのは、その限りでは内容的に合致していたのである。

そしてさらに重要なことは、もしこの箇所が「5 部門IIでの蓄積」の「b」の途中で敘述を打ち切った部分の補足であるとするなら、これまでの草稿の敘述全体が、何かマルクスが何の構想もなしに暗中模索のうちに試行錯誤を繰り返しながら書き散らしたものなどでは決してなく、むしろしっかりとした構想のもとに書き進められたものであるということを教えるのである。なぜなら、もし書き散らしたものであったなら、わざわざその一部の敘述の不十分さを補うための補足を最後に書く必要もないからである。しっかりとした構想にもとづくものであったからこそ、「5」の「b」における敘述の中途半端な切り上げ方が気になって、その不十分さを感じて、最後にその補足を書く必要があったと言えるからである。そして私はマルクスの草稿を丹念に読めば読むほど、そうした確信を一つつまりしっかりとした構想のもとに書き進められているという確信を一つ深めているのである。だからまた大谷氏や不破氏などが、マルクスをまるで何も分からずに右往左往し、試行錯誤を繰り返しているかに論じているのを見ると、腹立たしい気持ちを禁じえないのである。自らの薄っぺらな理解を棚に上げて、何とマルクスをバカにした話ではないか、と。

ついでにエンゲルスがこの部分をどのように位置づけているかについて考えてみよう。エンゲルスはこの部分を「第4節 補遺」としていることについては、すでに指摘したが、本文のどの箇所についての「補遺」とエンゲルスは考えていたのであろうか。

それは「第3節 蓄積の表式的敘述」の最後の部分（「1 第一例」の直前）で、次のように書いていることから分かる。

《この貨幣を可能的追加貨幣資本の形成のために流通から引き揚げることは、ただ二つの道だけによって可能であるように見える。その一つは、資本家IIの一部分が他の部分をだまして銭盗りに成功することである。新たな貨幣資本の形成のためには、われわれが知っているように、あらかじめ流通媒体が拡大されていることは必要ではない。どの方面かで貨幣が流通から引き揚げられて蓄蔵貨幣として貯えられるということの他には、何も必要ではない。この貨幣が盗まれたものでもありうるということ、したがって資本家IIのある部分のもとでの追加貨幣資本の形成が他の一部分の積極的な貨幣損失と結びついていることもありうるということは、事柄に何もつけ加えはしないであろう。資本家IIのうちのだまされた部分は、幾らか派手な暮らしができなくなるであろう。だが、ただそれだけのことであろう。

もう一つの道は、IImのうちで必要生活手段で現われる部分が部門IIのなかで直接に新たな可変資本に転化させられることである。これがどのようにして行なわれるかは、この章の終わり（第4節）で研究されるであろう。》（全集版632頁）

この個所は、草稿ではどのあたりになるのかを探るためにやや長く引用しておいたが、この部分は草稿では、次の部分に該当すると思われる。

《この貨幣を流通から引きあげ、こうして媒介的に可能的な追加貨幣資本を形成するために蓄蔵貨幣を形成することは、二通りの道によってだけ可能であるように見える。

その一つは、資本家IIの一部分が他の部分をだまして貨幣を掠めることに成功することである。新たな貨幣資本の形成のためには、われわれの知っているように、あらかじめ通流媒介物が拡大されていることはけっして必要ではない。どの方面かで貨幣が流通から引きあげられて蓄蔵貨幣として蓄えられるということのほかには、なにも必要ではない。この貨幣が盗まれたものであり、したがってまた資本家IIのある部分のもとでの追加貨幣資本の形成がはっきりした貨幣損失と結びついているということが、云々、云々。》（草稿61頁、大谷訳20-21頁）

この二つを比べると、エンゲルスがかなり加筆していることが分かる。マルクス自身は、草稿では「二通りの道」があるかに「見える」と述べながら、「その一つ」については述べながら、「二つ目」について何も述べていないのに、エンゲルスはそれは《IImのうちで必要生活手段で現われる部分が部門IIのなかで直接に新たな可変資本に転化させられること》であり、そしてそれは《この章の終わり（第4節）》、つまり彼が「補遺」とした部分で研究されるとしているのである。

だからエンゲルスも、マルクスが《云々、云々。》と敘述を打ち切った部分の《補遺》として、草稿の最後の部分がかかれたと判断していることが分かるであろう。そしてこの限りでは、エンゲルスは正しいのである。ただエンゲルスはマルクスが外観上の困難を列挙して、その不可を論証しているものと、彼が補遺とした部分とを同じ延長上のものと考えているようなのであるが、これは明らかに間違っている。エンゲルスもマルクスが外観上の困難を列挙している部分の性格や意義を正しく読み取っているとは言い難いのである。

## ●第2部第2稿の執筆を中断した理由は何か？

さて、ようやく最後の項目「(2)第8稿における貨幣べール観の最終的克服」である。まずこの項目が全体のなかでどういう位置を占めているかを確認しておこう。これは大項目「6 第8稿における拡大再生産の分析の内容と特色」が「(1)第8稿の拡大再生産論展開の筋道とポイント」と今回の項目に分かれていたのである。だから今回の項目では、大谷氏が「第8稿における拡大再生産の分析の……特色」を「貨幣べール観の最終的克服」にあると考えておられることが分かるのである。果たしてそうした理解が正しいのか、具体的に検討していくことにしよう。しかしその前に、その前文ともいべきところで大谷氏が次のように述べておられることをまず問題にしておこう。

〈すでに見たように、第2稿での第3章は、一方では、第1稿の執筆のなかで獲得した、第3章についての構想を実現しようとしたものであったが、他方では、その執筆のなかで第3章の課題についての新しい観点をすでに抱えるようになっており、第3章の執筆のなかで、マルクスは、第1稿から引き継いだ構想と、この新しい観点との相克に直面して、古い枠組みを維持できなくなり、執筆の中断を余儀なくされた。第8稿は、この新しい観点にもとづいて第3章を全面的に書き直したものである。〉（下185頁）

これを読むと、マルクスが第2稿の執筆を中断したのは、内容的に行き詰まったからだということになる。そして第8稿は長い中断の後、〈新しい観点にもとづいて第3章を全面的に書き直したもの〉だという評価のように思われる。

後者の評価は、ほぼエンゲルスと同じものであるが、すでにこれまでも指摘してきたが、われわれはこうした評価には賛成しがたい。というのは、マルクスは決して第2稿におけるプランを変更しなかったし、だから第8稿は第2稿の第3章の〈全面的な書き直し〉ではなく、第2稿で不十分なところや、第2稿ではやり残している部分（特に「蓄積あるいは拡大再生産」等）を補うものとして書かれているものだからである。しかしそのことについては、これまでも十二分に論証してきたと思っている。だからこの問題を再び、ここで繰り返す愚は避けたい。

ここでは、最初の問題、すなわち、マルクスが第2稿の執筆を中断したのは、果たして内容的に行き詰まったからかどうか、という問題を論じておきたい。

われわれは決してそうではないと考えている。もしマルクスが内容的に行き詰まったが故に中断したのなら、その中断がおよそ6年間にもわたったことが説明不可能であろう。6年間もマルクスは行き詰まったままで、それを打開する方向を見いだすことが出来なかった、などと大谷氏は事実上主張されていることになるが、果たしてそんなことをわれわれは信用することが出来るだろうか。決して否である。とするなら、マルクスが第2稿の執筆を中断し、しかもその中断が6年間にもわたらざるをえなかった理由は、他にあるはずである。エンゲルスはその理由について、序文で次のように述べている。

《1870年以後、再び休止が生じたが、それはおもに病状のためであった。いつものようにマルクスは、この時期をもろもろの研究にあてた。農学、アメリカおよびことにロシアの農村事情、貨幣市場と銀行制度、最後に自然諸科学—すなわち地質学と生理学、またとくに独立の数学的研究—これらのものがこの時期の多数の抜き書き帳の内容をなしている。》（全集版8頁）

実際、この当時の全集巻末の「マルクスとエンゲルスの生活と活動」を読むと、マルクスは1870年1月なかばから3月はじめまで病臥したり、3月10日ごろに『資本論』の仕事を再開するとあるものの、5月10日には「マルクスが病気になったので、ユングが総評議会会議でマルクスに代わって〔マルクスの起草した〕決議案を読み上げる」とあり、かなりマルクスの体調の悪さを思わせる記述が目立つ（8月9日からは健康がすぐれないので、保養のために家族とともにラムズゲートに1カ月弱滞在したりしている）。またこのころからドイツとフランスとの戦争が始まり、1871年のパリ・コミュンへと発展する両国における労働者の階級闘争の高揚が見られ、マルクスとエンゲルスが国際労働者協会（インタナショナル）の総評議会の活動に重点を移して行った時期とも重なっている。またマルクスは1871年の末からは『資本論』第1巻の第2版の準備に取りかかり、「補足と改訂」を書いたりしており、さらに72年からはフランス語版への手入れが始まり、これが1875年まで続いている。つまりこうしたマルクス自身の体調の悪化と総評議会の活動の繁忙化や優先すべき仕事等が原因となって、第2草稿の執筆を中断することを余儀なくされ、1876年になるまで第2部の仕事に戻ることができなかった理由と考えられるのである。

そして実際、われわれがこの大谷論文の批判的検証によってすでに確認してきたように、大谷氏らが憶測するような意味での〈第3章の課題についての新しい観点〉といったものはマルクス自身にはまったく見られないし、ましてや〈第1稿から引き継いだ構想と、この新しい観点との相克に直面して、古い枠組みを維持できなくな〉ったなどということもまったくないことも確認してきたことなのである。

## ●「第8稿における貨幣べール観の最終的克服」とは何か？（その1）

先に見たように、大谷氏は〈第8稿における拡大再生産の分析の.....特色〉を〈貨幣べール観の最終的克服〉にあると考えておられる。果たしてそうした理解は正しいのか、具体的に検討していこう。

まず大谷氏は〈それでは、第3章（第3篇）をめぐるマルクスのこの悪戦苦闘の過程は、その全体を見ると、彼にとってどのような意味をもつ過程だったのであろうか〉（下185頁）と述べられ、【再生産過程の分析におけるマルクスの苦闘の意味】という項目を立てて考察を始めておられる。そこでは〈第1稿から第2稿を経て第8稿にいたる過程で、第3章（第3篇）でのマルクスの叙述には、さまざまな点での変遷が見られたが、決定的であるのは、社会的総再生産過程の分析の中心課題の変化〉（下185-6頁）だと述べられ、〈社会的総再生産過程の分析の中心課題〉がどのように〈変化〉したかを論じておられる。しかし、奇妙なことに、大谷氏は第1稿と第8稿とを比較しながら、どうしても第2稿を抜かしておられるのである。すなわち次のように述べておられる。

〈第1稿では、中心課題を、総商品資本あるいは総商品生産物の諸要因のあいだでの「実体的転換」、すなわち「素材的変換」の解明に見て、この解明のためには、まずもって、これらの転換を媒介する貨幣の運動を捨象することによって、再生産過程の核心的な運動を把握すべきであり、この運動を媒介する貨幣の運動の考察は、いわばそれに付随するものでもあるかのように副次的に取り扱われていた。それにたいして、第8稿では、分析の中心課題は、流通手段としての貨幣の機能と蓄蔵貨幣の形態にある貨幣の機能とが再生産過程のなかで果たす、それぞれ異なった役割を明確に把握することによって、社会的総再生産過程における個別諸資本の循環の相互の絡み合いを明らかにするとともに、それら資本の循環と貨幣運動との絡み合いとを全体的に解明する、というところに置かれている。〉（下186頁）

確かに第1稿では貨幣流通による媒介を入れた考察とそれを捨象した考察とが入り交じり、マルクスはそうした叙述の問題点を自身で反省して、《最終的な叙述では》この両者分離して論じるべきということを述べている（大谷他訳前掲邦訳書213頁）。だから第2稿では、それはいわゆる「二段の叙述構成」として具体化され、「流過程および再生産過程の現実的諸条件」と題された第3章（篇）の「第1節 社会的観点から考察された可変資本、不変資本および剰余価値」では、「A 単純再生産」も「a 媒介する貨幣流通のない説明」と「b 媒介する貨幣流通のある説明」とに分けられ、「B 拡大された規模での再生産。蓄積」も、「a 貨幣流通のない叙述」と「b 貨幣流通のある叙述」とに分けられているのである（八柳良次郎訳第2草稿、前掲訳5頁）。

ところが大谷氏は、この第2稿についてはどうしてもまったく不問にされ、第1稿と第8稿だけを直接較べておられるのである。〈マルクスの叙述...（の）...変遷〉を問題にされるのなら、当然、その叙述がほぼ第2部全体をカバーしている第2草稿を論じないのは片手落ちといわざるをえないであろう。だからここには明らかに何らかの意図があると思わざるをえない。

確かに第1稿では、主要には、大谷氏が言われるように、〈総商品資本あるいは総商品生産物の諸要因のあいだでの「実体的転換」、すなわち「素材的変換」の解明〉に重点を置いているというならそうかもしれない。しかし、マルクス自身が《最終的な敘述では、この第1節を、(1)総再生産過程における商品資本の現実的素材変換、(2)この素材変換を媒介する貨幣流通、という二つの部分に分離した方がよいであろう。いまそうなっているように、貨幣流通を考えに入れることは、たえず展開の脈絡を破ることになるからだ。》(前掲大谷他訳第1稿213頁)と述べているように、第1稿では貨幣流通を考慮に入れた考察も行なわれているのである。そして第8稿では、大谷氏が〈流通手段としての貨幣の機能と蓄蔵貨幣の形態にある貨幣の機能とが再生産過程のなかで果たす、それぞれ異なった役割を明確に把握〉していると言われるように、問題は最初から貨幣流通による媒介を考慮して取り上げられているのである。しかしそのことは、マルクスの問題意識が、すなわち〈社会的総再生産過程の分析の中心課題〉が〈総商品資本あるいは総商品生産物の諸要因のあいだでの「実体的転換」、すなわち「素材的変換」の解明〉から〈流通手段としての貨幣の機能と蓄蔵貨幣の形態にある貨幣の機能とが再生産過程のなかで果たす、それぞれ異なった役割を明確に把握〉することに〈変化〉したことを意味するのでは決してない。マルクスの問題意識は最初から一貫している。つまり《総再生産過程における商品資本の現実的素材変換》と《この素材変換を媒介する貨幣流通》をともに考察することである。ただ第1稿では、その両方が分離されずに論じられていたのが、第2稿では、それらが整然と分離されて論じられており、第8稿では、そのうち第2稿では、十分展開されなかった貨幣流通による媒介を考慮した敘述を中心に補足的に論じられているだけなのである(だからそれは、何度もいうが、大谷氏やエンゲルスが主張されているような、〈新しい観点にもとづいて第3章を全面的に書き直したもの〉では決してないのである)。もし〈変遷〉いうなら、問題がより深められ、より整理されており、また諸概念がより厳密にされて行っていること、さらにいまだ不十分で手つかずの部分だったものが一つ一つ解明されて埋められて行っているということであろうか。しかしそのことはマルクスの問題意識や分析の重点が〈変化〉したことを決して意味しないのである。

さて、大谷氏は〈中心課題のこの変遷のなかに、二つの点での大きな変化を見ることができると〉(下186頁)とされて、二つのものを上げておられる。その最初のものは次のようなものである。

〈第一に、第1稿では、社会的総再生産過程を観察するさいに、主として、再生産の諸要素のあいだの交換、したがって結局は、商品と商品との交換に目を向けていたのにたいして、第8稿では、二つの部門にまとめられた個別諸資本が、諸要素の転換運動に媒介されて経ていく価値増殖と価値実現の運動に、したがって結局は、二つの部門にまとめられた個別諸資本の循環の絡み合いに目を向けるようになった、という変化である。〉(下186頁)

まず問題の重点が移っている、というなら確かにそうである。しかしそのことは最初の考察が否定されて、新しいものに变化したことを意味するのではない。例えば第1稿では〈商品と商品

との交換に目を向けていた〉のに、第8稿では、〈個別諸資本の循環の絡み合いに目を向けるようになった〉と大谷氏と言われるのであるが、第8稿の重点をこのように捉えることの問題点とはとらえずおいておくとしても（これはすぐに後で問題にする）、第8稿では〈商品と商品との交換〉という契機がどうでも良くなったかに理解するならば、とんでもないことなのである。社会的総資本の再生産過程を商品資本の循環として考察するということは、結局は、総商品資本が社会的に、素材的にも価値的に如何に補填し合うかが問題になるのであり、その限りでは〈商品と商品との交換〉として現われるからである。もちろん、それらは単純な商品の交換ではなく、商品資本の流通である。だからそこには固有の新しい条件が加わってくる。例えば固定資本の補填や蓄積という条件において、社会的な総再生産過程を考察する場合には、蓄蔵貨幣とその量が再生産の新しい条件となってくる。しかし蓄蔵貨幣が諸資本の再生産を媒介する貨幣の新しい形態として加わるにしても、そうした蓄蔵貨幣も流通にでて行くときは流通手段（広い意味での）として機能するのであり、流通過程ではもちろん直接的ではないにしても、やはり〈商品と商品との交換〉を媒介するものとして現われるのである。あるいはそうしたものが一つの条件になるのである。例えば蓄蔵貨幣が流通にでて行く場合には、それは一方的な購買として現われる。その限りではそれは〈商品と商品との交換〉ではないかに見える。しかしそれを社会的な再生産の一契機として捉えるならば、そうした一方的な購買に対しては、他方における一方的な販売、すなわち商品を販売するだけで販売して入手した貨幣を蓄蔵する行為が対応しなければならず、こうした条件を全体として見るならば、社会的には、直接的ではないにしても、やはり一方における商品の購買に対しては、他方における商品の販売が対応しており、〈商品と商品との交換〉が成り立っているし、そうでなければならないのである。ただ問題がより複雑になり、内容規定がより豊かになっているだけに過ぎない。

さらに問題なのは、大谷氏が〈第8稿では、二つの部門にまとめられた個別諸資本が、諸要素の転換運動に媒介されて経ていく価値増殖と価値実現の運動に、したがって結局は、二つの部門にまとめられた個別諸資本の循環の絡み合いに目を向けるようになった〉などと述べておられることである。先に引用した文章のなかでも、〈社会的総再生産過程における個別諸資本の循環の相互の絡み合いを明らかに〉しているという文言があったが、こうした理解はまったく納得がいかない。どうして〈個別諸資本の循環の絡み合い〉なのか。そんなことを第8稿のどこでマルクスは論じているというのであろうか、まったくもって不可解である。われわれが知っているのは、マルクスが《蓄積または拡大された規模での生産》と題した草稿の最初のあたりで、個々の資本家にとって現われた現実の蓄積は、年間再生産においても現われざるをえないと述べて、われわれがこれから対象にするのは《年間再生産》であり《年間の社会的再生産》であると述べていたことである。確かに《年間の社会的再生産》には個別諸資本の運動が含まれていること、あるいは〈個別諸資本の循環〉が〈絡み合〉って存在していることが前提されているというならそうである。しかしそのことは年間の社会的再生産においては、それらは直接には考察の対象としては現われないのである。それはただ前提されているだけである。そればかりかマルクスは社会的総再生産の過程をすべての資本が年1回転すると仮定して考察している。つまり個別諸資本がすべて年1回転するということは、流通期間をゼロとするならば、結局、すべての資本が周期を同じくして年1回転することを意味するのであり、だから個別諸資本の循環の絡み合いと言っても、

そこには自ずから制限があることは最初から明らかなのである。個々別々の諸資本がそれぞれ異なった周期や循環期間を異にして絡み合っているような実際の社会的総資本の再生産過程をそのまま直接前提したのでは科学的な考察は不可能だからである。もしマルクスが第8稿では〈個別諸資本の循環の絡み合いに目を向ける〉ようになったと言われるのなら、具体的にマルクス自身の敘述を引き合いに出してそれを説明すべきではないだろうか。

確かに、マルクスは第8稿では、次のような〈絡み合い〉については論じている。

《労働者階級 I によって労働力がたえず販売されるということ， [I の] 可変資本部分が彼らの商品資本の一部分から貨幣資本へと回復されること， 彼ら [II] の不変資本の一部分が彼らの商品資本の一部分から彼らの不変資本の自然形態へと補填されること， ——これらは互いに条件となり合っているが， しかし非常に複雑な過程によって媒介されるのであって， この過程は実際には次の3つの互いにかみ合いながら互いに独立に進行する流通過程を含んでいるのである。

1) 労働者 (I) の側では，  $A - G (=W - G)$  ， 資本家 I への彼らの労働力の販売。  $G - W$  (II) (資本家 II の諸商品の購買。したがって，  $A - G$  (I) ...  $G - W$  (II) 。結果 ——  $A$  (労働力) を維持し， それをふたたび商品として《労働》市場 (I) で [売ることができる] 。

2) 資本家 II の側では，  $W - G$  (労働者 I への彼らの商品の販売) ...  $G - W$  (資本家 I の諸商品 (v I) の購買) 。結果 —— 彼らの不変資本の一部分の， 現物形態への回復。

3) 資本家 I の側では，  $G - A$  (労働力 I の購買) —  $W - G$  (資本家 II への彼らの商品の一部分の， すなわち労働者 I によって新たに創造された (v + m) I のうちの v 部分の販売) 。結果 —— 彼らの可変資本価値の， 商品資本 (I) の価値部分から可変貨幣資本としての回復。

過程そのものもつこの複雑さが， そっくりそのまま， 不正常的経過にきっかけを与えるものとなるのである。》 (大谷訳上51-2頁)

この部分はエンゲルスが編集の段階で削除した部分であるが (エンゲルスはこの部分の敘述が必ずしも拡大再生産に固有の問題ではないと考えて削除したのかも知れないが) 、しかし非常に重要なことを論じていることは確かである。だがここでマルクスが述べていることは決して〈個別諸資本の循環の絡み合い〉といったものではない。まずどこにも〈個別諸資本〉などでて来ない。ここでマルクスが述べているのは次のようなことである。まずマルクスは、このパラグラフの一つ前のパラグラフで、一方的販売による貨幣蓄蔵と一方的購買による蓄蔵貨幣の現実の蓄積のための投資とが、価値量において釣り合わなければならないが、しかしそれは資本主義的生産においてはまったく偶然的であり、だからそれらは恐慌の諸可能性に転化すると述べていた。そしてこのパラグラフでは、一方的販売や一方的購買という点では、こうした過程においてもまったく同じことが言えるとマルクスは指摘しているのである。例えば労働者 I は常に資本家 I に彼らの労働力をただ一方的に販売するだけで、販売の見返りに資本家 I からその生産物を購入するわけではないこと、労働者 I は、資本家 II から一方的に生活手段を購入するだけで、彼らに労働力を売るわけではないこと、逆に資本家 III は労働者 I に一方的に生活手段を販売するだけであること、資本家 I は資本家 III に可変資本部分 (生産手段) を一方的に販売するが、資本家 II から必要生活手段

を購入するわけではないこと、等々。つまりこれらの過程はすべて一方的であり、相互に独立した流過程であるが、にもかかわらずそれらは社会的には、偶然的な諸運動を通じて、量的に釣り合う必要があるのである。だからこそ、こうした過程の複雑さは、そのまま不正常的経過にきっかけを与えるのだということなのである。どこにも〈個別諸資本〉などでて来ないし、また〈個別諸資本の循環の絡み合い〉といったものが問題になっているわけではない。ここで問題になっているのは、やはり社会の総商品資本と労働力が貨幣流通を媒介して相互に転換し合い補填し合う過程での〈絡み合い〉なのである（もちろん、ここで対象になっているのはそのすべてではなく、その一部分なのではあるが）。

次に大谷氏が〈中心課題のこの変遷のなかに、二つの点での大きな変化を見る〉とされている、その二つ目というのは、次のようなものである。

〈第二に、第1稿では、社会的総再生産過程における貨幣の役割を主として素材変換を媒介する流通手段の機能に見ていて、再生産過程における貨幣運動は、いわゆる「貨幣還流法則」——すなわち流通手段の前貸と還流の法則——とそのバリエーションでしかなかったのにたいして、第8稿では、社会的総再生産過程においても、流通手段としての貨幣の機能と蓄蔵貨幣の形態にある貨幣の機能との区別は厳然として貫徹しているだけでなく、再生産過程におけるこの二つの機能を峻別することによってはじめて、単純商品流通とは異なる資本主義的流過程の独自の諸現象を解明しており、再生産過程における貨幣運動については、流通手段の前貸と還流の運動とは明確に区別されるべき、一方的販売および一方的購買による、蓄蔵貨幣から流通手段へ、流通手段から蓄蔵貨幣へという反対方向への二つの貨幣運動を明確に摘出している、という変化である。こうした変化が、まず貨幣流通を捨象し、次にそれを導入して叙述するという二段構えの叙述方法を放棄したと深く結びついていたことは、ここで再説するまでもないであろう。〉（下186頁）

第1稿では資本の流過程の契機として蓄蔵貨幣の役割を見ていなかったと言われるのであるが、しかし固定資本の補填や蓄積を貨幣流通を媒介にして考察しない限り、それが問題にならないのは当然ではないだろうか。それらが第8稿では考察の対象になったというに過ぎないのである。しかしだからと言って、蓄積や固定資本の補填において蓄蔵貨幣が資本の流通において必然的な契機として入ってくるということが第8稿で初めて解明されたかに考えるのはまったく間違っている。まず蓄積についていうなら、すでに見たように、第8稿の《蓄積または拡大された規模での生産》と題された最初の部分、すなわち第1、第2パラグラフで個別資本を例に論じたときに、《第1部では、蓄積が個々の資本については次のように現われる》と述べていたように、こうした問題はすでに「第1部 資本の生産過程」で、すでに個別資本の観点から明らかにされていたことなのである。だから蓄積のためにはそれに先立って一定の必要な額になるまで貨幣蓄蔵が必要となるということは第一部で解明済みである。だから資本の流過程で蓄蔵貨幣の形成が必然的にその契機に入ってくるというようなことは自明のことだったのである。また固

定資本の補填についても、すでに第2部第2篇の「固定資本の回転」を論じたときに、それは指摘されていたことである（これは第2稿ではあるが）。固定資本を流動資本と区別するのは、まさにその価値の移転の相違によるのであって、だから固定資本はその部分的な磨滅とともに、その磨滅分が蓄蔵貨幣の形態で堆積され、そして完全に磨滅した時点で、その堆積され終わった蓄蔵貨幣で、固定資本全体が更新されるといったことはすでに考察済みのことなのである。このことは、例えば次のような一文をみれば、明瞭である。

《われわれがこれらのことを、ただ単純な貨幣流通だけを前提して、もっと後ではじめて展開される信用制度を少しも顧慮することなしに、考察するならば、運動の機構は次のようなものである。第一部（第三章第三節a）で明らかにしたように、ある社会に現存する貨幣の一部分はいつでも蓄蔵貨幣として遊休しており、他の部分は流通手段として、または直接に流通している貨幣の直接的準備金として機能しているとしても、貨幣の総量が蓄蔵貨幣と流通手段とに分かれる割合は絶えず変動する。われわれの場合には、ある大きな資本家の手の中に蓄蔵貨幣として大量にたまっているはずの貨幣が、いま固定資本の購入にさいして一度に流通に投げ込まれる。それはそれ自身また社会の中で再び流通手段と蓄蔵貨幣として分けられる。固定資本の損耗の程度に応じてその価値は償却基金という形で出発点に還流するのであるが、この償却基金によって、流通貨幣の一部分は、前に固定資本を購入したときに自分の蓄蔵貨幣を流通手段に転化させて手放したその同じ資本家の手の中で、再び――長短の期間――蓄蔵貨幣を形成する。それは、社会に存在する蓄蔵貨幣の絶えず変動する分割であって、この蓄蔵貨幣は交互に流通手段として機能してはまた再び蓄蔵貨幣として流通貨幣量から分離されるのである。大工業と資本主義的生産との発展に必然的に並行する信用制度の発展につれて、この貨幣は蓄蔵貨幣としてではなく資本として機能するのであるが、しかしその所有者の手の中でではなく、その利用をまかされた別の資本家たちの手の中で機能するのである。》（第2部全集版222頁）

だから第8稿であらためて、社会的総資本の再生産の観点から、そうしたことが論じられたからと言って、そうしたことが第8稿で初めて解明されたかに考えるのは間違いである。第8稿では、そうした問題が社会的な年間再生産の過程として貨幣流通を媒介にして考察されているだけなのである。

そして大谷氏は問題が〈貨幣運動〉であるかに述べておられるのは、如何なものであろうか。例えば第1稿では〈いわゆる「貨幣還流法則」――すなわち流通手段の前貸と還流の法則――とそのバリエーションでしかなかったのにたいして、第8稿では……再生産過程における貨幣運動については、流通手段の前貸と還流の運動とは明確に区別されるべき、一方的販売および一方的購買による、蓄蔵貨幣から流通手段へ、流通手段から蓄蔵貨幣へという反対方向への二つの貨幣運動を明確に摘出している、という変化である〉と述べておられる。しかし第8稿でマルクスが考察の対象にしているのは、大谷氏が指摘するような〈貨幣運動〉といったものではない。例えば次の一文を検討してみよう。

《(1)購買のあとに販売が、また販売のあとに購買が同じ価値額で続いて行なわれるということによって均衡がつくりだされるかぎりでは、購買のさいに貨幣を前貸した側への、ふたたび買うまえにまず売ったほうの側への貨幣の還流が行なわれる。しかし、商品転換そのもの——年間生産物のさまざまな部分のそれ——にかんする現実の均衡は、互いに転換される諸商品の価値額が等しいということを条件とするのである。

(2)しかし、たんに一方的な諸変態、すなわち一方では大量のたんなる購買、他方では大量のたんなる販売が行なわれるかぎり——そしてすでに見たように資本主義的な基礎の上での年間生産物の正常な転換はこれらの一方的な変態を必然的にする——、均衡はただ、一方的な購買の価値額と一方的な販売の価値額とが一致することが前提されている場合にしか存在しない。商品生産が資本主義的生産の一般的形態だということは、貨幣が流通手段としてだけでなく貨幣資本として資本主義的生産において演じる役割を含んでいるのであり、またそのことは、単純な規模のであれ拡大された規模のであれ再生産の正常な転換の、正常な経過の、この生産様式に特有な一定の諸条件を生み出すのであるが、均衡は——この生産の形成は自然発生的であるので——それ自身一つの偶然だから、それらの条件はそっくりそのまま、不正常的経過の諸条件に、恐慌の諸可能性に一転するのである。》（草稿51頁、大谷訳上48-49頁、(1)、(2)は引用者が便宜的に付けた）

ここでマルクスが述べていることは、まさに大谷氏が第1稿と第8稿の〈変化〉として論じておられる内容と同じものが明らかにされている。(1)の内容は大谷氏が第1稿でマルクスが主に考察していると述べておられるものであり、(2)の内容はマルクスが第8稿で論じているものとされていることである。しかしいずれもマルクスが問題にしているのは、「均衡の条件」である。確かに(1)では、《購買のさいに貨幣を前貸した側への、ふたたび買うまえにまず売ったほうの側への貨幣の還流が行なわれる》と「貨幣の還流法則」についても言及しているが、しかしマルクスが主として論じていることは、《商品転換そのもの——年間生産物のさまざまな部分のそれ——にかんする現実の均衡は、互いに転換される諸商品の価値額が等しいということ

《を条件とする》ということである。

ましてや(2)では貨幣運動など問題にもなっていない。ここでも問題なのは、《均衡はただ、一方的な購買の価値額と一方的な販売の価値額とが一致することが前提されている場合にしか存在しない》という「均衡の条件」なのである。そしてこれこそ《商品生産が資本主義的生産の一般的形態だということは、貨幣が流通手段としてだけでなく貨幣資本として資本主義的生産において演じる役割を含んでいるのであり、またそのことは、単純な規模のであれ拡大された規模のであれ再生産の正常な転換の、正常な経過の、この生産様式に特有な一定の諸条件を生み出す》とマルクスが述べていることの本当の内容なのである（なぜこういうことを強調するかということ、第8稿では、貨幣は流通手段としてだけではなく、貨幣資本としても捉えられていることを強調する人たちは、実際には、その内容について、つまり貨幣が流通手段としてだけでなく貨幣資本としても捉えられる必要があるということマルクスが実際には何をいわんとしているのかということについて、あまりにも曖昧であり、だからとんでもないことまで言い出しているからである。例えば社会的総資本の再生産過程を商品資本の循環として捉えるだけでは不十分で、貨幣

資本の循環としても捉える必要がある、などという大谷氏の主張などはその典型である！)。だから問題は〈一方的販売および一方的購買による、蓄蔵貨幣から流通手段へ、流通手段から蓄蔵貨幣へという反対方向への二つの貨幣運動を明確に抽出〉することなどにあるのではないのである。

そしてこれはもはや言うまでもない事であるが、ここで大谷氏が、氏が言われるところの〈中心課題の変化〉が〈まず貨幣流通を捨象し、次にそれを導入して叙述するという二段構えの叙述方法を放棄したことと深く結びついていた〉などと述べておられることもまったく正しくないことは、すでにこれまで述べてきたことから、十二分に論証されていると思う。

(この項目は字数の関係で二分割し、以下は「その2」に続きます。)

## ●「第8稿における貨幣べール観の最終的克服」とは何か？（その2）

さて、大谷氏はこのように二つの〈変化〉を指摘されたあと、次のようにそれをまとめておられる。

〈この二つの変化が意味するのは、一言にして言えば、「経済学、ことに重農学派やA・スミス以来の自由貿易学派がやっているような、実際にはただ、商品と商品との転換が行なわれるだけだということを前提すること」（S. 794.39-41）という、古典派経済学に纏い付いていた貨幣べール観の最終的な払拭であり、第二稿までのマルクスにもなお残っていたその最後の残滓の除去であり、それによるマルクス独自の社会的再生産の理論の最終的仕上げである。〉（下186-7頁）

しかしこれはマルクスに対する不当な言い掛かりであるとしか言いようがない。大谷氏は何をもって、〈貨幣べール観〉の〈残滓〉が、〈第二稿までのマルクスにもなお残っていた〉と主張されるのであろうか。大谷氏は〈この二つの変化が意味するのは〉と述べておられる。つまり、これまで考察した〈二つの変化〉からそう結論付けておられるわけである。だからそれまでの大谷氏の主張をもう一度振り返って整理してみよう。

まず大谷氏は〈第1稿から第2稿を経て第8稿にいたる過程で、第3章（第3篇）でのマルクスの叙述には、さまざまの点での変遷が見られたが、決定的であるのは、社会的総再生産過程の分析の中心課題の変化〉だと主張され、そして〈社会的総再生産過程の分析の中心課題〉がどのように〈変化〉したかを論じてきた。それを大谷氏は第1稿と第8稿とを比較して、次の二つの〈変化〉であると主張されたわけである。

（1）一つは〈社会的総再生産過程を観察するさいに〉、〈第1稿では、……主として、再生産の諸要素のあいだの交換、したがって結局は、商品と商品との交換に目を向けていた〉のが、〈第8稿では、……二つの部門にまとめられた個別諸資本の循環の絡み合いに目を向けるようになった、という変化〉というものであった。

（2）もう一つは〈社会的総再生産過程における貨幣の役割〉を問題にされ、〈第1稿では、……主として素材変換を媒介する流通手段の機能に見てい〉たが、〈第8稿では、……流通手段としての貨幣の機能と蓄蔵貨幣の形態にある貨幣の機能との区別は厳然として貫徹しているだけでなく、再生産過程におけるこの二つの機能を峻別することによってはじめて、単純商品流通とは異なる資本主義的流通過程の独自の諸現象を解明して〉いると主張され、さらに〈再生産過程における貨幣運動〉としても〈第1稿では、……いわゆる「貨幣還流法則」——すなわち流通手段の前貸と還流の法則——とそのバリエーションでしかなかったのにたいして、第8稿では、……流通手段の前貸と還流の運動とは明確に区別されるべき、一方的販売および一方的購買による、蓄蔵貨幣から流通手段へ、流通手段から蓄蔵貨幣へという反対方向への二つの貨幣運動を明確に抽出している、という変化〉というものであった。

しかしすでに検討したように、(1)で述べている問題は、むしろ大谷氏の側の混乱としかいえない問題意識である。社会的な総資本の再生産過程において、〈個別諸資本の循環の絡み合い〉といったものが直接の対象になりうると考えること自体が間違っているからである。それは前提されているというなら否定はしないが、それ自体が直接考察の対象にはなりようがないからである。もし大谷氏がそうした〈個別諸資本の循環の絡み合い〉を直接対象にして社会的総資本の再生産過程が考察できると言われるなら、一度、やって貰いたいものである。個別諸資本というのは、それを構成する諸部分すら、循環や回転期間がそれぞれ異なっており、それらは極めて複雑に絡み合っているのである。そうしたものをそのまま前提してそれを対象に科学的な考察ができる筈はないのである。科学的には現実の複雑な錯綜したものをそのまま前提するのではなく、物理学や化学における実験のように、一定の純粋な条件をわれわれの抽象力によって前提して考察する以外にやりようがないのである。そして社会的総資本の再生産においては、マルクスはすべての資本が年一回転する（流通期間はゼロ）という条件のもとに考察している。だから社会的には大きくは第I部門と第II部門、すなわち生産手段の生産部門と消費手段の生産部門が前提され、第I部門には、さらに消費手段の生産のための生産手段を生産する部門と生産手段の生産のための生産手段を生産する部門が、第II部門には、必要消費手段の生産部門と奢侈品を生産する部門にそれぞれ分けられているが、しかしそれらはまだ決して〈個別諸資本〉などは決していない。それは大部門に対して、中部門を構成するだけである。それ以上のより詳細な生産部門の区別はマルクス自身は考察していない（ましてや〈個別諸資本〉など問題にもしていない）。そしてそれぞれの生産部門間のそれぞれの商品資本の価値構成の諸部分が如何に補填し合うかを考察しているのであって、ここには〈個別諸資本の循環〉など出てくることはないし、ましてそれらの〈絡み合い〉もまったく出てくる余地はないのである。そしてこれ以外にわれわれは社会的な総資本の再生産過程を科学的に考察する方法を知らないのである。いやそうではない、社会的総資本の再生産の考察においても〈個別諸資本の循環の絡み合い〉が考察されなければならないと、大谷氏が言われるのであれば、何度もいうが、是非、その見本を見せて頂きたいものである。そしてマルクスが第8稿でそうした考察を行なっていると言われるのであれば、マルクスのそうした文章をお示し頂きたい。大谷氏はマルクスは第8稿で〈個別諸資本の循環の絡み合い〉という視点を新たに据えていると言われながら、何一つ具体的にマルクス自身の文章を示されていないからである。

大谷氏が〈第8稿では、……二つの部門にまとめられた個別諸資本の循環の絡み合いに目を向けるようになった〉と言われることに対置されているのは、〈第1稿では、……主として、再生産の諸要素のあいだの交換、したがって結局は、商品と商品との交換に目を向けていた〉ということである。この後者の〈商品と商品との交換〉というのは、最初に大谷氏がマルクスから引用された文章の中にある言葉である。果たしてマルクスは、大谷氏が引用された文章において、この〈商品と商品との交換〉に対して、何を対置しているのか、本当に〈個別諸資本の循環の絡み合い〉を対置しているのかをわれわれは検証してみよう。まずそれが分かるように、マルクスの文章を大谷氏が引用されている前後を含めて少し長く引用してみよう（大谷氏が引用された部分

を赤字で示す)。

《ついでに、ここでふたたび、次のことを述べておこう。以前（単純再生産の考察のところ）と同様に、ここでふたたびわれわれは次のことを見いだす。年間生産物のさまざまな構成部分の転換，すなわちそれらの流通 {これは同時に、資本の構成部分の回復——単純な規模での、または拡大された規模での資本の再生産，しかもさまざまな規定性における資本（不変資本，可変資本，固定資本，流動資本，貨幣資本，商品資本）の再生産——でなければならない} は、われわれが1) [単純再生産] のところで、たとえば固定資本の再生産のところで見たとまったく同様に、けっして、あとから行なわれる販売によって補われるたんなる商品購買，またはあとから行なわれる購買によって補われるたんなる販売を前提していない。したがって、**経済学**，**ことに重農学派やA. スミス以来の自由貿易学派が前提しているような**，**実際にはただ商品対商品の転換が行なわれるだけだ**ということ**を前提してはいないのである**。単純再生産のところで見たとように、たとえば不変資本Icの固定諸成分の周期的更新 {——（その総資本価値は $(v+m)(I)$ の諸要素に転換される）}，それは、固定資本の最初の出現〔と更新〕との中間期間には、つまりその機能期間の全体にわたって、まだ更新されないで以前の形態のまま働き続けるが、他方ではその価値がだんだん貨幣として沈澱していく——} は、cIIのうち貨幣形態から現物形態に再転化する固定部分のたんなる購買を前提するが、この購買にはm(I)のたんなる販売が対応する。他方ではそれは、cIIのたんなる販売（すなわちcIIのうち貨幣として沈澱する固定価値部分の販売）を前提するが、この販売にはm(I)のたんなる購買が対応する。この場合に転換が正常に行なわれるためには、たんなる購買（cIIの側からの）が価値の大きさから見てたんなる販売（cIIの側からの）に等しいということ、また同様に、m(I)からcIIのA) へのたんなる販売がcIIのB) からのm(I)のたんなる購買に等しいということが前提される。〔/〕同様にここでは、m(I)のうちの貨幣蓄蔵部分であるA, A'のたんなる購買（「販売」の誤記？——引用者）が、m(I)のうちの、蓄蔵貨幣を追加生産資本の諸要素に転化させる部分であるB, B', 等々と均衡を保っている，ということが前提される。》（草稿51、大谷訳上48-9頁、〔/〕は引用者が付けた）

実はこの引用文に続く文章は、われわれが先に (1)(2)と便宜的に番号を打って紹介した文章なのである。

この引用文では、前後の関連が分かりにくいので注意が必要なのは、マルクスは単純再生産のときに考察した固定資本の補填のケースについて論じているのであるが、それはあくまでも蓄積に関連させて論じているということである。だから最初の部分（大谷氏が引用された部分までのところ）と、〔/〕以下の部分とは蓄積について述べているということである。すなわち、最初に2回出てくる《ここでふたたび》と、〔/〕以下で出てくる《同様にここでは》の、《ここ》とは、同じ内容であり、それまで考察してきている部門Iにおける不変資本の蓄積の場合のことである。それに気をつけて、この文章を検討して頂きたい。

明らかにここでマルクスが《**重農学派やA. スミス以来の自由貿易学派が前提しているような**，**実際にはただ商品対商品の転換が行なわれるだけだ**》という主張に対置しているのは、一方的購買や一方的販売という事態である。すなわち単純な商品流通ではなく、商品資本の流通において

は蓄蔵貨幣もその媒介の必然的契機として入ってくるということである。そしてそれは単純再生産の場合の固定資本の補填においてすでに見たことであるが、《ここ》、つまり蓄積の場合においても同じであり、貨幣を蓄蔵する部門A、A'、A"等々の単なる販売が、現実の蓄積を行なうB、B'、B"等々等の単なる購買と価値額で一致することが均衡の条件として現われてくることを明らかに示しているのである。

だからここでは〈個別諸資本の循環の絡み合い〉などを、直接にはまったくマルクスは問題にもしていないことが分かるであろう。そしてこれは当然である。何度もいうが、社会的総資本の運動には〈個別諸資本の循環の絡み合い〉が前提されていることは誰も否定しないし、否定しようがない。しかしそのことは社会的総資本の運動を考察する場合においても、直接に〈個別諸資本の循環の絡み合い〉を問題にするということとは別問題なのである。マルクスは第2稿第1章で次のように述べている（下線は引用者、下線部分に注目）。

《個別資本ということで理解されなければならないのは、社会的総資本のうち個別資本家たちの資本として分離され機能している部分である。社会的資本はそのような個別諸資本からなるにすぎず、それゆえ社会的資本の運動は個別諸資本の諸運動の複合体からなるに過ぎない。けれども、この複合体そのものを描くことと、この複合体を構成する孤立的諸運動を描くこととは、別問題である》（八柳訳第2稿、MEM研究No.7〔1989.7〕60頁）。

また現行の第1篇第3章（第6稿）にもつぎのような一文がある（下線は引用者、下線部分に注目）。

《たとえば、われわれが一国の一年間の総生産物を考察して、その一部分が全ての個別事業の生産資本を補填し他の部分が色々な階級の個人的消費にはいつて行く運動を分析するならば、われわれはW'・W'を、社会的資本の運動形態としても、また社会的資本によって生産される剰余価値または剰余生産物の運動形態としても、考察するのである。社会的資本は個別資本の総計（株式資本も含めて、また政府が生産的賃労働を鉱山や鉄道などに充用して産業資本家として機能する限りでは国家資本も含めて）に等しいということ、また、社会的資本の総運動は個別資本の諸運動の代数的総計に等しいということ、このようなことは決して次のことを排除するものではない。すなわち、この運動は、単純な個別資本の運動としては、同じ運動が社会的資本の総運動の一部分という観点から、したがって社会的資本の他の諸部分の運動との関連の中で考察される場合とは違った諸現象を呈するという、また、同時にこの運動は、色々な問題、すなわち、個々の個別資本の循環の考察によって解決されるのではなくそのような考察では解決が前提されていなければならないような諸問題を解決すること、これである。》（24巻120-1頁）

だからわれわれは、どうして大谷氏が第1稿の〈商品と商品との交換〉に対して第8稿では〈個別諸資本の循環の絡み合い〉にマルクスの視点が〈変化〉しているなどと主張されているのか皆目分からないのである。

もう一つの（2）で大谷氏が指摘されている〈変化〉なるものは、結局は、第1稿（あるいは第2稿）では、社会的総資本の再生産過程を、貨幣流通による媒介を考慮に入れて考察する場

合に、蓄蔵貨幣の形態にある貨幣の役割やその運動を考察の対象にしていなかったが、第8稿ではそれを対象にしているということに過ぎない。確かにこれは事実としてはその通りである。しかしそれは、第1稿では、固定資本の補填も蓄積も貨幣流通による媒介を考慮して考察していないから、そうであるに過ぎないのであって、そのことは第2稿についても同じことが言える。そして第8稿では、ただ、そうしたそれまでの諸草稿では考察の対象になって来なかった問題が考察の対象になっているというだけのことである。しかし蓄蔵貨幣が蓄積や固定資本の補填といった資本の流通の過程でそれを媒介するための必然的な契機として現われてくるというようなことは、すでに第1部でもまた第2部第2章（篇）でも解明済みのことであり、決して第8稿で始めて解明されたというようなものではないのである。第8稿では、それを社会的総資本の再生産の観点から考察しているだけである。

ついでにマルクスが第2稿において蓄積のためには蓄蔵貨幣の形成が必然的な一契機として入ってくることを論じている部分を紹介しておこう（これは第3章ではなく、第1章である。すでに指摘したが、第2稿の第3章では「拡大された規模での再生産。蓄積」は論じられなかった）。

《変化する他のあらゆる事情を捨象するとしても、それにもかかわらず、生産過程が拡大される諸比率は、恣意的なものではなく、生産過程の性格に規定されていることを念頭に置かなければならない。すなわち、貨幣に転化された剰余価値は、例え資本化するように予定されていても一資本化によってさまざまな循環の反復が〔行なわれうる〕一、現実追加資本として機能しうるような大きさにまで、すなわち過程進行中の資本価値の循環に入り込みうるような大きさにまで、蓄積されなければならないことがありうる。このような場合には、剰余価値はしばらく潜在的貨幣資本として、すなわち蓄蔵貨幣形態で存在する。したがって、厳密に言えば、ここでは蓄蔵貨幣の形成は、資本主義的蓄積過程から生じるがそれでもこの過程とは本質的に区別される一契機として、現われる。なぜなら、潜在的貨幣資本の形成によっては、再生産過程そのものは拡大されていないからである》（八柳訳第2稿、MEM研究No.7〔1989.7〕51頁）。

だからマルクスが第1稿や第2稿でそうした問題を考察していないから、そうした問題が分かっていなかったということには決してならないし、ましてやだから第1稿や第2稿の段階におけるマルクスに〈貨幣ベール観〉の〈残滓〉があったのだなどとは決して言えないのである。

もちろん、マルクス自身にも、第1稿や第2稿では、表現に曖昧さを残すものがあったというならその通りである。そして第8稿ではより厳密に問題が論じられている、等々というようなものはいくらかもあるであろう（例えば上記の引用文中、マルクスは潜在的貨幣資本を「蓄積」と述べているが、第8稿ではこうした表現は消えて、厳密に「蓄蔵」と述べている等々）。しかしそのことはマルクスが第1稿や第2稿では〈貨幣ベール観〉を古典派経済学と共有していたなどということには決してならないし、その〈残滓〉があったなどということもできないのである。概念に曖昧さがあつたり、問題が十分整理されていなかったということと、古典派経済

学的な限界を残していたということとは決して同じではないからである。あくまでもマルクスが、社会的総資本の再生産の過程を、理論的により深く解明していく過程で、問題がより整理され、概念もより厳密化されていったということに過ぎないのである。

## ●【第8稿におけるマルクスの厳しい自己批判】とは何か？（その1）

さて、いよいよ最後の項目である。ここでは大谷氏が〈第2稿の第3章から第8稿の第3篇にかけて、マルクスが決定的な理論的飛躍を成し遂げた〉（下187頁）と評価される問題が論じられている。ここで論じられている問題は、簡単にいうなら、マルクスは当初は“可変資本は労働者の収入になる”というような論じ方をしている点が指摘され、それが第8稿では「自己批判」されているということなのである。大谷氏らの（というのはこうした指摘をされるのは大谷氏に留まらず、宮川彰氏や伊藤武氏らも同様の主張を行なっておられるから）この主張は、確かに部分的には当てはまるどころがあるように私には思えた時もあったのである。だから何を隠そう、私自身もそうした理解に以前は半ば賛意を示してもいた。しかし第8稿でマルクスがそれまでの自己の主張を「自己批判」しているとの判断には、やや行き過ぎの感が拭えなかった。というのは、確かにマルクスは第8稿以前の諸草稿のなかで、そうした概念的にやや首をかしげる表現をしていることは確かであるが、しかし同時に同じ文献のなかでも問題を正確に論じている場合も多々見られるからである。だから確かにマルクス自身に問題を十分意識的に整理して論じる姿勢が無かったにしても、マルクス自身が概念的に対象を十分に捉えておらず、混乱していたかに言われると抵抗を感じざるを得ないのである。ましてやマルクスが以前の自身の見解を「自己批判」しているなどという評価には、やはり違和感を禁じえなかった。だからこの問題での大谷氏の主張の批判的検討にはやや微妙なところがあり、問題をとにかく厳密に検討していくしかないと考えている。だから、この部分の検討も、あるいは読者の皆様には、まどろっこしいものと受けとめられるかも知れないが、ご容赦願いたい。というのは、この部分の批判的検討は、ある意味では自分自身が以前支持していた見解に対する、それこそ「自己批判」的検討でもあるからである。しかしとりあえず大谷氏の説明を追って行くことにしよう。

まず大谷氏は第5－7稿でマルクスが第2部第1篇第1章を何度も書き直した内容について、次のように述べておられる。

〈マルクスはその後も、貨幣資本の循環、生産資本の循環、商品資本の循環、という三つの循環形態が示しているものを正確に叙述する試みを繰り返した。

そのなかでマルクスは、次第に、資本家がつねに貨幣形態で前貸しなければならず、したがってつねに貨幣形態で還流してこななければならない可変資本の運動の重要性に目を向けるようになる。資本の側では $G-W(A)$ である可変資本の前貸に対応する、労働者の側での労働力商品の変態は $W(A)-G$ であり、労働力を再生産するための流通 $W(A)-G-W(Km)$ の第一の変態である。その第二の変態である $G-W(Km)$ が労働者の収入の支出である。資本の変態と収入の支出が絡み合うのは、この第二の変態であって、可変資本の前貸である $G-W(A)$ は直接には収入の支出と絡み合っていない。このような関連や絡み合いの正確な把握には、資本の形態としての可変資本の変態の運動と労働者の商品である労働力の変態の運動との明確な区別、労働力商品の第二の変態としての、賃金の支出による消費手段への転化と資本家の側での商品資本の貨幣資本への転化との明確な区別が不可欠である。〉（下187頁）

こうした理解が大谷氏によれば、第5－7稿において第1篇第1章を繰り返し練り直すなかで到達したものだといわれるのである。しかしこうした理解にはやはり納得が行かない部分が残るのである。というのは、第1稿の中にも次のように明確に問題を理解しているマルクスがいるからである。

《他方、可変資本について言えば、それは貨幣の形態で労働者に前貸しされるのであって、労働者は、これと引き換えに彼の労働を引渡すが、その受け取った貨幣で彼は自分の生活手段を買う。労賃は労働の価値に、いnamと正確に言えば労働能力の価値に等しい、と前提されているのだから、労働者は彼の全賃銀を彼の労働能力の再生産のために、それゆえ必需品の購入に支出する、ということが同時に前提されている。それゆえ、全可変資本が実際には(レアリーテル)収入として支出されるのであって、資本家にとってはそれは労働に転化するが、労働者にとってはそれは収入に転化する。》（『資本の流通過程』202頁）

以前は私もこのマルクスの一文にはやや混乱が見られると受けとめていたのであるが、しかしよくよく吟味してみるとそうではないと思うようになった。ここでマルクスは可変資本は貨幣の形態で労働者に前貸されるということをまず指摘している。これは大谷氏が〈そのなかでマルクスは、次第に、資本家がつねに貨幣形態で前貸しなければならず、したがってつねに貨幣形態で還流してこなければならない可変資本の運動の重要性に目を向けるようになる〉などと述べておられる問題であるが、しかしそんなことはある意味では当たり前のことであり、改めて力説しなければならないことであろうか、との疑問は禁じえない。そして、労賃が労働力の価値の転化形態であることもここでは明確に語られている。しかしこれもまた当然のことであり、ことさら改めて強調しなければならぬほどのことでもない。そしてそれが収入として生活必需品の購入に支出される。《それゆえ、全可変資本が実際には(レアリーテル)収入として支出される》と述べている。この一文が以前には、やや問題があると考えていたのである。しかしよく考えてみると、マルクスは《実際には(レアリーテル)》と限定して述べている。つまりマルクスはこの場合は貨幣を捨象して素材的に問題を見ているのである。というのは、マルクスはその直前(201頁)で《この考察においては貨幣流通（および貨幣資本としての形態にある資本）を捨象する》と前提しているからである（とは言うものの、マルクスはこれ以後においてもこうした前提を無視して、貨幣流通を入れた考察もやっではいるのであるが。ここらあたりはノートということからくる一定の厳密にさに欠けるところがあると言え言えるかもしれない）。マルクスはここでは「可変資本が、実際には貨幣の形態で労働者に前貸されるが、しかしそれを労働者はすべて生活必需品の購入に支出するのであり、それが前提されているなら、貨幣流通を捨象すれば、全可変資本は実際には(レアリーテル)収入として支出される、つまり生活必需品との補填関係にある」と述べているのである。マルクスがこうした限定のもとに論じているものを（あるいは特に限定しなくても、特定の条件のもとに論じているものを）、大谷氏らは、常に貨幣流通による媒介を前提された上で（というのは大谷氏らは貨幣流通による媒介を捨象した考察の意義そのも

のを認めておられないから――そしていうまでもなく私はそれは間違っていると考えている）、だから最初からマルクスが想定している条件とは違ったものを想定した上で、マルクスの敘述の不十分さや混乱を指摘されているように思えてならないのである。だからこの場合も、貨幣資本や貨幣流通を捨象して、問題を価値と素材との補填関係として見るなら、すべての可変資本は実際には（レアリテール）、つまり商品資本の価値の構成部分としては、収入に分解するものであり、素材的には、生活手段の生産部門の生産物と補填し合わなければならないと述べているのである。そしてそう理解すればここには何の問題もない。マルクスは同時に《資本家にとってはそれ（＝可変資本――引用者）は労働に転化するが、労働者にとってはそれは収入に転化する》とも述べており、可変資本が資本の循環としては、その貨幣形態を脱ぎ捨てて、労働力に転換し、生産資本の形態をとることも明確に述べているわけである。だからこうした敘述を見れば、マルクス自身が問題を混乱して捉えているわけではないことが分かるのである。ただどういう前提のもとに論じているかについて必ずしもその都度マルクスは明確にせずに論じている場合が多いために、ある場合は価値と素材の面だけからその補填関係を論じ、ある場合には貨幣流通の媒介を入れて資本の形態転換の側面から捉えている等々ではないかと思うのである。それを大谷氏は常に問題を一面的な前提のもとに――つまり貨幣流通による媒介のもとに――捉えようとするがために、そうしたマルクスの敘述に、問題が無差別に整理されずに論じられていると見えるだけであるように思えるのである。

それは例えば、大谷氏がこうしたマルクスの誤った敘述の典型として〈資本と資本との交換〉を例に上げて次のように述べておられる場合にも、それは当てはまるのである。

〈第2部の第1稿でこの不明確さがきわめて明瞭に現われていたのが、すでに見た、「資本と資本との交換、資本と収入との交換、収入と収入との交換」という把握である。たとえば、第1部門内部での不変資本の相互補填の場合、資本が資本として相互に位置を変換するのではない。どちらの不変資本もその形態を変えるだけであって、位置を変換するのは商品または貨幣である。商品と貨幣の持手変換すなわち商品の売買を通じて、資本の変態と資本の変態とが絡み合うのである。「資本と資本との交換」という表現には、資本循環の形態と商品流通の形態との関連についての混同が纏い付いている。〉（下187頁）

こうしたマルクス批判も、やはり私には、マルクスにとっては濡れ衣でしかない、と思わざるをえない。というのは、大谷氏はあくまでも貨幣流通による媒介を前提にしてこうしたことを述べておられるのであるが、しかしマルクスが「資本と資本との交換、資本と収入との交換、収入と収入との交換」という場合には、貨幣流通を捨象して問題を価値と素材の両面による補填関係として見ているのだからである。それは次のような一文に明瞭に表れている。

《(3)さて、まず第一に労働者について言えば、素材的にみれば、事柄はあたかも、彼らは各人が自分の生産物のうちで彼のものとなる部分を現物で受け取り、これらの生産物を彼ら相互のあいだで交換しあう、というのと同じことである。つまり、収入と収入との交換である。》（『資

ご覧の通り、マルクスが《[収入と収入との交換](#)》として述べているのは、あくまでも《[素材的にみれば](#)》という限定をつけ、しかも《[事柄はあたかも](#)》そうしたことと《[同じである](#)》と述べていることが分かる。これは部門で言えば、生活手段の生産部門（第1稿では《[資本A](#)》）の労働者について述べているのであるが、つまり素材的に見れば、さまざまな生活手段を生産している労働者たちは、結局、自分たちが生産した生産物（＝生活手段、消費者によって収入として消費されることを予定している生産物）を互いに交換して消費するのと同じ結果になると述べているわけである。それがすなわち《[収入と収入との交換](#)》ということでマルクスが述べている内容なのである。そしてこれは価値と素材の両面による補填関係としてみるなら、まったくその通りである。マルクスは問題を混乱して捉えていないことは、そのすぐあとで、次のようにも述べていることから明らかである。

《[というのは、資本家は商品のうちの労働者が受け取るはずの部分をも売るのであり、したがって労働者たちは生産物のうちの自分たちの分け前をたがいに直接に交換しあうわけではないからである](#)》（同上）

だから大谷氏にわざわざ指摘して頂かなくても、貨幣流通を考慮すれば、こうした《[収入と収入との交換](#)》といったことが直接には妥当しなくなるくらいはマルクスも十分承知の上で述べていることが分かるのである。しかし貨幣流通をとりあえずは捨象して総商品資本を価値と素材における両面からの補填関係として捉えるならば、それは、現実的（リアル）には、《[資本と資本との交換、資本と収入との交換、収入と収入との交換](#)》に、結果としてはなるのだ（それと同じことである）、ということがマルクスが、この言葉で本来は述べていることなのである。それを大谷氏らはマルクスの主張を厳密に検討もされずに、自説の誤った前提――貨幣流通による媒介を捨象して考察することは出来ない、という――を絶対化して、常に貨幣流通による媒介を入れて問題を考えておられるから、こうしたマルクスの主張を混乱とされるだけなのである。自己の誤った前提のもとに、マルクスを批判することこそ、混乱以外の何物でもないであろう。マルクス自身は大谷氏に指摘されなくても、貨幣流通を入れた場合にどうなるかについても、明確に問題を把握して論じているわけである。ただマルクスはそうしたものをいちいちその前提をその都度断って述べていないがために（その限りでは確かにマルクスもそれほど自覚的では無かったと言えるかも知れないが）、ある場合には素材的に問題を見たり、他の場合には貨幣流通を入れて考察しているがために、ある場合にはやや曖昧な表現と思える敘述をしてる場合もあれば、他の場合には正確に問題を論じている場合もあるというように、われわれには見えるだけなのである。私にはそのように思えるのである。

さて、大谷氏は上記のようなマルクスの〈不明確〉な敘述が、第8稿の1877年3月に書かれた〈第一層〉でも、まだ見られるとして、二つの文を引用され、その不明確さを次のように指摘されている。

〈「社会の年間生産物中の生産手段から成っている部分の他の価値部分——したがってまたこの生産手段総量の可除部分のうちが存在する価値部分——は、同時に、この生産に参加したすべての当事者にとっての収入、すなわち労働者にとっての賃金、資本家にとっての利潤、そして地代をなしている。」(S. 708.30-35.)

ここで言う、「社会の年間生産物中の生産手段から成っている部分の他の価値部分——したがってまたこの生産手段総量の可除部分のうちが存在する価値部分——」、すなわち第Ⅰ部門の $v + m$ は、この部門の商品資本の一部ではあっても、けっして「この生産に参加したすべての当事者にとっての収入、すなわち労働者にとっての賃金、資本家にとっての利潤と地代」ではありえない。

その少しあとでも、次のように言う。

「一方では、社会の年間総生産物をなしている商品資本の一方の種類価値の一定の部分は、その生産に従事する個々の労働者や資本家にとっての収入をなしてはいるが、しかし社会の収入の成分をなしてはいないのであり、また、他方の種類の商品資本の価値の一部分は、この種類の商品資本の個別的所有者すなわちこの投資部面で仕事をする資本家にとっての資本価値をなしてはいるが、それにもかかわらずそれはただ社会的収入の一部分でしかない、ということにスミスは気がついていたのである。」(S. 709.12-19.)

ここで「社会の年間総生産物をなしている商品資本の一方の種類価値の一定の部分」、すなわち第Ⅰ部門の商品資本の $v + m$ の部分は、それ自体としては、けっして「その生産に従事する個々の労働者や資本家にとっての収入をなしている」のではなく、「他方の種類の商品資本の価値の一部分」、すなわち第Ⅱ部門の商品資本の $c$ の部分は、それ自体としては、けっして「社会的収入の一部分」ではない。〉(下188頁、傍点は下線に変換してある)

この大谷氏が引用されている部分は、現行版では第2部第19章「対象についての従来の諸論述」の「第2節 アダム・スミス」の「1 スミスの一般的観点」に該当する草稿からのものである。そこでわれわれは大谷氏が引用されている部分の草稿そのものをその前後も含めて少し長く紹介してみよう(これは市原健志氏の草稿研究にもとづいて草稿を復元したものである。訳文は新日本新書版をベースにしている。エンゲルスの編集によって草稿が書き換えられている部分はそれが分かるように赤字にしてある〔だからエンゲルス版とその部分を比較すれば、エンゲルスがどのようにマルクスの草稿に手を入れているかが分かる〕。【 】で括った部分が大谷氏が引用されている部分であるが、全集版をベースにされている大谷氏の訳文とは少し違っている。なお大谷氏の引用部分を最初のものには(1)、あとのものには(2)と番号を便宜的につけてある)。

《1) 社会的年生産物の一部は生産手段から構成され、その価値は次のように分割される。——一つの価値部分は、これらの生産諸手段の生産にさいして消費された生産諸手段の価値にすぎず、したがって、更新された形態で再現する資本価値にすぎない。第二の部分は、労働力に投下された資本の価値、または、この生産部面の資本家たちによって支払われた労賃の総額に等

しい。最後に、第三の価値部分は、この部門の産業資本家たちの**利潤と地代**の源泉をなす。

第一の構成部分、すなわちA・スミスによればこの部門で仕事をする個別諸資本全部の固定資本の再生産された部分は、個別資本家なり社会なりの「純収入から明らかに除外されていて、決してその一部をなすことはありえない」。それは、つねに資本として機能し、決して収入としては機能しない。その限りでは、各個別資本家の「固定資本」は〔全〕社会の固定資本となんら異なるところはない。しかし、(1)【生産諸手段として存在する社会の年生産物の他の価値諸部分—したがってまた、この生産諸手段総量の可除部分のうちの実存する価値諸部分—は、確かに同時に、この生産に参加するすべての当事者にとっての収入、すなわち労働者にとっての賃銀、資本家にとっての利潤および地代を形成する。】しかし、これらの価値部分は、社会にとっては収入を形成するのではなく、資本を形成する—社会のこの年生産物は、その社会に属する個別資本家たちの生産物の総計からなるにすぎないにもかかわらず、そうなのである。これらの価値部分は、たいていはすでにその本性上、生産諸手段として機能しうるだけであって、必要な場合には消費諸手段として機能しうるような部分でさえも、新たな生産の原料または補助材料として役立つように予定されている。しかし、それらの価値部分がこのようなものとして—すなわち資本として—機能するのは、その生産者たちの手中ではなく、その使用者たちの手中である。すなわち—

2)、消費諸手段の直接的な生産者たちの手中である。それらの価値部分〔生産諸手段〕は、第二種部門の資本家たちのために、消費諸手段の生産にさいして消費された資本（この資本が労働力に転換されない限りで、すなわちこの第二種部門の労働者たちの労賃の総額をなすものではない限りで）を補填するのであるが、他方では、**この資本**、すなわちいまや消費諸手段を生産する資本家たちの手中に消費諸手段の形態で存在する資本は、それはそれで—すなわち社会的立場から見れば—第一種部門の資本家たちと労働者たちとが彼らの収入をそこにおいて実現する消費元本をなす。

もしA・スミスがここまで分析を進めたのであれば、全問題の解決に欠けるところはほんのわずかにすぎなかったであろう。彼は核心に迫っていた。というのは、すでに次のことに気がついていたからである。すなわち**一方では**、(2)【社会の年々の総生産物を構成する一方の種類の商品資本の価値の一定の諸部分は、その生産に従事する個別的な労働者と資本家とにとっての収入を確かになしはするが、しかし社会の収入の構成部分をなすものではなく、他方では、**他方の種類の商品資本**の価値の一部分は、その個別的所有者すなわちこの投資部面に従事する資本家たちにとっての資本価値を確かになしはするが、それでもなおそれは社会的収入の一部をなすにすぎない、ということがそれである。】》（全集版451-2頁）

さて、この草稿の引用文全体をしっかりと検討すれば、大谷氏の批判はまったく不当な言い掛かり以上ではないことが分かるであろう。そのために、引用文全体を解読してみよう。

引用文を正しく理解するためには、この一文が全体としてどういう文脈のなかで書かれているものかを踏まえておく必要がある。まずこの引用文は《ところで、もしA・スミスが、まえには彼が固定資本と呼ぶものの再生産の考察にさいして、そして、こんどは彼が流動資本と呼ぶもの

の再生産の考察にさいして、彼の頭に浮かんだ思想の諸断片を総括したとしたら、彼は次のような結論に到達したことであろう――》（全集版451頁）という導入文があって、そのあとに続く文である。つまりこの引用文は、スミスが不変資本の存在を「総収入」と「純収入」とを使い分けることによってこっそり導入しようとしていることを暴露したあと、スミスがもっと自分の考えを整理したなら至っていたであろう結論として述べられているものである。マルクスはそれを二つの点にまとめている。

最初は大谷氏による(1)の引用文が含まれる部分である（マルクスが「1）」と番号を打っている部分）。第一パラグラフでは社会的年生産物の一部は生産手段からなり（すなわち部門Ⅰの生産物であり）、それは三つの価値部分に分割される、すなわち不変資本、可変資本、剰余価値である。しかしマルクスは「不変資本、可変資本、剰余価値」という用語はまだ使わずに、それを、不変資本部分＝《生産諸手段の生産にさいして消費された生産諸手段の価値にすぎず、したがって、更新された形態で再現する資本価値にすぎない》価値部分、可変資本部分＝《労働力に投下された資本の価値、または、この生産部面の資本家たちによって支払われた労賃の総額に等しい》価値部分、剰余価値部分＝《この部門の産業資本家たちの利潤と地代の源泉をなす》価値部分と説明している。これはまったく正確な説明であり、大谷氏も文句のつけようがないであろう。特に可変資本部分についての説明に注意して頂きたい。ここには大谷氏が主張されるような、どんな曖昧さも不明確さも無い。つまりマルクスにはもともとは大谷氏が指摘されるような可変資本の概念を不明確に捉えているようなことがないことが、これを見ても分かるのである。

そしてマルクスはまず最初の構成部分（不変資本部分）を問題にし、そして次は可変資本部分と剰余価値部分の説明に入っている。そして後者の説明の一部を大谷氏は引用しているわけである。第一の構成部分（部門Ⅰの商品資本のうちの不変資本部分）は、《それは、つねに資本として機能し、決して収入としては機能しない。その限りでは、各個別資本家の「固定資本」は〔全〕社会の固定資本となんら異なるところはない》と説明されている。ここで「固定資本」が鍵かっこに入っているのは、スミスがいうところの「固定資本」だからである。重要なことはこの場合は各個別資本家にとっても、全社会にとっても同じだと述べていることである。つまり決して収入として機能しないという意味でそうだと述べているのである。つまりどんな意味でも、スミスが主張するような収入には決して分解しない部分だとマルクスは述べているわけである。

それに対して、次に見ている可変資本部分と剰余価値部分の場合は、個別の生産当事者にとつと、社会にとつとでは違っている、というのが次にマルクスが述べていることなのである。つまり《確かに同時に、この生産に参加するすべての当事者にとっての収入、すなわち労働者にとっての賃銀、資本家にとっての利潤および地代を形成する》と述べているのは、この部分（ $v + m$ ）は個別の生産当事者にとっては、価値部分としては彼らの消費に充てられる部分だということである。あくまでも「価値部分」としてマルクスが述べていることは、それまでの敘述から明らかである。ところが大谷氏は、〈第Ⅰ部門の $v + m$ は、この部門の商品資本の一部ではあっても、けっして「この生産に参加したすべての当事者にとっての収入、すなわち労働者にとっての賃金、資本家にとっての利潤と地代」ではありえない〉と批判されている。しかしこんな当たり前の批判でマルクスを批判したつもりなのは驚きである。大谷氏は、 $v + m$ が部門Ⅰ

の〈商品資本の一部である〉ことをマルクスは知らないとしても主張されるのであろうか。大谷氏がマルクスが商品資本が三つの価値部分に分けられること、そしてそのうちの $v + m$ の価値部分について述べていることをまったく無視されている（理解されていない?）。大谷氏にお聞きするが、「 $I(c + v + m)$ 」は何を表していると考えておられるのか。「これは商品資本であり、そのうちの $c$ も $v$ も $m$ もその一部である」、これが大谷氏の説明である。これでは $c$ も $v$ も $m$ も何も説明されたことにはならない。これらは直接には決して不変資本、可変資本、剰余価値そのものではない。それらはあくまでも部門Iで生産された商品資本を、再生産の観点から、その価値を構成する諸部分として分けられたものに過ぎないのである。つまり $c$ は再生産の観点から見るなら、価値部分としては、再び部門Iの不変資本に充てられる部分なのである。つまりその部分の商品資本が販売された貨幣で再び購入されるのは、やはり部門Iの生産物であり、部門Iで充用される生産手段なのである。つまり $Ic$ というのは、商品資本のうち再生産の補填関係から捉えられた価値部分として見た場合に、再び部門Iで生産手段として充用されるものに該当するということを表しているのである。だからこの部分の商品資本の現物形態も、再び部門Iで生産手段として役立つ使用価値でなければならない。そして $I(v + m)$ は、やはり部門Iの商品資本のうち、再生産の補填関係から見た場合、 $v$ は再び可変資本として部門Iで充用される部分であり、 $m$ は資本家が彼らの剰余価値として取得する価値部分なのである。そして可変資本として部門Iで充用される価値部分ということは、部門Iの労働者に支払われた賃金と価値額として等しいことを意味するのである。だから $I(v + m)$ は補填関係として見た価値部分としては、労働者と資本家の収入として消費される部分であり、だから部門IIの生産物と交換されなければならないわけである。だから $I(v + m)$ の商品資本は現物形態としては、部門IIの生産手段として存在していなければならない、等々。こうしたことはマルクスにとってはまったく明瞭なことである。だから大谷氏の批判などは不当な言い掛かりでしかないのである。先に紹介しておいたマルクスの説明をもう一度思い出そう。マルクスは次のように説明していた。可変資本部分( $v$ ) = 《労働力に投下された資本の価値、または、この生産部面の資本家たちによって支払われた労賃の総額に等しい》価値部分、剰余価値部分( $m$ ) = 《この部門の産業資本家たちの利潤と地代の源泉をなす》価値部分。これらは部門Iの商品資本を《価値によって次のように分割される》としてマルクスが説明していたものである。このマルクスの説明にはどんな混乱も不明確さもないことは明らかではないだろうか。

それではどうして、マルクスはここで大谷氏が問題にされるような表現を使っているのだろうか。それはスミスがすべての生産物の価値は賃金、利潤、地代に分解すると主張していることを問題にし、それを批判するために論じているからである。つまりこの部分（すなわち $I[v + m]$ ）は、価値部分としては、《この生産に参加するすべての当事者にとって》は彼らの収入に充てられるものであるが、《しかし、これらの価値部分は、社会にとっては収入を形成するのではなく、資本を形成する》のだ、つまりそれは素材的には生産手段であり、だから社会的に考えるなら、資本としてしか機能し得ないものだ、つまりスミスのいうように収入に分解しうるように見えるものも、社会的には収入には分解しえないものが存在するのだというのがマルクスのいわんとすることなのである。もちろん、ここで《社会にとっては収入を形成するのではなく

、資本を形成する》という場合の「収入」や「資本」は、スミスを意識してスミス流の使い分けをそのまま使っているのである。だからマルクスは問題をきわめて正確に論じていることは明らかなのである。

次はマルクスが「2）」と番号を打っている部分の検討に移ろう。

この「2）」は、スミスが彼自身の考えをきちんと総括したなら、到達したであろう結論の二つ目の項目という意味である。そしてここでは、 $I(v+m)$ の価値部分は《社会にとっては収入を形成するのではなく、資本を形成する》するが、それが資本として機能するのは、《第一種部門の資本家》、つまり部門Iの資本家においてではなく、《第二種部門の資本家》、つまり部門IIの資本家たちのためにであり、彼らはそれによって消費手段の生産に際して消費された「資本」（生産手段）を補填するのだ、ということである。そして彼らの手にある商品資本の価値部分、《すなわちいまや消費諸手段を生産する資本家たちの手中に消費諸手段の形態で存在する〔商品〕資本》は、《社会的立場から見れば》——つまりその素材（使用価値）を社会的分業の観点から見ると——《第一種部門の資本家たちと労働者たちが彼らの収入をそこにおいて実現する消費元本をなす》と述べているのである。こうした説明はまったく正確であり、どんな曖昧さや混乱もないことは明らかであろう。

そしてこうしたスミスが彼が断片的に述べているものを総括したなら到達したであろう二つの結論を述べたあと、マルクスは、もし上記のような結論までスミスが分析を進めたなら、《全問題の解決に欠けるところはほんのわずかだったであろう》《彼は核心に迫っていた》として、スミスがすでに気付いていたこととして述べている部分が大谷氏が次に引用されている部分（われわれが（2）と番号を打った引用文）なのである。だからそれはスミスがすでに気付いていたこととして、マルクス自身がまとめている文章なのである。われわれはその一文をもう一度引用しておこう。

《社会の年々の総生産物を構成する一方の種類の商品資本の価値の一定の諸部分は、その生産に従事する個別的な労働者と資本家とにとっての収入を確かになしはするが、しかし社会の収入の構成部分をなすものではなく、他方では、他方の種類の商品資本の価値の一部分は、その個別的所有者すなわちこの投資部面に従事する資本家たちにとっての資本価値を確かになしはするが、それでもなおそれは社会的収入の一部をなすにすぎない、ということがそれである。》

この一文に対して、大谷氏の批判ももう一度並べて書いてみよう。

〈ここで「社会の年間総生産物をなしている商品資本の一方の種類の商品資本の一定の部分」、すなわち第I部門の商品資本の $v+m$ の部分は、それ自体としては、けっして「その生産に従事する個々の労働者や資本家にとっての収入をなしている」のではなく、「他方の種類の商品資本の価値の一部分」、すなわち第II部門の商品資本の $c$ の部分は、それ自体としては、けっして「社会的収入の一部」ではない。〉

果たして大谷氏はマルクスが述べていることを十分解読されていると言えるであろうか。大谷氏はI (v + m) について〈それ自体としては、けっして「その生産に従事する個々の労働者や資本家にとっての収入をなしている」のではな〉いと述べておられる。〈それ自体としては〉ということで何を言いたいのかは、先の引用文(1)に対する批判から類推するに、それは「それ自体としては部門Iの商品資本だ」と言いたいのであろう。しかしそんな批判をして批判になっていると思うことが驚きであり、大谷氏がこのマルクスの一文をほとんど理解されていないことを反対に暴露しているのではないだろうか。それにそもそもマルクス自身は大谷氏が言われるように〈それ自体としては〉などという断りは一言も述べていない。《その生産に従事する個別的な労働者と資本家にとって》は彼らの《収入をなす》と述べているのである。大谷氏はマルクスが「個別の生産当事者の観点」（これは商品資本の価値部分を再生産の補填関係から見るということである）と「社会的な観点」（これは生産物の使用価値を社会的分業の観点からみるということである）とを使い分けていることに何の関心も示されていない。それが大谷氏がこのマルクスの一文を読み誤った原因であろう。マルクス自身はそれに続けて「それらは素材からみるなら」《しかし社会の収入の構成部分をなすものではな》いとも明確に述べているのである。このマルクスの言明を詳細に検討すれば、最初の(1)の引用文と同様に、マルクスは部門Iの総生産物（総商品資本）のうちの一定部分（すなわちI [v + m]）は、その生産の当事者にとっては再生産の観点からみて、どういう役割を与えられたものか、という視点と、それが社会的には、つまり社会全体の分業という観点からみた場合、その生産物の使用価値がどういう役割を担っているのか、という二つの観点から問題をみていることがお分かりになるであろう。だからマルクスが言いたいの、部門Iの商品資本の一定部分、すなわちI (v + m) の価値部分は一方で労働者の収入と資本家の収入に分解するが、しかし他方ではその現物形態は生産手段だから、社会的には資本を構成するのだと述べていることが分かる。つまりスミス自身はそこまで気付いていたのだ、というのがマルクスがここで言いたいことなのである。だからそこに表現上すっきりしないところがあるといえ、いえるかも知れないが、しかしそれはスミスが気付いていたという内容だからであり、スミスの言い回しを使いながらそれを述べているからである。またここで重要なのは、部門Iの総生産物（総商品資本）の価値と素材における補填関係であり、大谷氏が問題にするような、資本の循環における形態転換などはまったく問題になっていないからでもある。だからマルクスはこうした論じ方をしているということが大谷氏にはまったく理解されていないといわざるをえない。

（以下は「その2」に続きます。）

## ●【第8稿におけるマルクスの厳しい自己批判】とは何か？（その2）

さて大谷氏は以上のようなマルクスの問題ある敘述（ただし氏がそう考えておられるだけなのであるが）を指摘されたあと、次のように述べておられる。

〈このような表現は、第8稿の第二層では完全に消える。消えるだけではない。マルクスは、自分がかつて頻繁に使っていたそのような表現を明示的に掲げたうえで、それを批判する。すなわち、彼はここで、はっきりと自己批判をしているのである。〉（下188頁）

しかしわれわれは大谷氏が第8稿の〈第一層〉と言われている部分においても、マルクス自身は決して間違っ問題論を論じていなかったことを確認した。ただ確かに大谷氏が読み誤られたように、マルクスは一見すると分かりにくい表現をしていたことは事実である。それはどうしてであろうか。そしてそれに対して、これから大谷氏がマルクスが〈ハッキリと自己批判している〉という〈第二層〉として持ち出されているところでは、どうしてマルクスは大谷氏が〈このような表現は、……完全に消える〉と思えるほどに問題を論じているのであろうか。それを少し考えてみよう。

それは他でもない、すでにこれまでの検討でも示唆してきたように、大谷氏が〈第一層〉、〈第二層〉として持ち出されている草稿部分でマルクスが何を論じているのかを考えてみれば分かるのである。大谷氏がマルクスが依然として曖昧な間違っ論じ方をしているとして例示した〈第一層〉の部分というのは、すでに指摘したが、マルクスがスミスのいわゆる「 $v + m$ のドグマ」を批判している部分である。この部分はマルクスが《あとに置くべきものの先取り》として考察を始めている単純再生産の考察より前に位置する。だからここでは社会の総再生産過程を「第I部門」と「第II部門」に分けて論じる前のところであり、だからそれらはまだ《第一種部門》《第二種部門》というように表現されている。また「不変資本」、「可変資本」、「剰余価値」という用語さえ、大谷氏が例示した部分では避けられている。ましてや大谷氏が書いているような、「 $I(v + m)$ 」というような、われわれにとっては再生産表式でおなじみの記号ももちろん使われていない（しかしもちろん、大谷氏が引用されている部分以外では、スミス批判のなかでもこれらの用語は使われているのではあるが）。しかもここで問題なのは、スミスの「 $v + m$ のドグマ」、すなわちスミスが社会の年生産物の交換価値を賃金、利潤、地代に分解したり、それによって構成するという主張を批判することにある。だからここでは貨幣流通が問題なのでなく、社会の総生産物の価値と素材における補填関係が問題なのである。だからここでは一見すると大谷氏が問題として挙げたくなるような敘述が見られたのである（しかし断るまでもないが、詳細にマルクスがいわんとすることを読み取れば、そうした大谷氏のような捉え方は誤りであり、マルクスは問題を正確に論じていることが読み取れたはずである）。

それに対して、大谷氏が〈第8稿の第二層〉として上げているところは、単純再生産の敘述の一番最後の部分に位置している。つまりこの部分は、マルクスが《あとに置くべきものの先取り》と断って考察を進めているところなのである。だからここでは最初から貨幣流通による媒介を

入れた考察を《先取り》して論じている部分なのである。だからマルクスが大谷氏らが満足のゆくような敘述をしているのはある意味では当然なのである。それを大谷氏は、貨幣流通による媒介を捨象して論じていたときの自身の敘述を、マルクス自身が〈ハッキリと自己批判している〉などと捉えておられるだけの話なのである。しかし果たしてその部分はそうしたマルクス自身の〈厳しい自己批判〉といえるのかどうか、それは引き続いて検討して行かなければならない。

まず大谷氏は、マルクス自身の〈厳しい自己批判〉だとする部分を紹介をされるに当たって、次のように書きはじめておられる。

〈第8稿の単純再生産の部分で、社会的総再生産過程における金生産について論じたあと、マルクスは、単純再生産の敘述を締め括っている (S. 779.4-790.13)。マルクスはまず、社会的年間総生産物の場合にも、その価値は、有目的労働によって生産手段から移転された価値と年間の人間的労働が体化した価値生産物とから成っていること、および、資本主義社会では、年間労働のうちのきわめて大きな部分が不変資本を補填する生産手段の生産に向けられていることに注意を向けたあと、次のように言う。〉 (下188頁)

この後続けて、大谷氏はマルクスの一文を引用されているのであるが、その引用文の大谷氏の解釈の検討は後回しにして、まずこの部分に対する異議をさしあたり提起しておきたい。

大谷氏がマルクスが〈厳しい自己批判〉をしているとして引用されているのは、現行の「[第20章 単純再生産](#)」「[第10節 資本と収入、可変資本と補填](#)」と題されている部分におけるマルクスの記述である。この部分は、草稿では単純再生産に関する敘述が見られる一番最後に書かれているものである（だから草稿では現行の「[第12節 貨幣材料の再生産](#)」の敘述に続けて区切りを示す横線を引いた後に書かれている）。だから大谷氏は〈第8稿の単純再生産の部分で、社会的総再生産過程における金生産について論じたあと、マルクスは、単純再生産の敘述を締め括っている〉と考えるわけである。しかしこの部分の解釈として、果たして〈単純再生産の敘述を締め括っている〉という理解は正しいのかどうかである。確かにそれは第8稿の単純再生産を考察している部分の一番最後に位置しており、その位置だけを見るなら〈締めくくっている〉という大谷氏の理解は正しいかに見える。しかし大谷氏は草稿のこの部分の正確な情報を読者に伝えておられない（意図的に？）。というのは、そこには現行版では欠けている冒頭部分があるからである。おそらくエンゲルスは、自身がつけた表題（「[第10節 資本と収入、可変資本と補填](#)」）に相応しくないと判断して削除したのであろうが、しかしこの冒頭の部分は、この個所でマルクスが何を論じようとしていたのか、またこの部分がマルクスの単純再生産全体の敘述プランのなかでどういう位置を占める予定であったのかを考える上で重要な意味を持っているのである。大谷氏は、この部分が、単純再生産の敘述の締めくくりとして、マルクス自身が、それまでの古典派経済学の貨幣べール観を引きずっていた自身の見解を自己批判するために書かれたものであるかに言われるのであるが、そうした自身の主張にとって不都合なところ、つまり実際には草稿には存在する冒頭部分を、エンゲルスと同様に、敢えて論じずにいるように思えてならな

いのである。単純再生産の最後で論じているこの部分は、果たして大谷氏がというような目的で書かれたものであるのかどうか、あるいはマルクスの全体の構想のなかでどういう位置を占めているのか、われわれは草稿に直接当たって検討してみることにしよう。

市原健志氏はこの第10節（もちろん節もその表題もエンゲルスによるものであるが）の冒頭にエンゲルスによって削除された一文があるとして次のようにそれを紹介されている（市原健志《『資本論』第2部第3篇第19・20章と第2部第8稿》下187頁）

《3） I 1000v+1000m

および単純再生産の全構図

II 2000 c + 500v + 500 m

に後に立ち戻ることの保留をつけて、今やわれわれはさしあたり I) 4000 c に目をむけることにしよう。》

そしてこの部分に市原氏は次のようなコメントを書かれている。

〈つまり、第10節の初めは「I) 4000 c」の考察を目的にしていたと言える。なお、この部分の冒頭にある「3）」に対応する「1）」と「2）」がどれであるかについては判然としない。〉

われわれは、このエンゲルスによって削除された冒頭部分を見て気付くのは、この部分でマルクス自身は何を論じようとしていたかが明確に述べられていることである。すなわち第I部門の商品資本のうちの不変資本の価値部分、「I) 4000 c」の考察である。だから大谷氏が言われるようなそれまでの自身の見解を「自己批判」するために書かれたものなどでは決してないことがこの一文だけでも明瞭であろう。

さらにこのマルクスの冒頭の敘述を見てわれわれは奇妙なことに気付く。マルクスは単純再生産の最後に部門Iの4000 cの考察をやろうとしているのであるが、その冒頭でI (1000v+1000m) とII (2000 c) との関連やII (500v+500m) の内部の相互転換、および《単純再生産の全構図》については、《後に立ち戻ることの保留をつけて》やると述べている。これが奇妙であるのは一見して明らかだ。というのはマルクスはこの第8稿の単純再生産の部分では、以前にも紹介したが、市原氏によると次のような順序で考察しているのである。

- (1) 「第3節 両大部門間の変換――I (v+m) 対II c」
- (2) 「第4節 大部門IIの内部での変換。必要生活手段と奢侈品」
- (3) 「第5節 貨幣流通による諸変換の媒介」
- (4) 「第11節 固定資本の補填」
- (5) 「第12節 貨幣材料の再生産」

## (6)「第10節 資本と収入——可変資本と労賃」

つまりマルクスがここで《後に立ち戻ることの保留をつけて》と述べている問題は、実際には草稿ですでに考察済みの問題なのである。にも関わらず、ここでマルクスがこのように断っているということは、このマルクスの断りは、実際のこれまでの草稿での敘述を前提にしたものではないということを示している。それではそれは何を前提にしているのであろうか。それはいうまでもなく、本来マルクスが構想している執筆順序以外の何物でもない。つまり将来まとめるであろう完全稿では、マルクスはⅠ) 4000cの考察を最初にやる考えであるということである。あるいはもしエンゲルスに編集を委ねることを前提にしているなら、エンゲルスにこの部分が単純再生産の冒頭に来るべきことを知らしめるために書いているということである。

つまりマルクス自身のプランとしてはまず最初に部門Ⅰの4000cの考察が来て、そのあとⅠ(1000v+1000m)とⅡ(2000c)との関係が考察され、さらにⅡ(500v+500m)内部の相互転換が考察され、そして最後に《単純再生産の全構図》が考察される予定であったということである。だからこれは以前、「二段階の敘述構想」の放棄という、プランの変更をマルクス自身は果たして考えていたのかどうか、という問題を論じたときに、われわれが指摘していたとおりに、やはりマルクス自身は第8稿の段階でも、第2稿の敘述と同じように(しかし生産手段の生産部門を部門Ⅱから部門Ⅰにし、生活手段の生産部門を部門Ⅰから部門Ⅲにするという、位置づけの変化に対応させてではあるが)、部門Ⅰの不変資本の転換の考察⇒両部門の転換の考察⇒部門Ⅱの内部の転換の考察⇒全体の構図の考察、という順序で、その敘述の展開を考えていたことが分かるのである(そしてこの点では早坂啓造氏の問題提起は的確であったことが分かる)。これを見てもマルクス自身には第2稿の段階で立てたプランを変更する意図など第8稿の段階でも、まったく無かったことが明瞭に分かるのである。

とするなら、大谷氏が単純再生産の敘述の締めくくりとして、マルクス自身が自己のこれまでの見解を自己批判をしているという部分は、単純再生産を締めくくるところか、本来は単純再生産の一番最初に論じなければならない部門Ⅰの不変資本の転換をマルクスが単純再生産の考察の最後で論じているだけのものだと考えなければならないのである(このように敘述の順序が前後するのは、他方で第8稿の性格を物語っている。すなわちそれはあくまでもノートであり、しかも第2稿で明らかにした全体のプランをベースにして、第2稿における敘述の不十分さや欠落箇所を部分的に補足するために書かれているという性格をである)。そして実際、現行の第10節の敘述を追ってみると、確かに最初の部分は明らかにマルクスの問題意識が不変資本の考察にあることが分かるのである(そうした問題意識でこの冒頭部分を読んでむしろ初めてマルクスは何を言おうとしているのかが分かったほどである)。しかし途中からどうやらマルクスの問題意識は変化していくような感じも受けるのである。実際、市原健志氏も次のように指摘されている。

〈つまり第10節の対象はⅠ) 4000cの考察であったことになる。そして実際そうした文章を受けて続けて読むならば、第10節の初めの部分(現行版435ページ8行目〔邦訳, 699ページ3行目〕から437ページ2行目〔邦訳, 7011ページ9行目〕まで)は、確かに部門Ⅰの不変資本に関連した敘述を展開しているように見える。しかし、そのあとでは、なぜかマルクスはエンゲルスによ

って付けられた第10節の表題「資本と収入—可変資本と労賃」に一致する内容に考察の対象を絞っていってしまう。したがって結局、この第10節ではI) 4000cの考察はせずに終り、ついに「第20章 単純再生産」に該当する第8稿の部分ではこのことの考察ははずされる結果になった。〉（同論文上146頁、なお邦訳頁数は新日本新書版のもの）

このように市原氏も言われるのであるが、しかしもしマルクス自身の問題意識がそのように変化したのなら、マルクスは恐らく草稿にそうした意図を書き残したのではないかと思う。つまりそういう断りを入れるか、あるいは横線でも引いて、ここからは違う問題を論じるということがわかるようにした筈である。しかし市原氏の草稿解読ではそうした断りや横線などは見当たらないのである。だからマルクス自身は恐らく最初に立てた問題を追究しているのではないかという見当が立つのである。

問題はなぜ、マルクスは最初は部門Iの4000cの考察を行なうと断って始めているのに、そして実際、最初の部分では明らかに不変資本cの考察を行なっていると思えるのに、どうして途中からI (1000v + 1000m) とII (2000c) の貨幣流通による媒介を入れた補填関係を、特にI (1000v) とII (1000c) とのその考察に移ってしまっているように思えるのかということである。

結局、この問題を考えるためには、エンゲルスが「第10節 資本と収入、可変資本と補填」とした部分の草稿全体を復元して、マルクスの敘述を逐一追って、その詳細な解読を行なう以外にないのである。しかしそうすると、あまりにも問題が横道に逸れ過ぎてしまうことになってしまう。だからわれわれは、とりあえずはこの問題は保留し、後にもう一度この問題には立ち返ることにしてまずは大谷氏の敘述を追って行くことにしよう。

大谷氏は先の引用文で〈マルクスはまず、社会的年間総生産物の場合にも、その価値は、有用的労働によって生産手段から移転された価値と年間的人間的労働が体化した価値生産物とから成っていること、および、資本主義社会では、年間労働のうちのきわめて大きな部分が不変資本を補填する生産手段の生産に向けられていることに注意を向けたあと、次のように言う〉とされたあと、以下に紹介するマルクスの一文を引用され、さらにそれに関連した自身の見解を次のように述べておられる。

〈「今はやりの観念—— {俗物と一部の経済学者たちはこの観念によって理論的な困難から、すなわち現実の関連の理解から、わが身を遠ざけているのだ}、すなわち、一方にとって資本であるものは他方にとっては収入であり、またその逆である、という観念は、部分的には正しいにしても、もし一般的にそう観念するなら、まったくまちがいになる——つまり、それは、年間再生産に伴って行なわれる全転換過程の完全な誤解を含んでおり、したがってまた部分的には正しいことの事実的基礎に関する誤解を含んでいる。——。そこで、われわれは、この見解の部分的

な正しさの基礎をなしている事實的諸關係をまとめてみることにしよう。そうすれば同時にこの諸關係のまちがった把握も明らかになるであろう。」(S. 780.31-41.)

ここで言う、「一方にとって資本であるものは他方にとっては収入であり、またその逆である、という觀念」こそ、まさに、上に引用した第八稿の第一層でのマルクスのそれであり、第一稿での「資本と資本との交換、資本と収入との交換、収入と収入との交換」という把握そのものである。マルクスはここで、かつての自分の「誤解」とそれを生み出した「事實的諸關係」を明らかにしようとする。〉(下188-9頁)

この引用文の内容に対する大谷氏の解釈を問題にする前に、大谷氏は先にも紹介したが、〈マルクスはまず、社会的年間総生産物の場合にも、その価値は、有用的労働によって生産手段から移転された価値と年間的人間的労働が体化した価値生産物とから成っていること、および、資本主義社会では、年間労働のうちのきわめて大きな部分が不変資本を補填する生産手段の生産に向けられていることに注意を向けたあと、次のように言う〉として、上記の引用文を紹介されるのであるが、そもそも〈社会的年間総生産物の場合にも、その価値は、有用的労働によって生産手段から移転された価値と年間的人間的労働が体化した価値生産物とから成っていること、および、資本主義社会では、年間労働のうちのきわめて大きな部分が不変資本を補填する生産手段の生産に向けられていること〉と引用文の内容が、どのように関連しているのかが、大谷氏の説明ではまったく分からないということである。どうして上記のような説明のあと、マルクスは《一方にとって資本であるものは他方にとっては収入であり、またその逆である、という觀念》の説明に入っているのだろうか。それがさっぱり分からないのである。どうして年間総生産物の価値が生産手段によって移転された価値とその年に支出された人間的労働の対象化された価値とを含むことや、資本主義社会では、年間労働のうちのきわめて大きな部分が不変資本を補填する生産手段の生産に向けられているということが、《一方にとって資本であるものは他方にとっては収入であり、またその逆である、という觀念》の説明と結びついているのだろうか、それがさっぱり分からないのである。

これは分からないのは、ある意味では当然なのである。というのは、大谷氏が上記にまとめおられる部分と引用文との間には、マルクスの一連の敘述が挟まっており、それを大谷氏はここでは飛ばして、その二つ部分をただ機械的にくっつけているだけなのだからである。しかしこの大谷氏が飛ばしている部分は、どうしてマルクスは最初に「I) 4000 c」の考察を行なうと言明しながら、途中から「I) 1000 v」と「II) 1000 c」との貨幣流通を媒介にした補填關係の考察に移ってしまっているのかを考える上で重要な部分なのである。

だからこの問題も、結局は、やはり草稿そのものをマルクスの敘述を丁寧に追って考えてみるしかないわけである。よってこの問題も、われわれはやはり後回しにしなければならない。しかし大谷氏はこうしたマルクスの問題意識のつながりや展開について何の注意も払わずに、問題を論じておられることがよく分かるであろう。

【未完】